

---

# Konzert

清春

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

K o n z e r t

### 【Nコード】

N 6 6 4 0 D

### 【作者名】

清春

### 【あらすじ】

騎士も参加する剣術大会で優勝した少女は願いを国王に叶えてもらうため、第二王子を一年間守り抜くことを受け入れた。少女が持つ強さの理由、護られることを厭う王子の闇——少女と王子の複雑な過去が未来を紡ぐ。【ただ今鈍足ながら改稿をしています。ご迷惑をおかけしますがよろしく願います。】

## 0 歓迎の鐘は鳴る

「つまらんねえ……折角の剣術大会も、優勝候補どころか隊長クラスだっていやしねーもんな」

眼鏡をかけた中年の男がその気だるげな声に反応し、やつれ顔を浮かべながらもすかさず声を張り上げた。

「また貴方はそのような言葉遣いをして！ 私はもう何百何千回……いいえ、何万回もお止めになるように申し上げてきましたが！？」  
「うるせえなー。お前は少しくらい黙ってられないのかよ」  
「ハロルド様っー！」

名前を呼ばれ、金髪の男はにやりと笑った。

その国は「ロスネルド」と呼ばれていた。  
資源もそこそこ、土地も狭くはない。国民も穏やかで明るい性質を持つていと言われ、他国と比べても実に住みやすい国だった。  
だが貿易で莫大な収入を得ると言うほどでもなく、大規模な騎士団を持っている国というわけではない。しかしロスネルドは実に外交に長けた国であった。歴代の国王は、誰もが国の舵取りの上手い船長だった。おかげでここ数百年、国内で戦争が起こったことはない。

だからといって、ロスネルドの騎士たちが平和ぼけをしたただの

お飾りというわけではない。

過酷な訓練を受けてきた精鋭の騎士たちがひしめき合い、他国の騎士と力比べをする国際大会でも優勝を勝ち取ることも度々である。隣国と“良いお付き合い”をしているため大きな衝突もない。

しかし同盟国が助けを求めればすぐに優れた騎士たちを送り込む。騎士たちは敵を散らしなぎ倒し、その強さを見せ付けて帰還するのである。ぼけている暇は、生憎なかったのである。

その優秀な騎士たちは今日、闘技場で大会に参加する予定だったのである。

そう、予定では。

傍目にも高級な服を着て椅子に座っている金髪の男は、眼鏡の男の諫めなど歯牙にもかけず、ぼんやりと眼下の闘技場で整列する緑色の塊を見下ろした。その列があまりにもきちんとしていたので、当然であるべきにもかかわらず、思わず肩を竦めてしまった。

「……キーツ、今回は“外”の参加者はいないのか？」

「は？ ああ、もちろんいますよ。試験にパスした一般人が15名ほどですね」

ぶつぶつと文句を言っている途中で話しかけられたので、眼鏡の男は慌てて答えた。

「しかし……やっぱり俺としては、優勝候補のシュバイツァーかザクスに試合で当たって欲しかったな！」

それを聞いて眼鏡の男は深い、それはとても深いため息をついた。

「失礼ですが、今、彼らは、大会なんかに、出ている、暇は、ない

んで、す、がッ!？」

「わざわざ強調しなくても分かるぞ、分かる」

「ならばそのようなことは仰らないで頂きたい！ レギオス国が再び戦争を始めたというのに、貴方は危機感と言うものがないのですか!？」

「えー、だつてさあ。レギオスってここから遠いし、相手国はうちじゃなくてコプトだぜ？」

「他人事に思っていればそのうちあつというまに他国から叩かれますぞ!？ だいたいッ、我が騎士たちが命を晒して戦っていると言うのに、何を子供みたいに文句を仰っているんですかッ」

真剣に、力強く言われる。金髪の男はくくつと笑いを噛み殺した。

「まあ、正論だな。俺、キーツのそういう真面目なところが好きだぜ」

顔を上げながら、熱っぽく言ってみた。すると眼鏡の男は顔を真っ青にして壁際まで身を寄せた。

——すらりとした手足に、陽の光に煌く金の髪を持つ、いわゆる「美男子」が、熱い紫色の視線を彼に向けても正直違和感がない。違和感はないが、しかし……、

「な、なななな、ハロルド様っ!？ そんな気色悪いことを真面目な顔で言わないでください！ どうせなら普段からそんなお顔を……っっておえええ」

男はとうとう口に手を当ててよろめきながら、石の階段を下りていった。いくら見目が麗しくても、眼鏡の男は——語弊があるよ una のだが——女の方が好みの方だった。

「……うん。真面目で冗談が利かない、そんなからかいがいのある所がすごい好きだな。だが俺は年食ったおっさんより、若くて可愛い女の子のほうが好きだなッ！」

椅子から立ち上がって握りこぶしを作る美男子。その姿は、整い過ぎた顔には少々似合わない。

「ちょっと、なんでわたしが出ちゃいけないの!？」

金髪の男は、背後の方から微かな少女の声に気づいた。後ろに立っていた騎士たちも気になったようで、石壁にあいたアーチ状の窓から顔をのぞかせていた。

「なあ。なんの騒ぎだ？」

金髪の男が窓から顔を覗かせている騎士に声をかける。騎士は慌てて身体を起こし、振り向いた。

「はッ。それがどうやら……少女が入場チケットの販売員に詰め寄っているようです」

好奇心を剥き出しにして、男は騎士に代わって窓の下を覗いてみた。

確かに、15、6歳程の少女が販売員の胸倉を掴んで詰め寄っている。……なんというか、脅していると言ってもいいかもしれない。

「で、ですから、一般の参加は試験をパスしない限り不可能ですと……」

「じゃあその試験でもなんでも受けるからッ！」

「それはもう期限を過ぎておりまして、今提供できることは観戦チケットの発行しかできないのですが……」

「観戦じゃなくて、わたしは試合にでたいのッ!」

「だ、だからッ、私はただの販売員なんですよぉー!」

その「ただの」販売員は半泣きだった。一方、少女はがつくりと項垂れて、販売員から手を離れた。おかげで彼は地面にキスする羽目になった。

「わたしは……わたしはただ………」

少女の顔がくしゃりと歪む。上から様子を窺っていた金髪の男は、じつとその様子を見つめた。

突然、金髪の男は小さな唸り声を上げる。

「ど、どうかされたのですか?」

そんな騎士の心配も他所に、いきなり男は手を叩いた。

「よしッ、今回の大会を盛り上げるのには打ってつけ!」

そう言うがはいか、金髪の男は上着の裾がずるずると床を引きずるのも構わず、階段を駆け下りていった。騎士の数名が慌ててその後を追いかける。

窓際にいた騎士は追いかけるタイミングを逃し、仕方なくその場に待機していたのだが、しばらくすると再び窓の下が騒がしくなったのが分かった。

「キヤーツ！？ ハロルド様よ！」

「ええ！ どうしてこんな所に？」

「ハロルド様ツ、ご乱心をなされたのですか！？ ご勝手に外に出られては混乱が……」

「やだっ、ハロルド様じゃない！ ちょっとちょっと、ミリーあっち見てよっ！」

騎士は青ざめた顔で窓から急いで身を乗り出した。

下では騎士に囲まれた金髪の男が、外で入場を待っていた観客たちのざわめきをもとめせず、先ほど騒いでいた少女の前に立っていた。

その男の姿は騒がしい周囲をよそに、鋭くて、そして重かった。騎士は思わず目を奪われた。

金髪の男は喧騒が落ち着く時を待っていたようで、一瞬だけ人々の間に静寂が流れたのを見逃さず、ゆっくりと唇を開いた。少女はただ、驚きに目を見開いているだけだった。

「我、ロスネルド王国国王、ハロルドⅡRⅡリヴァズⅡロスネルドは、そなたの大会参加を歓迎しよう」

窓際の騎士は、国王陛下の傍でいつの間にか戻っていた眼鏡の宰相がぶっ倒れたのが見えた。

## 0 歓迎の鐘は鳴る（後書き）

気長に書き綴っていくつもりなので、気長にお読みいただけたらと思います。

## 1 どこかで何かが変わる時

美しい音が反響し、その音すらも特別なものに聞こえるのが不思議だった。普段聞きなれているはずの靴音は、全く違う音色に聞こえる。城と言うものは、どんなものでも美しくしてしまう不思議な魔力でも持っているのだろうかと思った。

走ったら転んでしまいそうな程、よく磨かれた大理石の廊下。そこを少し前から、先導する騎士の後ろについて歩いていった。

二人の騎士はどうやら新米らしく、何度も道を間違えられ、正直なところ城で遭難するのではないかと不安になった。それほど城は巨大で、そして迷路だった。

騎士たちが再び分かれ道で立ち止まり、行く先を相談し始めたのを横目に、茶色の髪の少女は壁にかけられている、見たこともない程に大きくて高額そうなタペストリーを眺めることにした。

少し見ただけで細かい部分まで手を込んで作られているタペストリーだと分かる。色も鮮やかで、青白い壁を彩るには最適に違いなかった。一人の男と彼に従う人々が描かれていて、その周りを月桂樹が覆っている。もしかしたら国王と国民を描いてでもいるのかもしれないと思った。

「悪いな。こつちだ」

深緑色の制服を着ている男たちは、親しげな笑みで少女に声をかけた。少し恥ずかしそうなのは、自分たちの仕事を未だに把握し切れていないからであろう。

「あの子が本当に優勝者なんだよな。改めて見ても、正直信じられ

ないなあ……」

「仲間達が負けたことは騎士として恥ずかしいが、実際に戦いの様子を見せられたら信じるしかないな」

目の前で自分の話をされているとは露知らず、少女は観光地に来た旅行者のように、せわしく視線をあちらこちらと彷徨わせていた。

だがやがて騎士たちが足を止めると少女は視線を前方に向けた。金箔で覆われた頑丈で、反面、繊細な文様を描いた扉が目の前に広がっていた。大きな扉だったため、扉そのものが壁であった。

「さて、ここからは謁見の間だ。国王陛下がいらっしゃるのだから、礼儀はわきまえねばならん」

少女は緊張した面持ちで頷いた。その動作は大会では決して見られなかった程ぎこちない。

「ここまで連れて来てくれてありがとう」

そう言って少女が浮かべた笑顔は、雪解けの川のように透明だった。

「剣術大会優勝者、リアナ・レーベルト殿。ただ今謁見の間に入られます！」

騎士の声と共に、少女は強く一步を踏み出した。

「今、なんと云ったんだ？」

灰色の髪が窓から入る光で銀に輝いている。まだ歳若い青年はそれに目を奪われ、一瞬ぼんやりした。しかしすぐに意識を目の前にいる少年に戻した。

「ですから、フェリス様に専属の護衛を、と……」

窓の傍に置かれた椅子に座っていた少年は、顔を強張らせて青年を睨んだ。少年の紫の瞳は仄暗く揺れる。

「護衛だと？ いったい誰を守ると言うんだ。ここには、誰かがわざわざ手間をかけてまで守るような人間はいない」

嘲笑を含んだ言い方に、青年は哀しくなった。少年に仕えてきた青年は、彼が何を言おうとしているのか分かってしまう。

「……ですが、これはハロルド様の御意思でございます。もちろんフェリス様をご心配なされてのご配慮でございますから……」

「あの人には俺から言っておりません。護衛などいらない、いなくても大丈夫だと」

「し、しかし、実際にお命を狙われていますし、エリオル様も先日のパーティーで」

「あの男なら護衛がいても死にかけのも道理だ。剣も満足に握れないような愚鈍な男だからな」

「フェリス様！ そのようなことを仮にも兄上であるエリオル様に對して言ってはなりません！」

少年は冷たい眼差しでもって青年を制する。

「黙れ」

青年は怯え、口を閉じる。だがその顔はまだ何か言いたげだった。それでも少年は青年の不満に気づかない振りをして、その代わりに先ほどもよりも穏やかな口調で青年に言う。

「彼は次の王。この先のロスネルドを担うものだ。護衛がいるなど当然のこと。そして俺はただの第二王子に過ぎない。誰かが身体を張ってまで守るような命を、生憎持ち合わせていない」

淡々とした口調から紡がれる言葉に、青年は胸が締め付けられる気になる。それは何度も味わった悔しさだった。

少年は顔を窓の外に向けた。鮮やかな庭園と青く澄んだ空が輝きに満ちている。しかし部屋の中はどこか薄暗く、昼間だというのに驚くほど窓の外とは対照的だった。ただ、室内に注ぐ一筋の光が銀の色に変わっているだけ。

「……王のもとにいつてくる。これでは契約破棄としか思えない」  
「契約、ですか？」

（いったいどんなことを？）

しかし青年に尋ねる権利は無い。弱々しく拳を握った。

少年——ロスネルド王国第二王子、フェリスⅡRⅡレイファールⅡロスネルドは、椅子から立ち上がると足早にドアの向こうへ消えていった。

青年はその背中をただ、見つめ続けた。

ロスネルドを統治するのは他でもない、目の前の荘厳な真紅の玉座に腰掛けているハロルド「R」リヴァズ「ロスネルド」である。

着ている服はとても高価な生地ばかりで仕上げられているはずだが、一国の王にしては地味な色合いだといっても良い。華美ではないが、むしろ統治者の威厳を醸しだしているようであった。国王の美しい金の髪は後ろで三つ編みにされている。

美しく威厳に満ちた国王を初めて見たら、誰でも身体が強張るのは無理はないと、リアナは額に薄い汗を浮かべながら思った。

「へえー。大会に本当に優勝しちゃうなんて、流石の俺もびっくりだわ、うん」

リアナが国王に会ったのはこれで二度目なのだが、気のせいだろうか。街のひょうきんな若者と同じ口調で国王がしゃべったような気がした。

「でもよ、あれはすごかったな。ほら、あれだよアレ！ 相手の肩に乗っかって回し蹴りしたヤツ！ ありゃあーひどかったね。俺が相手だったら頭よりも精神的に痛かったぜ！！」

国王の顔は楽しげに輝き、唇の間から白い歯が子供っぽく覗く。

初めて国王を見た時はもって“一国の王”に相応しい様子だった記憶がリアナにはある。重く張り詰めて、一国の王たる荘厳さを覗かせる姿だった。

あれは夢だったのだろうか。

そもそも一国の王様がこんなに親しげ、というよりも砕けた口調の人物だと、いったいどれほどの国民が知っているのだろうか。少なくともリアナは、全くそのような噂は聞いたことが無かった。

「途中参加をあれだけ派手に懇願するんだから、多少なりとも試合に勝って俺を……じゃなくて、観客を楽しませてくれるんだろうな」なんて思ってたけど、まさか大会で優勝しちゃうなんて思わなかったわ。あの大会に出たのはほとんど城の騎士団員だったんだけどな。うーん、これは騎士団員によく訓練するように言いつけないと、そのうち他国に見くびられちゃうぜ」

それほど真剣に悩む様子は見られない国王だったが、言われた言葉にリアナはむっとした。不満げに唇を噛むと、国王に向かって礼儀も忘れて開口する。

「それはわたしが女だからですか」

その言葉に反応をみせたのはむしろ側近たちで、目を剥いて国王の目の前で不服を唱える少女を凝視した。

しかし当の本人である国王が、少女の態度を気にした様子は無かった。

「いや。どちらかといえば、騎士団にも入団していないような歳若い子に屈強揃いの騎士たちが負けてしまった、って方が大重要なんだが……。それとも、そっちの理由の方がお気に召すかな？」

まるで夜会で女性を相手するように、国王は目を細めて微笑んだ。その思わず誰でも息を呑むような笑顔と言われた言葉に、リアナは

国王に不満を漏らしてしまったことを恥じた。

「いいえ、そちらの方がずっと嬉しいです」

「といっても外聞つてもんがあるからな。君は、ええっと、リリアだっけ？」

「リアナです。リアナ・レーベルトです」

「そうか、リアナね。……では、リアナ。そなたに我国の騎士団入団を命ずる」

広間は水を打ったように静かになる。国王の傍に控えていた眼鏡をかけた中年の男は、顔を真っ赤にしたまま口を魚のようにパクパクさせていた。国王は一瞬眼鏡の男に視線を向けて口元を緩めたが、すぐに真剣な顔をリアナに向ける。

「リアナ・レーベルト、これは国王である私の命令だ。断ることは出来ない。だが、物申すことがあればなんなりと言って構わない」

玉座の前でリアナは固まったままだった。謁見の間には不釣り合いだらう地味なワンピースの裾を強く握りしめる。

一瞬視線を絨毯の上に落としたが、リアナはすぐに顔を上げた。まだあどけなさの残る顔立ちには不釣り合いな、決然たる表情をしていた。

「騎士団に入団できるなど光栄なお話です。しかしそれはわたしの願いではありません」

琥珀の瞳は真っすぐに前へ向けられる。それを受け止めて、国王は微かに口端を持ち上げた。

「たしかに優勝者にはその者の願いを聞き届ける、とある。だが君

の場合は既に手ほどきをしてしまったからな」

手ほどき。それはリアナへ「特別に大会出場権を与えたこと」なのだろう。確かにそれを貰っておいで、さらに願いを聞いてくれとは虫がよすぎる話だ。

簡単に願い事が叶うことなど、ないのだ。

だからこそリアナは剣術大会で優勝すると言う一縷の望みに賭けたのだ。そしてその賭けに勝った。しかし勝利は仮初のものでしかなかった。もとより国王の恩情の上で手に入れた優勝だったのだ。ならば諦めるしかないだろう。

それでも、リアナにはどうしても叶えたい願いがあった。自分で出来ることはしてみた。だがその先はどうしても自分ではどうにもならない領域だった。その領域へ誘うことができる人は、きっと目の前にいる人だろうというのに――。

リアナは何も言えなかった。願いを叶えてもらえなくても王に礼を言うのが筋ではあるうと思っただが、思いの他シヨックが大きかったようので、呆然と視線を赤い絨毯に落とした。

「本来ならば正式な手続きを踏まなければならなかった大会に、陛下の御慈悲で出場できただけでもありがたく思っべきですぞ」

側近の男は肩を竦めながら言い放った。リアナはそれに頷かなければいけなかった。

それでも頷けなかった。頷いたら、己の願いが遠ざかってしまうことを、どこか冷静な自分が知っていた。

しかし継る方法をリアナは見出せなかった。自分はただの子供だ。なんの力もない、ちっぽけな存在だ。何も出来ない自分が悔しくて、

強く拳を握った。

「陛下の御前に居られるだけで幸福と思え。……そもそも優勝者の願いを聞くだなんて、陛下も無茶を仰らないでいただきたい！　なんだってハロルド様はいつもいい加減な事ばかり」

しかし側近の言葉は続かなかった。国王が玉座から立ち上がったからだ。ゆっくりとリアナに近づく。静かで重厚な空気が広がる。いつのまにか当たりは息をする音だけになっていた。

「……もし願いを叶えたい、と思うのなら、今度は確かにそなたの“願い”をかけて、己の仕事を果たすというのはどうだ？」

リアナも側近たちも部屋の警備を務める騎士たちも、呆気に取られた様子で国王を見た。そしてその中でただ一人、眼鏡をした中年の男だけが、真面目な主の顔を見て青ざめた。

「ハロルド様ツ、何をお考えなのですか！？」

国王は慌てた男の声を無視し、大声で告げた。

「リアナ・レーベルト。そなたが我が息子、フェリスⅡRⅡレイフ  
アールⅡロスネルドの命を、次の年の今日まで護り続けることが出  
来た暁には、そなたの“願い”、国王である私、ハロルドⅡRⅡリ  
ヴァズⅡロスネルドが必ず聞き届けることを、ここに誓おう！」

誰とも分らない息をのむ音が、広間に響いた。

## 2 彼に望む願い

駆け足で謁見の間に向かう灰色の髪の少年、フェリスは強く唇を噛んだ。

国王は言ったはずなのだ。フェリスが何度も訴えるほど嫌ならば無理強いはいしない、と。その“契約”を守る確かに国王は言った。

しかし言われたことを律儀に信じた自分は馬鹿だったのだ。

謁見の間の扉が口を閉じてから、しばしの時間がたった頃だった。その広間は、農民や商人、子供でさえ、どのような身分であつてもロスネルドの国民で、手続きを許可されたものであるならば、誰でも入室することが出来る。時には、他国からの使いが来る時も使用された。

もちろん身分証明がされている者がやってくるといっても、その中に邪な考えを持つ者がいないとはいえない。そのため国王が居る時は厳重に輪をかけた警備になっている。

しかし謁見の間は役目を果たす時以外は、あまり人が寄り付かない場所だった。だから広間の前に、いきなりロスネルド王国の第二王子が現れた時には、百戦錬磨の流石の騎士たちでも心の底から驚いたようだった。

「フェリス王子！？ な、なぜここに？」

王子フェリスはそれには答えず、騎士たちを急かした。

「扉を開ける」

騎士たちに目を向けるわけでもなく、ただ前を見据えている少年に、騎士たちは狼狽した。役目を果たすためにはその言葉に従う訳にはいかないだろう。しかし一国の王子の言葉を蔑ろにしていけないのか彼らには瞬時の判断ができないようだった。

騎士たちの葛藤に痺れ、フェリスはもう一度口を開いた。

「……開ける、と俺は言っている」

低く唸るような呟き。

仮にも戦場をかけた身であろう騎士たちは、怯えたように、でも少年に魅入られた。

「さあ、今すぐその扉を開ける」

「し、しかし陛下もいらっしやることですし、勝手な行動は……」

「“勝手”？」

目の前に居る瘦身の少年から、騎士たちは滑稽なほど視線を逸らした。目を合わせたのなら口を開くこともできないという風だった。

「いや、その、しかしですが……」

「言葉が分からないか？」

「い、いえ」

汗が、騎士たちの額を流れた。そして扉に手をかける。国王陛下の言葉に従う時のように恭しく、しかし微かな震えを持って扉を開けた。

騎士たちの様子も歯牙にもかけず、フェリスは足早に部屋に入る。怯むことなく堂々と。少年が進む先にはロスネルドの国王陛下がいるというのだ。

当然ながら目の前にあった大きな扉が開いて、真っ直ぐに自分に向かってくる息子に国王が気がつかないはずもない。彼はにやりと楽しい笑いを湛え、フェリスを咎める事もせず、むしろ歓迎するように声をかけた。

「めずらしいな、フェリス。お前がこんな派手な行動にでるとはなかなかの驚きだ」

「あなたの都合など俺が知ったことではないからな」

父親とはいえ一国の主。王子のぞんざいな言い方に、とうとう眼鏡の側近はよろめくように倒れた。むしろ溜まりに溜まったものがあつたのかもしれない。

「契約を破ったな。どういうことだ？」

「契約？ お前とそんなものしたっけか」

「俺には護衛をつけない、という契約だ。忘れたとは言わせない」

鋭く睨みつけると、国王はそれをあしらうように鼻で笑った。

「俺はお前と“約束”はしたが、“契約”なんてした覚えはねえよ」

飄々とした様子の国王に、頬がこわばった。

「『お前には専属の護衛はつけない』、って約束か。約束は破ったらいけないな。だが」

ハロルドは目を細めて、息子であるフェリスを見つめた。いつもは爛々と輝いている紫の瞳が、少し、揺れた。

「護衛をつけられない状況じゃ、もう、ないんだ」

「……だから？ 状況なんてどうでもいい。俺は『いらぬ』と、はつきりあなたに言った。護衛など、今後もな」

国王は息子を茶化すように声を立てて笑う。だが目は笑っていない。かっただ。

「全く、お前は本当に頑固だな。でももうお前の護衛役は決まったんだ。適任者を探してたから、丁度良かったぜ」

驚きを顔に浮かべていたフェリス良く見えるように、ハロルドは指差した。

「この子だ」

そこに居たのはフェリスと同じくらいの年の少女だった。琥珀色の瞳をした、同世代の少女よりも少し背の高い、いたって健康そうで、でもどこにでもいるような少女が居たのだった。

リアナは目を丸くして、謁見の間に入ってきた少年を見つめた。少年は国王に不満をぶつけているようだった。それを傍観者として見つめていた。

だから急に国王に指を指され心底驚いた。

指先を辿った少年の視線がリアナで止まる。

少年の瞳は国王と同じ色をしていて、でもそれとはまったく違う

ものだった。

重なった視線に、リアナは心の奥底で何かを感じた。

「リアナ。これが俺の息子のフェリス。こいつを一年間守りきれたら、お前の願いは俺が叶えてやる」

一瞬自分の耳を疑い、弾かれたように国王に振り向く。彼の口元に微かな笑みを浮かんでいた。

リアナは思わず唾を飲み込んだ。

「願いを……？」

遠い記憶。

赤い海の中で向けられた刃から、守ってくれた真つ白な腕

「……ふざけるなッ！」

少年の叫びに我に返る。

「ふざけているつもりはないんだが」

国王ハロルドの顔に、もう笑みはない。それは底冷えするほど硬い表情。

「いいか、フェリス。賢いお前ならとっくに分かってるはずだ。お前はこの国の王子だ。たとえ王位が継がれなくても、情勢が変わるきっかけに十分なりえる。お前の死が、国の混乱を招かないとも

言えまい。考えたくはないが、第一王子であるエリオルに万が一があった場合、お前がこの国を継がなければならなくなるかもしれない。……それに、もしもお前が捕まって、その命を盾にされたらこちらの身動きが取れない」

少年は態度を翻した。感情を露わにしていた先刻がなかったように口を閉ざし、ただ何かに耐えるように掌を握った。少年はひどく落ち着いた様子で――視線を床に落とし、自嘲気味に笑った。

「そうしたら、切り捨てればいい」

その言葉は小さい呟きだったが、不気味なほどその場にいるもの全ての耳に響いた。

なんと哀しい言葉。哀しくて、寂しい響き――……。

国王はとっさに何かを言おうとしたようだったが、かみ締めるようにその口を閉じた。

継承者が他に存在する状況で、第二王子であるフェリスを人質にされたとしたら、国王が選ぶ道など、無いのだ。

彼は強く歯を食いしばった。だが、すぐに怒りを込めて言葉にする。

「どちらにしろ、そういう可能性を少なくするのは懸命なことだッ。いい加減分かれ！」

「そんなこと……」

そこで、リアナは叫んでいた。

「ハロルド様ッ！」

声が広間に響くと、二組の紫の瞳が少女に向けられた。

美しく、強靱で、強い輝き。

そして、

儚げで静謐な、鋭い光。

自分が本来ならば、受けられないであろう、視線たち。

「やらせて下さい。王子の護衛を、わたしに……………」

（教わったから。誰かを守ることが、本当はなんなのか、教えてもらったから…………）

それは決意。少女に宿ったその叫びだった。

濃い紫の双眸が、揺らめいたままリアナを見つめた。

だからリアナはその視線を受けとめた。受けとめなければならな  
いと思った。

「馬鹿なことを…………ッ、何が護衛だ！」

フェリスはリアナに食って掛かったが、ハロルドが素早く制した。  
しかし、目を覚ました側近の男も再び声を荒げた。

「ハロルド様！ 貴方様はなんて無鉄砲なことをおっしゃっている  
のですか！ 身元も分からないような少女に、それこそ少女ですぞ  
！？ フェリス様の護衛など無茶なことをおっしゃるなんてっ。私  
は前々からヴェーリーをフェリス様にと申し上げていたのに」

「黙っている」

すつとハロルドの目が細められた。

リアナは国王から発せられる威圧感に、身体が重くなったのを感じた。さすがに国王に食って掛かっていた王子も眼鏡の男も黙り込んで、何かを言う様子はなくなった。

（すごい……）

リアナは緊張の中、感心していた。

誰であろうとも一瞬で黙らせることが出来る力。「王」とはそれを持ち合わせるべき存在なのか。

ハロルドはゆっくりとリアナの前にやって来た。衣擦れの音が近づく。慌てて頭を下げた。

「顔をあげなさい」

リアナは小さく息を吐いて、顔を上げた。王の鮮やかな紫の瞳に自分の顔が映っていた。

ハロルドはじつとリアナを見つめた。知らずに汗が流れる。

王は身を屈んでリアナの耳に口を近づけた。

「どうか、彼を光の下へ——」

「え？」

リアナが顔を上げた時、既に王は広間にいる全員に告げていた。

「先ほど申ししたが、もう一度耳に聞き入れてやった方がいいよう

だ。ここに居る少女、リアナ・レーベルトが本日を持ってフェリスⅡレイファールⅡロスネルドの護衛任務にあたることを私、ハロルドⅡRⅡリヴァズⅡロスネルドが名の下に証明する。不服は聞かん！」

綺麗な髪を持つ少年は強く、血が出るほど強く唇を噛んで、踵を返し謁見の間を出て行く。

側近たちは騒ぎ出し、眼鏡の男は再び床に倒れて唸り声を上げた。

夢心地のリアナに、ハロルドは微笑んだ。それはとても綺麗な笑みだった。

「さあ、リアナ。君の仕事はもう始まっている。早く行きなさい」

驚いたままのリアナを立たせてやり、ハロルドは彼女の背を押した。

リアナはぎこちなく頷き、とてもじゃないが優雅とはいえない礼をした。

「失礼します」

そして慌てるようにフェリスの後を追った。ハロルドが触れた場所が、とても暖かかったのは気のせいだろうか？

これは、光の導きか悪の囁きか。  
それでもいい、少しでも、彼が「幸せ」に気づいてくれれば……。

ハロルドはずっと二人の出で行った扉の外を見つめていた。

### 3 護る、その意味を

どうして第二王子の護衛をやらせて欲しい、なんて言ってしまったんだろう？

ただ、単純に願いを、どうしても叶えたかったからだろうか？  
自分に問いかけてしまうほどなぜ口にしたか分からなかった。願いと、いや、どんなものとも天秤にかけられない条件——「命」を前にして願くことは恐れ多く、軽々しくして良いものではないと頭の中で分かっていたはずだ。

それでも、灰色の髪に白い肌、深いアメジスト石のような瞳。整っている、だけでは物足りないほど美しい顔立ちは、見続ければ見続けるだけ吸い込まれて、その中へ取り込まれてしまいそうだった。それは少年が持つ力で、飾りつけることだけに価値を見出す異世界では、絶対的な支配力を持っているに違いない。

少年の容姿は人によっては見るだけで嘆息に囚われてしまうかもしれないが、ある人によっては悪魔の産物だと囁かれても過言ではない。美しさは恐ろしい魔力だとはよく言ったものだ。

しかし畏怖を与えるほど美しい少年には、ひどく人間味に溢れ、そこだけが自分たちと変わらないと感じさせるものがあつた。

一瞬見せた、暗い深淵に佇む濃い紫の瞳。

複雑に絡まった感情が渦巻く瞳が何を宿していたかは全く分からない。それでも、その瞳を初めて覗いた瞬間「哀しい」と思った。なぜだかわからずとも、そう思った。

リアナは息を切らして長い長い回廊を駆ける。途中で出会った騎士や侍女、侍従たちは、全てが完璧と言える城の中で場違いなほど全力疾走する少女に目を丸くしていた。中には「廊下を走るな」と、怒鳴りながら追いかけて来たたご老人まで出でくるしまいだ。とはいえ、そのご老人が若者の駆け足に追いつくはずも無かったが。

しばらくすると後方から微かな嘆息が耳に入ってきた。苦しげな喘ぎ声に一瞬心配になって振り向いてみた。壁に寄りかかったご老人の眼は闘志にぎらぎらと燃え盛っており、到底今すぐどうにかなるようには見えない。呆れるほどの生命力を目にして、もう振り返るまいと思った。

「こんなひ弱な老人を置き去りにするのか！」

正直、途中まで一緒に駆けっこをしていたくらいの老人が、ひ弱なわけがないだろう。むしろご老人はお迎えが来てもそれを叩き返しそうな気迫さえある。もしかしたら昔はそうとう名を馳せた大物かもしれない。リアナは妙に納得し、一人で勝手に頷いた。

大人物である老翁に自分が立ち向かえるはずもないので、リアナ結局立ち止まることなく、老人から逃亡を成功させたのだった。

だが、追いかけてこのせいかリアナは城で迷ってしまった。

リアナを弁護するならば、彼女の方向感覚が原因というわけではない。迷わせるような複雑な作りになっているのが城というものなのだ。初めて城へ訪れた者なら当然と言える。むしろ短時間で城の構造を理解されるほうが「城」にとって色々問題であろう。

迷った場合は無理をするにっちもさっちもいかないものだ、とリアナは思った。誰かに道を聞くのが一番である。しかしリアナが走って来た方向には誰もいない。

「どうして肝心な時に誰も居ないのよ……」

やはりご老人にもう少し粘ってもらえばよかったか。

大きなガラス窓が続く廊下は、少し不安になる程ひっそりとしていて、暖かな日差しを受ける床は湖上を煌く光を宿している。しかし先の見えない回廊が何を思っているかはまるで知れない。

——こいつを一年間守りきれたら、お前の願いは俺が叶えてやる。

思い出せるその甘美な響きに、今でも胸に宿る興奮を抑えきれない。

（“願い”を叶えてくれると言った。一年頑張れば、“願い”が叶う……）

国王の言葉に心が揺れた。一年の我慢で願いが叶うなら、と夢のような申しであつた。そして「やる」のだと、自分は返事をした。

しかし、正直リアナは迷っていた。

自分の辿った過去を振り返り、誰かを守るために剣を握ったことは無かつた。実際、握りたくても握れるだけの力が無かつた。誰かを守るほどの力を、自分が持っているとは思っていなかった。

剣術大会で優勝した。でもそれは本質の違う話だ。剣を握ることが誰かを守れることなどと思っているなら、それは傲慢だ。

“護る”ことは“命を預かる”こと。

曖昧な気持ちで答えをだしてしまったら、間違いなく誰かを傷つける。

それでも、自分は返事を出した。  
「やる」と、その言葉を口にした。

（なんでだろう……？）

とりあえず来た道を戻るのが懸命だ。リアナはのろのろと足を進める。

前方の壁際にガラスドアがあった。少し離れた場所からそこに目を向けると、鮮やかな紅い木々が少し遠くに見えた。何もかもが見慣れない高級品ばかりの中で、ガラス越しの風景は彼女にとって心を和ませるものだった。

その景色を良く見ようとドアに近づいたリアナは、そこで今まで探していた人物を発見した。

ドアの先はテラスになっていた。その手すりに両腕を乗せ、彼はどこか遠くを見つめていた。彼の灰色の髪は、陽の光で銀色に見えた。

リアナは静かにガラス戸を開けた。

「……何をしに、来た」

低く、無感情な言葉だった。謁見の間で見せた荒々しい感情は全く見えない。

リアナはガラス戸の前で足を止め、じっと少年の背中を見つめた。正直なんと言ったら良いか分からなかった。だから、明るく答えてみた。

「何って、あなたの護衛よ。わたしは、リアナ・レーベルト。よろしくね」

意外にもフェリスは振り返った。その表情は冷たいものだったが、口調は非常に淡々としていた。

「こうなった以上、国王が言ったことを、俺は覆せはしない。だが、俺はお前という存在を認めない」

「……別にあなたに認められなくても、わたしはわたしで勝手にやるから構わないわ」

あくまでリアナが約束したのは国王ハロルドと、である。それならばハロルドの意向になった働きをリアナが出来れば何の問題もないのである。だから王子であるフェリスがどんな見方をしたとしても、リアナの仕事には影響することはない。

だが、なんだってこの少年は、そこまで「護衛」を嫌がるのだろうか？

リアナからすれば、王族など皆から「守ってもらう」のが仕事のようなものだ。その代わりに、彼らは国民を「守る」義務がある。その義務があるから、彼らは常に「権力」の渦の中に立っていないければならないのだと思う。

国民のために命を晒せるほど熱心な王族がどれほどいるのか、というのがリアナの正直な思いだ。それでも王族という存在は、「守られる」ことが当然であり、城の中ではそれが「常識」であり「日常」であるのだろう。

だとすれば、ロスネルド王国の王子であるフェリスの考えは「非常識」であり、「普通」の王族からすれば考えられないことであるはずだった。

「……お前は、俺を守れると思っているのか？」  
「え？」

少年は振り返った。紫の眼光が鋭くリアナを貫く。

「なぜお前を、国王が俺の護衛につけた？ お前は騎士でも傭兵でもないだろ。見たところ、そもそも争いごとに係わり合いになる年齢でも身分でもないだろ」

「わ、わたしが、昨日の剣術大会で優勝したから……だと思っけど……」

フェリスは疑惑の眼差しをリアナに向けた。明らかに不審そうだ。

「……今回の大会の優勝者は一般参加者の子供だとは聞いていたが、まさか本当とは。冗談か何かではなかったのか」

「冗談なんかじゃないわよ。こうして、わたしがここに居るんだもの！」

フェリスは視線を外さない。疑惑の瞳でリアナを見据える。

「……では、お前は何者だ？」

「何……者？」

言われたことが理解できず、思わず聞き返していた。

「そうだ。優勝しておいて『ただの一般人』で済ませられると思うのか？ 剣術大会にはこの国の騎士が大多数の参加をしていたはずだ。そいつらを倒してお前のような者が優勝？ 騎士共がそとうの馬鹿か間抜けというのでなければ、お前には彼らに勝つだけの“力”があるということになる。じゃあ、その“力”はどこで手に入れた？ まさか、普通に生活していて自然に、などと言うわけではあるまい？」

フェリスの言いたいことが分かり、リアナは言葉を詰まらせた。

「そ、それは……」

「なんだ？ 言えない様な、やましい仕事でもしていたか」

その嫌味な物言いに頭にきたが、文句を言う前に身体が動いていた。

考えるよりも早く、掌が少年の腕を掴んでいた。

「何を」

彼が文句を言いたいのは分かったが、リアナは思い切り掴んだ腕を引っ張った。

——ガシャンッ！

背後でガラスの割れた音が響いた。リアナは構わずフェリスを抱え込んだままテラスを後にして、廊下に転がり込んだ。

「ちッ、また馬鹿なヤツらの仕業か！」

まさに少年を狙ったのは一本の矢であり、その矢が何を意味しているかは推し量るべくもない。

リアナは矢がそれ以上飛んでこないことを確認すると、急いで立ち上がった。

「犯人を捕まえないと！」

だがそうして意気込んだのはよかったのだが、彼女が駆け出すよりも早く、伸びてきた手が彼女の腕を掴んでリアナがいなくなるの

を赦さなかった。

「何よ!？」

リアナの腕をフェリスががちり捕まえている。肩の先に、深刻な顔をして自分を見つめている双眸があった。その真剣な眼差しにリアナは戸惑った。

「な、何……？」

「……何が掠った？」

「はあ？」

目の先には、「血の滲んだ」自分の肩がある。

リアナはどこか居心地が悪くなつて、視線を外した。

「何って……色々よ、多分」

リアナが言い淀むのを見て、フェリスはなぜかとても怒った顔をした。

「当たったのは矢だろ!？ どうして俺を庇ったりした!」

「か、庇うつて、それは咄嗟のこと……。だいたい矢がこっちに飛んできたら避けるのが当たり前でしょ!？」

助けたのになぜ自分が怒らなければいけない？

そんな思いでリアナは声を荒げた。

「なぜお前が傷つくッ!」

「え……?」

フェリスは痛みに耐えるように、何かに対する怒りの感情を叫んだ。少年の声がどうしてか耳の奥に留まり、螺旋を描いた。

どこか大人びた表情をしていた少年ではない。フェリスは「傷ついた顔」をした、年端もいかない幼子のような顔だった。

何かを言わなくては、とリアナは言い知れぬ焦燥に駆られ、フェリスに対する一つの返事を口にした。

「あー……でも、わたしあなたの護衛になったんだしさ」

空気が凍った気がした。とても薄い氷が張り巡された感じだった。フェリスは、思い切り壁を叩いた。驚いたリアナはそれを見つめるしかなかった。

「だから嫌なんだ！！ 護衛なんて……ッ！」

はっとした。

少年の顔が苦渋で歪んでいた。目に見えない傷にもがき、少年は「何か」と葛藤していた。

（もしかして、この人は……）

リアナはぼつりと声にした。

「誰かが自分の代わりに傷つくのが、怖いよね……？」

窓から光が二人に降り注ぐ。

銀の髪の少年が、憔悴しきった表情で、でも反発するような瞳をリアナに向けた。

「……別にそういうわけじゃない……」

俯くと、銀の髪に顔が隠れる。周りが身震いするほど静かだった。

「ただ、嫌なだけだ……」

まただ、とリアナは思った。

どうしてか少年の助けになりたいと思った。

（広間にいたときも同じ思いが浮かんた。だからわたしはあんなことを言ったんだ。護衛をやると、言ってしまったんだ……）

『そうしたら、切り捨ててくれて構わない』

そう国王に言った少年の顔がとても辛そうで寂しくて、そしてとてもとても暗い深淵に沈んでいるようだったから——だから気づいてたらリアナは国王にあんなことを申し出ていた。

そうだ、「だから」なんだ。

リアナはフェリスを抱きしめた。少年の身体が強張るのが分かった。でも、彼は何も言わなかった。

「護衛だから傷つくこともある。それは仕方の無いことだわ。でも、ひとつだけあなたに約束できることがあるの」

「……何？」

顔を上げたフェリスに小指を突き出した。リアナは笑った。

「わたしは絶対に死んだりしないわ」

フェリスの驚いた顔を気にせず、リアナは無理やり指切りをする。しつかりと指は約束を結んだ。絡んだ指から、フェリスは視線を外した。

「あなたも約束して。何があっても死なない。ね？」

リアナは小指に力を込めた。

「約束、だからね」

「だいたい……俺は護衛について認めないと言ったはずだ」

フェリスは小指を無理やりはがした。強硬な態度の少年に、リアナはため息を付いた。

「何度も言わなくなつて分かつてるわよ。わたしのこと馬鹿だと思つてるわけ？」

すると彼は一瞬口を噤んだが、次の瞬間——ニヤリ、と笑った。陰鬱な表情ばかりを浮かべていた少年の年相応の表情にリアナは驚いた。なんというか、不意打ちで一発殴られた気分だった。

「違うのか？」

「ッ!？」

わななくリアナを尻目に、フェリスは何かに気がついたように後

るを振り返る。素早く立ち上がると、足早にそのまま近くの階段を登っていつてしまった。

「ちょ、ちょっと！ 勝手に行かないでよっ」

フェリスを追いかけようとした所、ようやくリアナも近づいてくる足音に気がついた。

「こっちか！？ 今度こそこっちだろうな！？」

「ええ。五回も間違えましたけど、今度こそこっちですわ！」

「どうかのう。さつきも張り切って三階の突き当たりに行つたが、完璧はずれたったぞい」

「さつきから煩いですわね、このキチガイじじい！ 法廷にぶち込みますわよ！！」

「なぬ！？ じじいといかなる無礼！！ わたしやあまだ若いわ！！」

「みなさん…… 目的を忘れないでください、お願いですから……」

リアナはポカンとした顔のまま騒がしい声のするほうへ眼を向けた。

訳がわからないままそのまま突っ立っていると、大勢の使用人たちがモップやら箒やらを手にとって来た。その中の一人である侍女が勝ち誇ったように、割れたガラスドアを指した。

「ほらっ！ 言ったとおりですわ！」

「うわ、マジでガラス割れてる」

「最悪だ……このガラスの取替え俺の仕事じゃん……」

「現場検証をしなければなりませんわ！ いいですこと。皆さん、現場はそのまま荒らしたり触れたりしてはいけませんことよ！」

リアナの目の前には騒々しいを体言したような人たちが群がっている。とても愉快そうな人たちだった。

お互いに言いあっていたその愉快な人たちは、とうとう傍に立っていたリアナに気がついた。

そしてリアナを指差し、とんでもないことを叫んだ。

「「「犯人発見ッ!」」」

リアナは一斉に向けられた指先を見詰めたまま、呆然として否定することを忘れていた。

## 4 ゴアイサツ

青みを帯びて浮かびあがる部屋。その中で少女は寝台の端に腰掛けて、ぼんやりとカーテンの隙間からちらつく光を見つめていた。

寝台は驚くほど柔らかで、そのせいであまり眠れなかった。大きすぎる部屋は、走り回れる程の広さがあり、精緻な模様が彫られた調度品たちが己を主張し合って、部屋全体の雰囲気より厳かなものにする。薔薇が彫られた楕円の白い鏡台、黒味を帯びた褐色のテーブルと椅子、ワインレッドの天蓋が囲っている寝台、床を覆う北国製の絨毯——自分の場違いを痛感する。

城の一室を貰ったものの高級品の中で肩身を狭くしていると、お腹の音が鳴った。例えどんな場所に居ても食欲がある自分が情けなかった。

それにしても昨日は厄介な日だった、とリアナは思った。

自分の「願い」が叶わなかったことは、今の所はいい。その願いは一年経てば叶う見込みが出てきた。今までの希望の無さから考えれば、天と地の差だった。

だが、護衛をする相手が少々付き合いづらそうな人物であったことは否めない。肩の怪我也、幸いにして毒が盛られていなかったのが大したことはなかった。とはいえ痛かったのは確かだ。さらにガラス扉を壊した犯人に間違われ、ほんとに困ってしまったのだった。

リアナはなんとか窓ガラスを割った犯人ではないと誤解を解くことができた。しかし大勢に詰め寄られて怖い思いをしたので、少々トラウマになってしまいそうである。ついでにフェリス王子の護衛です、と自己紹介をする羽目になった際、何故だか喜ばれたのは気

のせいだろうか。

結局、なんだかんだでその後リアナは城の人たちに世話をしてもらった。

城のことなどまったく分からなかったので非常に助かった。しかし案内された部屋に十人もの侍女たちが現れたときは、流石に困惑するしかなかった。

どうやら服を着せたり風呂を手伝ったりしようとしたらしいが、恐れ多くて部屋を出て行ってもらった。むしろ妙に彼女たちの視線が怖くて、身の危険を感じたからだ。しかしなぜ同性に危機感を感じなければならなかったのかは不明だ。

そこまでしみじみと回想していたリアナは、大事なことに気がついた。

「……不敬罪で訴えられたりするかしら……？」

一国の王子に対して言葉遣いも振舞いも、今思い返せば「無礼」の一言でしかない。だがリアナとしては正直、彼に対して「偉い人」というよりも、近所の同い年くらいの少年としか見ていなかった。フェリス王子は人と言うには美し過ぎて、ぞっとするほど人の目を惹きつける容姿をしている。神の傑作に対して溜息を吐かずにはられない。

身分も、そして容姿さえ異世界の人と言っていいはずのロスネルド国第二王子。しかしとても不思議なことに王子フェリスには、ハロルド国王に感じたある種の「隔たり」というものを全く感じなかったのだ。

なぜかは良く分からない。だがリアナにはそう感じられたのだ。

「うーん、ま、いつか。今度気をつければ」

良くは、多分ない。しかし多少のいい加減さは、リアナ・レーベルトのそういう性格であった。

「あけてくださいましッ！」

ドンドンという激しく木が軋むような音に、ぼんやりとしていたリアナは驚いた。音の方に目を向けると、扉が激しく動いていた。激し過ぎて扉が歪んでいるように見えた。

「い、いま開けますからっ」

慌てて扉を開けた瞬間、リアナは後悔した。腕一杯に服を抱えた侍女たちが押し寄せるように部屋になだれ込んだのだ。

「なんですか!？」

リアナの困惑をよそに、あっという間に女性たちに囲まれてしまった。先頭を切って現れた——多分この人が扉を叩いていたに違いない——女性が持っていた服を寝台に放り投げ、すばやくリアナの手を取った。

「リアナ様！」

「はいッ？」

「絶対にわたくし、ローズ・アルト・ローラインの名にかけて、リアナ様をどこぞの令嬢にも負けない女性にしてみせますわ！」

（ちょ、ちよつと、待ってッ!？）

リアナが顔を蒼白にして固まっていると、ローズは手をパン、と叩いた。

「さあ、みなさん！ わたくしたちの腕の見せ所ですわッ」  
「はいッ！」

誰もが眼を輝かせてリアナに視線を向けた。心の底からこの場から逃げたいと思った。

危うくドレスを着させられそうになったリアナはとにかく必死だったので、とりあえず脱兎のごとく部屋を飛び出した。

だが、一度あることは二度もある。

そういうわけで、リアナはまたしても城内で迷子になってしまった。しかも今回は「戻る場所」が明確で、なおかつ「帰り方が分からない」わけなので、真正正銘の迷子であった。

ただ昨日と決定的に違うことがひとつあった。

「あの……。すみませんけど、ここはいつたい、城のどのあたりなんでしょう？」

リアナは渡り廊下を巡回していた男たちに声をかけた。彼らはリアナに気がつく、と、慌てた様子で駆け寄ってきた。

「ちよとちよつと！ お城に勝手に入ってきたちゃダメじゃないか！ 全く、どこから入ってきたんだね？」

いきなり怒られてしまった。恐らく、リアナを城に迷い込んだ一般人とも思っているのだろう。

「あ、あの……わたし、その」

「待て。この子、噂のフェリス様の護衛の子じゃないのか？」

男の一人がリアナが誰か気がついたようだった。リアナは思い切り首を縦に振った。

「何ッ。この子がフェリス様の！？ ……俺の娘と同年くらいだぞ」

男たちに囲まれ思案気に見つめられていると、廊下の反対側から情けない悲鳴と、何かが床に落ちる音が響いた。視線をそちらに向けると、床に散らばった本の中に一人の青年が倒れていた。

「大丈夫ですか！？」

慌ててリアナが駆け寄ると、青年は額を擦りながら顔をあげた。

「は、はい……なんとか……」

彼の手をとって起こしてあげる。後ろからやってきた男たちも心配そうに窺ってきた。

「大丈夫ですか、アルバートさん」

「あ、はい。お天気良かったものですから、ちよつと外を見なが

らあるいていたら、転んでしまいまして……」

「アルバートさんらしいですね。はい、こちらが落とした本ですよ」

苦笑する男たちから本を受け取ると、青年はふんわりと笑った。  
そしてとても美しい礼をした。

青年は長身で、二十代くらいだろうか。どちらかといえば地味目な色の、シャツと上着をきっちり着込んでいる。印象的なのは、一つにまとめた長い濡れ羽色の髪だった。動作のひとつひとつがとても上品である。

やはり貴族の家柄なんだろうな、と思って青年を見ると、彼はリアナにも頭を下げた。

「手をお貸し下さってありがとうございます。ええと、間違っていたら申し訳ないのですが……この度フェリス様の護衛役となられたリアナ様ではないでしょうか？」

どこまで自分の噂は城内を駆け巡っているのだろうか。呆れながらもリアナは青年に肯定を返した。

すると青年はとても嬉しそうな顔をして、リアナの両手を思い切り握んだ。

「初めまして。私はアルバート・ルノ・リゼルセムと申します。フェリス様の御付をさせていただいております。ですから、リアナ様とご一緒できる機会が多くなると思います。何卒、宜しくお願い致します」

「あの、……どうも……」

青年——アルバートの勢いにリアナは飲まれそうになる。彼があまりににこやかで、嬉しそうなのだ。それが妙に不思議で首を傾げ

た。

リアナとアルバートは男たちが仕事に戻って行くのを見届ける。

「そうだ。リアナ様、お召し物をご用意致しますから、一度お部屋に戻っていただけますでしょうか」

「……そうですよね。この服じゃあね……」

リアナの普段着。要するに、町で買った安物の衣服。城をうろつくのには悪目立ちしてしまうのも仕方ない。

「そうだ。あの、アルバートさん……」

「私のことは『アルバート』で結構ですよ、リアナ様。敬語も要りません」

につこりと青年が微笑む。実に柔らかで春の陽ざしのような笑みだった。

(……なんだか調子が狂う)

リアナは躊躇いながらもアルバートの言葉に従った。

「……じゃあ、アルバート。わたしも『様』とかいらないんだけど

……」

「いえ、これは私のけじめなのです。どうか気になさらないでください」

正直気になる。「リアナ様」と呼ばれたこともないし、そんな身分はないし、呼ばれるだけの立派な行いをしたこともない。だがどうにも青年の掴みどころのない、いや、純粋な瞳で見つめられて、嫌がる言葉をかける気になれなかった。

「……わたしの剣って、返してもらえるのかな？」

あきらめてそう訊ねると、アルバートは首肯した。

「はい、私が預らせていただいております。ではお部屋に戻りましょうか」

そう言って、迷いの片鱗も見せず真っ直ぐに部屋を目指すアルバート青年の背中、迷子リアナにとってとても頼もしかった。

流石に大勢の侍女たちはもう部屋に居なかった。ただ侍女ローズが一人で、しょんぼりとした様子で待っていてくれた。

「すみませんですわ。そこまでリアナ様が嫌がると思いませんでしたの」

申し訳なさそうに頂垂れる女性。彼女の肩から長く美しい髪がぱらぱらと零れる。

なんだかその姿が気の毒になり、リアナはにつこりと笑った。

「もういいよ、分かってくれば。朝食ありがとう、ローズさん」

机にはパンだけじゃない朝食が並べられていて、新鮮なサラダや色鮮やかなフルーツまでちゃんと用意されていた。こんなに豪華な朝食は初めてだ。

ローズはなぜか顔を真っ赤にして、がっしりとリアナの手を取った。

「リアナ様……わたくし、この身をあなた様にお捧げすると誓いますわ！」

「は？」

「ンもう！ その笑顔ってば罪ですわ！ …… ああいけない、入ってはいけない園に踏み入れてしまいそう……」

その衝撃的発言に、身の危険を感じるのだが。

リアナが自分の身に不安を覚えた時、扉をノックする音が響いた。おそらくアルバートであろう。

ローズが扉を開けるとやはり青年が立っていた。

「あら、アルバートではありませんか。 もう少し遅く来ればよかったのに……」

「はい？」

「いいえ、なんでもありませんわ。 リアナ様のお召し物をご用意してきますから、その間にお話を済ませてくださいませ。 …… くれぐれも、二人きりだからといって、変な考えをお持ちになるなんて、そんな恐れ多いことを考えないでくださいませ」

ローズに睨まれたアルバートは少し青ざめた顔で神妙に頷くと、彼女と入れ替わりで部屋に入ってきた。

「はは、どうしたんでしょうね、ローズさんは」  
「…… ホント、どうしたんだろうね……」

なぜ睨まれたか分からないアルバートが、少し羨ましかった。

リアナの心中も知らず、アルバートは手に持っていたものを彼女に差し出した。

きょんとした。アルバートが持っていた剣は、絶対にリアナが持ってきたものではない。彼女の剣はもっとボロボロで、唯一刃だけが研ぎ澄まされていただけの代物だ。

「ハロルド様からの賜りものです。この剣が貴方に武運を運んでくださるよう、ということですよ」

剣を受け取ると、思ったよりも軽かった。黒い鞘と柄、どちらにも銀の装飾が施されていて、巨匠の作品だと言ったことが素人目にも分かった。震える手で刀身を抜くと、鋭い刃が光に反射した。

「い、いいのかな、こんなにすごい物を貰っても……」

「もちろんですよ。その代わり、その剣にはフェリス様のお命がかかっているということをお忘れなく」

ちらり、と青年の顔を見た。口調は穏やかだったが、表情は実に真摯でどこか必死なものだった。

「……ええ、分かったわ。ありがとう」

急に手に持っていた剣が重くなった気がした。

## 5 護衛Ⅱ雑用？

朝日が目に痛い。身支度を終えて顔を洗ってはみたが、どうしても周りがぼやけて見える。

普段書類や書物に目を通したり、書き物をしたりするために使用している部屋の中央に、一対のソファが置かれている。その片方に座り、気だるさを振り払いながら視線を眩しい窓の外から、目の前の丈の低いテーブルに映す。

テーブルには既に朝食の用意があつた。しかしとてもではないが今それを食べる気にはなれなかった。

「フェリス様、お早うございます」

いつのまにか、青年が扉の前に立っていた。いいや、おそらく彼はノックをしたはずだ。だが青年に呼ばれた少年——フェリスは、ノックの音に気がつかなかったようだった。

まだ頭が上手く働いていなかったフェリスは随分と時間をかけた後、御付きのアルバートに挨拶の返事をした。

「今日は嬉しいことがありますよ。フェリス様に『護衛』がお付になられるんです」

フェリスはため息をつく。わざわざアルバートに言われるまでもなく知っていることだ。最悪なことに、一度その相手と顔も会わせている。

「今お着替えなさってますから、すぐにこちらへ来られると思います。とっても可愛らしいお嬢さんでしたよ」

「……お前は会ってきたのか」

わざわざ会いに行かずとも、この部屋に居れば向こうから来るだろうにご苦労なことである。

「それがですね、廊下で偶然お会いしたんです。私が転んだところをみられてしまつて恥ずかしかったのですが……」

「……それで、頼んでいた物は？」

フェリスが訊くとアルバートは慌てて手にしていた書物をフェリスに差し出した。本を受け取りつつ、フェリスはテーブルに並べられた朝食に視線を向けた。

「フェリス様、ちゃんと朝食はとってくださいね。せめてパン一つは頂かないと身体に悪いですよ」

「……」

「お召し上がりになられるまで、朝食はこのままにしますからね」

以前も食べる気になれずに朝食を放置していたら本当に昼までそのままだったので、フェリスは諦めてクロワッサンに手を伸ばしそれを口に運んだ。

主人が食事をとっている傍ら、アルバートはお茶を淹れ始めた。茶葉の心地好い香りが部屋を満たす。

「フェリス王子、ローズでございます。護衛役のリアナ様をお連れ致しました」

扉越しに侍女の声が聞こえた。フェリスは一口だけ頂いたパンを机に戻すと、深々とため息を付いた。

自分で返事をする気にもなれず、アルバートに視線を向ける。

「どうぞ、お入りください」

フェリスの代わりにアルバートが返事をする、侍女ローズ・アルト・ローラインが一人の少女を伴って部屋に入ってきた。ローズは滑らかなお辞儀をすると、とても満足げな顔で隣にいる少女を見た。

「こちらが、リアナ・レーベルト様ですわ。どうです、フェリス王子。とっても可愛い方でしょう?」

ローズよりも背の高い少女。茶色の髪に琥珀色の瞳、そして青色の制服を着ていた。腰には真新しい剣がさげられている。

「護衛役に相応しい恰好ですと、厳つい感じになってしまわれるでしょう? リアナ様の可愛らしい所を引き立たせる服を探すのに苦労しましたわ」

「本当にお似合いですよ、リアナ様」

「……ありがとう」

アルバートに褒められて、少女——リアナ・レーベルトは弱々しく笑った。

「別に良いけど……もう、今更だけど……護衛なのにスカートってどうなのかしら……」

「素敵ですわ! 裾が翻る感じが可愛いのですよ! できればフリルだって欲しかったんですからッ」

時々この侍女は可笑しなことを言う。おかげでフェリスは頭痛がするような気がしてきた。

「今更、挨拶はいらない。面識はある」

「……あの、フェリス王子。ちょっと良いですか？」

リアナ・レーベルトが躊躇いがちに声をかけてきた。昨日と態度さくじつが違う。フェリスは訝しげに少女を見た。

「なんだ？」

「その、昨日は大変な無礼というか、あまりその、作法とかは習ったことがないので……不愉快な気持ちをさせてしまったかもしれないが……あの、気にしないでもらえますか？」

「……」

少女の表情が半笑いに見えた。

謝ることに關してはひとまず置いておくことにして、その「謝る態度」のなっていない事はどうだろうかとフェリスは思った。

だいたい「気にするな」ではなく、普通は「すみません」などと謝るのが普通だし、もしかしたら謝っているつもりすらないのだろうか。

「……慣れない言葉を使わなくて良い。むしろその言葉遣いは、俺のことを馬鹿にしている気にさせられる」

「はあッ！？ ……い、いえ、そんなつもりはないんですけど……」

フェリスは再びため息を付くと、はっきりと言ってやる。

「だからその人を苛立たせる言い方を止める、と言っている」

少女の顔は引きつり数瞬持ちこたえていたが——結局、彼女は叫んだ。

「止める」ですって!？」

リアナはフェリスの前まで詰め寄ると、失礼なことに指を向けてきた。

「あんた、こつちがちゃんと謝ってるのに、何よその態度！王子だからっていい気になってんじゃないわよッ！」

なぜかリアナの姿を見て、ローズは両手を組んで彼女を見つめていた。

「ほお、それが本音か。お前のその態度が俺はともかく他の王族貴族たちに通用すると、思わない方が賢明だぞ」

「なんでよ！ちゃんと下手<sup>したて</sup>に出てたじゃないッ。どこが悪いのよ！」

「表情、姿勢、誠意と言ったところか」

「細かい男ねッ。それにちゃんと悪いと思ってるわよ」

「どこがだ。どうせ形だけでも謝ればいいとか思ってたんだろ」

「そ、そんなことないわよ。あんたさ、もうちよつと人の気持ちを素直に受け取ったらどうなの？」

「素直に受け取る以前の問題だ。出直してこい。いや、二度と城に来るな」

「なにそれ!？ は、腹が立つわね！」

流石にこれ以上部屋の空気が悪くなるのはよろしくないと思ったのか、アルバートが二人の間に割って入った。侍女はいまだに恍惚とした表情をしている。

「あ、あああのですね！ お茶の用意が出来ましたから、よろしければいかがですか？」

フェリスは肩を竦めてソファの背もたれに寄りかかった。リアナもアルバートに言われしぶしぶ口を閉じる。

今のやり取りで、フェリスはすっかり目が覚めたようだった。お茶を一口飲むとソファから腰を上げる。

「俺は仕事をする。アルバートは後で資料室からレギオス国とセント・フィリア法王国の地図を持って来てくれ。ローライン、お前は下がって良い。……それから」

リアナに視線だけを向ける。一瞬彼女は身構えた。

「お前は俺の邪魔だけはするな」

「なんですって!？」

意外なことに彼女はそれ以上言い返さなかった。だが目つきは到底穏やかなものではなかった。

ローズがしぶしぶながら部屋を出て行くと、自然と部屋は静かになる。フェリスは執務用の机で書物に目を通していたし、アルバートも主に言われた地図をすぐに取りに行ってしまった。護衛であるリアナといえば、立っているだけ、である。

あまりに手持ち無沙汰だったのだろう、リアナは恐る恐るという様子でフェリスに声をかけた。

「ねえ。なんかわたしも手伝おうか？」

「邪魔するな、と言った」

「邪魔してない! ……暇だし、掃除でもしよっか？」

呆れて顔をあげた。

「護衛」などという仕事をしてもらいたくはないが、だからといって仮にも「護衛」という仕事に就く者が「暇」などと言うとは信じがたい。掃除に関しても、毎日アルバートか侍従・侍女がしている。リアナが掃除しても、二度手間になるだけだ。

「いない。大人しくそこに立っている。立つたまま何もするな。それがお前の仕事だ」

「そうだけど……。じゃあ、聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「聞きたいこと？」

へらへらとあるいは不服そうな表情を浮かべていたリアナが、真顔になった。

「昨日の犯人は、分かったの？」

フェリスは書物に視線を戻すと、淡々と応えた。

「矢を投げつけてきた馬鹿な輩は騎士たちが捕まえた。今頃口を割らせているところだろ」

「なんでフェリス王子のことを狙ってるの？」

本を閉じて、椅子を少女の方に向ける。

「別に俺が特別なわけじゃない。第一王子であるエリオルも最近狙われた。国王もそうだろう。……犯人から聞くまでもないさ。今回は恐らく、“ガランド”の取り締まりに不満を持つ奴らの仕事さ」

“ガランド”？

「王都からそれほど離れていない場所にある、不法地帯のことだ。」

都から近いにもかかわらず、ガランドの荒れ方は酷くてな。しかもそこには中々手ごわい裏の統治者がいて、国王と言えども迂闊に手を出せなかったんだ。どうやら他の王族や貴族たちも一枚噛んでい  
るらしい。それでも、とうとう国は、効果は薄いとはいえ手を下  
した」

「えっと、何かを禁止したの？」

「禁止、というよりも、飽く迄“警告”だな。販売禁止商品の売買、身売り、当然ながら殺人や傷害罪の類などの違反を犯した者は罰則に処する。当たり前のことだが、それをガランドに言い渡してやった訳だ」

リアナは吃驚したようだった。

「それだけ？ ハロルド様が『誰かを捕まえた』からとかじゃなくて、警告したから、だからフェリス王子たちが命を狙われるの？」  
「一応は騎士たちの目は前より厳しくなったがな。……しかし、取締りが厳しくなったから、というよりも……まあ、自分たちのプライドが傷つけられたとも思ってるんじゃないか？ 事実上、自治区の扱いをされていたからな。腹いせに息子の俺たちも殺してやりたいんだろう」

「何よそれ！？ 馬鹿みたいッ！」

リアナの言うとおりだ。確かに、『馬鹿みたい』だ。

だが現実には、『馬鹿みたい』なことが当たり前に起こる。勝手に命を狙われることは、自分が城に住み「王子」という地位にいるならば、背負わなければならない宿命だ。

だからこそその宿命を、誰かが自分の身代わりに背負うことはないのだ。

「……やはり、お前に仕事を与える」

「え？」

「俺はお前を“護衛”と認めないと言った。だから、お前のことは俺の“雑用係”として扱う」

「はぁ！？」

「そういつわけで」

フェリスは引き出しから少し皺がある紙束と、真新しい紙束をリアナに渡した。

「ここに書いてある走り書きを清書している」

「嫌よッ！　なんでわたしが雑用なんて」

「“暇”だと言ったのはお前だ。“暇つぶし”を与えてやってるんだ、感謝しろ」

「か、感謝“しろ”ですって！？」

そして再び起こった二人の言い争いは、部屋に戻ってきたアルバートが留めに入るまで続いていた。

## 6 騎士たちの名(1)

男は鼻歌を歌いながら城内を歩いていた。その後ろを彼よりもういささか若い――若すぎる青年が、慌てた様子で追いかけてくる。

「先輩！ どこに行くんですか？」

男は後ろを振り返ると、白い歯を見せて笑った。

「フェリス王子のところだ」

「フェリス様の！？」

男が再び前を向いて歩き出したので、青年は急いで肩を並べた。

「……先輩、まさかまーた王子に失礼なことしようとしてるんじゃない。ありませんよねえ？」

青年は不安げな表情で男の顔を窺った。さつきからにこにこニヤしてるので、なにかよからぬことを考えている気がしてならない。

しかし意外にも、男は青年の問いを否定した。

「いやいや、説教はこの間のでりた」

「じゃあなんで王子の所に行くんですか」

「ばっかだなあ、タクト。お前さんは男のロマンってヤツが分かってねえ！」

ビシッ！ と男は指を青年の前に突きつける。青年は嫌そうな顔をした。

「先輩の言う男のロマンは、あまり一般的なロマンじゃない気がするんですけど」

「うるせえ！」

後輩の指摘に男は鼻を盛大にならずんずんと先に行ってしまった。怒っているのか、凶星だからか。多分両方だ。

青年は正直男の事を放っておこうと思ったのだが、また厄介事を引き起こされたら堪らないので、仕方なく男を再び追いかけた。

「フェリス様、お聞きになれていますか？ 遠征に出かけていた騎士の皆さんが、今日城に戻られたそうですよ」

「……そうか」

フェリスの部屋で今日もお茶を淹れているアルバートを、起きたばかりの部屋の主はぼうつとしながら見ていた。その傍ら、リアナは口にパイを放り込みながら尋ねた。

「そういえば、ここの騎士ってレギオス国と戦ってたって聞いてたんだけど」

「……口にもものを入れたまましゃべるなど躓けられなかったのか？」

「はいはい、教わりました。すみませんねえ」

フェリスに呆れられた。しかしリアナが護衛になってから一週間と少し、彼に呆れられることがあまりに頻繁であったので、よほどのことがない限り気にしない方向で行くことにしたのだった。

「でもさ……攻められているコプト国って、確かロスネルド<sup>うち</sup>の同盟国じゃなかったよね？　むしろ、セント＝フィリア法王国と仲良かったと思ってたんだけど違うの？」

リアナの疑問に答えたのは、やはりアルバートだった。

「そうですね。ですから騎士の皆さんが帰られた今でも、レギオス国とコプト国の戦争は終わっていません。騎士の方々の目的は、コプト国から程近い『ルピ』とよばれる島国にいらっしゃった、ルーアン公爵の救出ですから」

「え？　救出のためなの？　でもその公爵さんは何でそんないかにも戦争が起こりそうな場所に居た訳？　コプトってレギオスから近い島国じゃない。それにレギオスがかなりの好戦的な国だって、小さな子供でも知ってるわよ」

「それは……その、ルピは大変美しい小さな島国だと聞いております。以前から公爵様はお休みがあればそちらに足を伸ばしていたそうで、ですから時期が悪かったといいますが、なんといいますが……」

「要するに、公爵が馬鹿だったことだろ」

「フェリス様！」とアルバートが彼を諫めようとしたが、当のフェリスはまだぼんやりとした眼差しのまま壁を見つめていた。

しかし急にフェリスはその寝ぼけ眼をリアナに向けた。

「……どうしてお前が俺の朝食を口にしてるんだ？」

リアナは肩を竦めた。今更過ぎる。

「さっきから食べてるわよ。それにこのやり取り、ここ一週間毎朝

やってるんだけど」

弁解すれば、なにもリアナの食い意地が張っているからフェリスの朝食を奪っているわけではない。ついでに朝食のみならず、フェリスが口にするものはリアナが一度口にしたものである。

要すれば、彼女は「毒見」というものをしている訳である。もちろん厨房を出た食事はきちんと毎回、フェリスの意思がどうあれ毒見係が口を通してある。そしてその食事のほとんどはローズが運んでくる。

それでも念には念を、そう思ってリアナは毎回「美味しい食事」にありついていくのだ。……もちろん、自分の分の食事はきちんととってはいるが。

フェリスはやつと目が覚めたのか、眉間にしわを寄せるとリアナが手にしていたパイをひったくった。

「勝手に食べるな」

「王子の癖してパイ一つにケチくさいわね」

リアナが文句を言っていると、いきなり部屋の扉が開いた。ノックもなしに、それは豪快に。

「おーす！ フェリス王子ご機嫌いかが！」

部屋に響くほどの大声。リアナとアルバートは突然の闖入者に驚いた。だがフェリスといえば一瞬で不機嫌な顔つきになる。

入ってきたのはなかなか立派な体躯の男だった。騎士団の深緑の服を着ているので、騎士の一人なのだろう。服の色よりもっと深い色の瞳はどうやら楽しげに見えた。

「……この間言ったことを覚えていないようだな？」

フェリスは男を睨んだまま、低い声でそう言い放つ。一方、男はそんなフェリスの様子もかまわず、ソファに座ったままのフェリスの目の前までやって来た。

「いやいや、覚えてますって！ 身体じゅう鎖で縛って湖に沈める、ってのはマジ勘弁なんで。あ、そんな心配なさらんって！ 今日用があるのは王子じゃないですからねッ」

男は軽々しく言っているが、鎖で縛って湖に沈めると言うのはどうかとリアナは思った。本当にフェリスが実行したら嫌だ。

「先輩ッ！」

声のした方を見ると、リアナとさほど年齢の変わらないであろう少年が慌てた様子で中に入ってきた。一度部屋に飛び込んできた勢いに任せてフェリスに頭を下げると、がっちりと男の腕を掴んで外に出ようとする。

「なにすんでえ！ タクト、手エ離せよ！」

「ダメですよ！ 何また迷王子に惑かけようとしてるんですか！先輩仮にも騎士団員でしょ！？」

「ばかやろッ。だからだろ！？ 男のロマンを邪魔するヤツはこうだ！」

男は少年を羽交い絞めになると、首を絞め始めた。

「せせせ先輩いい！ や、やややめッ……」

「あつはつは——！！ どうだあッ！」

（どうだ、じゃないッ！！）

リアナは心の中でそう叫んだ。実際、少年の顔は青白くなった。流石にまずいと思ったのか、アルバートがそこに割って入る。

「あ、あの、コイズさん。その、タクトさんが苦しんでらっしゃるので、その辺で……」

「あん？ アルバート、気にするなよ。騎士団員たるもの、こんくらいでへバったり……ってアレ？」

少年は青白い顔のまま動かなくなった。

「……」

部屋が静まり返った。

「大丈夫ですか！？」

アルバートは血相を抱えて少年に駆け寄る。リアナも流石に慌てそれに倣う。顔を覗くと少年は白目を剥いていた。

「まったく、気合がたりねーな。こんくらいで倒れるなんてまだまだだな」

「まだまだっていう問題！？」

心配するどころかやれやれといった様子の男に、リアナの表情は引きつった。そこに冷静な声色が入る。

「どうでもいいが、騒ぐのは別の場所にしろ」

どうでも言い訳は無いと思うのだが、フェリスはかなり怒っているようで、そのままりアナから取り上げていたパイを握りつぶした。相当面白くないらしい。

しかし男はフェリスのことなど気にすることもなく、馬鹿笑いをした。

「そんな怒んнатて！ どっちにしる騒ぐのは演習場だしな！」

アルバートが少年を揺さぶると、少年は疲れたような表情をしながらもなんとか生き返った。

「ああ、ありがとうございます、アルバートさん…… って、先輩！？」

とうとうに少年は怒ったらしい。というより当たり前だろう。再び男の腕を掴む。

「これ以上迷惑をかけるのは止めてくださいっ！ 帰りますよ！」  
「ったくうるせーな。戻るよ、戻る」

邪険にしながらも男がちゃんと答えてくれたので、少年はほっと息を漏らした。

男はくるりと身体をリアナに向け、彼女の肩に手を置いた。

「おしッ。じゃあ行くか！」

「はい？」

（いきなり、なに！？）

リアナの混乱をよそに、男はぐいぐいと引つ張る。

「いやー楽しみだなー。今から楽しみでしょーがねーよ!」

(だから、何がッ!?)

訳がわからず抵抗を忘れたリアナに代わり、少年が男の前に立ち塞がる。

「せ、先輩! なに女の子浚おうとしてるんですか!?!」

「はあ!?! 俺は年上のほうが好きだ! 貧相な身体のカキよりも、もつとふつくらして気持ちいい身体の女の方がいいッ!」

「意味不明な回答しないでください!! しかもこんな所で力説するなッ!」

「いますッ! ごく失礼な事言われたんだけど!」

リアナも真面目に怒った。しかし男は二人の声も聞こえないのか、涼しい表情でフェリスに声をかける。

「フェリス王子ー。悪いけど俺らと一緒に来てくれる?」

「断る」

即答だった。しかし男はめげない。

「そんなこと言うなよ。別にお前さんに何かして欲しいんじゃない、王子がきてくれないとコイツ」

そう言いながら男はリアナを指す。

「も来れないからさ。この子、王子の護衛だろ？ だからさあ、な  
？ 演習場に行けば騎士がごまんといるから王子の危険もなくなる  
しッ」

「何の話だッ！？」

リアナと少年の叫びが重なる。

男はフェリスに顔を近づけた。そして少年の耳元でなにやら呟く。

「……………」

フェリスは無言で目の前の男を睨んだ。男は笑ったままだった。  
やがてため息が聞こえたかと思うと、フェリスは立ち上がった。

「……………なるべく早く終わらせろ」

「そーこなくっちゃ！」

「じゃーいくぜ」と言いながら、男はがっしりとリアナの腕を掴  
んで引つ張っていく。訳のわからない展開にリアナは抗議の声を上  
げる。

「ちょっと、いったいなんなのよッ！？」

すると、意外にもリアナの疑問に答えたのはフェリスだった。な  
ぜか彼は上着を持って、リアナたちの後ろをついて来ていた。

「お前はこれから、そいつと手合わせするんだ」

「…………？」

暫くしてからリアナは聞き返した。

「……手合わせ?」

どういう事<sup>ワケ</sup>なんですか、王子サマ?

## 7 騎士たちの名(2)

ロスネルドの居城と同じ城壁の中に、騎士たちが毎日の鍛錬を行う演習場はある。

ただつひろい平地。土が敷き詰められているだけの場所。そういつたらお終いなのだ。それでも整備は常にされている。近くには騎士たちのための宿舎やそれに連なった食堂、厩舎、武器庫もあった。

騎士に連れてこられた演習場には、同じ深緑の制服を着込んだ騎士たちが興奮気味に集まっていた。リアナは知らなかったが、若い騎士たちはほとんど見習いの身であった。

あまりの人数に熱気が辺りを漂う。目の前の男も嬉しげでとても楽しくて仕方がない、といった笑顔を浮べていた。

「おい、貴様ら！ さっさと仕事に戻らんかッ！」

仕事熱心なリーダー格の騎士もちゃんとして、叫んでは若い騎士たちの群がりを散らそうとしてはくれたのだが、正直誰もそれを聞いていない。

リアナはほとんど「手合わせ」とやらから逃げられないんだろうと思っていた。

周りは囲まれているし、なにしろ目の前の男がそれを許さないだろう。ついでにフェリス王子にも後で嫌味の一つ二つを頂くかもしれない。しかしいつたいなぜこんな状況に身を置かなければならないのか、全く持って謎だった。

ため息をついたリアナは、仕方なくまだ実戦に使われていない新しい剣に手をかけた。

一応は手入れをしてある。だが慣れるために何度かは素振りをしていたとはいえ、まだまだ新品に手は馴染まなかった。それでも手にしている剣はただの剣ではない。王より賜りし名匠の傑作だ。使いやすさは不気味と言っていいほど良い。

少女が逃亡を諦めたのが分かったのだろうか、目の前の男は帯剣をゆっくりと引き抜いた。刃が太陽の光に当たって一瞬強い輝きを放つ。

「そっぴゃあ自己紹介がまだだったよな。俺、ロスネルド王国専属騎士団親衛第2隊所属、コイズ・ヴァレンシュタインだ。よろしくな」

やたらに長い名前の役職だなと思いつつ、リアナは取りあえず自分も名乗るのが礼儀だろうと思った。

「えっと……わたしはリアナ・レーベルト。フェリス＝R＝レイファール＝ロスネルド王子の護衛……です」

言い終わって、リアナはフェリスの名前を間違えなくてよかったと思った。昨夜ローズから丁度間違いを指摘されて、矯正されたところだった。間違えたら流石に自分自身で血の気が引きそうだ。

当の護衛対象の王子フェリスは、コイズに振り回されている騎士の若者タクトが慌てて用意した椅子に座っていた。ひさしのある場所に設置された即席にしてはなかなか立派な椅子だった。そこでフェリスは優雅に本など読んでいる。良いご身分だ。全くりアナたちの方に興味がなさそうである。

アルバートは御付なのでもちろん王子の傍らにいるが、目が合うとちゃんと手を振ってくれた。王子とのこの違いはなんだろうかと思ったが、手を振るなどという友好的な態度をフェリスがとるわけ

がないので期待どころか想像するだけで馬鹿らしいと気がついた。

そしてアルバートの隣にはリアナが同じ年くらいの少年だと思っていたタクト——タクト・ノーライツ・ザハロフが立っていた。

彼とちよつど話す暇があつたので尋ねてみると、なんと彼は21歳であつた。聞いたとき正直嘘をつかれていたのかと思つたが、どうやら本当らしい。所謂「童顔」というヤツだつた。犬みたいに可愛らしい顔をして下手をしたら年下に見えなくも無いのに意外な事実だつた。

（詐欺つてやつよね……）

リアナが色々考え事をしている間に既に場は一種の緊張が張り詰めていた。それに再びため息をつく。

「よゆうだなあ？」

コイズは笑いながらも目が本気だ。リアナは肩を竦めた。

「余裕つていうか……こういう見世物は剣術大会で十分なのに」

「はは、そりゃ悪かつたな。でも俺その大会出れなかつたからさ」

そうだろうな、と思つた。手合わせしなくても分かる。コイズがいたらリアナは優勝など出来なかつただろう。

それにそもそも、リアナが出場した剣術大会は「不完全」な大会であつた。

ローズから聞いた話だが、リアナが優勝した剣術大会には、大会の目玉とされていた騎士団の中でもトップを張る騎士はいなかつた。その時彼らはレギオス国から公爵を守つていたのだ。ある意味彼女にとっては大変幸運な状況だつたのである。

「なんでわたしと手合わせしたいかわかんないけど……その理由が大会優勝者だからってのは買いかぶりだからね」

「まー、運も実力ってヤツだぜ？ それに大会に出てたヤツだって、うちじゃあそこそこの名のあるヤツだって出てたんだから。ところでさ」

コイズは笑みを保ったまま剣の柄に手を当てる。

「そろそろさ、話じゃなくて試合、したいんだけどな」  
「分かったわよ……」

リアナは観念して剣を握る。コイズはすつと目を細めると笑みを消した。強い視線を正面から受け止める。

しばらく二人は睨みあったままだった。心臓の音がやけに煩い。微かにコイズが足を動かしたのが見えた。リアナは身を後ろに引きながら、剣を身体の前に庇うように構える。

一瞬の後、身体に鈍い衝撃が走る。身体全ての力が剣に集中する。

力技では勝ち目が無いのは分かりきっている。素早く相手の剣を崩し、コイズの右腹を狙う。

だが長身でガタイの良いことも歯牙にもかけないのか、驚くほど速くコイズは態勢を整え、リアナの放った一撃をかわす。ジャリ、と相手が地面を踏んだのが分かった。

守備の後の間の無い攻撃への切り替え。目の前の騎士はそれを容易くやりこなす。見かけによらず動きもしなやかで、力も十分すぎるほどある。

付け入る隙はあるか？

リアナが力で勝てるわけは無い。素早さを逆手に取ろうとしても、相手も同じくらいの動きをする。隙をつくらそうとしても、用心深くガードをとる。

剣技は相手の方が上手だ。

リアナは下段の構えから上方へ剣を振り上げた。コイズは反応よくそれを避けるために一歩引く。

さて、勝機はあるか？

そもそもリアナがコイズに勝たねばならない理由は無い。ただ「試合をしろ」とフェリスに言われた、それだけだ。

コイズが一步を踏み出した。とっさに間合いを崩さないように同じだけ後ろに下がったリアナは焦った。

違う、二歩、だ。

リアナが一瞬うろたえたのを尻目に、コイズはガードをかなぐり捨てて二歩目を踏み出した。取ったはずだった十分な間合いは、その一步に崩される。

しまった、と思うよりも速く身体の方が反応をしていた。

リアナは迫った刃を、避けなかった。

どこか遠いところでざわめきがした気がした。だがリアナは痛みを捨てた。

「——ッ!？」

リアナが避けなかったことに一瞬動揺したのである。コイズの動きは鈍った。そこをリアナは逃さなかった。

二人は動かなかった。一人は相手に刃を突き付け、そしてもう一人は刃を突き付けられていたから。

感じるのは硬質な剣の感触だけだった。

「……参ったな、こりゃ」

小さな笑い声にはつと我に返った。心臓が煩いくらいに騒いでいるのが分かる。汗が、額を流れた。

顔を上げると楽しげで、そして悔しげな顔をしたコイズが、身じろぎせずにリアナを見つめていた。

「わりいけど、ソレ、下ろしてくんねえと動けないんだけど」

コイズの首元には、鋭い刃が触れんばかりに紙一重で突きつけられていた。そうしているのが自分だと遅まきながら気づくとリアナは慌てて剣を下ろした。

リアナはやっと周りが息を呑んで自分たちを見ていることに気がついた。

「親衛隊員のくせに無様だな」

いつから見ていたのだろうか。本を読んでいたはずのフェリスは演習場の真ん中にいるコイズを見つめ、緊張感の名残が続くその場に物怖じせずに言い放った。

王子の一声が緊張の糸を断ち切ったのか。周りが湧くように喧騒

を帯びた。騒がしさの中コイズは剣を鞘に収め、椅子に座っている王子を半眼で睨んだ。

「すみませんねえ……無様で」

「自覚があるだけマシか」

「なんだとッ!？」

コイズがフェリスに詰め寄るのに対して、アルバートがリアナの傍に駆けてきた。そしてアルバートは慌てた様子で手にしていたハンカチでリアナの腕を縛り上げた。

「何してらっしゃるんですか!？ 怪我までしてやることじゃありません!」

怒られてリアナは呆然とした。温厚そうなアルバートも声を荒げることあるらしい。なんだか申し訳なく思ったが、こうするしか勝てなかったのだ。

手合わせを観戦していたタクトも傍にやってきて、持っていた救急箱をアルバートに渡した。

「いやー、しかしリアナさんすごいですね。あの先輩を負かしちゃうんですから」

アルバートに応急処置をされながら、リアナは頬を指で搔いた。

「うーん、ちょっと卑怯っぽかった気もするけどって、いたたッ」「そうですか？ 堂々とした剣さばき、みんな見惚れてましたよ？あの先輩を目の前にして、あれだけ物怖じしない姿はカッコよかったです!」

「冗談じゃ在りませんよ。恰好なんて問題じゃありません。みなさ

んが何を考えてらっしゃるのか、私には分かりません」

アルバートは不機嫌そうに言い切った。興奮した様子だったタクトは少し怯えたようだった。

「でもわたし護衛だし、これからはもっとそういう事増えると思う」

そういえば前にも似たような台詞を言ったことがあるな、とリアナは思った。アルバートといえば一転して深いため息をついた。

「分かってますよ。御付の私としては、コイズさん程に強いリアナ様が、フェリス様の護衛をなさって下さる事は嬉しいです。でも、だからといって無闇に怪我をなさることは感心致しかねます」

「……」

リアナは何も言わなかった。アルバートはきまりが悪くなったのか、小さく頭を下げた。

「……でしゃばった事を申しました。お許してください」

リアナは首を思い切り振った。

「ううん、謝ることなんてない。わたし、アルバートがそう言うてくれて嬉しい。仕事の時は仕方ないけど、遊びで危険なことをしないように気をつけるわ」

アルバートはほっとしたように優しく微笑んだ。

「アルバートって、意外と厳しいところあるんだよなあ」

くくつと笑いながらコイズが戻ってきた。フェリスに口で勝てたとは思わないが、機嫌は悪くはなさそうだった。

「優しいからこそ厳しいんじゃないんですか？　っても、ちょっと怖かったけど……」

タクトは苦笑しながらそう言う。確かにとリアナも思った。

「談話中悪いが、もう流石に部屋に戻っても構わないだろうな？」

コイズの後ろに本を手にしたフェリスが仏頂面で立っていた。機嫌が悪そうなのはなかなか部屋に帰れないからだろう。

それにしても、いかにも面倒くさそうな様子をしているにもかかわらず、なぜフェリスはわざわざ演習場まで来たのだろうか。フェリスならきつと嫌なら嫌と言うはずだ。

思い起こせばフェリスが手合わせをしろとリアナに言った時、コイズが何かをけしかけた風にも見えた。

リアナは立ち上がって尋ねてみた。

「ねえ。さっき部屋で、コイズになんて言われたの？」

するとフェリスは仏頂面から、どこか苦虫を噛み潰したような顔になった。そしてそのまま踵を返してさっさと城の方へ戻っていつてしまった。その後を慌ててアルバートが追う。リアナも追いかけてようとしたが、その前にコイズに振り返った。

「あの時フェリス王子になんて言ったの？」

「ん？　ああ、聞きたいのか？　っても、ヘタに言うと俺が怒られそうだしな……」

だがコイズはにーっといたずらっ子のように笑った。

「まあ、俺は負けた身だし。特別に教えてやるよ」

コイズはリアナの耳に手を当てて教えてくれた。

「『あの子の実力を目で見るいい機会だぜ？ あの子が強ければ強いほど、お前さんの心配は減るんだろ？』……って言ってやったのさ」

リアナは目を瞬かせてコイズを見上げた。コイズはぐしゃぐしゃと自分を負かした少女の頭を撫でた。

「そーゆーことだ」

「ちょ、っと、止めてよ！」

「それからな、今度手合わせする時は容赦ないからな。ぜってえ負けないッ！」

コイズは強く拳を握った。そこにタクトが言葉を挟む。

「しかし先輩、リアナさんに負けたから当分の間大きな顔できませんね。けーつきよく、ゴタゴタ起こしたから後から隊長に呼び出されるのも必至ですし」

「うがぁ——ッ！！ 試合には負けたし、そんなの踏んだり蹴ったりだッ！」

自業自得ってやつだ。リアナはくすくす笑いながら、今度こそフエリスに追いつくために城に向かって走って行こうとした。だが今

度はコイズに止められた。

「リアナ！」

「ん？」

振り返ると、少し申し訳なさそうな表情のコイズ。

「怪我、悪かったな」

普通に話しているが、実際は結構、腕が痛かったりする。でもリアナはにっこり笑った。

「コイズの不幸に比べれば、なんてことないよ」

「んだと！？」

試合も、まあたまには悪くない。

リアナは今度こそ本当に駆け出した。

部屋に戻ると既にフェリスは演習場に居た時と同じく、本を読んでいた。

「アルバートは？」

リアナがきよろきよろと周りを見渡しながら訊ねてみると、フェリスはちらりと視線を上げて答えた。

「お前が怪我したから医師を連れてくると出て行った」

「えっ。足を怪我した訳じゃないから、自分で行くのに……」

「……怪我は、痛くないのか？」

リアナは固まった。

（今、なんておっしやいましたッ！？）

リアナが頭の上に疑問符を浮べている間も、フェリスはその心中を伺え知れない、実に感情の起伏のない声でもう一度尋ねた。

「痛いかな、痛くないかな、それも分からないほど怪我が酷いのか？」

「え、や、その、痛いけど、でも、そんな悲鳴を上げるほどでもないかなッ！」

なぜだか慌てて答えてしまった。彼に心配されることは全く予想していなかったのだ。

アメジストの瞳が探るようにリアナを見つめてくる。それに少し、どきりとした。

「ほ、ホントよ？ 前に腕をひどく怪我した事あるからどれくらい悪いのかは分かるのよ」

さらに不必要だとは思いつつも言い訳をしたくなつたのだが、そうする前にアルバートと白い上着を羽織った恐らく医師がやって来た。

その後、リアナは有無も言わず腕は包帯でぐるぐる巻きにされてしまったのだった。



## 8 月のない夜

自室にある豪華な椅子に座りながら、リアナはりんごをフォークで突き刺した。隣に居るローズはハンカチを目に当てて泣いていた。

「リアナは女の子なんですわよ？ 肩の次は腕を怪我なさるなんて……そのお肌に痕が残ったらどうするんですの！」

「しょうがないじゃない……。それにわたし結構怪我とかよくするから、今更惜しむものでもないし」

「そんなこと仰ったらダメですわ！ こうなったら今日はマッサージを致しましょう！ 薔薇でつくった蠟燭を灯した中でリラックスしながらするのがオツなのですわよ」

今まで泣いていたかと思えばほろりとローズの表情は変わる。ハンカチを懷にしまいうきうきとした顔になった。

「生誕祭の頃になれば商人がいつも以上に城に来ますから珍しい蠟燭が手に入るかもしれませんわ。わたくし、果実が入ったものを欲しいんですの」

「……生誕祭？ 誰の？」

ローズは本当によく表情がころころ変わる。彼女は呆れ果てたようにリアナを見やった。

「リアナ。仮にもロスネルド国民なら自分の王様の誕生日くらいちゃんと覚えておきなさい」

「そっか……。そう言われてみればハロルド様の誕生日はターコイズ月の27日だっけ。地方の小さい町でもお祭りするけど、なんかもう王様の誕生日って言うか一種の行事になっちゃってて、『誕生日』

つてより『祭の日』って感覚しかないのよね」

「まあ。でもリアナは王都での誕生祭は初めてでしょう？ 王都のお祭りはすごいですわよ。この日のためにわざわざ王都まで足を運ぶ方が大勢いますもの。出し物だってお店だって、すごいんですからッ」

「それは楽しみだわ。でもあの王子が城下なんかに行くかしら……」

リアナがフェリスの傍に居なければならないなら、彼が祭りに行く意思を持ってくれなければ城下にはいけないだろう。しかも祭の日など人が多いから余計に危険だ。そもそも祭りを楽しみにしているフェリス王子を、想像ですらできない時点で危険以前の話だ。

「い、行けなさそう……」

「それは……。で、でも、リアナ、落ち込まないでくださいな！ お城ではちゃんと陛下のパーティーをしますから、そちらを楽しみましょう。リアナはフェリス王子の護衛ですもの、絶対にパーティーに参加できますわ。それならフェリス王子が出ないということはありませんし」

公務というヤツか。王子様も大変そうだ。

「まあ、まだ二ヶ月以上あるし気が早い話だけだね」

「そうです？ 祭りやパーティーの準備でわたくしたちは今から大忙しですわよ？ そのうち城中がバタバタし始めると思いますわ」

リアナとローズがあれやこれやと夕食後の談話を楽しんでいると陽が落ちてから一つ目の鐘がなった。鐘の音を聞いてローズは慌ててテーブルに広げてあった食後のデザートを片付けた。

「リアナ、ごめんなさい。わたくし今日は配膳室の方のお手伝いに

行かなければなりません。『噂の公爵』様が急遽お城に来ているものですから、他の予定のあったハロルド様が、わざわざ、暇をつくって、おもてなしなさっているの」

皮肉たつぷりだ。いったい「噂の公爵」とはどんな人なのだろうか興味が湧く。だがただの護衛であるリアナが公爵とやりに会う事はまずないだろう。リアナは食器を持って部屋を出て行くロースを手を振って見送った。

しかしリアナにとって今夜は、まだ始まったばかりだった。

リアナの仕事は「護衛」とはいえまるまる一日の労働ではない。基本的には朝日が昇って同時に起き、身支度と朝食を済ませてフェリスの元に行く。

とはいえフェリス王子はひどく朝が苦手で、寝坊はしないが起きてからが若干長いのだ。それでも彼は朝食がかなり短いので埋め合わせに苦勞することはない。侍女に言わせれば、王族貴族の食事は普通はやたらに長いらしい。

日中は護衛とは名ばかりに王子の雑用をあれこれ押し付けられ、時には訪問者の相手を彼の代わりにやらされる。（ただ、王子の邪魔をしようとする者は限られているが）

そして夜を告げる鐘が鳴るとリアナのお勤めは「一応」終了する。

「一応」の理由は、フェリスの部屋のとなりにリアナの部屋があるので、何かあれば仕事をすることになるからだ。

一国の王子の隣の部屋に、はたして護衛とはいえ庶民の少女が寝泊りしても問題ないのかはリアナには知る由はなかったが、常識的には考えられない事だとは思ふ。だがあの国王ならばありえる、と思ってしまうのだった。

城に来てすぐ王子が狙われた事を抜かせば、リアナにとって実に平和な護衛の日々だった。幸いにもリアナが護衛らしい役目を特にせずとも済んでいたのである。

だが今夜は違った。

リアナは窓の外を見た。夜空に月はなかった。

「なんだ？」

フェリスは廊下に出るために扉を開いただけだった。それだけだったのだが、その扉は途中で止まってしまった。ついで何かとぶつかる鈍い音までした。

仕方がないので両開きの扉の、開かない扉の反対側を開けて外を確かめてみた。

「……なんでお前がいるんだ」

自分の「雑用係」が廊下の床に蹲って悲鳴を飲み込んでいた。頭を押さえながら顔をあげて、涙を浮べた瞳を恨みがましくフェリスに向けていた。

「あ、謝ろうとか思わないわけ……？」

「扉の前に立ってたお前が悪いんだろ。どけ。邪魔だ。失せろ」

リアナは一気に顔を真っ赤にすると立ち上がり、拳を強く握り締めながらゆっくりとした口調で抗議する。

「す、すいませんけど、わたし、王子様の、お守を、しなきゃ、いけないですよねぇ？」

「お前の仕事はもう終わっただろ。とっとと部屋に戻って寝ろ」

「終わってません！ だいたい夜にいたいどこに行こうというわけ？」

「お前に言う義務も義理もない」

不審そうなりアナを見て一言付け加える。

「俺が湯殿に行つては可笑しいか？」

「王子が一人で入浴？ 嘘はよしてよね」

「俺は、特に湯場での世話は大嫌いだ」

服を他人に着替えさせられるのも嫌いだつた。自分で着た方が早いのになぜわざわざ人を呼ぶとは面倒の何ものでもない。

もちろんフェリスにも侍従や侍女に服を着替えさせ、それが当たり前だと思っていた頃はある。だがそれは過去のことだった。

「フェリス王子って意外と恥ずかしがりやなのね」

「……」

少女の発言はフェリスの理由とは当然違つたが、訂正するのも面倒だった。そういうことにしておこう。

フェリスは反論を捨てて無言でリアナに背を向け歩き出す。しかしすぐに呼び止められた。

「なんだ。まさかお前も来る気じゃないだろうな」

「……なんで着替えじゃなくて上着をもつてるの？」

もちろん王子が着替えなんぞを持って風呂に入りに行かないが、リアナの指摘は『痛かった』。

「湯冷めしたくないからな」

リアナはフェリスの返事に納得したようだった。それでもやはりフェリスにくつついてくる。

「ま、一応見送りだけはさせてよ」

「……分かった。迎えはいらないからな。湯殿にいる誰かに見送らせる、それでいいだろ？」

フェリスの妥協案に満足したのかは分からなかったが、リアナはフェリスに向かってひとつ頷いた。それから大人しく湯殿に向かうフェリスの後をついてきた。

いつもにない少女の従順な姿に、フェリスは眉を顰めた。しかし下手に少女の神経を逆なでするようなリスクを負うのも馬鹿らしく、フェリスもまた何も言わずに歩き続けた。

リアナは確かに湯殿までフェリスを送ると、真っ直ぐに元来た廊下を帰っていった。

それをしっかり見届けるとフェリスは手にしていた黒い上着を頭からかぶり、湯殿ともリアナの帰った行った方角とも違う廊下に足を向けた。

フェリスが早足で行き着いた先には夜勤を勤める二人の騎士がいた。

「フェリス様」

「ご苦労。帰りは遅くなる」

「はい。あの……」

なにか言いたげな騎士たちにフェリスはため息を付いた。

「大丈夫だ。前も無傷で帰ってきただろう。それに何も俺が独りで行く訳じゃない。お前たちの仲間が俺について来るのは知ってる」

「……はい。お氣をつけて」

一人が扉を開けると、そこには暗闇が待っていた。今夜は新月だ。だが灯りを手にするわけにはいかなかった。灯りでこちらの居場所が巡回している他の騎士に見つかってしまふからだ。闇に目を慣れさせるしかない。扉の外に出て、記憶と身体を頼りに歩き出す。

（それにしても毎回毎回心配そうな顔で見送られるのは煩わしいな……）

いつそのこと金を積んでしまえば、あるいは脅しでもかければ簡単な話かもしれない。だが金を渡して彼らが癖になっても困るし、脅しによつて不信感をもたれても困る。それ以上に城外から同じ手口で侵入されたら洒落にならない。自分としても、そういう手は使いたくなかった。

しかしおかげで『城の外』に出られるまでの道のりは長かった。一週間で変わる騎士たちの見回りのルートを通らないように、注意深く影を伝っていく。

やっと騎士たちが寝泊りするの宿舎の裏手に着いた時、フェリスは額に薄っすらと滲んでいた汗を拭った。

「よお。今夜はちーっと、遅かったんじゃないの？」

建物の影から現れる深緑の塊。フェリスは不愉快そうに視線を向けた。

「……今回はやっかいな雑用係がいたからな」

「リアナか？　それでアイツを撒くのに時間がかかったと」

「そういうわけだ」

こんなことなら彼女が部屋から出られないような雑用でも押し付けてくればよかった。タイミングよくリアナが現れて、実際は肝を冷やしていた。

（……本当に、タイミングが良かったただけなのか？）

フェリスは一瞬浮かんだ疑問を、偶然以外あるわけがないと自身心の中で笑った。

「どうせならアイツもつれてくればよかったのに」

「馬鹿いうな。これ以上余計なヤツに付いて来られてたまるか」

言外にコイズの存在も煩わしいと言ってやる。にやにやとしていたコイズは言葉の含みに気がついただろう。しかしそれに対してなにも言わず、「行くか」とフェリスに背を向けたただけだった。

そしてコイズは背を向けたまま動かなかった。

「何をしている？　さっさと行け」

急きたててもコイズは歩こうとはせず、緩慢に振り返った。

「……相手の方が、上手うわてだったらしいぜ、王子様？」

「はあ？」

コイズの身体の方こうに誰がいることに気がついた。  
それが誰なのか分かると、フェリスは額に手を当てて俯いた。

「最悪だ……」

宿舎から漏れる明かりの中に、琥珀色の瞳の少女がにっこり笑って立っていたのだった。

## 8 月のない夜（後書き）

注）ターコイズ月＝12月のことです。

この国（世界）では誕生石で何月かを示します。

確かめるものによって、多少誕生石は変わるので、

こちらで宝石は決めてしまいました。

次に表記がある場合、設定を後書きに書いておきたいと思います。  
（いつになるやら）

## 9 会つものに会えず

「うつ、冷えるなあ……今年の冬は早いのかねえ」

隣の馬上でコイズが呟く。彼は手綱を握っていない方の手で反対側の腕を摩った。リアナも上着の襟で冷気にさらされた首元を隠す。馬に乗ったリアナ、コイズ、そしてフェリスも闇夜に紛れられるような黒く染められた外套に身をすっぽり覆っている。それでも寒いものは寒かった。

三人は城を出ると、正門から伸びる大通りから外れた道で馬を歩かせた。先頭はフェリスでその後にはリアナとコイズが続いていた。

フェリスの態度を不審に感じたリアナは、見事彼の『隠し事』を暴くことができた。だから当然フェリスが城外へ行くことに反対したい所だった諦めた。

口で言っても考えを変えるような人物ではないし、年頃の少年が城だけで生活することは可哀相、というよりも無理だと思った。だからリアナは止めるのではなくフェリスに同行することにした。

もちろん自分の同行にフェリスは難色を示すと思っていた。しかし案外抵抗もなくリアナは受け入れられた。もしかしたらリアナが現れた時点でフェリスに諦めがあったのかもしれない。

しかし――

ちらりと前で揺れる背中に目を向ける。その背中はやはり怒っているようにも見えた。

リアナはため息をついた後周りを見渡した。

月がないから余計に辺りの景色が分からない。手にしている灯りのせいで目が眩んでよく闇の先が見えなかった。自分たちの行く先

の街明かりと離れていく城のぼんやりと浮かんではいる姿だけが、幻想的に揺らめいていた。昼間だったらきっと綺麗な景色が見れただろう。

「ね、コイズ。これってやっぱりお忍びで街にお出かけってヤツ？」

本人に聞くには少々勇気がいるので代わりにコイズに尋ねてみた。コイズは呆れたような半眼を前に向けた。

「そういう可愛い理由がアイツにはないもんかと、俺は常々思ってるんだけどよ」

「遊びに行くんじゃないの？」

少し驚いて聞き返す。少し、なのは相手がフェリスだからだ。

「まあ、着いたら分かるし気分転換に乗馬してるんだと思っとけ。というかお前さ、馬にも乗れるってどういう生活してきたんだ？俺らの馬は農業とか商業で使う馬とは違うんだぞ」

いま乗っている馬は市井にいる馬と体つきからして違う。足の長さも、肉付きも、毛並みも、そういう巷に溢れているものとは比べ物にならない。

性格もそうだ。従順である一方気性が激しいのも否めず、乗り手が彼らの扱いに手を焼くことも稀ではない。乗り手が自分の背に乗るに相應しいと分かれば一転して大人しくなるのだ。

そういうわけで、馬に慣れていても誰でもコイズたち騎士が扱うような馬に容易く乗れる訳ではない。

「んー。前にこういう馬に乗ったことがあるから、かな」

「……お前実は貴族とか金持ちとかいわねえよな」

今乗っている馬は、なかなかの高級品でもあったのだ。

城下は鮮やかな光を灯していた。人気の無い場所を通ってきたのでなお更そう感じられた。

夜のため残念ながら露店はほとんどなかったが、人通りは騒がしいほどだった。中には陽気に歌を歌っている人までいる。

フェリスは上着のフードを目深に被って周りに目もくれずどこかに向かって歩みを進めていた。乗ってきた三頭の馬は少し離れた場所にあつた小屋の老人に預けてきた。

足早に人の間を進むフェリスを追いかけるのに必死で、リアナは始めどこに着いたのか分からなかった。看板はなかったし、部屋からの灯りは全くない。

不気味な建物に入ってもやっぱり真っ暗で、再び手元の灯りをつける羽目になる。部屋の中が明るくなって自分がいるのがどんな場所か初めて分かる。

リアナは首を傾げた。なぜこんな所に用があるのかと不思議で、一応フェリスに聞いてみる。

「王子は意外と運勢とか気になるタイプなんだ？」

案の定無駄に綺麗な顔がフードの中から睨んできた。彼が手にしていた灯りが下から彼の顔を照らしていて凄みが増している。

「本気で言っているならこちらにもそれ相応の対処をさせてもらう

が？」

「け、結構ですッ」

だがフェリスがわざわざ訪れた場所は、どう考えても若い女性が来る様な店の中にしか見えない。

幾重にも重なった紗の布が天上から垂れ下がり、壁一面の棚には瓶や使用方法不明の不気味な道具が乱雑に並べられている。部屋の中央には二人座るのがやつとといったところのテーブルが置いてあり紫のクロスがかけられていた。その上には見たこともない大きな水晶が煌いていた。

「……お前、怖いのか」

「え？」

顔をフェリスに向けると彼が奇妙に顔を歪めているのが分かった。そのまま視線をゆつくりと下を向くと、自分の手がしっかりとフェリスの服の裾を握っていた。

「そんなんじゃ仕事も満足に勤まらないだろうな」

嘲る様な視線に肩身が狭く感じる。

「べ、別に幽霊とかそんなのが怖いとかはないわよ。ただっ、こっ、なんか変なのよっ」

「ふーん……」

「ま、いいじゃねえか。リアナにも意外と可愛い所があるってことで」

「だから！ 違っって言ってるでしょ！」

リアナは更に言葉を紡ぐとするが、その前にフェリスが動いたため掌から柔らかい布の感触が離れる。何かを思う前に——もしかしたら少し寂しいと思ったのかもしれない——リアナは気配を感じて振り返った。

「……………いらっしやい……………」

「うぎゃあッ!？」

構えをとったリアナだったが目の前に真っ黒な布に包まれた塊を目にし固まった。しわがれて喘ぐような声が塊から漏れてきたので、結局そのまましりもちをついてしまう。

「おやおや……………とっても血の流れの良いお譲ちゃんなこと……………しかも真ん丸の金のおめめはとっても綺麗だね……………」

なにやら不気味なことを言われた気がしたが、リアナは断固としてその言葉を聞かなかったことに決めた。

目の前に現れた塊こと老女は、リアナの胸元辺りほどしか背丈がない。しかしフードから除く顔は想像したものよりも幾分皺がなく若かった。同じようにフードを被ったフェリスが彼女に対峙すると可笑しい景色だった。

「失礼、ヴィルフイラ殿。彼はいますか？」

フェリスは胸に手を当て老女に頭を下げる。老女は小さくかぶりを横に振った。

「残念ながら来ておらん。……………それにしても飽きずによく来るもの

「じゃな」

老女の言葉に対しフェリスはやんわりと笑った。

「なにか不都合でもおありですか？」

リアナは見たこともない笑顔を目にしてしまい背筋が冷たくなったのが分かる。老女といえば低く引きつった笑い声を漏した。

「まさか。わしはともかく、あやつなら願っても無い仕事だろうからね……」

「それならば安心致しました。私はこれからも彼と“良いお付き合い”をしていきたいのですからね」

「……なるほど。肝に銘じておこつ」

老女がにやりと笑った。その姿は物語の魔女のようだった。

「ところでなぜ彼はいないのですか？ 今日私は私ができることになっていた日ですが」

「そのことだが、あやつは今ガランドの歓楽街におる」

“ガランド”。その言葉を耳にしてリアナの鼓動は強く打った。

「なんでも他の仕事が入って、どうしても今夜じゃないと駄目だと零しておった。お前さんに会えるのは良くて夜半過ぎだと。だから悪いが帰ってもらいたい、と言っておった」

「……なるほど」

フェリスは少しの間黙考した。だが次に口を開いた時はつきり老女に訊ねた。

「どの店にいるかわかりますか？ 今日中に彼に会いたい。だから私が彼に会いに行きます」

「フェリス王子！？」

リアナは思わず声を上げた。とても王子一人で勝手に決めて良いことではない。なにせ行先はガランドなのだ。ヴィルフイラも思う所があるのだろう少し鋭い声で言う。

「お主は仮にも王子だろう。そんな軽はずみなことでよいのか？ ガランドとお前さんは気が合わないと思うぞ」

「王子だと名乗っていくつもりは全くありません。そうですね……理由が不十分だと言うのなら、『一度城の者としてガランドの現状を目にしておきたかった』、ということにでもしておきます」

「……」

さらりとでつち上げの理由を述べられリアナもコイズも目を見開いて少年を見た。理性的で慎重な王子かと思いきや、意外と大胆な王子だ。

沈黙の中大笑したのは年老いた占い師だった。

「なる程。良い度胸をお持ちだ。その気持ちに免じて教えよう。……あの男はガランドの東、ラバカという酒場に居る。どうやら酒場に来る男から情報を掴もうとしているらしいから、あやつを見つけてもむやみに話しかけるのだけは止めた方が良い」

フェリスは何も言わず、老女に会った時のように頭を下げた。



## 10 不法地帯(1)

昼間は暗い部屋の中で占いを営んでいるというヴィルフラの店。その二階は一階の陰鬱さとは正反対に、実に色鮮やかで派手な衣装が一面に敷き詰められ部屋を彩っていた。貴族の正装やドレスから平民の簡素な服、あるいは大人から子供のものまで実に種類やサイズに富んだものだった。

「これ、誰の趣味よ」

あまりの多さにリアナは呆れ、隣で衣装を物色しているコイズに尋ねた。コイズは城下でごく普通に着られているような赤茶色の裾の長い上着を手にとった。

「ここらの衣装は商売道具さ。元々は情報屋が変装するために集めてたらしいんだが、そのうちに貸衣装として商売品にしたってわけだ。そういうわけで女子供の服まであるんだぜ」

「……フェリス王子が会いたかったのは情報屋だったのね」

コイズは口元に手を当てた。一瞬『ヤバイ』とでも言いたげな表情をしたが、結局リアナの質問に頷いた。

「どうせ会いに行くし良いだろ。フェリス王子が会いたい相手は確かに情報屋だ」

「情報屋」とは言葉通り、情報を売り物にする職業のことである。個人のプロフィールから国家の裏事情までその仕事範囲は広い。

仕事柄表立って商売のできるような職業ではないため、彼らと接触するには一般人では少々難しい。というよりも面倒がかかる。依

頼しやすい情報屋はたいていりくな情報など持つてはいない。それに情報を得る対象が危険であればあるほど値段は跳ね上がる。

だから情報屋は大抵、膨大な金や強力な権力の近くで動く。王族であるフェリス王子が彼らを利用していても不思議な話ではない。

「……王子様だものね、国際情勢とかそういう話でもするのもかね。でもだからってわざわざ、自分から殺されに行こうなんて、本当に馬鹿じゃないかって思うわ」

相手に聞こえるように、普段よりも大きな声で言ってやった。彼がどんな反応をするのか手にしていた服から目線をあげて見てみたものの、フェリスはそ知らぬ顔で自分のサイズに合う服を探していた。

「変装すれば王子なんてばれないなんて、そんなの楽観的過ぎないかしら。あなた、一応ともこの国の王子なんですよ。わたしやコイズと比べたって顔が知られているのは当たり前なのよ」

それでもフェリスは反応しない。リアナはさすがにムツとして王子の腕をつかんだ。

「ちょっと、ちゃんと人の話を聞いてくれる？」

すると返事の代わりに、フェリスは腕を握られていることも気にせずそのまま歩き出した。

形としては彼に引っ張られることになったリアナは、やり返すつもりで力を入れたのだが結局は麻で編まれたつい立の中まで連れて来られてしまった。

「それで？」

「なに？」

眉を顰めて彼を見ると、どこか呆れた様子を見せる紫の瞳が返ってきた

「俺が着替えている間お前は傍で見てるのか」

「……はい？」

一瞬で表情をひきつらせたリアナにコイズは追い討ちをかける。

「あらやだ。リアナってば大胆なのねえ」

「なッ、違う！」

一瞬で顔が真っ赤にし、慌ててつい立から出る。

「まあ、いいんじゃないの。立場は普通逆だけど、王子のハダカなんて侍女でもなきゃ見れないんだからさ」

「そういつつもりじゃない！」

「いやいや、恥ずかしがらなくたってもな、お前くらいの年頃なら男も女もそういう方面に興味が——」

「変なこと言わないでッ」

リアナは動揺したままコイズを突き飛ばした。しかし大柄なコイズは少しよろめいただけで笑ったままからかいの言葉を続ける。二人はぎゃあぎゃああと騒ぎ合った。

結局リアナがコイズとじゃれている間にフェリスの着替えは終わってしまった。もちろん変な意味ではなく、フェリスが出かける準備を終わらせてしまったことが問題なのである。今すぐにでも部

屋を出てガランドに向かおうとするフェリス放っておくわけにはいかず、急いでリアナも着替えることとなったのだった。

治安の悪いガランドではなるべく女性は露出を避けたほうが良いとのことだ。コイズの薦めもありリアナは男物の服を着ることにした。さすがに男装と言うほどのものではなくただ袖を通しただけではあるが、露出を避けると言う意味では悪くはなかった。

コイズは先ほど手にしていた上着に白いズボンを合わせて着ていた。さすがに彼も一目見て騎士だと分かる制服を着て行くわけにはいかない。

そしてフェリスは実に地味な色合いの、所々ほつれのある襟のないシャツを身に着けていた。彼の少し長めの髪は、後ろで縛っている。

正直なところ、フェリスを見てリアナは感心してしまった。

本当に整った人というものは何を着ても決して悪くは見えない――その事実在世の中の不条理さを改めて感じ、リアナは少し不貞腐れた。

「変装にはお粗末ね」

「フードを被れば顔など見えない」

そう言う問題ではない。リアナはむくれたままフェリスたちの後に続いて衣装部屋を出た。

「お疲れさん。仕事は朝までか？」

近づいてくる男を警戒するそぶりを見せていた守衛は、声で分かったのか石壁の松明の明かりに照らされた顔が見えたからなのか、コイズが手を挙げると同じように手を挙げ返した。守衛の任に就いているのは王都を囲う城壁を守る騎士のうちの一人であった。

「なんだ、コイズじゃないか」

コイズよりも一回り小さな彼は、同僚の背中を叩いて歓迎してくれた。

「お前が制服着てない姿を見たことなかったもんだから全然分からなかったぜ」

「へへ。俺ももう普段着が制服みたいなもんだからな」

「だけどそれが平服にしちゃ貧相だな。どうしたんだ」

守衛の目はコイズの後ろに控えているリアナたちに向けられた。リアナは一瞬、強く馬の手綱を握った。

「子供が二人？　こんな遅くに……。お前いま仕事じゃないんだろ。こんな所に何の用だよ」

職務としてではない。おそらく同僚としての純粋な疑問だったのだろう。それが分かっているのかコイズはいつもような飄々とした表情を浮かべた。

「実はこいつらちょっとした事情で知り合っただが……。父親の具合が悪くなって今は親戚がいる王都に預けられてたんだ。で、今その父親の病気はそこそ良かったらしいんだよ。それでもいつま

た具合が悪くなるか分からなくて、看病していた母親が父親の状態が良いうちにつてんで、時間の合間を縫って子供に会いに王都の近くまで来てるんだ。だからなるべく早く二人を母親に合わせてやりたいんだよ」

「つまり、あまり時間がないから面倒な事務手続きが要らない騎士が二人の代りに俺らを説得しに来たと」

「ご名答！ ……だ・か・ら、お願い、ここ、通してくれない？」

言うまでもないが、大きく目を見開いて体をくねらせるコイズは気持ち悪かった。

「……あいつは一体なにをしてるんだ」

「しっ。静かにしててよ」

傍で軽蔑の眼差しを向けるフェリスと同感なのか、守衛の男もげんなりした様子でコイズから一步離れる。呆れてものも言えないようだった。

しかしわざとくねくねと身体を動かしたままのコイズを見て守衛の男はとうとう笑い出した。「仕方ねえな」と肩をすくませる。

「なんか責任問題でたらお前が全部負えよな」

「へえへえ、分かってるよ。ついでといっちゃ何だが今度の休みにでも酒をおごりますよ？」

「……それは悪くないな。んじゃ、俺は他のやつらに事情説明してくつからちよつと待ってる」

守衛の男は小走りに門へ行くと数人の同僚と何度か言葉を交わし、再び三人の前まで戻ってきた。

「コイズ、あいつらの酒もよろしくな」  
「なんだと!？」

コイズの抗議を無視して守衛の男は馬を連れている——さすがに騎士の馬は目立つのでわざわざお金を払って借りた馬なのだ——リアナたちを門の外まで案内してくれた。門の外は本当に人気がなく、どこまでも暗闇が拡がっていた。

多少時間はとられたが、フェリスの外出がお忍びであることと余計な手間をかけられなかったので、コイズの働きは十分の成果といえる。おかげで三人は本来ならば門が閉まっている時間に王都から外へ出るのだから。

リアナたちは守衛に別れを告げ馬を歩かせた。

静まり返る街道は不気味だ。さらに途中からは街道を逸れて続く道を行かねばならず、ますます闇夜の危険が三人を包み込んだ。

盗賊に襲われても不思議ではない。4、5人だったら対処の仕様があるが、大所帯の盗賊だったら2、30人は相手にしなければならなくなる。普通に考えてこちらに分はない。

こうなれば祈るのみだ。このまま何事もなくガランドへつけますように……と。

ただ目的地に着いたところで安全かと考えれば、もしかしたら現状のほうがまだマシなのかもしれない。

## 11 不法地帯(2)

始めはぼんやりとした赤と黄色のにじみが、真つ暗な空に小さく見えるだけだった。

その明かりが強くなり視界いっぱいになると、そこは既に「不法地帯」の入り口だった。

石と漆喰で作られた壁の隙間にたっている、お粗末な木製のアーチがリアナたちを迎えてくれた。そこには二人の男が、通る人間に目を光らせている。

見張りか何かなのだろう。

リアナは果たして、どうやって中に入るのか頭を悩ました。だが、三人が馬を少し離れた場所に置いて来た後、先頭を歩いていたコイズは、懷から出した袋を男たちに手渡した。

袋の口をあけて中を確認した男はにやりと笑った。そして、親指を肩越しに後ろへ向ける仕草を見せた。どうぞお入りください、ということらしい。袋の中身は金貨か貴石といったところだろう。

あまり街慣れをしていない、ということが目立たないように、コイズはさりげなく視線を店のそれぞれに向けていた。情報屋がいる「ラバカ」は、この街の東だ。

リアナもフェリスも探ものはコイズに任せ、ただ彼の後ろを付いていくだけだった。

ただ、それだけ。会話はない。

そういえば、世間話的なことを話したことはない。

街は夜と昼とが逆転した所。まだまだ街は始まったばかり。決して広くも綺麗でもない通りを、怪しげで艶かしく、乱雑で陽気な店

が連なっている。際どい服装をした女性が手招きしているのを見たときは、流石に同性とはいえ恥ずかしくなって視線を逸らしてしまった。

一息つくと、リアナは隣りを歩く少年に目を向けた。彼はフードの中から鋭く前を見据えている。ふと、彼がリアナの方へ顔を向けた

「なんだ？」

リアナは慌てて顔を背けた。

「ああ、いや、場所は悪いけど、こうして一緒に歩いてると、本当に王子様って感じがしないなって」

偏見がありそうだが、リアナの王子像から言えば城の外と一緒に歩くことは、国中の女の子の憧れであり、それはあくまで憧れで、到底現実にかかるものではないのである。

だから、現実が起こったら、隣りに歩いている人は「王子」なんかではない、という考えだった。

そもそも、王子が長距離を馬も馬車もなしで歩くというのは、想像していなかった。

そんな思いからついでた言葉に、フェリスはきょとした瞳を浮かべた。

それは実に可愛らしく、驚いたのはリアナのほうだった。

「『王子』って感じがしない？」

確認するように尋ねられ、リアナは戸惑いながらも首肯した。

フェリスはあごに指を当てると、どこか合点がいったように小さく頷いた。

「成る程な。通りでお前はやら馴れ馴れしい振る舞いが多いのか」

……確かに、彼に対して敬いの態度をとる事は少ない。

だが、それはリアナだけに非があるわけではない。

「フェリス王子だって、自分が無礼を働かされたと思ったなら怒るなり処罰するなりすればよかったでしょ」

彼は、おそらくわざとだろう、「王子」らしい振る舞いというものをしない。偉そうな言動はするが、本質的な部分で驕っている様子は見られない。王族でも貴族でなくとも、偉そうな態度の人間はいるものであり、そう考えれば、王子だから偉そうというのは短絡的ではない。だから、彼がいかに命令口調をしたとしても、「近所に住むちよつと偉そうな少年」と言ってしまうえば、彼が「王子」である必要はなくなる。

彼が絶対的な力で王子らしい振る舞いをしなかった。そういう意味では、リアナの彼に対する態度には、彼自身にも責任があるはずだ。

だから、憤怒の思いを込めてフェリスを横目で睨んだ。

しかし、その怒りも飛んでしまった。

——フードから覗く彼の表情が、どこか柔らかかったからだ。

「ここはガランド。自分から名乗り出るつもりはない、と俺は言っ

た。

だから、不用意に『王子』と呼ぶのは、俺を殺すつもりなのと一緒だな」

「えっ？ いや、そんなつもりは……」

虚を衝かれ、リアナは戸惑った。

「そういう意味では、お前やコイズが同行者でよかったのか。アルバートなどがいたら、今頃俺は死んでいるかもしれん」

確かに、アルバートからのフェリスへの態度は、どう考えても城の外では「異常」である。彼が口で言って態度を改めるものは、疑わしい。

だが、フェリスがリアナを、そしてリアナが彼と出会ってからコイズを、こんな風に肯定したのは恐らく初めてである。

「そんなこと言うなんて気持ち悪いなあ」

話を聞いていたのだろう。コイズが少し顔を後ろに向けていた。彼はにっこりと笑った。

「なあ、フェリス？」

それはごく自然で、むしろ普段のコイズの呼び方の方がどこよそよしいものかもしれない。

彼はリアナに目を向けたまま、フェリスの方へ顔を向けた。

「ほれ、お前も言ってやれよ。今ならフェリスの護身のためだつっー建て前で、どんな無礼も許されるぜ」

「常に無礼なお前が言うな」

呆れつつも、諦めが既についた表情。なんだか笑いたくなくなってしまった。

リアナも同じように呼んでみようかと口を開いた時、目の前を歩いていたコイズの傍にぴったりと女性が寄り添ってきた。

「兄さん、良い男じゃない。ちょっとうちの店によってかない？サービスしてあげるわよ」

薄い生地の露出の激しいドレスと紅をひいた大きな唇が印象的な女性に見上げられ、コイズは口元を引きつらせ、同時に鼻の下をのばしている。

「いや、悪いけど、俺、ちょっと行きたいところがあつてさ」

「んん、いーじゃないのさ。ちょっとくらい。ね？ちょっとでいいからさ」

「まあ、俺も、ちょ————つとくらいだったら、寄りたくないこともないんだけどさ」

そう言いつつ、フェリスをちらりと見る。フードからのぞく視線がどんなものか、丁度その時見えない位置に立っていたリアナにはうかがい知れなかったが、コイズの表情が固まったのであまり見ないほうが良い部類のものだということは判断できた。

だが何か勘違いをしたのか、女性はさらにねだる。

「もしかして、ガキも一緒？いいじゃない、そんなの、ほっとけば心配する歳でもなさそうだし、その辺で待たせておけば良いのよ。」

よければ、あの子らも相手してあげるし」

リアナは冗談じゃないと思いきり首を横に振った。フェリスはともかく、女である事を隠してはないリアナに「相手」するとは、どういふつもりだ。茶でも用意して話し相手になってくれるのか。

コイズはやはりフェリスが怖かったのか、実に残念そうに――それはとても離れがたそうに断りを入れた。

すると一転、女性の化粧顔は無表情になり、吐き捨てるように「てめえみたいな大木に声かけたあたしが馬鹿だったよッ!!」と離れていった。

女性のあまりの豹変ぶりは生々しく、怖かった。

そしてコイズの背中の中物悲しが、見るものに痛々しさを感じさせた。

「……………行くか」

フェリスの一言がなければ、三人の間に流れていた微妙な雰囲気は、そうそう晴れはしなかっただろう。

酒場はなかなかの盛況ぶりだった。数十もの卓はほぼ満席で、カウンスターにも空きはなかった。

幸運なことにちょうど店を後にする客がいたため、滑り込むように三人は、まだ片付けられていないテーブルについた。

「酒は口にするなよ」

フェリスがコイズに釘を刺す。

だが彼は、にやりと笑うと肩を竦めた。

「酒場に酒を飲まない客ってのは、不自然じゃありませんかねえ？」

確かに。怪しまれなくては、飲まなければならない。

「不自然っていえば、フェリス、やっぱりフード被ってるの変じゃない？」

「そうでもない。周りをよく目にしろ」

そう言われ赤ら顔の多い男たち——いや、意外にも女性も結構いた——を見てみると、ぽつりぽつりとだがフードで顔を隠している人物もいる。

その視界の端から髭で顔が半分隠れた男が、三人のテーブルに向かってくるのが分かった。

「で、何飲む？」

第一声がこれだ。しかも、グラスや皿を片付ける時の荒々しさ。とてもじゃないが、客をもてなす様子が見られない。

コイズは言った者勝ちだと言わんばかりに、さっさと注文してしまふ。フェリスは顔を顰めるものの、コイズの意見に一理あると見たか、しかたなくアルコールの入っていないお酒もどきを頼んでい

た。

リアナは迷ったが、結局甘い果実酒を頼んだ。

男がいなくなると、リアナは小さな声で尋ねた。

「それで、探し人はこの中にちゃんといろの？」

まさか隣のテーブルで馬鹿笑っている男が情報屋とは思えなかったが、こんなにも人がいたのでは検討すらつかない。

フェリスは肯定するとそっと視線をカウンター席の奥に向けた。

「奥から二番目、黒髪の男と話してるヤツだ」

## 12 不法地帯(3)

グラスに唇をつけると、口内に甘い果実の香りが広がった。店員の態度のひどさには閉口するが、酒類の質は酒に疎いリアナも悪くはないと分かるものだった。

酒を楽しみにしていたコイズは運ばれてきて直ぐにそれを呷ると、すかさず二杯目を店員に頼んでいた。

果実酒を飲みながら、グラスの向こう側を見つめる。

カウンターの奥にいる二人のうちの一人。  
つまりは、リアナたちの探し人。

「情報屋」と言うからなんとなく取引上手できつちりしてそんな人物を浮べていたリアナとしては、その印象の薄い男を見ているも果たして裏の世を渡っていけるのか不思議であった。

くすんだ髪色に決して頑丈とはいえない体つき、顔は遠めで分かりづらいが、これといった特徴はない。

彼は時々笑いながら、相手と会話を続けていた。

雰囲気から、すぐには終わりそうにない。

これは長期戦になるかもしれない、と考えていると、フェリスとコイズが言い争っているのに気がついた。

どうやらコイズが無理やりにもフェリスに酒を飲ませようとしているらしい。

フェリスが渡されたアルコールの入ったグラスを付き返すのだが、コイズはわざと「その歳で酒も飲めないのかあ？あ、もしかして酔ったら泣き出したり、もしかしてキス魔になるとかか！？」と、幼

稚な挑発をする。

もちろんそれに乗るフェリスではないが、先ほどよりもコイズを睨む目つきが陰しくなる。

「二人は、いつ頃からそんな関係？」

なんだか二人の様子が面白くて、自然に尋ねていた。すると、コイズが嫌そうな顔をした。

「気持ち悪い聞き方すんなよ」

「そう？でも、二人って結構、親しそうな間柄だけど、どこで知合ったのかなって、純粋なわたしの興味なんだけど」

いくら城にコイズが勤めているとはいえ、フェリス付きの騎士でなければ会話もほとんどないはずだ。だが現実には会話どころか個人的な関わりが多い。

コイズは腕を組むと、宙を少し見上げた。

「えーと、フェリスと出会ったのは俺が18ん時だから……9年前か。んで、フェリスがこの間の誕生日で16になったから、こいつは7歳の時だったか」

「結構古い知り合いなのね」

「んー、そう言われりゃあそうかも。当時のフェリスはまだちっこかったし、それなりに可愛げあったし。偉そうなところは変わんないけど、どうしてこんな少年になっちゃったのか。なんか可哀相になってきたよ、俺」

コイズの泣きまねに、フェリスは小さく片眉をあげた。

「お前に哀れに思われるとは腹が立つな。生きているものなど、小さいものは大きく育つものだ。昔と同じままでいるほうが不自然だろう」

「そうかもしれないけどよ、それにしてもホント、お前可愛くない！一度くらい命令じゃなくて、『コイズ兄さん、お願い』とでも言っただけで頼みごとしてみろよ」

それは可愛いを越えて怖い。

「み、見たくはないわね、そんなフェリスは」  
「俺だってやりたくない」

本人が心底嫌そうなので、その日は来そうにない。

「だいたい、あの日コイズがあんな場所に来なければ、俺はお前と係わり合いになんてならずに済んだかもしれないのに……お前のせいで俺の人生の半分は狂ったな」

「へえ、じゃあ俺ってばフェリスの運命を変えた重要人物じゃねえか！はは、良かったな。おかげで今があるんだもんなあ」

「ふざけるな。騎士のくせに俺の部屋に入り浸り、仕事を邪魔しては勝手に人のものを使用して時には持って帰る始末。いい加減礼儀を知れ」

酒場は喧騒に包まれていて、二人の小さなやり取りは目立つほどのものではない。

リアナはくすりと笑ってしまった。

それに気がついたフェリスが彼女を睨む。

「何だ」

「いや、なんか二人とも、兄弟みたいだなんて……」

フェリスは口元を引きつらせた。一瞬彼の動きが止まる。

「……天変地異が起こっても御免蒙るな」  
ごめんこうむ

ひどい言われようであった。

そうしているうちに時間は過ぎて行く。

それでも情報屋が酒場を離れる様子もなく、テーブルにはグラスの残骸が増えていった。

もちろん客の出入りは何度もあったし、その時も別段気にすることもなくあった。

だが、いきなり響く不穏な声に、リアナだけでなく酒場の人々も出入り口の方に顔を向けた。

「セハン！こんな所にいやがったのか。いやあ、お前を捜すのには苦労させられたぜ！」

大柄の男が1、2……6人か。

柄の悪いやつらばかりの街でも、いつそういやらしい笑みを浮かべた男たちだった。

彼らははずかしく酒場の中を通り過ぎるとそのまま奥まで進んだ。

一瞬ドキツとしたが、彼らの目的はどうやら情報屋ではなかった。だが、視線は情報屋の、おそらく「取引相手」であった。

黒髪の男は真っ青な顔で男たちを見上げていた。

「へへ、久しいじゃねえの。まさかこんな遠くにいるとは思わなかったけどよ、ガランドに来るとはお前も馬鹿だな！おかげで仲間がお前のこと見つけてくれたさ」

威圧する男たちに気づかれないように、「情報屋」はカウンターから少しずつ身体を離れた。

だが、彼の前に男たちの一人が立ち塞がる。

「おっと、あんたはセハンのオトモダチだろ？トモダチ放って逃げちゃうなんて、駄目だよ？」

「トモダチ」ではないだろうが、「情報屋」は何も言い返さなかった。

正確には言えなかったのだろう。

男たちは黒髪の男に優しげな声で、非常に物騒なことを話しているようだった。

時々漏れる「金」、「痛めつける」、「切り刻む」、「裏切り」、などの単語は不穏なことこの上ない。

ただ成り行きを見つめていたリアナだったが、フェリスの零した言葉に振り返った。

「このままでは悪くなりそうだな……」

それは、「情報屋」の身の危険なのか、フェリスが頼んだ情報が聞けなくなることへの危惧からの言葉なのかは分からなかったが、たしかに彼がこのまま男たちに捕まっていたらどちらも危なくなるのは想像しなくても分かる。

「どうする？助ける？」

特に考えずに聞いてみると、コイズが頭を振った。

「話しかけるな、と言われてるだろう。つまりは関係するなということだ。」

下手にこちら巻き込まれたら、俺らはともかくフェリスが危険だ」

それはもつともなことだった。

注意をひき付けることで、男たちのみならず酒場の全員から注目を浴びることになるだろう。それでフェリスの正体がばれてしまつたら……そちらのほうが相当「やばい」。

だから、リアナたちにはどうすることも出来ず、どうにかして情報屋が逃げてくれることを願うだけで、傍観者にしかなれない。

そのはずなのに、それはリアナとコイズだけだといったかったのか。

「えっ」

呆然としている間に、彼は真っ直ぐに男たちに向かつていった。

「馬鹿……やろっつ」

コイズが立ち上がった時にはすでに遅かった。

フェリスは男たちの間をすり抜けると、「情報屋」の腕を掴み、

そしてそのまま踵を返そうとした。「情報屋」は何かを言ったようだが、フェリスは聞く耳を持たなかった。

男たちはいきなり何事もないように現れ、そして去っていかうとする少年に目を丸くしたものの、もちろんそのまま逃がす訳がなかった。

「ンだよ、おめえはよ」

一人がフェリスの肩を掴んだ。

彼はちらりと男を見上げた。

「……この男はお前たちと関係がない。だから引き止められる謂れはない」

「はあ？いきなり出てきてなんだ、その言い草は。お母ちゃんに年上をちゃーんと敬えって教わらなかったのかなあー？」

仲間の言い方に男たちは下品な笑いをたてた。

それを無視するようにフェリスは肩にあった手を払うと、再び戸口に向かおうとする。

流石に二度目はからかわなかった。

フェリスの行く手を再び塞ぐと、胸倉を掴んだ。

「言ってることが分からないのかな？この餓鬼がッ！！」

これ以上言葉を続ける気がなかったのだ。

だから男はその代わりフェリスに拳を向けた。それで十分だと思っただのだ。

だが、フェリスが関わったことですでに動かざるおえなかった男

がいたわけで、その暴力を許すはずがなかった。

拳の勢いが止まったことに気がついた男は、いつの間にかそばにいたコイズを睨み付けた。

「何すんだよッ！ああ？てめえがこの餓鬼の保護者か？ちゃんと躡けておけよなッ！！」

空いていたほうの手で懐に入れていたナイフを取り出すと、男は腕を掴んでいたコイズに切りかかってきた。

コイズはすぐに手を離して間合いを取ると、フェリスと「情報屋」を男たちから庇うように姿勢を整えた。

既に男たちは自分たちの本来の目的を忘れ、各々刃物を手にしていた。構えから見て、お飾りでナイフを握っているようではない。こうなるとコイズも自分の剣を抜くしかない。

しかしそれを止めたのはリアナだった。彼女の方が先に剣を手にしていた。

「コイズ、二人を連れて店を出て」

「おいおい！馬鹿言うなよ、お前置いて行けるわけ……」

リアナはその反対を受け入れる前に襲い掛かって来た男のナイフを逃れると、反対の手で掴んだ鞘で男の脛を渾身叩き付けた。

崩れ落ちる仲間を見て先ほどよりも怒りを強めた男たちに剣の切っ先を向けたまま、リアナは叫んだ。

「護るべきなのは誰なのか分かるでしょうッ！？」

「……っ！」

小さな悪態の後、コイズはフェリスたちを強く掴み引きずるように出口に走った。

フェリスが抵抗したから、彼はいつそう力を込めた。

「離せっ」

その声を最後に、扉が閉まる音が響いた。

店内はすでに先ほどの喧騒どころではない。

人々は興味深そうにリアナたちを見つめ、「やれ！やれ！」と囁し立てていた。

一対六で少女が一人。

見るからに力の差はあるが、この少女がいかにして足掻いて男たちに勝たれるのかは観客たちにとってもつまらないことじゃない。

一方的な暴力は、時として非常に愉快なこともある。

それは男たちも同じ思いだ。

もう目的——彼らは知らないが——「情報屋」のことなどどうでもいい。

馬鹿な餓鬼だとは思ったが、もう新しい獲物を甚振る<sup>いたぶ</sup>楽しみに心を奪われていた。リアナに足を痛めつけられた男とて、ひとつ痛みをもらった理由は「偶然」であり、その痛みの倍以上に少女を傷つけ泣かしてやろうと笑みを浮かべていた。

酒場にいる誰もが、リアナが屈服する時の恥辱を浮かべた表情をいまかきと待ち望んでいた。



### 13 不法地帯(4)

それは不思議な感覚だった。

城の闘技場や演習場にいたときも感じた、奇妙な感じ。

なぜ、自分はこんなにも大勢に囲まれているのだろう。

なぜ、自分はこんなにも注目を集めた中に立ってるのだろう。

それは、きつと本来いるべき場所ではなかったはずだ。

「何事」もなく、そして今日を迎えていたならば、決してありえなかった光景。

決して、自分がえるはずのなかった、むしろあってはならない状況。

でも、それもあの日にすべて打ち壊された。

壊されたことが良いことなのか悪いことなのか、未だに自分には推し量るべくもない。

だが分かっていることはある。

「許せないこと」

それだけは分かる。哀しいほどに、身を刻むほどに、分かる。

泣きたいほどに……分かるのだ。

目の前にいる男たちの心は知りたいと思う以前の話だった。

知る必要がない。

表情が雄弁に彼らの心情を浮かび上がらせているからだ。

無精ひげの浮かぶ顔はいやらしく膨らみ、目の前に居る自分を見下している。舌なめずりの音が聞こえてきそうなくらいだ。

「お譲ちゃんがひとりで6人相手してくれるの？身体は持つのかよ！」

下品な物言いに周りがどつと沸く。

想像していた通りの言い方ではあったが、不快感は消えてくれない。それでも様子を見るべき時なのは分かる。いくら彼らの獲物が自分に移ったとはいえ、フェリスたちの逃げる時間を稼ぐのも役目なのだ。それが酒場に残った故だから。

こうなれば焚き付けるだけ焚き付けてみよう、とリアナは小さなため息を付いた後、なるべく生意気に見えるように笑った。

「あら。あんたたちで満足させられるのかしら？」

意外にも効果はあったようで騒がしさが一瞬止む。

「おうおう、言ってくれるじゃねえか。それじゃあ試してみるか？大勢に見学されてッ！！」

見世物はもう沢山だ。

リアナはナイフを手にしておきながらわざわざ掴みかかって来る男の突進を軽々と避けると、傍にあったテーブルの上に飛び乗った。そこを残りの男たちが群がるように飛び掛ってきたので、ひらりと隣のテーブルに飛び移る。そのテーブルには先客がいて、面白がつて観戦していたものの突然騒ぎの元凶が向こうからやってきたからか、慌てて席から立ち上がる。

運悪くか、リアナを追ってテーブルにやってきた男たちとかち合う羽目になり、そこでまったく別のいざこざが起こりはじめる。リアナはそれを尻目にテーブルを再び移る。

ひらひらと、まるで手ごたえを与えない相手に男たちは苛立ってきた。

いい加減手にするナイフを使う気になってきたようだった。

男の中の一人が、腕の届かない距離にいたリアナを仕留める為に狙いを定め、彼女の動きを追って手の中にあつたものを放った。

ちょうどテーブルに飽き床に下りたところだったリアナだが、騒ぎの中男の動きを読んでいたかというように、飛んできたナイフを危なげなく避ける。

あまりに見透かされた動きのようだったので、男は「まさか」という言葉を吐いてしまいそうになった。いや、動きを読められていてもタイミング良く避けられるのは技量の問題だ。

「ナイフっていうのは……」

酒場は観客たちの予想を裏切り、鬼ごっこの長期戦となっていることに盛り上がりを見せて騒がしかった。

そのはずなのに、男には少女の眩きがなぜか耳に入った。

「こつ使うのよ」

その直後風が唸ったと思ったら、重くて鋭い音が男の後ろで突き刺さった。

彼の短髪がはらりと宙を舞った。

痛みもないし、手を頭にあてても血も出ていない。

それでも、瞬間になにか彼女の予想外のことが起きたなら——例えば男が少しでも動いていたら——背中 of 壁にめり込んでいるナイフが耳を浚っていた、いや、男の頭を貫いていたかもしれない。

背筋がゾクツとした。

少女は仲間たちに躊躇も見せず剣を振るっていた。

その姿だけでなれない武器を扱う幼い少女ではないことは分かる。あまりに面白い横槍だったため甘く見すぎていたことを今更ながら思うが、「ガランド」という街で彼女くらいの年齢で大の大人を屈服させる人間は少なからずいる。中には殺すことに関して相当の依頼料を貰う餓鬼もいるくらいだ。

成る程。

少女もその類の人間だというならば、認識を改めなければいけない。

薄く滲んだ汗を乱暴に拭くと、男はやっと腰に手を伸ばし剣を抜

いた。

「お前らあああッ!!」

悪くない緊張感だ。

一方的な蹂躪も好きだが、手ごたえのある喧嘩のほうが相手が負けを認めざる終えなくなったときの絶望の表情を浮べるから好みだった。

喧騒すら吹き飛ばす男の大声に仲間たちは顔を向けた。

男はその中にいる少女に鈍く光る刃先を向けた。

「ちんたらすんのはやめだッ。マジにいくぜえええ!!」

そして少女へ一直線に向かう。

もちろん少女が逃げることは分かっていたし、実際少女はそうした。

だが仲間たちを刺激するには手っ取り早かった。

男たちは次々にナイフを捨てると剣を手に取り、少女を追い詰める。

いくら手馴れていても酒場と言う限られた空間で六人相手ではどうしようもないのだろう。少女は徐々に隅へと追い詰められていく。

さて、どうしてここから愉しもうか？

しかし自分にとって非常に苦しい状況のはずなのに、少女に焦った表情は見られなかった。

……むしろ、薄く笑っている気すらするのは気のせいだろうか。

訝しげに様子を見ていた男を残し、仲間たちは一斉に飛び掛った。獲物を目の前にして下品なことこの上ない。

そして一瞬の後――

目の前が真っ白になった。

「なんだ？」

男は周りを見渡すが、どうやらその原因が仲間たちのいる辺りらしく、その姿は白く覆われて見えなかった。

それでも仲間たちの咳き込む声が聞こえ、また自分も感じ始めた目と喉の痛みに慌ててその場から離れた。

その間に今度は呻き声が聞こえた。

それは流れからして道理であっただろう。

視界の利かない相手を目の前にして何もしないわけないだろうし、そういうつもりでこの白い粉――おそらく目や喉を刺激する薬物だろう――を撒いたのだ。

男は仲間を助けるつもりはなかった。

自分が巻き込まれるのは分かっていたし、どちらにせよ助ける暇はなかった。

少女がなぜ粉の中にいながらも平然とした顔で出てきたかは分からないが、彼女は一人だけ災難から逃れた男に向かって剣を構えて走ってきた。

しかし、真っ向勝負で負ける気はなかった。

どうやら思ったとおり油断してはいけない相手だ。

こうなれば子供も女もない。切り捨てるだけ。

少女からの一撃を両腕で受けとめると、男はその隙に思い切り相手の腹を蹴り飛ばす。

鈍い音と共に少女と巻き込まれたテーブルが派手な音を立てて倒れた。

案外すんなりと攻撃が利いたので、男は一瞬畏かと疑ったが、少女が苦々しげな表情でふらつきながら立ち上がる様子に演技はないようだった。

「くッ……」

彼女は何かを振り払うように首を振ると、再び剣を構える。その姿はふらついているように見えた。

「ヘッ、結構やるじゃねえか。

嬉しいねえ……嬉しいよ、俺は。でも威勢が良いのもここまでか？」

少女の眼はゆらゆらと揺れている。集中し切れていない。

痛みのせいかは分からないが、集中力がない時点で男の勝ちのようなものだ。彼はにやりと笑う。ここからは彼女にとって拷問にかけられたような時間が始まるのだ。

男は唾を飲み込んだ。

一番初めに抵抗できないように……腕を潰すため……そう、それから両足を塞いで逃げられないように……それから身体じゅうに切り傷をつけてやって……髪を短く切ってしまうえば意外と喚くかもしれない……

そんなことを、男は考えなければ良かったらう。

そうすれば彼は氣を失わずに済んだのだから――

## 14 不法地帯(5)

微かな違和感はリアナにあった。

ただ彼女は、「単に剣を交えるだけに限らない戦いのスタイル」に自分の身体が感覚を“取り戻してないだけ”だと思っていた。

だが男に腹を蹴られる直前にハッキリと気づく。

気づいた時には遅く、彼女は衝撃を受け入れて床に転がっていた。腰と背中では強く打ちつけたが、頭は身をよじって庇った。

だから目の前がぐらりと大きく円を描いていることは関係がないはずだ。

……視点が定まらない。次にどう動くか考えられない……

眩暈を振り切るように頭を振るが、そんなもの焼け石に水だった。

(酔った、か)

リアナは額に汗を浮かべ、舌打ちした。

彼女のその考えと相違なく、確かに彼女は酔っていた。

それはリアナを弁解するならば彼女を誤解させる理由が在った。

それは彼女が飲んでいた「果実酒」がそれではなかったからである。

このガランドの酒場では果実酒と言われて果物と蒸留酒から作ら

れた酒を出すことはまずなかった。そもそも店にそんなものは置いていないし、店ではあまり声のかからない酒だった。

だから稀に「果実酒」をオーダーされた場合、店員は適当な酒に果物の絞り汁をつつこんだものを運んでくるのであった。

もちろんあまり酒に詳しくなかったリアナの軽率さといえはそれまでだが、出された酒の濃度が運悪く高すぎたのも問題であった。彼女が感じたように、確かに質は“悪くなかった”。

男は薄笑いを浮かべながら一步一步間合いをつめてくる。立ち上がりつても満足に剣を構えることができない。

仮にここで逃げたとしても、今の自分が真つ直ぐに走ってくれるかは自信がない。

それにもう一度ナイフを投げられたら、今度は避けられないと思った。

なんとしても今、男と決着をつけなければならない。後ろで床に転がっている男たちには一撃ずつ与えてはあるが、気絶まではさせていない。目の前の男を倒すのに時間はかからないと思ったからだ。

でも、

現実には、口元を歪めた男が剣を振り上げた。

それなのに、身体が重くて、仕方なくて、だからリアナは悔しくもその様子を目にしているだけしか出来なかった――

「……っ……！」

反射的に目を瞑ろうとした。

でも、その直前に「煌き」に気づき、驚きの中「それ」を見つめた。

「なん、で……」

その姿は美しかった。  
容姿云々の話じゃない。

その鮮やかな身のこなし、そして見たこともない動きに目を奪われた。

確かに「彼」だった。

この場から立ち去らせるために、自分が時間を稼いでまで逃した少年だった。

その努力をなぜ踏みにじったのか、もし彼女がシラフだったら怒鳴っていたかもしれない。

実際そんな気力もなかったし、驚きの方が勝っていてそこまで思考は到らなかった。

彼は男の背後にいて、そしてほんの少し腕と足を動かしたただけに見えた。

無駄な動きなど一切なく、素早く、そして確実に。  
その初めて目にするおそらく——体術で、男を、

「無力化」させたのだ……！！

リアナは酔いが回りすぎて幻想を見ているのかもしれないとぼんやり思った。

彼は同じ年頃の少年よりも華奢な体格で、相手は自分よりも二回りは大い男で。

でも現実には、フェリスは男を床に押し付けているし、男は抵抗する様子も見られずもしかしたら気を失っているかもしれないという状況だ。

ぽかん、と口をだらしく空けていたリアナにフェリスは顔を向けた。

ああ、怒っているのだ、そう思った。

「お前……」

男から手を離し真っ直ぐにフェリスはやってきて目の前に立つと、ふらふらしながらも自分を凝視している少女の左耳を掴んでそれを引っ張った。

「いッ！ いたいッ！！」

自分は立っているのもおぼつかないのになぜ彼はこんなことをするの！？

リアナは睨もうと思ったが、痛みで顔を顰めるので精一杯だった。しかもフェリスは眉間に皺を寄せて彼女の様子など気にかける様

子もない。

「なんだお前の様はッ。

ご立派に俺たちを先に行かせて戦ったはいいが、結局一人じゃどうにもならなくなって降参か！それとも何だ？わざと負けた振りでまして相手の隙でも狙うつもりだったのか！？」

「う、っ……」

確かに言われるとおりだ。どうにもならなくなった。

フェリスが来てくれなければ自分は今、かるうじで立つこともできなかったかもしれない。

彼はリアナの肩越しに視線を向けると、指を彼女の耳から離れた。

慌てて耳を摩る彼女を横に除けると、フェリスは軽く腰を下ろして構えの姿勢をとった。

リアナに目や鼻や喉、拳匂に腹まで刺激を喰らった男たちが目をぎらつかせて立ち上がったのだった。

「こうなったら逃げるのも野暮だ。相手してやる」

#### 14 不法地帯(5) (後書き)

酒に果実の絞り汁突っ込んで混ぜたらカクテル、でいいのかな？ (乱暴？)

王子という役割が折角いるのに剣を使って優雅に戦うとかではなくてすみません。

次話では多少使うと思われます。元から王子らしい所がない人な気がしますが。

## 15 不法地帯(6)

少年は、己に振り下ろされた刃に対して身体を左に避けながら、左手で相手の右手を掴み、そのままそれを自分の腰に引き寄せた。その相手の手を左下に捻って、さらに自分の右手も添えて深く引くと、男はバランスを崩して、後方にまるで宙を浮くように転倒する。

フェリスは痛みで握っていられず床に落とした男の剣を奪うと、新たに刃物を振り上げて襲い掛かってくる男と対峙した。

彼らは一度それぞれ刃を打ち合わせると一度間合いを取り、再び剣を交える。

もちろん相手しなければならぬ男たちはまだ残っている。

リアナは酔いと驚きで呆然としていた自分に気がつき心の中で自分に叱責を飛ばした。

耳を引っ張られたおかげか少しだけだが目が覚めた。さらに意識をハッキリさせようと、怪我して治療したばかりの、左腕のまさに傷口に、ベルトに残っていたナイフを抜き取って切り付けた。傷を挟った。

一瞬よりも長く唇を強く噛んだがそれも直ぐ終わった。じくじくと痛みは広がるが、感覚が少しはつきりしてくれる。

リアナはフェリスの背後から隙を狙おうとしている男たち三人を牽制する為に、残り全てのナイフを男たちの足元に投げつけてやった。

「間違えるんじゃないわ。あんたたちの相手は『わたし』よッ!」

願ったとおりに彼らはリアナに向かってきた。

目の端でフェリスを見るが、状況的には彼が優位のようだった。剣さばきは彼に相応しく淀みなくしなやかだった。

護るべき人に戦わせている。

それにリアナは奥歯を噛み締めた。例えフェリスに負ける様子がなくとも、その役目はリアナが負うべきものだ。

リアナはすばやく剣で男二人を薙ぎ払い体勢を崩させると、残りの一人にフェイクの振りを与え、既に手の中に用意してあった細い紐を男の腕に巻き付けた。

そして反対側の錘おもりの付いた端を剥き出しになっている酒場の梁に投げつけて絡ませてやった。

男はその場から動けなくなり、紐を切ろうと刃を動かしていたが無駄だった。刃物で切れないこともないが、華奢なわりに頑丈な紐で時間がかかるのだ。

男が間抜けにももがいている間にリアナは残り二人の相手をしていった。しかしやはり剣先の間合いが上手く取れず、何度か空振りをしてしまう。

その時、酒場のドアが大きな音を立てて開くのが聞こえ、ドタドタと足音が近づいてきた。

音はリアナの前に現れると一瞬で男たちを吹き飛ばした。

「行くぞッ！」

汗だくのコイズがフェリスの相手をしていた男をも制圧する。フェリスの腕を掴み、リアナの異変を感じたのか彼女を反対の腕で抱

えて「逃げるが勝ち」と言わんばかりの素早さだった。

正直ほっとして、リアナはそのまま身を委ねた。  
いや、そうしようとした。

遠ざかっていく雑音に、無機質な音が響く。

何の音が逡巡したが、やがてその音が拍手だと気がついた。

「何だ、アンタは」

コイズの低い声が聞こえた。

「いえいえ、貴方方の楽しい『劇』を見させていただきまして、その賛美のつもりです」

その声には確かに楽しげな様子が聞き取れた。

「はあ？ 訳わかんないな！ どけよ、邪魔だぜ」

リアナはのろろと顔をあげ、床に足を着けた。

三人の進行を妨げるように立っているのは、フェリスと同じようにフードを目深くかぶった長身の男だ。

コイズは少しでもこの場から早く離れようと、リアナとフェリスの腕を引いて男の横をすり抜けようとする。

だが男はそれを止めた。

「『狼』は絶滅したのだと思っていましたけれど、生き残っていたんですね」

足を、止めた。

「どうした？」

訝しげな声。

「この刻印をみるのは久しぶりですね。以前、貴方の仲間に仕事を邪魔されたこともあるんですよ？」

男の手には、小さなナイフが。

「……」

「5年…いえ、6年前でしたか。私の耳には『絶滅』という形で話が入ってきたんですが。ふふ、だからもう『狼』には逢えないと思っていましたんですよ？」

それがこのような形で再会できるなんて、非常に愉快です」

知っているのか。

「おい、どうしたんだよ。行くぞ！」

そうだ。こんな戯言、聞き入れる間すらも惜しいじゃないか。

敵のど真ん中においてこんな騒ぎを起こして――

「笑えます。あの『狼』が無残にもどこかの誰かも知らぬ者たちに『駆除』されたなんてねッ」

こいつは知らない。

何も何も知らない。

だから、こんなことがいえるのか。

「……」

「どうしたんだよ、行くぞ！？何突っ立ってるんだよッ！」

どうして頷かない。どうして直ぐにここを去らない？

だって――

「そういえば虐殺だったとか。ふふ、面白そうだな。ぜひその場に居合わせてみたかった」

男は、嗤っていたのだから。

あの惨状を知らないくせに嘲笑ったのだからッッ！！！！

リアナは強く強く、柄を握り締めた。

16 不法地帯(7)

「あん？あいつが何モンかって？」

図々しくも他人の部屋で豪快にソファに座り、テーブルに足を乗せている男は突然振られた話に思わず眉を寄せた。

「お前、負けておいてそういう考えは一度もなかったのか」

呆れを含んだ言い方に、コイズは苦笑いを零した。

その話題のせいで最近同僚にからかわれてばかりだ。ついでに後輩のタクトまで調子に乗っているときたものだ。

「あー。いや、俺らの中でもそういう話にはなつたぜ。

あの子実はザクス隊長の隠し子だとか、セント＝フィリアの聖騎士だとか、ガランドの有望ルーキーだとかなッ」

もちろんそれらは冗談で、ガランドのルーキーなどとは意味として「刺客」と言う意味である。冗談でなければ嫌味だ。

いつものように窓辺の書記机にいたフェリスだが、彼は皮肉そうに笑った。

「成る程。なかなかユニークな意見だ。しかも的を射てるかもしれない」

ぎよつとしたコイズは、彼を諷めるように少々声を低くした。

「それはさすがに言い過ぎだぞ」

「……そうか？俺は少なくとも一度は疑った。俺の命を狙ってるんじゃないかってな」

「お前……。それは、お前の立場なら仕方ないかも知れねえけど、でもお前助けてもらっただろ？」

「確かに、そんなこともあったか」

それはリアナとフェリスが始めて出会った日。

フェリスを狙った刺客からの矢を彼女のおかげで逃れることが出来た。

それなのにフェリスはそっけなかった。

「だが、それが演技だとは否定できまい？それに矢を避けられたのも事前にそれが飛んでくることを知っていたからかもしれない」

「フェリスッ！！」

いくらなんでも酷いと思った。

彼女とはフェリス以上に短い付き合いになるが、それでも分かることはある。

あの子に邪な所などない。からかうと面白いくらいに怒って、そして朗らかに笑うあの少女が「暗殺」などとは考えられない。

フェリスは睨むコイズにため息を零した。

「否定したいんだろ？なら、説明できるのか。あいつは『何者』なのか」

彼が言いたいことは分かる。

リアナの正体が分からない限り、疑うことは道理。そして彼女を

潔白だと思うならばその反証を挙げろ、と。

「そ、それは……俺も、分からねえけど……。でも、……あいつにだって色々あるかもしれねえ」

「……俺は本人にも聞いたが、あいつは言い淀んでいたな。しかも例の暗殺未遂で結局そのままになった。今聞いたところで素直に口を割るとは思えないが……」

だが、『色々ある』で済ませていい問題でもない。少なくとも、俺にとってはな」

コイズが気づいて口を開く前に、フェリスは自嘲気味に吐いた。

「いくら価値のない命だとしても、今はまだ死ねないからな」

「だから」と彼は続けた。

「最低限自分自身で身を護らなければいけない、それだけだ。正直言えばあいつは関係ないかもしれん。所詮、俺の問題だ」

コイズはその時椅子に座ったフェリスの前にいた。頭を垂れて両手を脇で強く握っている。

「……悪かった。俺が、悪かった。だから……そういう言い方は、やめろよ……」

どうしてこんなにも自分を卑下するのか。価値のない命なんてないのに。そんなもの、どこにも存在しないのに。

「死ぬなんて、簡単に言うなよ。死ぬのは簡単だ、……殺すのも、殺されるのも。」

だから、だからお願いだからそんなこと言うんじゃないよ……ッ  
！！」

コイズは半ば叫ぶように言った。

それに対し何を思ったかは分からない。

フェリスは目を瞑った。彼は一切表情を変えなかった。

「その通り、簡単だ。」

だから俺は、やすやすと殺されるつもりはない。

疑う心が罪だと言うなら蔑めばいい。<sup>さげす</sup>それでも俺にとってそれは  
必要不可欠なものだ」

「……じゃあ、どうやってたらリアナのこと信じてやれんだよつ。あ  
いつがなんで強いのか、それさえわかれば信じてやれるのか？

誰だって人には言えないことはある！お前がそうであるように、  
誰一人として心の内を全て曝け出せる奴なんていねえだろ！？」

例えリアナが剣の師に指導を受けていた、と言ったところでそれ  
を信じるか否かはまた別問題だ。

「いつそ」

フェリスが呟いた。

彼は窓の外に目を向けていた。

「あいつが刺客だった方がよっぽど信じられるんだが」

「……………」  
「まあ、その杞憂もそのうちなくなるだろう。方法はあるのだから」

最後の方は独り言のようだった。

少年は足を組みなおした。

そしてしばらくしてから、もう一度口を開いた。

「……………まだ死ねない。だから、あいつには感謝しているのは事実だ。」

例えあれが仕組まれたものだとしても、少なくとも俺はあの時死んでいなかったのだから」

「……………嫌な感謝の仕方だぜ」

「それにあいつは……………無自覚だろうが多分……………」

「なんだよ」

「いや、何でもない」

そして再びフェリスは瞳を閉じた。背にあるガラス戸から入ってくる陽光に、彼の髪が銀色に煌くだけだった――

リアナは襲い掛かろうとする身体をなんとか自制心で留めているように見えた。

気配が違う。

少女の身体から溢れているような怒気。それはどこか冷めていて、いやむしろ冷酷とっていい。冷たい憎しみが滲み出ているようだった。

コイズの背中越しに見ていたフェリスは思わず彼女の肩を掴んだ。するとリアナは腰に伸ばしていた手を離した。

「あ……」

我に返ったように琥珀の瞳が振り返った。

なんだというのだろうか。  
何の話だと言っのだろうか。

（もしかして、この話は自分が知ろうとしていたことなのか？）

そんな風に困惑気味のフェリスたちを見て男は何を思ったか、そちらに一瞥を向けると、フードから覗いている唇を三日月の笑みにした。

「おやおや。もしかして貴方の仲間にご存じなかった？それは悪いことを言いましたね」

言われてリアナは強く拳を握った。  
微かに肩が震えている。

「しかしまあ、貴方の“本当のこと”を知ってお仲間が貴方をどんな目でみるか考えたことはおありですか？

くすくす、私だったらむしろ大歓迎ですけど、普通だったら…  
…ねえ、見るんじゃないませんか？」

「……何……」

彼女の声は掠れていた。

男は不気味な声で一笑する。

「気味の悪いものを見るかのように、ね？」

「くっ……」

少女の顔が歪む。

「だって、貴方人間じゃないでしょう？欲望のまま人を狩る『獣』  
でしょう？」

笑った。嗤った。

男は恍惚に浸りながら、甘ったるい声で囁いた。

「ねえ、『裔狼族』<sup>えいろうぞく</sup>のお嬢さん？」



## 17 狼を継ぐもの

リアナの顔は真っ青だった。

「お二人は聞いたことありません？ 『狼裔族』<sup>えいろうぞく</sup> って。

ああ、貴方たちのような不自由を知らない生活をしてきた方々は知らないでしょうね。

この一族は有り体に言えば、『間者』をするのが仕事でね。それを家族・親類だけでやっていたんですよ。まさに血の連なる者たちだけでね。

ここにいた彼女を含め、この一族に生まれたら赤子の頃より『間者』になることが宿命。それはもう、それになるためだけに訓練、生活をしているんですから、それは立派に仕事がこなせるようになります。彼女はそのうちの一匹というわけです」

そこで男は言葉を切り、リアナがどんな表情をしているかじつくりと眺めた。

「一族全員で『間者』の仕事してるなんて、結構オモシロイと思いますけど。ああ、もちろん褒め言葉のつもりですよ？」

ふふ、疑っていますか？ 彼女の戦いぶりを見ても、まだ『ただのオンナノコ』なんて思えませんか？

……まあ、私としては『狼』というより『狗』<sup>いぬ</sup> ですか。依頼主の言うことなら雑用も辞さないようですし」

わざとらしく言葉を切り、男は薄い唇を緩めた。

「例えば、『暗殺』とかね？」

「違うッ！！」

リアナの顔は真っ青だった。唇を堅く噛んだため、血が滲んだ。

「そんなんじゃない！ちゃんと理由があつた！！何でも言うこと聞いたなんて嘘よッ！！」

叫ぶリアナを見て、男はどこか哀れむような眼差しで、声で、告げる。

「人を殺すのに違いがありますか？貴方がたが暗殺をしていたのは事実じゃないですか。」

どんな理由が在るにせよ、『殺人』は『殺人』です。偽善ぶって己たちの罪から逃げようなんて、浅ましいですね」

リアナは激しく否定する。髪を乱すほど、目に涙を浮べるほど――

「違うッ！みんな、理由が在った、信念があつたのよ！！」

「それなら信念さえあれば人を殺して良いということになる。ふふ、これを肯定したら、それこそあなたは『ケダモノ』、ですよね？」  
「そんなッ！」

「……この街にいる我々は、人を殺すことの正当性なんて肯定しませんよ？」

殺されたくないから殺す。生きるために殺す。己の欲望のために殺す。

醜いと思われるでしょうけれど、私はむしろそれが潔く、人間らしいと思います。

……むしろ、その欲望を綺麗ゴトで覆い隠し、飽く迄美しいままでいようとする人間方が『ケダモノ』だと思います」

「ねえ、お嬢さん。仮に我々のような人間が醜く賤しい存在だとしても、道徳や理念を建て前に人を殺す人間たちと何が違うと言うのですか？」

耳を両手で塞ぎ、入ってくる言葉を全て防ごうとする。でも、男の声は隙間を逃さないように通り抜ける。

「血からは逃れられないんですよ。あきらめなさい。あなたがそんな奴らというなんていけません。あなたの本来の居場所は『ここ』です。」

心配することはありませんよ。あなたのような絶滅寸前の種ならば、我々は喜んで迎え入れますから」

「黙れだまれだまれええええええ！！！」

リアナはただ鳴咽に混じって叫ぶことしかできなかった。それがどれだけ情けなくてみっともないか、小さな子供の駄々と大差ないか、分かっていても止められなかった。

男が言ったことになんの嘘も誇張もない。

間者をすることで、あるいは主人の願いを叶えることで、「裔狼族」と呼ばれる一族は生活してきた。

そしてきつとそのせいで、家族も親類も全員殺された。殺戮のなかでただ一人だけ生き残った少女だけが、その時に何があつたのかを知るのみだつた。

真実だから、本当だから、それを知っているから、だからこそただ叫ぶしかない。

怖かったから。

自分が10年過ごしてきた世界がどれだけ、まわりの世界にとって異質で暗くて恐ろしいものか。それは家族を失ってから6年で知り、学んだ。

……だから、だからこそ、振り返ることができなかった。

そこに浮かぶ表情など容易に想像できたから――

「ちがう」

「まだ否定するんですか？あきらめの悪い――」  
「そうじゃない!!」

振り返りたかった。でも怖くて怖くてたまらなかった。

……それでも、伝えたかった。言わずにはいられなかった。

「わたしは………フェリスを殺そうなんて思ったことは一度だつてない……っ」

自分の何もかもが信じられなくても、これだけは信じてほしいと、心の奥底から切に願った。



## 18 その背に問う

人里離れた山の奥。そこに、街中の屋敷程大きな古びた家が建っていた。

その家の前に小さな少女が座り込んでいた。

「どうしたんだ」

声をかけられて少女はぱつと顔を上げた。

目の前に白髪の男性がたっていた。

「おじいさま！」

男性は少女の隣に腰を下ろした。

「どうしたんだ。めずらしく元気がないみたいだが」

「うん、あのね。あたしね、ぜんぜん、けんじゅつ上手くならないの。おじいさまみたいなりっぱな剣士になりたいのに……」

そう言うと男性は笑った。

「私は剣士ではないぞ。ただの間者だ」

「かんじゃ、つてよくわからない。でもおじいさまは剣を使っててきをたおすんでしょ？」

「そうだな。私の一番の武器は剣だな。でも絶対に目立つところで戦わない。それに剣を振るうことが目的じゃない。それはあくまで手段だ。私たちの仕事はそういうものだ」

「よく、わからない。むずかしい！」

男性は目を細めて隣の少女を見つめた。

「そのうちお前も分かるさ。……立派な剣士ではなく、立派に一族の仕事を担えるように励みなさい」

少女は大きく頷いた。大きく目を見開いて、笑顔いっぱい表情で――

「うん！ぜったいにりっぱな『かんじゃ』になるね！」

あの頃は、その言葉の意味をまったく理解していなかったけれど――

「……………この男の言っていたことは嘘ではないようだな」

不自然なほど静まり返った酒場に、その言葉が響いた。

「成る程。こいつが戦いに慣れているのは、そういう家に生まれ訓練されてきたから、だと」

フードをかぶっている男はくすりと笑いを溢した。

「ええ。お嬢さんの反応が何よりの証拠でしょう？」

「……それで？貴様がわざわざそんなことを言う理由はなんだ？」

そこで男の顔が少しだけ変わった。

「動揺されずにそう言いますか。ちゃんと『みている』方ですなえ」  
「お前のような胡散臭い者が善意で教えてくれるとは思えないからな」

「貴方のような方々は馬鹿ばかりだと思っていましたが……しかし、貴方は悪くない。『ここ』まで来る破天荒さも実にオモシロイですし。」

「いやあ、気に入りました」

につこり笑うと男は片腕を広げて道を空けた。

「どうぞ、お通りください。『殿下』殿？」

フェリスは男を睨んだ。

「面白い皮肉だ。だが遠慮なく通らせてもらう」

酒場にいるものは誰一人フェリス達を止めなかった。

ただ不自然なほど、息を殺すように彼らを見ていただけだった。

「ああ、そうそう」

酒場を出ようとする三人の背中に飄々とした声が掛かる。

「『殿下』殿は気に入りましたから、今後一切この街の者には手を出させません」

フェリスも、そしてリアナもコイズも振り返った。

「まあ、貴方のお父上と兄君は知ったことではないですがね――

――」

フェリスは唇を噛むと、男に背を向けた。

「……俺がお前に感謝でもすると思うのか？」

「おや？ 気付いてらしたかな、貴方のその態度は」

「煩い奴らが、お前が現われてから気味悪いくらいおとなしくなったのに、気付かないとでも思うのか」

以上だ、と言いたげにフェリスが再び足を止めることはなかった。

「あのやろーがガランドの黒幕かよ！？ くそっ！ 状況が状況じゃないきやひっ捕らえてやりてえ！」

大人気なく地団駄を踏むコイズに、フェリスはため息ついた。

「残念だが、あいつが俺を知っている上で手を出さないんだ。屈辱的だが、こちらはその情けがなければ今ごろ八つ裂きだな。なにせガランドの『国王』と言って良い。

奴の気が変わらないうちに街を出るのが最良だ」

「くそおおお！！あんな奴に情けをかけられるなんてえええ！！」  
しばらく唸っていたコイズだが、彼はリアナと目が合うと、瞬巡  
を見せた。

「あ——のさ、リアナ、お前さ……」

コイズの顔を見ていられなくて、ガラントの店灯りの中リアナは  
俯いた。

聞きたくなかった。

あからさまに罵られたりはしないかもしれない。でも、結局言わ  
れることは同じに違いない。

何を言われるか分かかっていて素直に聞いて、傷つくと分かって受  
け入れるなんて……できなかった。

「ちゃんと話さなくてごめんね。」

あはは、びっくりしたよね？でもわたしは暗殺なんてしたことな  
いよ？そりゃあ、……そういう訓練は受けてきたけど、10歳の頃  
に家はなくなっちゃったしさ！

あはっ、それからはこれでもまっとうに生きてきたんだよ？生活  
費はアルバイトで——お店のお手伝いとか、そういう普通のバイト  
だよ？そういうのでなんとか暮らしてきたんだからっ」

聞かれてもいないのに口が饒舌になる。

「こんなかたちで聞かせるつもりなかったのに、な。あはは、もー、  
言わなかったわたしが悪いんだけどね」

影のかかった朱色の砂利を、じっと琥珀の瞳は固まったように見

ていた。

ふと気配を感じて顔を上げようとしたが、その前に頭を大きなものでおおわれた。

「無理して笑ってんじゃねえよ……」

コイズの声が頭上から降ってくる。

「別に無理なんか、して、ないよ？」  
「嘘つけ。」

コイズはぐつとリアナの頭を押さえ付けた。

「うまく……いえねえけどさ……。今は違うんだろ？なら良いじゃん！気にするなって！」

気付いていた。コイズの言葉には迷いがあることに気付いていた。それでもこの時初めて、深く息を体から吐きだすことが出来た。

「良い訳があるか」

弾かれたように顔を上げると、強い紫の光にぶつかった。  
身体に鳥肌が、立った。

「あの、わたし、だからわたしはフェリスのこと……ッ！」

太い腕がのびてきた瞬間、リアナはそれに抱きとめられた。足に力が入らず、その腕に支えてもらえないと地面に倒れこんでしまう。

コイズが上から顔をのぞかせた。

「大丈夫か？……色々あつて疲れたんだろ。俺がおぶってやるよ」

リアナはしかめていた顔を横に振った。

「……両手がふさがった、ら、どうやって、フェリス、を、まも、るの……？」

「あ」

たつた今気が付いたといわんばかりのコイズは頬を掻いた。リアナをおぶったらさすがに戦えないだろう。

だからといってリアナが一人で立てるようでもなく、まさか危険な場所に放置するわけにもいかない。

悩んだ末、コイズは、

「じゃあ、フェリスがおぶってやれよ」

と言い出した。

「……」

「お前も男なら、女の子一人くらい背負ってやれよ。そんなこともできないのか？」

「……出来ないわけではないが、お前がやればいい。何かあったらお前の代わりに戦ってやるさ」

「いやいやいや！それは不味いから！さっきみたいのは俺の心臓に悪いから止めてくれ！」

困ったように唸るコイズに、腕のなかのリアナは弱々しい声を絞りだした。

「い……いよ……。少し休んだら、後から行くから……フェリスを早く……」

「リアナっ」

「ほら、……わたしは、『普通の子』……なんかじゃないし、ね？」

自嘲気味に笑うと、コイズは唇を噛んで目を背けた。

「今は馬鹿なこといつてる場合じゃねえぞ」

「コイズは、騎士よ？」

言った意味に気が付き、コイズがさらに一人で悪態を吐いた。

「どーすりゃいいんだよ、畜生！」

その答えを出したのはフェリスだった。

「……仕方ない。俺がやれば良いのだろう？」

リアナが呆然としている間に腕をとられ、フェリスは背中を彼女に向けた。

「早くしろ」

ふらつきながらもその「無防備な」背中を見つめて、リアナはその場に立ち尽くしていた。

だが再度フェリスに同じ言葉を、先程よりも強く言われ、彼女は慌てて彼の肩に両手を置いた。

「あ、あの……？」

決して体格が良いとは言えないフェリスだったが、すんなりとリ  
アナを背負った。

「なんだよ、やりやー出来るじゃねえか。もったいぶんなよッ」  
「あくまでも仕方なく、だ。これ以上ぐずぐずとしていたくない。  
行くぞ」

そう言葉を紡ぐフェリスと触れた部分が、微かに音を響かせる。  
身を委ねた背中の暖かさに、落ち着かなかった。

それと同時に、なぜだか泣きたくなった。

## 18 その背に問う（後書き）

「かんじゃ」が「患者」に思えるトリック。（どうでもいい）

## 19 知るといって

フードを下ろしているから銀の髪が目の前で揺れている。

誰かに背負われたのは幾年ぶりだろうか。もしかしたら、6歳の頃に訓練で川に落ちて溺れたとき以来かもしれない。——息がかかるほど「誰か」が傍にいてくれたことすら懐かしい。

前を歩くコイズに続くフェリスは、先程から黙ったままだ。

幾分気分がよくなったリアナは決まりが悪く、また沈黙に耐えられなかった。

「あ、あの……」

「なんだ」

不機嫌そうな返事に何とっていいか分からず、少しだけ強く彼の肩を握った。

「その……ごめんなさい。わたし、言わなくて……」

改めて口にすると声が震えた。

「まあ、口に出来ないのも道理か。護衛が暗殺者だったら笑えないな」

「……」

リアナが押し黙ると、フェリスはため息をついた。

「……悪い。言いすぎたな」

「え？」

「お前は違うんだろ？」

リアナは思わず手に力を入れた。

「痛い……」

「あ、ごめんっ」

慌てて手を離して身を退こうとしたため、バランスがとれずにフェリスの背中から落ちそうになった。

だがそれを彼が素早く防いだ。

「落ち着け」

「ご、ごめん。……だって、フェリスがそんなこと言うとは思わな  
いから。わたしのこと、信じてないと思ったから……」

フェリスは少し間を取った。

「信じて……ないのかもしれない。俺は……お前を『疑わなければ  
ならない』から」

「そ、そっか……」

当たり前だ。

彼の立場、自分の生い立ち、それから信頼を築くにはとても短い  
時間。その中で「信じてくれ」ということは無理なのだ。

「だけど、分からないんだ」

躊躇うような素振りだった。不思議に思えて、聞き返していた。

「わ、からない？」

「ああ。自分でも、疑うべき相手をなんで背負っているのか分からない。

ただ……」

「お前は、俺と似ているのかもしれないと思ったから」

思いがけない言葉だった。

「似てる？わたしが、フェリスに……？」

立場も生まれも性格も何もかも、似ているところなどないはず。強いて言えば、歳が同じということだけだ。

「……」

「フェリス？」

「……………知ったら、知る前には戻れないんだ」

「えっ？」

すぐ傍にあるフェリスの顔を見つめる。

半分しか見られないその表情は、どこか——遠くを見ているようだった。

「俺は昔ある人に出会って、自分がいる世界がどれだけ特殊なのか

知ったよ。

“自分の立場”というものをはじめて知った」

「……」

「自分が当たり前にされてきたこと。それが城下はおろか多くの人々にとって“特別”なことだと、知ったから。言葉や文字なんかじゃなくて、身体で初めて理解したから。

そうしたら、自分にされていること全てが苦しくなった。息苦しくなった……」

リアナは何も言えなかった。

「……お前もだろう?」

「わたし?」

彼の言いたいことが、分からない。

「お前も知ったんだろ?お前の家が“特別”だったことを。

自分が受け入れてきたものが、他人からどう思われていたことなのか——」

どうして……

彼はなぜ……

「……うん。でも、それはフェリスと比べるものではないわ」

リアナの場合は人としての「倫理」や「道徳」というものと戦わなければならない。

それは目にも出来ず触れられもしない。どうやって乗り越えるべきなのか、それはあくまで人として、人間として、それを「何かと比べることなく」、答えを出さなければ成らないものだから――

「同じだよ」

目を見開いて、闇に滲む肩を見つめる。

自分の心臓の音が少し早く聞こえた。

「お前は、今、自分が今までしたことをどう思っている？」

「……………人から褒められるような生活ではなかったとは、思うわ。人を殺すために生きてきたといっ…ていいんだもの……………でも！でも、…………でも、それでも！

あそこはわたしの居場所だった。わたしの生きる世界だった！していたことが正しいことかどうか、それを疑うこともしなかったわたしには罪がある。それでも、わたしにとって家族たちと一緒にいられる、…………優しい場所だったわ……………！」

涙が頬を流れる。熱くて、たまらない涙が。

「…………お前はもう一度同じように家族が目の前に現れたら、どうする？」

お前はまた同じような生活をするつもりなのか？」

「できない！！出来るわけないよ……………  
だってわたしたちがやってたこと、は……………」

「それなら、いいじゃないか」

「い……い？」

「お前は気づいた。知った。分かった。

それはとても簡単な事で、とても難しいことだ。何かのきっかけ——それが善きものにしろ悪しきものにしろ——がなければ気づけないことは多い。

だが、そこでどうするかが、それこそが本当に人間として問われることなんじゃないか？

お前は過去の過ちを認め、受け入れた。

……それで、いいじゃないか」

「いいじゃないか、って……」

良いはずはない。自分の家のせいで死んだものは、決して少なくないはずだ。

そして、

「何も起こらなかったら」、自分は今頃——

だが、リアナの苦しみを断ち切ろうとするように、彼は言葉にして、声に出して、伝えてくれる。

「いいんだ。だから、俺はお前を軽蔑も見下しもしない。

もしお前を煩わしく思う理由が在るとしたら、今のお前が俺にとつて不利益であるという点のみだ」

「フェリス……」

「少なくとも」

彼は迷ったはずだ。きつと、そうであつたはずだ。  
たけれど、フェリスは……——

「俺は、お前の過去を受け入れる。

残念ながら興味がない、とはいえない。俺は俺の信条があり、やるべきことがある。

だが、お前が過去を受け入れるなら、俺もまたそうしよう」

まだ細い、と思う。

でも、目の前にある背中が大きく思えた。

「……」

そつと額をそこに当てると、微かに鼓動が聞こえた。  
目を瞑っても、涙は後から後から止まらない。

「ありがとう……」

首にすがり付いて泣くリアナを、フェリスは黙って背負うだけだった。

## 19 知るということ（後書き）

ということ、第一章終了です。いつのまにか一章になっていて不思議です。

女の子率が非常に低いのが悔しいです。さて、次章でどうなるでしょう。

## 0 宰相殿は慨嘆なされる

「ハロルド様!!」

「お、キーツじゃねーか。どうした？」

三つ編みを解いて侍女に髪を梳いてもらっていると、顔を引きつらせた中年の男——もとい、ロスネルド国の宰相であり、長年お小言をハロルドに降らせてきた腐れ縁でもあるキーツが、部屋に駆け込んできた。

歳のせいかな、キーツはしばらく切れ切れだった息を整えていた。

しかしいくら宰相がハロルドのお目付け役であつたとしても、結局は国王と部下でしかない。ハロルドの就寝前に許可もなく部屋に入室するだけの理由があるというのか。

「き、ききき聞いておりませんでしたぞ！」

「はあ？ナニが？」

「フェリス様の護衛のことです！」

「リアナ・レーベルトの？」

さっぱり分からないという様子の国王に、キーツは内心焦れつつくて仕方なかったようだ。

彼は室内にいた騎士と侍女を下げさせると、改めて主人に向かい合った。その声は心なしか小さくなっていた。

「何をポーカーフェイス気取っているんですか！あの子は不味いですよ！」

不味いと口にするキーツの表情は焦りと懇願が交ざり合っていた。

それでもハロルドはふてぶてしく笑った。

「ああ、お前やっと知ったんだ。キーツの情報網もたいした事ないなあ。」

でもあの子なら護衛にしちゃあ申し分ないと思うがねえ」

「それは確かに……って、『だからこそ』不味いのではないですかッ」

「『裔狼族』と今更関わってしまったたら貴方様は……いえ、貴方だけじゃなく……！」

「キーツ・フォン・マインド」

名を呼ばれ、キーツは押し黙った。その声の響きはいつもの明るいものではない。

「……はい」

洪々と返事をした。

ハロルドはしばらくひじ掛けに腕をのせ、考え込むように頬に手を当てていた。

「……………」

「……………」

「そろそろ、な」

「はい」

やっとハロルドが口を開き、どこか安心したようなため息をキー

ツは溢した。

「奥さんとパーティーの相談しないといけないわけだよ」

「はいい??」

「いやあさ、アイツせつかちだろ?別に俺の誕生日が近くなったら誕生パーティーの準備すりゃあいいのになあ。なんか俺の服装がどうとかこうとかで、早いとこ話し合う場を作ないとそのうち乗り込んできそくなわけよ」

綺麗な金髪を指で乱しながら「だるいなあ」と口を零すハロルド。  
キーツは唇を震わせた。

「は、ハロルド様。私の話をすり替えないで頂きたい……っ」

「ああ。ま、いーじゃん。『裔狼族』との関わりなんて今更断てるもんじゃねえし」

顎をあげてどこか不敵に微笑むロスネルドの国王。

「過去をなしに出来るような話じゃない。」

「それは……!」

「なら、ま、あの子を拒むほうが『今更』さ。……あの子が現われたのも『ウンメイ』ってやつかね」

まるで他人事のように話す国王にキーツは絶句した。

「……貴方はまさか……リアナ・レーベルトのことを知っていて『あえて』フェリス様の護衛に……?」

ハロルドはとぼけたように、

「明日何日だっけ」

とキーツに尋ね、宰相の堪忍袋をぶち壊した。

## 1 まだ太陽は見えぬ

早朝はさすがに寒くなっていた。すでに制服に着替えていたリアナは、肩からストールを羽織ってまだ薄暗い廊下を歩いていた。

そのうちに、廊下の先を長い髪の女性がシーツを抱えていることに気が付いた。朝から紺と白の侍女服はきっちりと皺がのばされている。

「おはよう、ローズ。お仕事中？」

呼び掛けると女性はすぐに振り返った。

「リアナ！おはようございます。」

今からもつとこれを集めないといけないんですの。眠くて仕方ありませんわ。

リアナも早起きですわね。朝食はまだですわよ」

「朝は昔から早いから……」

そこでリアナはローズの後ろにいる小柄な侍女に気が付いた。

「あ、ごめん。仕事の邪魔だよな」

「あら。そんなことなくてよ。」

でもやっぱり侍女長の雷は嫌だから、朝食の時に話しましょう」

ちろりと小さく舌を出すローズは、同性ながらとても可愛らしかった。

「うん。待ってるね」

手を振ってローズと別れると、またもや暇になってしまった。早起きのリアナにとって朝の時間をどうつぶすか、が最近の課題になっていた。

城に来る前は朝早くから川で洗濯をしてそれを干し、また朝食を含め一日の大切な食料となるパンを捏ねて焼いたり、小さな小屋といていい家を掃除したりして朝の時間はあつという間に過ぎていた。また、簡単な食事を済ましてアルバイト先まで約一刻を費やして歩いていかなければならない毎日だった。

リアナの家は街から離れた山の中にあるため、長時間の徒歩を強いられるのである。それでも、小さな頃から山で暮らしていた慣れがあり、また山の恵みを頂くため、一人で生きていくのにその方が便利であつたのだ。リアナにとっても山は危険である一方、故郷でもあつた。

基本的に生活すべてを自分でしてきたリアナにとって、城での生活は楽で、仕事以外にも自分の時間を持てる夢のような暮らしだ。もちろんそれらは護衛の仕事のお給料のようなもので、お金を払う必要もない。城を去る日のことを考えると、家事の仕方を忘れていたのでは、と今から杞憂になる。

そう考え、一度ローズたちの手伝いを申し込んだこともある。だが逆に気を遣わせたり、庶民生活の基準では勝手が分からず、迷惑をかけることになり、結局朝は暗いうちから散歩をしているのだった。

しばらくぶらぶらしていたリアナは、急に名案を思い浮べた。

「演習場で剣の練習すればいいのよ」

いつもは夜に部屋の前の庭で練習をしていたが、せっかく稽古する場所があるのだから有効に利用するべきである。

早速演習場に向かったリアナは、騎士の宿舎前で見知った顔を見つけた。

「タクトっ」

バケツを手に使っていた童顔の青年が驚いた表情をみせた。

タクトは21歳だが、身長もあまりなく小柄なほうで、その上顔立ちが幼い。おかげでリアナより年下に見える青年なのだ。それなのに騎士の格好に違和感はない。

彼は声をかけた相手を確認すると、タクトはほっとしたようにため息を吐いた。

「なんだ、リアナかあ。」

「おはよう。こんな時間にここに来るなんて珍しいね」

「おはよう。ちょっと剣の練習したいなっと思ってきたんだけど……タクトはどうしたの？なんか怯えてたみたいけど」

「あ、うん。僕、今朝の武器庫の点検と掃除の当番なんだけど」

「何か問題があるの？」

「あはは。ホントはね、二人でやらなきゃいけないんだ。でも相方のほうが寝起き悪くてどうしても起きないから、一人でやるつもりなの。」

ただそれが隊長にばれると怒られるから、名前よばれてびっくりしたわけ」

「まさか相方って……」

疑わしそくに尋ねようとするリアナをタクトは慌てて止めた。

「先輩じゃないからね！」

確かに先輩はしばらくでいい加減で時間にルーズだけど、今回は関係ないからまだ寝てると思うよ。昨日の夜も遅かったみたいだし」

「昨日……」

「あ、いや！リアナには関係ない話なんだけどね。」

そういうわけで隊長にはれる前に掃除終わらせないと」

わざとらしく話題をすり替えたタクトは、どうやらフェリスが城を出ていることと、それにコイズが同行していることを了解しているらしい。

その上でリアナに対し誤魔化そうとするということは、恐らく彼はコイズから昨夜リアナがフェリス達と一緒に居たことを知らないのであらう。

（コイズは……言っていないんだ……）

リアナの生まれや育ってきた環境を、言わなかったのか。

「……」

「どうしたの？」

「あ、ううん、なんでもない。」

それよりも、よかったら掃除私も手伝うよ。それだったら私も役に立てそうだし」

「え！いいの？」

妙に必死に聞いてきたタクトに首を傾げたリアナは、実際に武器庫を目にしてわかった。二人でも掃除の大変そうな倉庫だったのだ。朝早くから掃除するのも理解できる。

さっそく掃除に取り掛かったリアナたちは、それ以上私語をして

いる暇もなく素早く掃除を終わらせていくことになった。

倉庫がやつと3分の1程度すんだ頃、換気のために開け放っていた扉に足が見えた。少なくとも床を拭いていたリアナにはそれしか見えなかった。だがタクトが息を呑んだので、顔を上げた。

「タクト・ザハロフ。これはどういう事が説明しなさい

「あ、いや、その……も、申し訳ありません」

深緑の制服に腰には剣。それはタクトやコイズとは相違なかったが、戸口に立っている男性には彼らとは違う雰囲気があった。額に大きな傷があるのも目を引く。

まじまじと男性を見つめていたリアナは我に返ると、立ち上がったタクトを弁護した。

「待ってください。お掃除のお手伝いを頼んだのはわたしで、タクトのせいじゃないんです！」

リアナに目を向けた男性は顎に指を当てた。

「君が噂のリアナ・レーベルト君か」

「えっ、あ、はいっ」

なぜかリアナまで姿勢を正してしまった。

「あ、う、噂……ですか？」

思わず聞き返すと、厳しい顔をつきをしていた男性はそこで初め

て表情を和らげた。

「あのヴァレンシユタインと手合せをして勝ったと聞いた。剣術大会での優勝も耳にしたときは驚いたな」

「えっと、その、きよ、恐縮です」

「そうかたくならなくていい。君は私の部下ではない。

だがザハロフ。君は君のやるべき仕事を、同じ仕事を任されたソワンとやらなければならない。分かるな？」

「はい。大変申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げるタクト。リアナはおろおろと彼と男性を交互に見る。

そのリアナの様子を男性はちらりと見た。

「本来なら罰則を与えるところだが、彼女のことを考慮して、今回限りはなしとしよう」

「……ご配慮、大変有難うございます」

「今後はないように。ソワンにもよく言っておきなさい。良いな」

タクトがもう一度頭を下げるのを見届けると、男性はリアナに一瞥をして、振り返ることなく倉庫を出ていった。

その背中が消えて、コイズは大きく息を吐いた。

「はあああ、危なかったあー」

「うう。ごめんね、タクト」

「何あやまつてるの。僕こそごめん、だよ。それにリアナのおかげで罰なしで済んだし。助かったよ。」

……でもあの隊長がリアナのこと考えてとはいえ、罰則ナシなんてなんか信じられないなあ。やっぱりリアナは隊長の隠し子だった

りしないよねえ?」

「はあ?」

訳が分からずリアナが眉をひそめると、タクトは「なわけないよねえ」と一人で何か納得していた。

「え?え?なに?隠し子?」

「なんでもないよ!」

気になったのでタクトを問い詰めていたリアナは、すっかり朝食の時間が過ぎていたことに気が付かず、その後ローズの冷たい笑顔を見せられることになるのであった。

## 2 陽光の中で

とても珍しいことだった。朝の目覚めがはつきりしたのは、随分と久しぶりだ。

カーテンでは防ぎきれない朝日が部屋に光をもたらしている。その光に惹かれるようにテラスへ出る。眩しさに顔をしかめながらも、城壁内に広がる林を見渡した。そろそろ木々の身体は淋しくなっている。

ひんやりとした空気に部屋へと戻るが、すぐに着替えをすまし寝室を出た。

いつも使っている書記机のある部屋で、艶やかなりんごを目にすると、自然に手は伸びていた。そしてなんとなく、それを取っていた。

そのまま部屋を出るつもりだったが、心配性な青年のことを思い出した。

少しだけ手間を掛ける。それから静かに部屋を後にした。

「ゆうかいです!! 誘拐されたんです!!」

部屋に入ろうとした瞬間に黒髪の青年が青い顔で飛び出てきた。

とつさにアルバートを避けたりアナは、そのまま足をもつれせた彼が床に倒れこむのを見ることになった。

「だ、大丈夫？」

恐る恐る声をかけるとアルバートは俯せになったまま顔を上げた。

「私のことはいいんです！」

それよりもフェリス様を……っ、フェリス様をお捜し下さい！」

普段おっとりとしたアルバートしからぬ様子に、リアナも心配になった。

「フェリス……王子がいないの？」

「そうなんです！ 完璧そうに見えて食事が適当だったりコイズさんが苦手だったり、意外にも弱点が多いフェリス様が一番嫌いな『朝』に、フェリス様が寝室にも部屋のどこにもおられないなんてっ」

なにやら本人が居たら嫌な顔をしそうなことをアルバートは宣いつつ、確かにリアナが毎朝フェリスの部屋を訪ねると、彼は不機嫌な顔をして（いつもの事のような気もするが）ぼんやりとソファに座っていることを思い出した。

「……すぐに捜してくるわ」

「はい！ 私も心当たりをお捜しします！」

念の為、手がかりはないかと部屋に入ったりリアナは、テーブルの上においてあった紙に目を向けた。

「……」

「どうかされましたか？」

『林にいる』

誰宛ても誰からも書かれていない短くて、実にシンプルな伝言だ。簡素すぎて誘拐犯の偽造にも思えない。

リアナはメモをアルバートに見せる。

「……迎えに行ってくるね」

「あれ。…気が付きませんでした。す、すみません」

相当アルバートが焦った様子が良く分かった。

なぜ城のなかに林があるのか理解できない。迷子になるほど大きくはないが、フェリスを捜すのは楽ではなさそうだ。

城の外に出たリアナは、林のどの辺りにフェリスがいるかは皆目見当が付かなかったので、とにかく手当たり次第に彷徨うことを覚悟した。

陽が木々の上に降り注いでいる。葉がだいぶ落ちているせいで、その光がリアナの頬を打つ。

懐かしい気分になり、立ち止まって空を見上げた。澄んだ高い蒼

がどこかと繋がっているような気持ちにさせる。

「あ」

木の上から布が垂れ下がっている。その布の先に目を瞑って幹に身体を委ねている少年がいた。

「王子さまー。捜しましたよ？」

声をかけても少年が身じろぎすらすることはなかった。  
寝ているのだろうか、彼のいる木の下まで歩み寄った。

顔が見えない。

顎を上げても、どんな顔で寝ているかは分からない。

「……」

リアナは木の根元に座り込んだ。

「あのさあ」

寝ているはずだ。でも、それで良かった。

「わたしね、今は誰もいなくなっちゃったけど、前はね、大きな家で30人近い人数で住んでたんだ」

そつと目を閉じた。

「わたしたちはね、隠密としての技術を学ぶ一方で、自分の一番得意な能力を伸ばす訓練もしていたの。わたしは……ほら、剣だった

ってわけね。ふふ、わたしのお祖父様と一緒にだったの。だから直接お祖父様から手ほどきを受けていたわ」

頭を幹に押しつける。

「……お祖父様はね、わたしたちの……『裔狼族』なんて言われるわたしたちを率いていた人なの。お頭……っていうのかな。とても強い人だった。腕も、それ以上に心も。決して甘やかすような人じゃなかったけど、わたしは大好きだった」

不思議だった。過去を話したくないと思っていたのに、寝ている相手とはいえ、「言葉にしている」という事実が自分で信じられなかった。

「……結局、わたしたちはわたしたちのしていたことで恨みを買って、殺されたの。私が生きているのは運が良かったとしか言えないわ。………独り言なんて、馬鹿みたいね」

ふう、と一息付き、目を開けた。

するとなぜか……目の前を赤い物体が通り過ぎた。ごろごろと地面を転がったそれを反射的に掴む。

「りんご?」

「やる」

振ってきた声に顔を上げると同時に、影が上から落ちてきた。

灰色の髪を銀にきらめかせ、深い紫の瞳でリアナを見据えている少年。すっと伸びた姿勢で立つ彼に、不本意でも目を奪われるのも

仕方ないと思った。

そんな自分を思わず隠すためか、独り言を聞かれた恥ずかしさからか、リアナは無理やり不機嫌な顔を作った。

「……なによ。食べないの、りんご」

「その気がなくなった。どうせ部屋に戻れば食べきれないくらいある」

「狸寝入りなんて性格悪いわね」

そう非難してみても、フェリスはどこ吹く顔だった。

「俺が黙っていたのを寝ていたと勘違いしたのはお前だが。それを俺のせいにするんだな」

「うつ。と、とにかく！ 勝手にふらふらと部屋を出ないでよねっ。アルバートなんてあなたが誘拐されたって顔が真っ青だったんだからっ」

リアナの言葉など全く聞いていない。フェリスはリアナに近づき、彼女の手を取った。

間近でフェリスと対面することになったリアナは慌てた。

「な、な、なに、よ？」

掴まれた手を戻そうとするが、フェリスは強く掴んで離さなかった。

近い場所から瞳を覗かれ、リアナは本人の意思ではどうにもできず赤くなった。

「な、なんなのよ！」

答えだ、というかのように、フェリスは手を掴んだ反対の手で、  
リアナの腕に触れた。

### 3 薬は毒にもなりうる

「いっつつたあッ！」

フェリスの手を振り払って蹲るリアナ。  
王子と言え、どこか冷ややかな視線を彼女に突き刺す。

「ふん。お前は自虐癖でもあるのか」

「はああ?? そんな趣味ないわよッ」

なぜフェリスが怒っているのか分からない。

彼は地面に座り込んだリアナの腕をもう一度取ってひっぱり上げると、彼女の制服の袖を少し乱暴にまくった。

そこには真新しい包帯が巻かれていて、微かに紅く滲んでいた。

「あ……あははあ！ いや、すぐには治らないよね怪我ってさ！」

「一晩で治る訳がないだろ」

「やだなあ。これ前にコイズと手合わせした時の怪我だし！」

「昨晚、自分でその傷口を剣で引っ掻いただろうが。あまり見苦しい言い訳をするな」

いつ見てたのよ、と言いたくなるのを我慢してリアナは立ち上がった。だが依然フェリスは腕を掴んだままだった。

「……たいしたことない怪我だから。離して」

「叫んでおいて『たいしたことない』ねえ…?」

フェリスはいきなりリアナを解放した。

慌てて腕を引き寄せる。

しかしフェリスは素早く、掴んでいたのと反対側のリアナの手首を握った。そのまま強い力で引っ張って、歩き始めた。りんごが手のひらから落ちそうになる。

「え、ちよつと、待って！」

リアナの抗議など聞く耳を持たない。

スタスタと木々を通り過ぎる背中を、リアナはどこか淋しい気持ちで見つめた。……高くて厚い壁のように見えた。

（昨日は……昨日はとても温かったのに……）

落胆した気持ちで足元に目を向けた。まだ新しいブーツの先が行き先も分らず交互に頭を覗かせる。

ぼーっと考え込んでいたリアナはいきなり顔を持っていたりんごと同じくらい真っ赤に染めた。

（……、……そうよ……わたし、あの時……）

泣いた。

なりふり構わず、彼の背に縋りつき、

---

「なんつってことを……！」

今更過ぎる。しかしリアナには死活問題だった。

恥ずかしさで死にそうなのと、泣いた相手が悪かったことにまた

泣きそうになる。顔を会わせたくなくても、仕事柄それは無理だ。

「いきなり大声を出すな。いったい何事だ？」

振り返る顔を見て、リアナは再び奇声を上げた。

「……嫌がらせか何かか？」

「そ、そんなんじゃない！そんなんじゃないんだけど、あれはこれで、それでッ！」

「人語じんごを話せ」

「も、う、うるさいッ！だいたい、どこに向かつてるのよっ。部屋は東塔でしょ！？」

林を抜けて二人は中央塔に向かっていた。

中央塔は、謁見の間を中枢に、食堂、厨房、保管庫、裁縫室、書架室、大型の衣裳部屋、ダンスホール、ラウンジ、といった場所が一緒くたになった塔だ。人が多く働いているのはこの塔で、後の塔は、フェリスや国王ハロルドたち専用の塔となる。

そういうわけで、リアナが行ったことのある城内は、フェリスが与えられている東の塔と、何かと用ができる中央塔の部分だけなのである。

だから、というわけではないが、フェリスが引つ張って行く先が途中で気付くことができた。

「医務室、デスカ……」

「じ」名答」

当てたいつもりはなかったが、祝いの欠けらもない返事だった。

「別に医師に見てもらわなくても薬はつけてあるもの。我が家秘伝の塗り薬をね！」

少し胸を張って言うとなぜか睨まれた。

「ナント力族の薬かしらんが、怪しい薬に頼る前に専門家に見せろ」

「なんですって！？ わたしが調合してるのよッ」

「それはそれは…… ますます効き目が怪しいな」

鼻で一笑された。

それが似合いすぎていて、腹が立つどころではない。

フェリスは毛を逆立たせるリアナを容易くいなすと、そのままずるずると、医務室の扉の前まで彼女を引きずった。彼は軽くノックをして、リアナをその中に押し込む。

医務室の居場所を知っていてもリアナは実際に中に入ったことはなかった。

白いシートとカーテンが目を引く部屋だ。清潔感たっぷりで薬品の匂いがする。医師とは無縁だったリアナにとって、初めての空間だった。

その部屋の隅にある机と睨めっこをしていた初老の男性は、部屋に入ってきた二人を振り返ることもなくぶつぶつと独り言を言っている。小さな眼鏡を掛けた、少しでっぷりとした白衣の老人だ。アルバートが以前連れてきた医師とは違う。

「ん、んん！？ なんだね君たち！ ここは君たちの遊び場でも逢

瀬を提供する場でもないぞ！」

やっと気付いた医師は、眼鏡を太い指で支えながらそんなことを言いだした。

「だいたい最近の城のもの達はたるんどる！　ちと気分が悪いだだけで風邪だ病だ、掠り傷を前に骨折なんて言いだすとは！　まったくまったく、理解に苦しむ！！」

医務室に来て、愚痴を大声で言われるとは。しかも王子を目の前に「君たち」扱い。……リアナとて人のことは言えないのだが。

フェリスは慣れた様子で医師に顔を近付けた。

「エダン医師。お世話になりたいんだが、良いだろうか」

「んんん！？　おや！　フェリス様でしたか！　こりゃ失礼！！　いやはや、最近老眼がひどくてですな、参りますわ」

がつはつはつ！　と身体を揺らして笑うおじさんに、身体の力が抜けた。

彼はひとしきり笑うと、リアナに気が付いたようだった。

「ふむ、アンタが病人か怪我人か。元気そうだから後者かの。ほら、怪我を見せなさい」

素直に袖を捲った腕を差し出すと、医師はテキパキと包帯を解いて傷口を診察しはじめた。

「塞がりはじめた傷の上に真新しい傷……しかも刃物で、か。お嬢ちゃん、これはどういうことなんじゃない」

小さな瞳が見透かすように見つめてくる。

やましいことは決してないはずだが普通に怪我する類のものではなく、どう説明したものかと口籠もっていると、そこでフェリスが口を挟んだ。

「そいつは俺の雑用がかりで……国王が勝手に付けた、『護衛』らしい」

雑用係と言っているのはフェリスだけで、らしいものにもリアナは確かにフェリスの護衛だ。

だが医師は驚きを滲ませて目を見開いた。

「護衛……ですか。貴方様に」

歯切れの悪い医師がリアナは気になった。

フェリスはその医師から目を逸らした。逸らし、強く片腕を反対の手で握り締めていた。

「ああ。そのようだな……」

突如降りてきた重い雰囲気リアナは肩身が狭くなった。

ちらりと医師を盗み見る。朗らかだった顔が一転して、居たたまれないような表情をしている。

（何かを知っている。それもフェリスと同じことを……？）

それが何を示しているかは分からなかった。



#### 4 彼の眩き、彼の土産

王宮を守る騎士、親衛隊第2隊所属のコイズ・ヴァレンシュタインは、久しぶりにとれた貴重な休みに、城内の廊下を足早に歩いていた。

もちろん行き先はフェリス王子の部屋である。

その日はすでにフェリスたちと城の外へ出かけた夜から二週間経っていた。なぜなら、今朝まで急に入った任務でロスネルドの国境の壁まで出かけていたのであった。

中庭に面した城壁にヒサシがかかったただけなような、開放的な廊下にコイズはいたのだが、その中庭に誰かがうずくまっていることに気が付いた。周りに白いものが散らばっている。

多少急いでいたコイズだったが放っておくのも性分でなく、そのまま足を中庭に向けた。

するとすぐに誰が慌てて紙を拾い上げているのか気が付いた。

「大丈夫かよ、アルバート」

声を掛けると弾かれた様に青年は顔を上げた。

「コイズさん！こ、これはお見苦しいところをお見せしました…」

「はは。お前さんらしいっちゃ、お前さんらしいな」

アルバートは情けないように頭をかきながら笑った。

「これはフェリスが頼んだ書類か？」

紙を拾いながら訊いてみた。

「あ、ありがとうございます。」

……いえ、その、フェリス様の書類には違いありませんけど、フェリス様に『お届けする』書類です」

本当はしてはいけないのだが、コイズはさっと拾った書類に目を通した。

「ああ、ハロルド王の誕生祭の決め事、か。まだ先のことのように、結局は昨年同様、時間がなくなるんだろうなあ」

「何かと準備がありますから。騎士の方々もあわただしくなるでしょうね」

「そうなんだよなあ。祭り事は好きだが、警備する身としては大変な訳よ」

「ふふ。でもきつと今年もコイズさんはフェリス様の担当になると思いますよ」

「相手が陛下やエリオル殿下じゃないだけ気は楽だが、フェリス王子がまたごねそうだな。ま、どうせ『フェリス王子のご友人』なんて酷い肩書きで傍に居させられるんだろうけど」

あれは笑えるよな、とコイズは噴出した。もはや「護衛」という名目さえなければ、何でもアリだと、マインド宰相殿は思っているのだろうか。

「……リアナはやっぱりいるんだろうな」

「そうですね。やっといらしたフェリス様の『護衛』ですから」

コイズは「そうだよなあ」とひとりごちた。

あの夜に知ったことを思い出し、考え込んでしまいそうになり、

そんな自分を心の中で叱責した。

（自らが出した答えを、何度も自問しそうになるなんて……な）

それは自分自身が許せない。

あの時「信じる」と決めたから。リアナを信じると決めた。  
だからこそ、迷う自分が醜い人間に思えた。

「そういえば、コイズさんは今まで任務に出かけられたのですよね。  
ご苦労様です」

そこでペコりとアルバートは頭を下げた。

「もしかして、レギオス国とコプト国の関係ですか？」

考え事をしていたコイズは、一瞬反応が遅れたが、慌てて頷いた。

もはや「戦争好き」と揶揄されるようになっていたレギオス国が、  
四度目のコプト国侵略をあきらめた。いや、正確には「休戦」だ。  
休戦の今も落ち着きを見せないレギオス国は、いつまたコプト国に  
兵を向けるのか分からない状態だと報告を聞いていた。

「おう。親衛第1隊のシュバイツァー隊長が、国境騎士の責任者と  
今後の動向について用があるって言うんで、連れてかれたんだ。

ひでえよな。俺、第2隊所属なのに。でも、ザクス隊長が『最近  
ヴァレンシュタインが弛んでるのでぜひ渴を入れて欲しい』なんて  
言って差し出したんだぜ。ひでえよあの隊長！」

思わず感情が高ぶり、コイズはこぶしを握る。

「それだけコイズさんのことを信頼しているんですよ。そうでなければ、ザクス様が自分の部下を他の隊長に預けたりしませんよ。自

分の部下が不始末を起こしたら、その責を担うのは指揮下になくても上司である隊長さんが負うんですから」

そうなだめられ、肩をすくめる。アルバートのポジティブな考えというか、お人よしの解釈の仕方にはある意味尊敬する。隊長の部下をやってなければ、コイズも自分はそんな風に考えられたらどうかと思った。

「ほら、これで全部だろ」

全ての書類を集め終わり、コイズはアルバートに紙束を押し付けた。

彼は頭を下げる青年の後ろに広がる庭園を見つめた。そろそろ秋が終わりの時期とはいえ、庭師たちの努力の賜物か、鮮やかな緑が広がっている。その一角に秋咲きの薔薇が見事な花を咲かせていた。

リアナは反射的に手を伸ばしたが、結局それは無駄な努力に終わった。

乾いた音が部屋に響く。

好奇心で部屋の隅の棚を弄っていた報いだった。

机から顔を上げたフェリスの視線が痛い。

「……」

「……」  
「……」  
「ごめんなさい」

肩を小さくしながら落としたものを拾う。幸い、棚から落ちたのは木彫りの鳥の置物だった。頑丈そうで壊れた様子は見られない。

「大丈夫そうだけど……、落としてごめんね」

木彫りの鳥をフェリスに見せると、彼はすぐに興味を失ったようだった。

「別に構わない。欲しければやるけど」

「えっ。いや、でもこれ……誰かからもらったんじゃないの？もしかしてフェリスの手作りとか？」

「俺が作る？まさか。」

相手が一方的に渡してくるだけで、俺が欲しいわけじゃない。捨てるのも億劫だからその辺に放置してあるだけだ」

手の中の木彫りを見つめて、酷い言われようだなと、それが可愛そうに思えてきた。

リアナが木彫りを見つめていると、部屋の扉が開いた。  
案の定アルバートが部屋に戻ってきたのだ。

そして彼の後ろからコイズが顔を出した。

「よっ、ちよいと久しぶりって感じか？フェリス王子イ、俺がいなくて寂しくなかったですかあ？」

挨拶代わりと言わんばかりにコイズがフェリスをからかうと、当然フェリスは彼を睨んだ。だが今日は何も言わずにアルバートから紙束を受け取っていた。

「こちらが祭りの日の予定です。あと細かな指示がいくつか……」

コイズはリアナの手の上にのっかっている置物に気が付いた。

「お。これは俺が去年王子にあげたヤツじゃねえか。なんだ、リアナはそれが欲しいのか？」

少し自慢げに言うコイズを見て、リアナは心苦しくなった。フェリスといえば、涼しい顔でアルバートから報告を受けている。

「う、うん、なんか、可愛いなあ、って」

リアナは何も悪くはないが、なぜだか後ろめたくなる。

コイズは満足げに笑うと、リアナの頭を撫でた。

「じゃあ今度出かけることがあったら、お前の分も買ってきてやるよ。な？」

暖かく触れる手のひらが、とても嬉しいと思えた。

リアナが「何者か」を知った後でも、普通に接してくれる、接しようにしてくれるコイズの優しさが嬉しかった。

「うん……ありがとう……」

頷いたコイズは、踵を返してフェリスの傍に近寄ると、懐から赤

い石を取り出した。赤い石といっても、本当に赤色をしたただの石ころに見える。

「今回のお土産はこれですつ。お土産に合いそうなお店に寄る『隙』がありませんでした！文句は隊長に言え」

石ころを目の前に、フェリスは複雑な顔を見せたが、黙ってそれを受け取った。

先ほどの言い草を耳にしていたリアナは、よく断らなかったものだ、変に感心してしまった。要らないと言いながら受け取る辺り、フェリスも案外コイズに対して優しいのかもしれない。

「……ところで、コイズ。お前は国境まで行っていたんだろ。詳しい話を聞かせろ」

「はいはい。どうせそう言うと思ってましたよ！

でもその前に一杯欲しい。アルバート、茶が飲みたいんだけど淹れてくれよ」

「はい、ただ今」

甲斐甲斐しくお茶の用意をするアルバートの横で、コイズはどすんとソファに座り込んだ。

## 5 硝子色の人(1)

リアナはフェリスの部屋から追い出された。

なんでも、護衛とはいえ聞かせられない話をするから、という理由らしい。

もちろんいつものように抗議をしたリアナだが、コイズが「護衛」を代行するという事でフェリスは話をつけた。

御付であるアルバートも部屋を下がるように言われたので、リアナ共々、二人は扉の前に立つはめになった。

「なんか暇になっちゃったな。アルバートは今から何をするの？」

王子の横暴さに呆れつつ、リアナは隣りを見上げた。

青年は書類を抱えたまま、少し考え込んだ様子を見せた。

「私も特にフェリス様から言われていないので……一緒ですね。どうやら休憩を頂けたようです」

しつとりと微笑むアルバートは、部屋を追い出された事に不満はないようだ。なぜかリアナが、そのことに理不尽さを覚える。

「よければリアナ様、温室に行きませんか？南方の珍しい花や植物を見られますよ」

「そんな場所があるんだ。行きたいな！」

アルバートの気配りであろう。あの王子も彼を少しでも見習ったらしいのに、とリアナは心中で頷いた。

温室は東塔から離れた場所にあった。

大きなガラス張りの建物で、中から室内に花が咲いているのが遠目からでも見えた。

温室に近づいた所でアルバートが足を止めた。

「ミユナーさん、こんにちは。今日は王妃様の護衛はお休みですか？」

アルバートの後ろから前を覗くと、美しいあかがね色の短髪の女性が背筋を伸ばしてこちらを見ていた。制服に剣を持っている格好からして、女性騎士のようだが、20代前半と思われる女性にしては髪がとても短いことに驚いた。

リアナの経験から、田舎では髪の短い女性を見かけることもさほど珍しくはないが――髪を売って家計の足しにしている女性も居るのだ――王都や王城といった、身分の高い人たちが住むような場所ではとにかく髪の長い女性しか居なかった。

もちろん、どこに行っても年頃の女性にとって髪は大事だった。しかし身分が高ければ高いほど、その髪の長さは重要性を増す。それを王宮貴族とは縁のなかったリアナは気づいたのだった。

だから、王宮という身分のトップばかりがいる場所で、髪の短い女性に出会ったことに驚いた。

いくら落ち着きのないリアナとて、背中までは髪の長さがあると

いうのに。

リアナがまじまじと見つめていた女性は、尖った顎を引いた。

「いえ。王妃様が赤いバラを一輪所望されたので、私でお役目が果たせるならば…と参りました」

実に起伏のない硬い物言いだった。表情もうまく読み取れない。しかし女性の様子を気にするでもなく、アルバートはいつもながらのほほんと返す。

「そうですか。今ならもつと西のほうの庭園に綺麗な花が咲いていますよ」

「ありがとうございます。探す手間が省けました。感謝致します」

頭を下げ、颯爽とその場を後にする女性を見て、リアナは羨望のまなざしを向けた。

「かつこいい人ね……」

呟いた後にわれに返ったリアナは、誤魔化すように大きな咳払いをした。

だがアルバートはそれをしっかり耳にしていたようで苦笑を漏らしていた。

「リアナ様までミュナーさんの虜なんですね」

「うっ。だって、素敵な女の人だったし、ねえ？」

「ええ、確かに素敵な女性ですね。男性にも人気はありますが、女性の方がミュナーさんに強く熱心のようですよ。ふふっ、ローズさんとか、ね」

侍女ローズ・アルト・ローライン。さすがというか、やはりいうか。

リアナがなんともいえない表情を浮かべると、アルバートは慌てて言いつくろった。

「だ、大丈夫ですよ！ローズさんは今、とてもとてもリアナ様一筋ですからッ！」

特にいないフローだった。

リアナとアルバートが温室に入ると、一気に季節が変わった。綺麗に手入れされた鮮やかな色の花や緑が建物の中に溢れている。日差しが外よりも強く感じる。ガラスの建物の中はまるで春か初夏のようだった。

「すごい！見たこともないお花ばかり」

「こちらの花はコプト国だけに咲く珍しいものですよ」

すらすらと花の名前や特徴を口にするアルバートにリアナは感心した。

「アルバートって、フェリスの御付だけあって博識だよね。紅茶淹れるのも上手だし」

彼は顔を薄紅色に染める。

「そ、そんなことないですよ！私なんて、全然、出来ることなど少ないですし、今でもフェリス様のお役に立てているか自信がありませんし」

「……アルバートはどうやってフェリスの御付になったの？試験とかあったとか？」

城の仕組みがいまいち分からないリアナにとって、役職の人選など全く分からない。いや、そもそもどんな役職があるのかすら知らない。

「もちろん試験がある役目もありますし、ハロルド様や宰相様、役職のリーダーや人事担当者が選ぶ場合もございますね。私の場合、恐れ多いことですが、フェリス様が私を指名してくださったのです」「そうなんだ。フェリスが選んだもん、やっぱりアルバートってすごいんじゃない？」

「いえ、それは違います。フェリス様がお優しいから、私を救ってくださったんです」

「“救った”？」

アルバートはまぶしそうにガラス越しに太陽を見上げた。

「————助けてくださったんです、あの方は……」

「助けた、とは面白い解釈だな。あいつにそんな良心などない。当然だがな」

リアナは聞いたことのない声に振り返った。

温室の扉に長身の人立っているようだった。少し距離があつたことと、ちょうどそこが室内にある木の影になっていて良く見えないので自信はないが、低い声からして男性だ。

だがアルバートはその人物が誰だか分かるようで、額に汗を浮かべて深々と頭を下げた。

「こ、これは大変失礼いたしました。すぐにここから下がります」

小さな笑い声が聞こえた。

「逃げなくても良いぞ。別に私は花など興味ないしな。だが面白そうなモノを見かけたから――」

影から一步進んだ男は、どこか見るものを嫌な気分させる笑みを浮かべた。

しかしリアナはそれを見ていなかった。

ただ呆けた様に、目の前の人物を穴が開くほど見つめていた。

息さえ詰まらせてしまうような美しさに、ただただ囚われていただけだった――

一通りフェリスに報告を終えたコイズは、冷めた紅茶を口にして、

伺うように相手を見上げた。

書記机に凭れ掛かって話を聞いていたフェリスは、怪訝な表情を浮かべた。

「なんだ？」

「いや、まあ、そのなんだ。リアナちゃんのことなんですけどお」

フェリスは「で？」、と相手を促した。最初から聞く気がない態度をとられず、コイズはほっとして話を続けた。

「俺はさ、あの子のこと、下心があつてお前の護衛になつたんじゃないって思うんだ。」

「そりゃ、騎士としては疑わなきゃいけないのかも知れねえけど……俺は、あの子を信じたいんだ」

「それはお前自身のことであつて、俺は関係ない。お前がそう思うのなら、そう信じればいい」

「ああ、そうだけど……お前もあの子をまだ傍に置いてるなら、きっと俺と同じなんだよなあ？」

——信じたんだよな？

それをどうしても本人に確かめたくて、今日フェリスのところまで来たのだ。

フェリスが信じられなかったのなら、リアナはここにいないはずなのだから。

少年は肯定も否定もしなかった。だが、コイズにはそれで十分だった。

「ま、でもさ、陛下には言った方がいいんじゃないか？マインド宰

相に知られると多分、騒ぎになるとおもうけど、きっと陛下なら分かってくださると思うぜ。言わずにいた方が、彼女にとって危険な気がするんだ」

フェリスは無言だった。

興味ないのか、とコイズはため息をついた。「どうでもいい」 pensando 思っているのかもしれない、この少年の場合。

「恐らく」

話し出したフェリスにコイズは再び視線を上げた。

「恐らく、国王はあいつのことは知っていたはずだ。少なくとも今なら絶対に知らない、という事はないはずだ。……でもあの人のことだから、護衛を決めたときには既に知っていたと思う」  
「そりゃ、分かってて護衛にしたのか？」

フェリスは顎に指を当てた。

「あの人は何も調べずに俺に護衛をつけるとは思えない。——しかしそこが興味深いな」

「ん？リアナの家のことを知っておきながら護衛に任命したってことが、か？」

「ああ。普通だったら本人に暗殺のつもりがなくても可能性を考えて護衛になんてしない。それでもあいつを護衛にしたいならば、あいつの潔白を確かめてからそうするだろう。」

だが、もしも護衛に任命したときには、国王があいつのことを既に知っていたのなら、さすがに大会から一日であいつの潔白を調べられるはずがないから、あの時点で護衛になんてする“はずがない”。

では、それでもなお、なぜ国王はあいつを護衛にしたんだ？」  
「うーん。そう言われると、なんでだろうなあ」

腕を組んで悩み始めたコイズを尻目に、フェリスは机から離れて椅子に座ると、いつものように用紙に何かを書き始めた。多分、コイズのから聞いた報告をまとめているのだろう。

「……お前、『なぜなんだ』って考えないわけ？」

「確かに興味深いけど、どうでもいい。本人に聞いて答えるとは思えないし、本人に聞かずして分かるものでもない。考えるだけ無駄だ」  
「た、淡泊……」

呆れ声にも、フェリスが気にすることは全くなかった。

## 6 硝子色の人(2)

背の高いアルバートよりもさらに高い身長に、長い手足。だが決して貧弱ではなく、程よく筋肉の付いた肢体に深紅の生地に金の刺繍が入った豪華な服装をまとった姿は、凛々しい。顔は背丈に対し小さく、その周りを金の髪が縁取っている。無造作に下ろされた長い髪はゆらゆらと彼の胸元を揺れていた。

目を奪われて、リアナは嘆息を漏らした。

ハロルド王やフェリスと初めて会った時も、その美しさに戸惑いさえしたが、その時以上に目の前に立っている青年の美しさは神懸かりと言っても過言ではなかった。

ハロルドが「華」で、フェリスが「謐」ならば、青年はさしずめ「欄」。調和のとれた美しさ。思わず慄くほどの。おのの

青年はその場に固まって真っ赤な顔で自分を凝視していたリアナを見て、青い瞳を細め、笑った。

だがそれは、零れんばかりの輝く笑みではなかった。

――笑顔ではなくて、陰鬱で陰険な笑みだった。

青年は美しかった。想像したこともなかった美しさを持っていた。だからこそ、その邪悪な表情は恐ろしく、見る者を不安にさせた。恐怖を芽吹かせた。

「くくつ。これは愉快だな。アイツの女も、私を目の前にしたら鞍替えしたくなかったってわけか」

そのにたにたとした、厭らしい顔に驚いたリアナは我に返り、困

つたようにアルバートを仰ぎ見た。

アルバートはきゅつと唇を固くすると、まっすぐに青年を見つめた。

「失礼ながら、リアナ様はフェリス様の護衛でございます。何か誤解があるようですが、決してそのような疚しい関係ではございません」

「ほお？それでは、女をはべらして遊んでいる私は『疚しい』人間だつてわけか」

「い、いえ！そんなつもりは……」

予想していなかった返答にアルバートが狼狽する姿を見て、青年は白けた様な目つきになった。

「はつきり言えよ。お前らが私をなんて陰で言ってるか、知らないわけじゃないんだ。

ああ、たしか一番最近耳にしたのは……“色欲魔”だったか？別に事実を否定するつもりはないが、将来の国王に対してはなかなか肝の据わった発言だとは思わないか？」

アルバートは答えに窮し、眉の間に深い皺を作った。

「——そのような戯言を、貴方様は聞き入れることはないでしょう。貴方様の有能さは、ハロルド様を継ぐに相応しいと言われております」

「くつくつく！！面白い言葉だな、それは。

『有能』？誰だったか、平気で人を『馬鹿』呼ばわりするような奴がいたがなあ。それに、そいつは確か、お前の主ではなかったか、アルバート？」

「フェリス様は、そのようなことはっ、その」

「嘘のつけない男だ。ここで生きていくには難しいぞ？」

ひとしきり笑った青年は今度はリアナに青い視線を向けた。リアナは目の前の青年から「好感」というものが薄らいでいくのを感じていたものの、やはり視線に驚いて俯いてしまった。

「庶民の女、か。まあ、王族にしてはその自覚が欠如しているアイツには、お似合いなんじゃないか？とはいえ、アイツの使い道なんて、他国に媚を売るためにしか役に立たんからな。間違っても正妻にはなってくれるなよ」

それは言外に「側室」だったら構わないということなのだろうか。つまり、フェリスが他国の姫と結婚する邪魔さえしなければ、側室になるうが遊びであろうが、なにをしてもかまわないという、それはリアナを牽制する言葉のようで、実際はフェリスを貶める発言だった。

さつと体中を怒りが走り、リアナは今の今まで見惚れていた青年を強く睨んだ。

「貴方がどんな人かは知りませんが、フェリスに対してそんな……“道具”みたいなことを言うなんて、許せません！！」

だが青年はリアナの視線も軽く流す。

「おやおや、“フェリス”と呼んでいるとは、大変仲が良いんだな。くくつ。」

それに、さっき言っただろう？私は『<sup>みらい</sup>将来の国王』だって。私が何者か、“知らない”とは言わせない。そして、知った後でも同じことを言えるかを良く考えるといい」

リアナはぐつと歯を噛み締めた。

予想はあった。リアナがいる場所が城という特殊な場所にいなかったら、話の流れを一笑できたかもしれない。だがここはやはり城であるし、普通なら夢物語や勘違いで済ませられることを、——リアナの予想を肯定してしまう。

むしろ、青年をフェリスや国王と比べて考えた時点で、自分自身どこかで気が付いていたのかもしれない。

リアナは瞬巡した。相手を解って発言するのと、相手を知らずに発言するのは、時として意味を異なる。だからこそ、リアナは迷っていた。

しかし迷った時には既に、それ自体が答えだった。

だから、彼女は顎を引いて、真つすぐに青年——いや、ロスネルド王国の次期国王、第一王子・エリオル「R」ジェナ「ロスネルド」を見据えた。

「……先程の発言を、撤回していただきたいです」

それが、リアナの答えだった。

少女の姿は、琥珀の瞳を黄金に輝かせ、温室のガラスを通り抜けて降り注ぐ光に栗色の髪を金色に変え、伝え聞く獅子の相貌を思い起こさせた。

睨みつける琥珀の双眸を見て、エリオルは長い指を顎に当ててなにやら考える素振りを見せた。

絡みつくような視線の元は、リアナに一体どんな罰則——いや、むしろ処分を言い渡そうとしているのか。思わず身震いした。

それでも言葉を撤回する気はなかった。

なぜなら、リアナは彼の「護衛」であり、それが役目だと思っている。

そう、

そのために、彼女は『“護衛”になることを選んだ』。

理解されないかもしれない。でも、彼女はそれが“護る”ということだと『信じていた』。

「……成程。私には従わず、と。前にもいたな、そんな女が」

そう、エリオルは呟いた。

彼は肩を竦めると温室のドアに顔を向けた。

「本当はもっと甚振あそんでつてやろうかと思ったが、気が削げた。どうせまた、アイツが横から割り込んでくるだろうし。今日は自己紹介くらいで済ましておく」

ヒラヒラと振り返りもせず、手を振って温室を出ていく第一王子に、アルバートもリアナも小さくため息をついた。

エリオルが温室を出る姿を目で追っていたリアナは、一体どこにいたのか、太い剣を腰から下げたいかにも恰幅しやうふくの良い男が彼の前に現れたことに気が付いた。男はエリオルに頭こぶを垂れた。黒の鎧に黒のマントを身につけた姿は、いかにもただならぬ人物だとリアナの瞳に映し出していた。

「アーク……」

「え？」

呟いたのはアルバートだった。

聞き返したリアナに、彼は慌てて首を振った。その瞳はひどく揺らめいていたように感じた。

それでも青年は微笑んだ。

「なんでもありません。さ、フェリス様のところへ戻りましょう」  
「知り合いなんじゃないの、あの人」

既にエリオルと黒い鎧の男性は温室を離れて行ってしまうている。

「いえ、その」

戸惑うアルバートにリアナは首をかしげた。聞かない方が良かったのだろうか。

だが、その前にぬつと、二人の間に顔を現した人物がいた。

「まったく、あのちゃらんぽらん王子、どうにかして欲しいですわ」

リアナとアルバートは、思わず一歩後ろに後ずさった。

## 7 心馳せて

「まったく、あのちゃんぽらんな王子、どうにかして欲しいですわ」

半眼で呆れ切った表情。

いきなり現れた花束を手に行っている侍女に、リアナもアルバートも驚いた。

「ローズ？こんな所に、なんで？」

「わたくしですか？ええ、ちょうどリアナの部屋に飾るお花を探してたんです。手配が遅れてしまって、明後日までいつも仕入れているルートから花を用意できないものですから、庭師や温室の管理者に許可をいただいて花を集めてるんですの」

侍女ローズはそう言って花束を見せた。しかしいきなり花を持っていない方の手で、リアナの手を強く握った。

「それにしても！！良かったですわ、リアナに何もなくて。あの万年発情男の毒牙にリアナもかかったら、わたくし悔やんでも悔やみきれませんわ！」

……時々ローズは、基本的に侍女として完璧な彼女にとって、どこで聞いてきたのか不思議な言葉を使う。

「い、いいの？あの人、第一王子でしょ？」

リアナとて彼に逆らった身ではあるが、少しは言い方というものもあるう。

だがローズはイライラと親指の爪を噛んだ。

「構いません！あんな女ときたら見境のない男なんて、こんな言い方でも甘いすわ！」

リアナは知らないでしょうけど、あの男、暇があれば城下に出かけて女性に声をかけたり娼館に足繁く行ったり、もう権力振りかざして遊んでる道楽王子ですよ！！

それに加えてあの偉そうな態度！いえ、確かに偉い方ですけども、それが当たり前だと思って嫌味な物言いをして！！それでも構わない、相手にされたいなんて言う女の気がしれませんわ！！」

いつも以上に感情的なローズに、リアナはたじたじになる。ただ相槌を打つしかない。

「あの、そのような話がありますが、殿下は今まで国の業務でいくつか素晴らしい働きをなさっております……。先日のシリル国とのジエンの森の領土権問題で、とうとう和解に持ち込んだ功績も素晴らしいものです」

アルバートはエリオルを庇うようにそう言うが、ローズがキツと彼を睨んだ。

「まあ、アルバート。あのこと忘れたんですの？わたくしが、あの男のせいで危うく襲われそうになったというのに、なぜ貴方はあんな男の肩を持つんですの！？」

「お、襲われ？」

ギョツとするリアナに、アルバートが慌てて言葉を加える。

「あの、多少意味合いが違うかと……」

「違う！？一緒じゃない！ああもう、今思い出しても腹が立ちますわ。いきなりわたくしの所に来て、『今夜の伽の相手をしろ』ですって！！このただの侍女が、性格はともかく第一王子の命令に逆らえるわけないのに！相手の意志をまるで無視して！最低な男ですわ！！」

怒りで顔を真っ赤にさせたローズは、心底エリオルが嫌いらしい。

「全く、アーク様とフェリス王子がいなかったら、わたくし今頃とつくに城を止めてましたわ！」

「フェリス…王子と、……アーク様？」

先ほどアルバートが呟いた名前と同じだった。

あの黒い鎧の男性が助けてくれた、ということなのだろうか。それに、フェリスも関わっているらしく、少し興味がそそられた。

両手を組んでそれをぎゅっと握ったローズは、少し嬉しげに答える。

「ええ、先ほどの黒い鎧を身につけた男性がアーク様ですわ。殿下の第一騎士……つまり、殿下の警護に関して、あの方が一番の責を担ってる方ですの。お歳は多分、20歳とそこそこというところかしら。いいえ、半ばくらいあるかもしれませんわね。何しろ、お名前以外は詳しい情報がない方なのです。でもあの若さで未来の国王の第一騎士なんて、そうそうなれるものじゃありませんわ！」

そのアーク様が、わたくしを貶めようとした殿下から、助けてくださったのよ！あの殿下を真っ向から諫めてくださって、格好良かったですわ……」

どこか夢心地に語るローズの瞳は煌めいていた。

不思議なことに、彼女がいつもよりも綺麗に見えた。

「でも、その場は殿下の魔の手を逃れられたから良かったんですけど、殿下がそれでも言い寄ってきたので困っていたんですの。そこでガツンと言ってくださったのはフェリス王子ですわ。」

わたくし、随分前から東塔——フェリス様の居住区担当の侍女でしたけれども、正直フェリス王子のこと、無愛想で周りに無関心な王子だと思ってました」

「でも」と続けるローズの言葉には、どこか敬意が含まれていた。

「わたくし、忘れませんわ。フェリス王子はわたくしのことを、『東塔を掌握している者の、限られた有能な人材だ。だから軽々しく手放す気はない』。そう言ってくださった。フェリス王子はどこか殿下と関わりたがらないから、だからこそ殿下にそう面と向かって言ってくださったことが嬉しかったですわ」

「フェリスが……」

意外といえば、確かに意外な話な気もする。

しかしリアナは、フェリスが自分を“うけいれて背負って”くれたことを思い出し、胸の前で手のひらを握った。

「ええ。普段は周りに気遣ってる様子なんて見せませんけれど、実際はお優しい方なのですよ。まあ、正直たまに、本当にイラッとしますけど」

ぺろりと舌を出すローズに、リアナは笑った。

「アルバートだって、そんなお方だからお仕えしてるのでしょうか？」

青年は静かに耳を傾けていた。そしてローズに問われ、深く、頷いた。

「はい。もちろんです」

アルバートの顔は、まるで自分が褒められたかのように嬉しげだった。

（フェリスって、なんだかんだいって愛されてるよなあ……）

リアナはローズとアルバートから一歩下がって、自分を見下ろした。

（……わたしにはもう、“誰もいない”。だから、だから……羨ましい）

残っているものと言えば、何も知らずに学んできた技術と、優しい思い出と、そして――

「……………様……………」

“あの人”がくれた「心」だけだ。

（だからこそ、フェリスを“護って”見せます。わたしはあなたからそれを学びました。

あの時私を救い、壊れた心を癒してくれたあなたがくれたものを、

わたしは忘れない。だから、今度はわたしが……)

リアナはガラス越しに空を見上げた。太陽の光がまぶしく、目を細める。

(彼を“護る”ことができたなら、そしたらわたしは、それこそ本当にあなたに会える気がします。会って、あなたに言いたかったことを言えると思います)

空はどこまでもどこまでも遠く、まだ手に届きそうになかった。それでも澄み渡り、心を清らかにしてくれた。

「あら？ そうなの」

一人の女性が扇越しに返事をした。

その前で直立不動のままの姿勢をした女騎士は、頷いた。

「はい」

「やだわ。私より先に会うなんて、ずるいわ、ミュナー？」  
「申し訳ありません」

その硬い返事に女性はこころと笑った。彼女に非がある話ではないだろうに、こうして主人を立てる心意気は関心に価する、そう女性と思った。だが、ミュナーがそれを知る由もなかった。

「それで？どんな子だったのかしら」

楽しげに笑う女性に、ミュナーが答えると、彼女はますます笑みを深めた。そして、何かを思いついたように、傍にいた侍女に引出しから紙とペンを取ってもらうと、紙面に何かを書き始めた。

ミュナーが不思議に思って尋ねると、女性は悪戯っぽく、それこそ無邪気な少女のように答えた。

「招待状よ。誕生祭には早すぎる招待だけど、ミュナーばかりじゃあずるいもの」

その様子を見てミュナーは、女性に少女のことは、言わない方が良かったかもしれないと思った。

## 8 後宮からの招待状(1)

その日は天気はいいものの、少し風が強かった。

フェリスの部屋で雑用……ではなく護衛をしていたリアナは、頭を悩ましていた。

「……うう……ん……？」

悩んでいる間にも、用事でいないアルバートの代わりにお茶を淹れてくれているローズが、「頑張れ」と応援してくれるのだが、これ以上良い手など見つからない。

「……<sup>リザイン</sup>投了なら早めに言ったらどうだ」

向かいのソファに座りながらも、視線は手元の書物から離れないフェリスに、リアナはむっとしながらも、なんとか最悪の盤面と戦っていた。

しかしチェスなどやったこともなく、つい最近コイズやローズに教わったばかりのリアナに、手馴れたフェリス相手に勝てるわけもない。だが、せっかく教わったのだからゲームを試みたい。そういうわけで、無謀にも彼にチェスを申し込んだのだった。

正直なところ断られることを想像していたものの、意外や意外、フェリスは二つ返事で了承した。そのわりにリアナが熟考している間は、常に読書しているという姿勢からして、彼にとってそれ程手間のかかることでもないのだろう。

リアナは悩んだ末に頭をかきむしった。

「もう分かんない。降参します！」

そう言って自分のキングを指で弾いた。駒はころころと白と黒の盤上を転がり近くの駒に当たって止まる。

「おい、丁寧に扱え」

本から顔を上げたフェリスに怒られ、リアナは口を尖らした。だが素直に謝った。

「それでは、チェスを片付けてしまえますかね」

テキパキと片づけ始めるローズ。リアナはソファに抱きつくように凭れかかった。

「なんかすつごく頭使った気分」

「やり始めてからさほど時間がたっていないような一局だったくせに。もう疲れてるのか」

フェリスのいつものもの皮肉にリアナはふん、と鼻を鳴らした。

「どこぞの誰かさんみたいに、部屋に籠って頭しか使わないような生活はしてませんでしたから」

「……それはどうも。どこかの誰かみたいに、身体しか使わない脳を腐らせるような生活は性に合っていないからな」

しばし両者は睨み合いを続けた。

その均衡を崩したのはローズの笑い声だった。

「何笑ってるのよ、ローズ」

「何が可笑的い、ローライン」

似たような台詞が偶々重たまたまなってしまった。ローズのはそれがまた面白かったらしく吹き出していた。

「くすっ……お二人とも、仲がよろしいのですわね」

ローズの言葉に異義があるのだろう、フェリスは眉間に皺を作った。

「どこを見れば友好的に見える」

「どこ、というよりもそのままですけれど？」

「……お前の目はどこか可笑しいんじゃないか？」

ローズにも容赦ない言葉。だが彼女はくすくすと笑っただけだった。

「それではわたくし、新しいお菓子の用意をしますわ。少しお待ちくださいね」

裾を翻し部屋を出ていくローズを見ながら、リアナは先日のことを思い出して、向かいのフェリスを見た。彼は本をソファの間に机に置いていた所だった。

「そういえば、この間フェリスのお兄さんにあっただけど……」

言った後に、フェリスに言えるようなことを第一王子に言われなかったな、と記憶を蘇らせたのだが、フェリスの驚いた顔にリアナが驚いて、それどころではなかった。

「あの男に……？」

身を乗り出したフェリスが少し怖かったが、リアナはただ頷いた。

「なにか、悪かった？」

「別に、悪くはない……。どうせ俺の悪口でも言っていたのだろう」

ソファに座りなおすフェリス。図星にリアナは言葉を詰まらせた。

「それとも、お前に嫌なことを言ってきたか？」

「わたし？」

「例えば……いや、なんでもない。……ただ、あの男のことで何かあったら俺に言え。お前にはどうにもできないことでも、俺だっただけにかできるかもしれないからな」

「？」

紫の瞳を見つめながら、リアナは首を傾げた。その瞳の意味することを、彼女がうかがい知ることではできなかった。

「……ねえ、フェリスとエリオル様って仲悪い……みたいよね？」

みたい、ではなく、悪いことは明白なのが、リアナにとってそれは少し不思議なことだった。

（兄弟って、口では悪いこと言っても、実際は相手のこと、大切なものだわ。でも、あのエリオル様の瞳……怖かった……）

そう、あの美しい蒼い瞳には、「憎しみ」のようなものが込められていた。

リアナは昔を思った。

彼女には三人の兄弟と、同年くらいのことやとこまでいた。だれもが皆仲良く、喧嘩をしても仲直りして、笑いあって、皆好きだった。お互いが大好きだった。

「そうだな。一般的に言えば、仲が悪いんだろう。あの人は俺を『憎むほど』嫌いだ」

淡々と言うフェリスには、つらさも寂しさも何もない。ただ、事実を述べているだけだ。

まるで他人事のようなだった。

「……王子、だから？王族だから？だから、仲良くなれないの？」

ソファを立ち上がってフェリスの前に立つ。見下ろす少年は、じっと目の前の机を見つめた。

「さあな。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「フェリスは？あなたはどう思っているの？お兄さんのことを……」

「兄、か。……昔は、そう思っていた頃も、あったな」

今は、そうではない。

そういう答えだった。

「ただ、あの人は次のロスネルドを担う者であり、未来の国王だ。それ以上でも、それ以下でもない。俺にとって、あの男はそう言う存在でしかない」

「そんな……」

俯くりアナを見上げて、フェリスは呟いた。

「何をお前が気に掛けることがある？これは俺とあの男の問題だ。そういえばアルバートも気にしていたな。そんなに、考えることなのか？」

「だって……だって、悲しいじゃない。せつかく兄弟なんだよ？」

「悲しい……？」

心底不思議そうに見上げるフェリスに、リアナはぎゅっと上着の裾を握った。

（悲しいかどうかも、分からないなんて、そんなの………辛すぎるわ）

あんな風に兄から言われたら、もっと傷ついてもいいくらいだ。それなのに、フェリスは「ああ悪口を言われたのか」、そんな程度で済ませてしまう。きっと、どんなことを言われているのかフェリスも知っているのだろう。それでも、それが彼を傷つけることがない。

それは、良いことじゃない。傷つくことはなくても、それでは心が何も感じないということだ。傷つくことは悪いことだけではない。時としてそれは、人が人として生きていることを証明してくれる。大切なものをどれだけ大切なのかを教えてくれる。

身体を震わせて俯くリアナを見て、フェリスは静かに立ちあがった。

きつといつものように鼻で笑って、それで済ますに違いない。リアナは何か言おうと唇を動かそうとした。

「なぜ、お前がそんな顔をする？」

ひんやりとした、でもなぜか暖かい指先が頬に触れた。

顔を上げたリアナは、目の前にある少し困ったような表情を浮かべたフェリスに驚いた。触れている指がどこか落ち着かなくて、でもその温もりは離れがたいものの気がした。

「そんな顔って…？」

だがその言葉の先は扉をノックする音に消された。

そちらに顔を向け、少し大きな声でフェリスが返事をした。指はそのままリアナから離れて行った。

「誰だ？」

「……王妃様の第三騎士、ミュナー・サリエ・ウイントンでございます、フェリス様」

「ウイントン？……とにかく入れ」

「失礼致します」

静かに扉が開かれ、外から透き通るような赤い髪をした女性――騎士のミュナーが現れた。彼女はフェリスに頭を下げ、突然訪問した非礼を詫び、彼がそれを許すと、少し釣り目の瞳をリアナに向けた。

「お会いするのは二度目ですね。前は名も名乗らず失礼しました。私はミュナー・サリエ・ウイントン。王妃ソフィア・C・マルリア・ロスネルド様の第三騎士でございます」

「あの、えっと……わたしはリアナ・レーベルトと言います」

ぺこりと頭を下げる。

それをみて微笑したミュナーは、懐から真つ白な封筒を取り出すと、リアナにそれを渡した。

「わたし宛て、ですか？」

まじまじと封筒とミュナーを交互に見ると、彼女は頷いた。その時のミュナーは、どこか憐みを帯びた表情で見つめ返した。

「確かに貴女宛てでございます。どうぞ中を御覧なさって下さい。そのために、私は参上いたしました」

その言葉に従い封をあけると、中から綺麗な文字が並べられた便箋が現れた。

「えっと、なにになに？」

紙面にはこう書かれていた。

『突然のお手紙に驚かれています。ごめんなさいね。

貴女には前々から一度お礼を言いたかったの。

良かったら、息子の都合のつく日で良いから、会ってもらえないかしら。会えるのを楽しみにしているわ』。

(……息子？)

頭を斜めにしたまま次の文に通したリアナは目を擦った。だが、文字が変わることはなかった。

「……………ソフィア・C・マルリア・ロスネルドより……………」

リアナはちらりとフェリスを便箋越しに見た。

傍に立っていた彼は、綺麗に眉間に皺を寄せると、リアナが手に

持っていた便箋を視線で射抜いた。

## 9 後宮からの招待状(2)

黒い鎧に黒の制服、——そして黒く短い髪。

第一王子であるエリオルの第一騎士を務めているその男は、主人に部屋から追い出されていた。だがよくあることだった。第一騎士として常に傍に居なければならぬが、アークはそれ以上にできるだけ主の意向を重んじていた。だが、決して壁一枚分の間から離れることだけはなかった。

アークはエリオルの執務室の前に立つたまま、背後の部屋に意識を向けていた。その中には己の主<sup>あるじ</sup>だけでなく、主人が招いた客人たち<sup>ち</sup>がいた。——そう、あまり褒められたものではない類の。

あの方は何か良くないことを考えている。むしろ主人の笑い顔さえ目に浮かぶようで、アークは頭が痛いくらいだった。

やがて部屋の中の気配が動き、しばらくして中から数人の男たちが現れた。

いずれも黒い装束身を包んだ顔も分からぬ者たちだった。その者たちはアークに視線も向けずに、素早く目の前から消えていった。

(恐らく、中々の手練に違いないが……)

険しい顔つきで男たちの消えていった先を見つめていたアークは、後ろの部屋から主人が出てきたので膝を折って頭を下げた。

「待たせたな、アーク。用事は済んだ」

「は。……しかし、エリオル様。いったいあの者たちはどんな目的で呼んだのですか？ 私にはとてもではありませんが、穏やかな理由だとは思えませぬ」

「くつくつく！面白い余興を見るための、演出だ。それをあいつらに頼んだ、それだけだ」

「……貴方様の部屋にあの様な者たちを入れるとは、少し軽率かと」

そう顔をあげて進言するアークを、エリオルは少し煩わしそうに、同時にどこか面白いものを眺めるように見た。

「この私に躊躇ためらいもせず意見するお前は本当に希少だな。

だが、女を部屋にあげるよりいいだろう？それならあの口煩い宰相も最低限黙認するだろうし」

これは女の噂に絶えないエリオルには不思議な話ではある。しかし確かに侍女たちを抜かせば、エリオルが自分の意志で女性を自分の部屋に入れたことは、“ただ一度”しかない。

「そういう問題ではありません。そもそも引き合いに出している問題自体、間違っています」

「くくつ！真面目な男だ。少しは女と遊んだほうが良い。なんなら私が積極的にお前の暇いとまをつくってやってもいいが？」

「結構です」

彼の剣と同じような切れ味で、アークはエリオルの一方的な好意をバツサリと切った。

もしこれがただの侍従や騎士であつたら、エリオルが相手にどんな制裁を与えていたかは想像するのも恐ろしい。だがアークが無事であつたのは、彼が彼であつたからだ。

だからエリオルはただ笑い声を立てただけだった。

「それよりも“余興”などと、いったい何を考えているんですか？」  
「暇つぶし、私の悦びのため、嫌がらせ、か？」

「良く判りませんが、ロクなことじゃなさそうですね。止めてください。きつと色々問題になります」

「まだ問題になっていないのに、煩い奴だな。お前は隅に立っていれば良い。消えろ」

「消えろ」と言われても実際にそうするわけにもいかない。だが主人の癩癩に似た邪険にされた扱いには慣れているので、アークは文字通り隅に控え、気配を消して、ただ主人の身を守ることだけを考えていた。

手紙を受け取ってから三日後。

リアナは大きく息を吸い込み、城の中央塔、一番北奥の扉の前にいた。彼女の後ろにはフェリスがいるが、今日の彼はリアナの付き添いのようなものだった。

「……なぜ俺まで行かなければならない」

両腕を組んでそっぽを向いているフェリスは、いつもながら不機嫌だ。

「だっていくら招待されてるのがわたしでも、フェリスを置いて行くわけにはいかないじゃない。それにあなたのお母さん——王妃様だって、一緒にいらっしゃって言うてたみたいだし」

手紙には書かれていなかったが、ミユナーがそう言っていたのだ。

「俺には別に改めて会う理由はない。どうしても俺を置いていけないならコイズの所にも行くから、お前が一人で会いに行け」

「なによ、お母さんに会いたくないの？」

「会いたくないとは言っていない。改めて行く必要がない、と言っている」

「どっちも一緒じゃない。……ねえ、一人はやっぱり不安だし、来てよ」

顔の前で手を合わせて頼むリアナを見て、フェリスは面倒なものを見るような表情を造る。それから指を、組んでいた二の腕に同じ調子で何度も打ち付けた。

だがやがて溜息をつくと、諦めたようにリアナの隣に立った。

「夕方までには帰らせてくれ」

「……ありがとう！」

リアナは扉の傍で警備をしている騎士に、後宮へ行くための通路がある入口を開けてもらうように頼んだ。扉が開くと、彼女は意を決したように足を進める。

扉の先は白い廊下が続いていた。後宮まで続く渡り廊下になっており光が差し込んでいる。しかし季節は冬に入っていて、陽だまりの中に立っても寒さは消えてくれない。

ただ、身なりを整えようとするリアナの指が鈍いのは、寒さのせいだけではない。

「そんなに緊張しているのか？」

固い動きを見せるリアナに、フェリスは問うた。

「だって、王妃様でしょ！？フェリスはともかく、ハロルド様やエリオル様の前に居るのは心臓に悪いのっ」

「……エリオルには何やら反抗していたと、ローラインやアルバートに聞いたが」

ぎょっとして隣を見やる。しかしフェリスの表情に変わりりはなかった。

「え、えっと………わたしがなんて言ったのか、二人に聞いた……？」

恐る恐る尋ねる。

今もあの時と同じことを聞かれたら、同じことを言い返す気はあるが、本人に聞かれたら恥ずかし過ぎて悶絶しそうでならない。しかしフェリスは首を横に振った。

「そうだな。アルバートはやたらにお前を褒めていたが、それはてつきりあの男に逆らったからだと思ったが？ローラインは……いつもの調子で話がずれていて、良く解らなかったな」

「そうなんだ。よかった」

「なんだ？何か、言ったのか？」

珍しく興味を示すフェリスに内心舌打ちしつつ、リアナは最高の笑みを浮かべて「全然！何も言わなかったわ！」と答えた。

すると、フェリスは少し顔を青ざめさせた。

「気色の悪い顔をするな」

「……」

その言葉に傷ついたものの、自覚があったので何も言わずに視線を前に戻した。そしてそのまま長い廊下の先を進んだりアナだった。

## 10 後宮からの招待状(3)

廊下を過ぎ、リアナとフェリスの二人は再び扉の前に到着した。後宮の入り口であった。

そこには女性騎士が入り口を警備しており、中央塔とは違う様相を醸し出していた。

後宮には基本的に男性の出入りが禁止されている。それは息子であるフェリスやエリオルも例外ではなく、気軽に中に入ることができない。彼らが後宮を訪れるのは、たいてい呼び出しをもらう時くらいだ。

しかし、ロスネルドでは大分昔の代から後宮に、正室を含め、大勢の側室たちを住まわせることはなくなっていた。

今でも特に側室を娶(めと)ることが許されていないわけではないが、ハロルドには正室にソフィア王妃がいるだけだ。そして後宮は今や、ほとんど国王よりも彼女の宮となっていた。

騎士の中から前に出た女性が、深々と頭を下げた。

「ご足労ありがとうございます。ここからは私がご案内致します」

「ミユナ―だ。彼女はそう言って二人を誘(こゝろな)つ。開けられた扉の先は、<sup>かくわ</sup>芳しい香りに満ち溢れていた。

中に足を踏み入れると、そこは大きな後宮の玄関ホールのような場所で、天高い頭上には何段にも連なったシャンデリアが、微かに流れ込む風に揺れていた。

ホールや廊下には色とりどりの花で溢れていて、実に華やかで女性らしい気配りのされた宮に、リアナはただ嘆息する他なかった。

やがて一つの部屋の前に辿り着き、ミュナーがリアナたちをその場に待たせると、彼女は部屋の中に入って行った。

すぐに戻ってきた彼女は、引き締めていた表情を緩め、二人を歓迎した。

「ようこそいらっしゃいました。中でソフィア様がお待ちでございます」

しかしここまで来てモリアナは戸惑っていた。扉の先に怯んだ彼女は、フェリスに目で縋った。向けられた必死の表情にフェリスは肩を竦めたものの、先に部屋の中へと足を踏み入れた。

二つの大きな部屋を通り過ぎた先、その奥の部屋に王妃は居た。リアナは赤い絨毯に向け続けていた視線を、恐々と上に向けた。

視線の先には、荘重の雰囲気の中アンティーク調の椅子に座る女性がいた。

豊かな髪を頭の上でひとつに纏め、椅子から零れる鮮やかな萌黄色のドレスを身に包み、フェリスやエリオルを息子に持っているなど信じられないほど若々しい女性が、部屋に注がれる光の中に居た。

彼女の両隣りには女騎士が控えていたが、女性が小声で彼女たちを下がらせたので、部屋の中の護衛騎士は、後ろからやってきたミュナーだけとなった。

「失礼致します、ソフィア様」

フェリスが見たこともないほど恭しく、深々と頭を下げた。リアナは慌てて彼に倣<sup>なら</sup>って腰を折る。

「いやだわ、フェリス。どうしてもいつもそんな調子なの。いい加減、母親に対して他人行儀すぎないかしら？」

顔を上げたフェリスが、困ったように見つめるソフィアに向って首を振った。

「そんなことはありません。何度も申し上げておりますが、貴女は王妃であらせられる。いくら息子といえど、節度ある態度を持たねばなりませんので」

「あら。その割に、陛下にはずいぶんな態度と言葉で接しているみたいだけれど？」

リアナはフェリスのハロルドに対する口調、態度もろもろを思い出した。国王ハロルドに対しては、息子とはいえども、齒に衣を着せぬような物言いで謙<sup>へりくだ</sup>る様子も見えない態度だった。ただ、少年と父親の思春期中の悪さ、とでも言えば分からないでもない。

しかし、ソフィアに対してはフェリスは礼儀正しく、リアナも見習うべき程の態度を取っている。ただ、母親と息子の間柄にしては、よそよそし過ぎるくらいだ。

エリオルのことも考慮すれば、フェリスの、家族に対する態度には、妙なところがある気がする。それとも、王族の家族関係と、庶民の家族関係を比べる自体間違っているのだろうか。

（うつん、そんなの関係ない。だってフェリスの態度は可笑しすぎるわ……）

「……………」

リアナが悶々と考えている一方、急に黙りこんだフェリスに、ソフィアはため息を零した。それはまるで、反抗期に悩む母親の顔のようだった。

「私はともかく、父上に向って言葉が悪すぎですよ、フェリス。貴方は手のかからない子だけでも、それだけはどうかしてちょうだい」

「……………今日ここに呼ばれたのは私ではないはずですが」

感情を抑えてはいるものの、フェリスの機嫌がよろしくないのは手に取るように感じられた。

それはソフィアも同じだろう。彼女はふ、と息を抜くと、リアナに微笑みかけた。

「ごめんなさいね、せっかく来てもらったのに嫌なところ見せてしまつて。」

初めまして、フェリスの護衛さん」

悠然と首を傾げる女性には、気品と美しさの中に、どこか可愛らしさが咲いていた。ソフィアの顔はすっきりと整っており、賢く聡明な雰囲気を見ることができる。だが、その中にも遊び心を忘れないような、懐の広さを感じさせるのだ。

背筋を伸ばしたリアナは上ずった声で名を名乗った。

「フェ、フェリス王子の護衛をさせて頂いております、リアナ・レーベルトです」

「あらあら、顔を真つ赤にしちゃって可愛らしいわ。フェリスも筋肉の張った騎士よりも、可愛い女の子が傍にいてくれて嬉しいですよ」

扇の中でころころと王妃は笑った。

だがフェリスが無反応だったので、彼女は少し顔を曇らせた。

「なんとか言ったらどうなの、フェリス。何もしゃべらなければ、木偶と同じでしょう」

「……………特に、私が受け答えするような時とは思えませんでしたので」

さらりと答える彼に、ソフィアは呆れたようだった。

「面白みのない子ね。ユーモアというものを少しは学んだらどうなの。」

「ごめんなさいね、こんな息子で。フェリスの護衛は大変でしょう？もしフェリスに嫌なことを言われたら私に言いなさいな。遠慮はいらなくてよ」

「は、はい」

まだ緊張しているリアナを見て、王妃はソファに座るように促した。フェリスもソフィアに言われ、しぶしぶ間を開けてリアナの隣に腰かけた。

そこに侍女が現れて紅茶を用意してくれた。喉がからからだったリアナはこれ幸いと、呷るあおようにカップの中身を飲み干す。侍女がもう一度リアナにお茶を淹れると、王妃は彼女を部屋から下がらせた。

「リアナは……………そう呼んでも構わないかしら？リアナは何が好きかしら。趣味でも得意なことでも、ああ、好きな人のことでも良いわ」

「は、はあ……………」

「私は花が好きなの。一番好きなのはバラね。ほら、そこにある一輪挿しは、この間ミユナーに取って来てもらったのよ」

リアナの目の前のテーブルの上に置いてある細長い花瓶に、赤いバラが一輪活けられていた。

「私が初めてミュナーさんを見かけた時のバラでしょうか」

「多分そうね。そうでしょう、ミュナー？」

王妃の一步後ろに控えていたミュナーは肯定の返事をした。

「はい。リアナ様は、アルバート様とご一緒でしたね」

「あの時は女性の騎士に初めて会ったので、少し驚きました」

しかし逆に、後宮に来てからは男性の騎士を見ない。

「そうですね。女性の騎士は数が少ないので、必然的に後宮の警護につくことが多いですから、あまり見かけないと思います。後宮は、できるだけ女性で勤められる仕事は、女性でしか行っておりませんので」

「ふふ。だから、ついついミュナーに、そのバラの時もそうだけど、色々頼みごとをしてしまうのよ。その辺の殿方より、よっぽど素敵でしょう？」

ミュナーの凜々しい顔つきには、確かに見とれるところがある。下手な男に惚れるよりも、彼女に熱心になった方が良いと考える女性の気持ちもわからないでもない。

「この子は良く気がきくから、色々な我儘を言ってしまうのよ。でもそんな私のいうことを聞いてくれる、本当にいい子よ」

王妃がミュナーに向ける優しい眼差しを向ける。

彼女はそれだけ王妃から信頼されているのだ。リアナは羨ましいと思った。

「娘に欲しいくらいだわ」

その一言が、今までであった和やかな雰囲気を崩した。  
リアナの肌は敏感に、一瞬張りつめた空気を感じ取った。

（なに？）

フェリスが咳払いをした。

「……ソフィア様」

「あ……ああ、そうね。ごめんなさい」

一瞬間を食らった様子のソフィアだったが、フェリスにちらりと目配せされ、慌てて口元を扇で抑えた。彼女の視線はゆっくりと隣に向けられた。

視線を受けたミュナーは静かに目を伏せた。

「お気になさらず、話を続けてください」

だがその声が、ほんの微かに揺れていたことを、リアナは聞き逃

することができなかった。

## 11 それでも歩き続ける

後宮に漂う花の優しい香が、次第にリアナの緊張をほぐしてくれた。もしもいま冬でなければ、部屋の窓を開け放ち、甘い匂いに酔いしれていたことだろう。それ程に心安らぐ場所だった。

肩の力が抜けたリアナは饒舌になり、陽が傾く頃にはソフィアやミユナーと楽しく会話ができるくらいになっていた。

そんな時、赤み始めた窓の外見て、ずっと話を聞いているのか聞いていないのか（それでもさすがに読書などすることもなく）ぼんやりと座っていたフェリスが、リアナに目を向けた。

「あ、えっと……そろそろお暇いっせさせていただこうと思うんですけど……」

リアナがソフィアにそう言うと、彼女は扇を口元に当てた。

「あら、もう少しゆっくりしていきなさいな。よかったら、一緒に食事でもいいかが？」

「ごめんなさい。でも、フェリス王子にこれ以上付き添って頂くわけにもいきませんし……」

「そうねえ。…フェリスにしては我慢した方ね。そろそろ帰してあげましょうか」

ソファから立ち上がったリアナとフェリスは、王妃に別れの挨拶をした。

しかし部屋を共に出て行こうとしたところで、リアナはソフィアに呼び止められた。

「フェリスは部屋の外で待っていてちょうだい。ミユナー、よろし

くね」

返事をしたミュナーとフェリスが扉の向こうにいなくなると、ソフィアはリアナを再び座らせた。そして、今までアンティーク調の椅子に座っていた彼女は、少女の前のソファに腰をおろした。

「リアナ、単刀直入に聞くけど、許してね。あなたはフェリスが好きかしら？」

一瞬何を言われたのか分からず、頭の中でその言葉を反芻するはめになった。リアナは言われた言葉を飲み込むと、慌ててソフィアの真意を探ろうと必死になった。

「ど、どういう意味で聞いてるんですか？」

「うふふ、男の子として好き？　そう言う質問でも良いわね」

くすくすと笑ったソフィアは直ぐにそれを止めると、ハッとするほど真摯な青い瞳を、リアナに向けた。

「……………それでもいいの。でも、私が聞きたいのはね、『人として』好きなのか、それだけ。それだけで良いの」

「『人として』…………？」

ソフィアが何を知りたいのか、リアナには解らなかった。しかし、彼女の視線を受け、リアナは考えてみた。

好きか嫌いか？

嫌いではないことは確かだ。初めも今も、彼の言動に頭にくることとはあるが、だから嫌いになのか、と言われるとそういうことにはならなかった。

たぶん、選択肢が二つしかないならば、「好き」ということで良いはずだ。ただ、それを認めるのは少し癪ではあるのも事実。

「……色々難しい人だとは思いますが、わたしは王子を護りたいと思います。きっかけは、わたしの私欲でした。でも、彼を護つてあげたいと思った気持ちには、嘘偽りがありません。だからそのために、もつと彼と仲良くなれたらいいと思います。そんな人をどうして嫌いになれるでしょうか」

素直に「好き」とは言えなかったが、ソフィアにとって望む返事だったようだ。彼女はほつと安堵のため息をつき、少し泣きそうな微笑を零した——その顔は、リアナにとって懐かしいものを……彼女の母親を思い起こさせるようだった。

「ありがとう、リアナ。あの子の護衛があなたで良かったわ」

立ちあがったソフィアはリアナの前までくると、腕をのばして少女を包み、抱いた。懐かしい匂いが鼻孔を<sup>くすぐ</sup>攪り、リアナは胸がぎゅつと締め付けられるような気持ちになった。

「お願いね、あの子のことを頼むわ」  
「……………はい」

その言葉のなんと重いこと。

同じようなことは言われたことがあるが、何度耳にしても慣れることはない言葉。

それでも、リアナは変わることなく、固く頷いた。それを見てソフィアは再びリアナを抱きしめた。

「……無茶はしないで。あなたも、あなた自身を大事にして。リアナが護衛で私は嬉しいわ。でも、二度とフェリスに同じようなつらい目にあって欲しくないの」

「……同じような……？」

リアナが問うと、ソフィアは言葉を詰まらせた。

目の前の彼女はつらそうに唇を噛むと、絞り出すように言う。

「……あの子があんな性格になったのは、あの子がとても大切な人を亡くしてしまったからなの。その人は、フェリスを庇って亡くなってしまったの……だから……」

「え……？」

思わず耳を疑った。

「だから、あの子は『護衛』を嫌うの。同じ苦しみを、繰り返したくないから……」

「嘘……」

その時やつと、フェリスの言動に合点がいった。

護衛を毛嫌いする理由。

リアナが初めて城に来た時、謁見の間で——フェリスが護衛を「  
いらない」といった時に浮かべた、拒絶や絶望の瞳……………その時、  
フェリスは昔の事を思い出していたのだろうか？大切な人が亡くな  
った、その悲しみ苦しみを、その胸に抱いていたのだろうか……………

でも、もしも自分も同じように大切な人を、自分を庇ったことで  
亡くしたらどうだろうか？自分の傍にいたから、死んでしまったら、  
どんなにつらいだろうか——？

（…………でも、それじゃあわたしは、わたしという存在は、フェリス  
を苦しめているの…………？）

そのことに気が付き、リアナは青ざめた。

リアナは護衛になった時に決意していた。彼を護ろうと。フェリ  
スを助けようと。

それなのに、彼女の存在そのものが、フェリスの心を追い詰めて  
いた。

彼女は決めていたのに。身体だけでなく、フェリスの「心」も護

ろつと、決めていたのに。

「……………そんな……………」

「あの日」に救ってもらえたような、そんな大きなことは出来ないかもしれない。「心を守る」など、大層なことは出来ないかもしれない。

でも。

それでも、少しでも力になればと。

少しでもあの哀しい瞳を和らげることができればと――

ソウ、オモッテイタノニ

リアナは黙り込んだ。

そんな彼女から離れたソフィアは、不安げな表情を浮かべた。もしかしたら、リアナが護衛を怖くなって止めたくなったと思っていたい

るのかもしれない。

リアナは考えた。考えて、思考を巡らせ、どうすればいいのか、それだけを考えた。

(…………でも、じゃあわたしは、「今」、「護衛」を止めるの?)

はたと、彼女はそれに辿り着いた。

たった今、フェリスを頼まれたばかりなのに？  
いや、違う。

自分で決めたのに？それなのに、止める？  
そんなこと、できるのだろうか？

(「できる」？……………違う。それは、違うわ)

できるとか、できないとか、そうじゃない。  
だって、いま自分が護衛を止めたとしても、王子である限り、彼は同じことを繰り返さなければならない。同じように、苦しむだけだ。

そんな思いをさせないように、自分は「護衛」になると、決めたということじゃないのだろうか？あの日に決意したことは、そういうことじゃないのだろうか？

それならば  
.....

「わたし、フェリス王子に言ったんですよ？わたしは絶対に死なない、そう約束したんです。  
だから、わたしはその約束を果たします。必ず」

彼女が至った答えは、それだった。

自分の存在を含めて、「彼」を「護る」。そして、「死なない」という約束を「果たす」。それだけだった。

だから、リアナはそう言って微笑んだのだった――

## 11 それでも歩き続ける（後書き）

ここまでお読みくださって、本当にありがとうございます。

さて、話数が増えてきたわけですが……はい。あんまりストーリー的には進んでません。

一応主人公たちの気持には多少変化はあったかな、と思いますが、本筋から離れているような気がしなくてもないです。これは書き手の力不足です。申し訳ないです。

あと、人物の心情の流れが分かりづらいという方もいらっしゃるかと思います。書き手の文章力のなさです。頑張って勉強していきます！

もう全部ひっくるめて読者様に謝罪とお礼を言わせていただきます。拙い作品ですが、これからも宜しくして頂けたら嬉しいです。

## 12 学ぶことを忘れずに(1)

スキップのままフェリスの部屋にやってきたリアナは、朝から元気だった。その勢いで扉を開けて、大声で朝一番の挨拶をする。

「おはようございます!!」

そんな彼女を迎えたのは、寝起きでいつもの倍機嫌の良くないフェリスだった。

黒い上着の前はだらしく開けられていて、中のシャツの襟はねじれている。彼のさらさらとした灰色の髪は寝癖で後ろに跳ねていた。虚ろな紫の瞳をリアナに向ける姿は、普段のフェリスを想像させまいとしているようにも見えた。

「朝から煩いな……」

ソファでぐったりしていたフェリスに、リアナは背中に隠していた物を差しだした。

「フェリス、あげるわ」

リアナが出したのは素朴なクルミ入りのパンケーキだ。彼女は自信満々に言う。

「見た目は地味かもしれないけど、結構おいしいのよ?」

「またおまえの手作りとやらか? なんなんだ、この間から。俺はお前の味見役か?」

パンケーキをフェリスの前に置き、あらかじめ切っておいた一切

れを皿に移す。

「そんなつもりはないわよ。フェリスに食べてもらいたいから朝から頑張ったんだから」

顔をしかめるフェリスの前に小皿をさしだす。彼はそれを受け取らず視線をリアナに戻した。

「……………王妃の所にいつてから妙に張り切ってるみたいだが、何か言われたのか？ なんだか俺の事を聞いてくるようになったし……………」

リアナとフェリスが王妃の所に尋ねてから、リアナはよく朝に自作のパンやらデザートやらを作って持ってくるようになっていた。フェリスがそう思うのも自然なことだった。

それだけではなく、彼の背中を押しては城の中を連れまわして（実際は連れ行ってもらって）いた。また彼の好きな物を聞き出そうとしたり、会話を広げようと努力していた。

彼女としてはフェリスと仲良くなるために色々考えての行動だったのだが、本人からしてみれば少々不気味なことらしく、そういう時のフェリスはリアナに懐疑的な視線を向けていた。

「別に？ ただ護衛としては、王子のことを色々知っておいた方がいつか役に立つかなー、と」

王妃に言った事をフェリスに絶対に聞かせたくはないので、彼女はそう言った。

「……………食べ物何か、それに関係あるか？」

痛いところを突かれたリアナは言葉をつまらせた。

「…それは、ほら、好きな食べ物って必然的に食べる回数増えるし！ 毒を仕組まれるのに可能性が高いかな、と」

「俺が毒を入れるなら、そんなの気にしないがな」

「うっ…。いいじゃない、わたしの好意よ、好意！ だいたい、フエリスってあんまり食事に頓着しないじゃない。何が好きなのか、教えてよ。そうしたら、わたしがそれを振舞って見せるんだから！」

「そんな気遣いはいらん」

そんなやり取りをしていると、アルバートが部屋にやって来た。

彼はいつものように柔らかな声で挨拶をする。

「お早うございます、フェリス様、リアナ様」

「おはよう、アルバート」

「今日はパンケーキですか。最近ではリアナ様の手作り朝ごはんが羨ましいですね、フェリス様」

「どこがだ」

そういつつフェリスは、リアナがずっと手にしたままだった小皿にしぶしぶ手を伸ばし、パンケーキを口にしました。

これはリアナが新たに発見したことだが、彼女がなにか作ってくれる度に彼は散々文句やらなにやうものの、必ず一口は食べてくれるのだ。そして彼女にとってそれは、一口だけでも嬉しいことだった。

だからリアナの顔は自然と笑みになる。

「ねえねえ。中央塔の西の方に綺麗な場所があるんだって。侍女の人に教えてもらったんだ。今日はそこに行ってみない？」

「今日は俺の授業がある。遊びたいなら自分ひとりでどうぞ」

「あー、あの小難しい意味不明の授業ね……」

フェリスは不定期ながらも色んな専門家——先生に授業をしてもらっていた。それは政治学であつたり、数学であつたり、とにかくリアナには理解しがたい内容ばかりだった。護衛である彼女はフェリスが勉強している間、その暇で仕方ない時間と闘わねばならなかった。

「でも午後なら空いてるでしょう？ 天気がいいんだし、行こうよ」

一生懸命説得するリアナに、アルバートが加わる。

「いつもお部屋にいてばかりでは、お身体を悪くしますよ。一緒に行ってきたらどうですか？」

「そうよ。このままじゃあフェリス、いつか倒れるんじゃないかしら。おじいさんじゃないんだから、もっと元気にいきましょうよ」

「フェリス様はたくさん運動して、たくさんお食事をするべきです」  
「動かないから全然食事とらないのよ。一日中動いていたら、きっとフルコースだってぺろりと平らげちゃうわ」

二人がかりで言われ、寝起きで若干思考が鈍っていたフェリスは、眠くて何か言われるのが耐えきれなかったのか軽く怒鳴るように答えた。

「分かった。分かったから。頼むから静かにしててくれ……」

いらいらと前髪を手で乱すフェリスを尻目に、リアナとアルバー

トは互いに手を打ち鳴らせて喜んだ。フェリスが同意したら、それはいくら後になって彼が後悔しても実行される羽目になるのは実証済みだった。……リアナが彼の寝起きに頼みごとをするのは、ある意味確信的な行為だったりするのでもあった。

フェリスの個人授業は、彼の部屋ではなく、そういう時に彼が好んで使う小部屋で行われる。

そこには図書館程とは言わないが、教材に事欠かない程度の書物が壁を占領しており、少し埃っぽい部屋だった。

今日の授業は政治学だった。

机と本に向き合うフェリスの背中とその隣で難しい話し続ける教師を、リアナは出窓の突き出た部分に腰を下ろして眺めていた。リアナが座っている場所は民家ならば本来座る場所ではないだろうが、ここではふかふかのクッションのようなものが備え付けられているのだ。

政治学を担当している先生はネルソンと言い、他の授業の教師よりも幾分か若かった。年頃は40歳半ばくらいだろうか。リアナよりも少し年上の子供がいると言っていたのを聞いている。

実際、政治学にはもう一人ご老人が担当している。ローズ曰く、そちらの先生を王子の勉学に目を光らせているキーツ・フォン・マ

インド宰相は推奨し、フェリス王子の担当にさせているらしい。しかしフェリスはどうやら彼が望んでネルソンにも来てもらっているとか。

あれこれと、授業というよりも話し合いをしているフェリスとネルソンを、いつもならぼんやりと見つめているのだが、最近のリアナは暇があれば考えていることがあった。

彼女はフェリスの横顔をじっくりと見つめる。

（……………フェリスを庇って亡くなった人って、どんな人だったんだろうか……………）

王妃ソフィアが話してくれるまで、フェリスにそんな過去があるとは知らなかった。「大切な人、を、自分を庇ったことで、亡くしてしまった」ことを。

（大切な人、か……。フェリスにとって“大切な人”って、どれだけ“大切”だったんだろうか）

あのフェリスが「大切」だと、護衛に対して、守られることに対して、感情的になるほど「大切だった」ということ。…………いや、「今」でも、か。

（きつと、とても好きだったんだろうな…………）

その時リアナにはある小さな感情が浮かんだのだが、彼女はそれを何もなかったようにすぐに忘れてしまった。

（でも知らなかったのは、フェリスのことを誰にも聞かなかった私が悪いのよね。アルバートは知っているのだろうか。コイズは？

ローズは？)

しかし実際に彼らに聞くのは、やはり憚れる話だった。  
フェリスにとって、触れられたり、蒸し返されたくない話かもしれない。

(……それでも知りたいと思う私は、ひどい人間なのだろうか……  
……)

はあ、と深いため息をつく。

自分だって聞かれたくない過去があるくせに、よくそう思えるものだ、とリアナは自分自身に嫌悪した。

ひとりでもんもんと思考のループを続けていると、ちらりと振り返ったネルソンと目が合った。

彼はフェリスに幾つかの問題を与え考えさせると、リアナの方にやってきた。

「リアナ君。良かったら、君も少し勉強してみないかい？」

「わたしが、ですか？」

少し驚きながらも尋ねると、彼は頷いた。

「もし君に興味があればね。難しいことはするつもりはないよ。君が聞きたい事を聞くだけでも良い。でも、せっかく若くて時間があ  
るんだ、学んでみることは悪いことじゃないよ」

眼鏡の奥の瞳がにこりと笑う。

しかしリアナは恥ずかしげに俯いた。

「あの、でも、わたし、政治とか本当に一般的なことしか知らないし、基礎的なことすら解ってないかもしれないし……」

「別に政治じゃなくてもいいよ。君がわからないこと、知りたいこと、僕が分かる範囲なら教えてあげたいと思ってる。数学とか語学なんかはちよつと専門外だけど、地理とか歴史なら多少教えてあげられると思うし。ね、やってみない？」

ネルソンはじつと考え始めたリアナを、辛抱強く待った。

やがておずおずと、少女は顔を上げた。

「あ、あの、先生。ロスネルドの同盟国とか、敵対してる国とか、そういう国のことを聞かせてもらえますか？ 特に聞きたいってわけじゃないんですけど、あんまり良く解ってないから、ちゃんと知りたいって言うか……」

そうだ。王子の傍にいる身としては、「はい、知りませんでした」では済まないこともあるかもしれない。

ネルソンは優しく頷いてくれた。

「うん。じゃあまずは三国同盟のことから説明しようか」

なぜだか目を輝かせ始めたネルソンに、リアナはわくわくし始めるのを感じた。

### 13 学ぶことを忘れずに(2)

「三国同盟」。

これは、ロスネルド王国を含め、あとの二国、「ギリアム国」と「シリル国」の三国間の同盟のことだ。

「ギリアム国」とは、広大な砂漠の国だ。国土のほぼ全てが砂で覆われた乾燥地帯。そこでの作物の生成は極めて困難を要している。そのため、ギリアム国は商業に栄えた国となった。彼らの商売上手な気質は、国民性と言ってもいいのかもしれない。

代わって「シリル国」。ここは“花の都”と揶揄されるくらい、植物や食物などに溢れた国である。イベントごとにも多く盛大に行われる、陽気な国である。一方で、軍事力には多少頼りない部分があった。

「この『三国同盟』は、先々代の国王、つまり陛下のお爺様が二国と結ばれた同盟だね。

三国同盟が持つ意味は『結束』。三国のうち、どこかの国が他国に侵略された場合、その国への軍事的、物質的援助を惜しまない、という条約が結ばれているんだ。この三国同盟のこと自体や、条約そのものを“トライアングル トライアングル”と言うこともあるね。

『三国条約』の規定によって、『ギリアム』か『シリル』が他国から侵略されそうになった場合、あるいは組織的な力を要する事態が起きた場合、ロスネルドでは騎士団を送ってることになっているんだよ。

これは元々は大国『セント＝フィリア法王国』に対抗する同盟だ

ったんだ。ただ、法王国は賢い国だからね、同盟国相手に戦争をするような国ではないんだけど。まあ、この国のことは後で話してあげるね。

今ではこの同盟は、ほとんど今戦争中の『レギオス国』に対して有効なようなものだよ。

ただ、レギオス国は今のところ島国『コプト』や、『セント・フィリア法王国』しか相手にしてないんだけどね」

「……えつと、じゃあつまり、三国は仲が良いつてことで、いいんですよね」

我ながら単純明快なことを改めて言ったものだな、と思い、リアナは顔を赤くした。

だがネルソンは笑わなかった。

「そうだね。

特にシリル国とロスネルドは結構親密だよ。エリオル殿下はシリル国に婚約者がいるしね」

この事実には少し驚いた。

だがエリオルは21歳と聞いたことがある。婚約者がいても可笑しくない。いや、ずっと子供の頃や、生まれたときにはすでに相手が決まっていたのかもしれない。

しかしそこで、リアナは目を吊り上げた。

「ちょっと待つて。エリオル様って、かなりのプレイボーイよね」

しかも本人が認めている、正真正銘の。

教師ネルソンは一瞬相好を崩しそうになるが、持ちこたえた。

「いやまあ……………その、一応側室が禁止されているわけではないから」

一少女の質問から逃れようと、ネルソンは決して目を合わせようとはしなかった。

「あ、そうですか」

リアナは淡白に返す。

「で、でもね、こう言ったら失礼だけど……………政略結婚なんだよ。好きな人とは結婚できないんだ。それは、つらいことなんじゃないかな」

そういつて彼は、自分の薬指に嵌めていた飾りも石もない金のリングに目を落とした。

「それは確かに辛いと思いますけど…………でも、エリオル様ってそんな相手いるんですか？侍女の話では誰彼構わず手を出してるようですけど」

「うーん。それはちよつと僕じゃあ分からないけれど…………。でも今後好きな相手ができるかもしれないし。未来の国王様でも、決していいことばかりじゃないんだよ。」

でもね、エリオル様は婚約者のことを嫌いではないと思うよ。幼馴染だつて聞いているし。

…………おつと、話が逸れてたね。  
えーつと、『ギリアム』国には、ロスネルドの代表として殿下が

毎年招かれてるね。もともと人懐こくて友好的な国だから、仲良くなりやすいけどね。

『ギリアム』はね、ちょっと面白い国なんだよ。この国の王族は子をたくさん生なす事が多いんだけど、第三継承権までを持った三人の子供以外は、みんな“オアシス”と呼ばれる街に一人ずつ預けられて、その長の養子として育つんだよ。

なんでも、国のどこで内乱、紛争、戦争が起きても、そこで率先して民を率いる役目を、王族の子供たちは持つているんだって。王都にいる王族が狙われた時の、予防線とも言われているね」

「へえ……なんか面白そうな国ですね。わたし“砂漠”って見たことないんです。どんな所なんだろう」

「僕も一度だけ行ったことあるけど、圧倒されるよ。見るもの全て砂だからね！しかも暑くて暑くてたまらなくなつて、そして夜は酷く寒い。身体が慣れなくて数日は大変だったな。

でも、砂漠に沈む夕陽は、それはそれは美しかった……」

その光景を思い出しているだろうネルソンの姿を見て、リアナもぜひギリアム国の夕陽を見たいと思った。

リアナはそこで、ネルソンの向こうでこちらを見ているフェリスに気がついた。

「やだ、ごめんね、フェリス」

ネルソンもフェリスが問題を解き終わったことに気が付いた。

「すみません、フェリス様。すぐに戻ります。  
ごめんね、リアナ君。また後で」

頷こうとしたリアナだったが、その前にフェリスがそれを止めた。

「ネルソンはそいつの相手をしていてくれ。俺もここで聞いているから」

「しかし、フェリス様はこういうことは知っていると聞いていたが……？」

「そうだな。でも、初心に帰るのも悪くはない」

ネルソンは興味深そうにフェリスを見つめていたが、やがてにこり——いや、どちらかというのにやり、と笑った。

「そうですか。フェリス様がそうおっしゃられるなら、私は続きをさせていただきますよう」

そのネルソンの顔を見て、フェリスは微かに眉を寄せた。

「さて、リアナ君。貴重な時間をもらえた様だ。えっと、ギリアムのことを話していたっけね」

「そうですけど……。でも、フェリス、本当にいいの？あなたの授業時間でしょ？」

リアナがフェリスに問うが、椅子を傾け後ろを向いていた彼は、片腕を机に乗せた状態で、緩慢に頷いた。

「俺が良いと言っているんだから、気にするな。お前が少しでも常識を学んでくれるんだったら、容易いことさ」

「な、なにそれ。わたしがまるで、物知らずの非常識って言いたい

わけ？」

むっとして言い返すが、フェリスは面倒臭そうに手で払う素振りを見せ、「無駄口を叩いているなら、少しは勉強しろ」と言う。

「ほらほら、喧嘩はなしだよ。さあ、じゃあ今度は今戦争中の『レギオス国』について話そうか」

ネルソンがそう言って諫めてくれたので、リアナはしぶしぶ口を噤んだ。だが、彼女はフェリスを見たままだった。

（なによなによ。お礼、言いそびれちゃったじゃない）

そんなもやもやを抱えたまま、ネルソンの話は続いた。

## 14 学ぶことを忘れずに(3)

「さて、『レギオス国』だけだね。リアナ君、君はレギオスの名を聞くとどんなことが思い浮かぶかな？」

そのネルソンの質問に、リアナは顎に指を当てて天井を見上げた。

「うーん。やっぱり、いつも戦争しているイメージ、ですけど」

ロスネルド国と「レギオス国」は、セント・フィリア法王国を跨って位置している。そして、「レギオス国」と法王国は昔から大変仲が悪かった。いや、実際はそんな可愛いものではなく、長きにわたる戦争で、両国とも悲惨な数の死傷者が出ているくらいだ。

そのため、ロスネルドとレギオス国との間に交流は、今はほとんどない。

「……そう言えば、大きな国で戦争してばかり、ということ以外、あまり話を聞いたことない気がします」

そう。レギオスの名前を聞く機会など、<sup>かの</sup>彼国が戦争を始め、終わる時くらいだ。

ネルソンは頷いた。

「そうなんだ。昔はそうではなかったんだけどね、最近ではあまりレギオスの国の様子は外国に<sup>もたう</sup>齎されることが少なくなったんだ。だいたい、君くらいの子たちが生まれる前くらいかな。だから、リアナ君があまりよく知らないのも分かるよ。」

『レギオス国』は大陸でも広大な土地を持つ国のうちの一つでね。人口もロスネルドの三倍はあるんじゃないかって言われてるんだ。ただね、この国は東部の土地が死んでしまっているんだ。作物は育たない。水もない。とても人の住める場所ではないんだ。だからレギオス国は国土の西半分で、本来なら一国で収めているはずの人口を扱っているんだよ。

……そうするとね、やっぱり人たちは、自分の居場所を得ようとするんだ」

ネルソンの瞳が真剣さを帯びていた。

「足りない食べ物、必需品、そして自分が生きるための場所。そういうものを得ようと人々は争い、奪い、人を傷つけ時には殺す……。もちろん、レギオス国だって何もなかったわけじゃない。でも、対策がとてもしゃないが追い付くような状況じゃなかったんだ。

国内だけではどうしても混乱を治められなかった。

じゃあ、今度はどうする？

そう、過剰な人口を逃すための、新しい土地を得れば、事態は治まるのではないか。そう、レギオスは考えた。

レギオスも分かっていたと思う。セントフィリア法王国を相手に戦争を仕掛け

ても、いくら巨大な国とは言え、国力の疲弊していた自国が良くて相打ちに持ち込めるかどうか、という状況であったことを。

それでも、それだけ切羽詰まっていたんだね。レギオスは戦争を始めてしまったんだ。

その結果はどうだったか？

やはり、レギオスが新しい土地を手に入れることはなかった。でも、戦争は違うものを生み出してしまったんだ。

……「憎しみ」。それを、人々の心に植え付けてしまったんだ。多くの人々の死は、それを抱かせるのに十分だったんだ。

もちろん、法王国だって同じさ。

戦争前までは決して友好的とは言わないが、それなりの国付き合いをしていた二国は、それを境にお互いを憎みあう相手に変えてしまったんだ。

それは、ずっと昔のことだけれど。

ただね、いまもレギオス国が戦争をする理由はセント・フィリアや資源に溢れたコプト国の土地を手に入れるということだけじゃなくて、やっぱり、そういうことが、根底にあると思うんだ」

初めて聞く話。知らなかった事。

リアナは軽いショックを受けていた。

「……わたし、レギオスってなんで戦争ばかりするのかって思ってた。ただ傲慢に、大きな国が自分の権力を振りかざしたいだけって、そう思ってた……」

急に自分が恥ずかしくなった。なぜ今まで知らなかったのだろうか。知ろうとしなかったのだろうか。

（やっぱり、わたしって、そういう人間なのだろうか。知ることを、学ぶことを、遠ざけてただのらりくらりと生きているような、そんな人間なのか……）

ただ与えられた事だけに満足し、その中だけで生きようとする。そこが最高の世界だと信じ、外の世界もまた、同じように最高の

場所であると信じて疑わない。

世界の片隅で誰かが苦しんでいた、泣いていた、それ  
に気がつくことは決してないのだ……………

自分の汚い部分を、改めて目の前にして、苦しかった。つらかつ  
た。

リアナは両ひざに拳を乗せながら、俯き、言いようもない焦燥感  
に苛まれた。

変わりたいと、願ったのに。変わろうと、思ったのに。

やはりわたしは、結局変わることもなく……………

「どうしたんだ」

リアナは、ぱつと顔を上げた。

その瞬間、紫の眼差しと目が合った。

……………なぜだろう、そこにはどこかやさしい光があったような  
気がした。

「わたし……………」

ぐっと拳に力を入れた。

あの夜の温かさを、思いだしていた。

——しつたあと——  
「そこでどうするかが、それこそが本当に人間として問われることなんじゃないか？」

彼がくれた言葉が、もう自分の中にはあつたから——……………

リアナは立ちあがってネルソンの手を強く握ると、力強い輝きを瞳に宿して彼を見上げた。

「先生、わたし、もっと知りたい。たくさん勉強したい！！お願いします、わたし、いろんな事を聞いて、調べて、自分の頭で考えてみたいんです！」

飛び上がらんばかりのその勢いにネルソンは目を剥いた。彼女の豹変ぶりに頭がついていかなかったのだ。

だが、まじまじと彼女を眺めていた彼は、その若い琥珀の瞳を見つめ、苦笑を漏らした。

「ははっ。教師冥利に尽きる言葉だね。

よし、僕の授業は甘くはないよ？わざと難しくするつもりはないけれど、課題はかならず出すから覚悟しておいてね」

ウインクまでし出したネルソンに、嬉しくてリアナは抱きついた。

「おやおや。こんなおじさんに抱きついてても何も出ないよ？

いやしかし、娘にも昔はこんなに素直で可愛い年頃もあったものだけど……あーあ、今じゃあ顔を合わせれば『消えろ、このクソ親父』とまで言われて……。あ、思いだしたら泣きそうになった」

方や、彼方を見つめながら切なげに涙を浮かべる男。

方や、そんな様子の中年男に笑顔で抱きついている少女。

その異様な光景に、フェリスは額に手を当てた。

「なんなんだ、これは……」

呆れ果てた呟きに、二人が気づくことはなかった。

## 15 蛇への道に行く

その温かさは、いったいどれほど昔のことだろうか。

「自分の立場を奢るな。周りを見る。学び、そして知りなさい。そしてその上で、自らに誇りを持つんだ」

あの人は、決して「誇る」ことを第一とさせなかった。

それは、決して「プライド」と言われる類のものではなかったとしても、彼はその前に「学び、知ること」を置かせた。

「誰かに教えてもらうことを、恥と思うな。それは自分の『誇り』の礎となるもので、決して躊躇うことではないのだ」

自分の顔面に大きな影がかかる。そつと、傷だらけの手が、頭を撫でた。

「……先生」

掌の向こう側で、彼が優しい笑みを浮かべた。

それは、いったいどれだけ昔の記憶だっただろうか――

（そうか……あの人は、あの時笑ったんだっただな……）

机の上の書物を片付けながら、フェリスはぼんやりとそんなことを思った。

こんなことを思い出したのも、彼の「雑用係」がネルソンに「いろんな事を知りたい」

のだと、言っただけなのかもしれない。

（こんなにも記憶が曖昧になってしまふほど、時は経ってしまったのか）

身体は成長したのに、心は昔に置いてきぼりにしたままな気分だった。

知らず、焦燥が彼の心に宿る。

（いつまで俺はこんな所で、こんなことを……いや、）

まだ、世界を知らない自分には学ぶべきことが多い。

それが、あの人の意志であるならば、それを止めてはならない。

だが、いつまでそうしていれば、自分の「願い」を果たす時が来るというのだろうか。

彼の長年抱いていた「願い」はただ、単純で、知識も思慮も、そして理性すらもないことだというのに。それなのに、学ぶ必要があるのだろうか。

フェリスは自分の両の掌を見つめた。

ただ、彼の「願い」に必要なのは、それだけなのに。それなのに、まだ彼はこうして暖かな城で同じような毎日を送っていた。

無言のまま手を見つめていると、フェリスの目の前に少女が顔をのぞかせた。

「なんだ、あっちへいけ」

煩わしいと手を払うフェリスの動作はいつものことだったが、その声は普段より刺々しかった。

「だって、片付けの途中で動かなくなるんだもん。どうしたのかなって」

リアナはそのフェリスの微妙な心の変化に気付かないのか、無邪気に答えた。

「別に、考え事をしていただけだ」

「考え事の割には、怖い顔してたよ」

振り向くと、じっと見つめる琥珀の双眸があった。

……どうせなら、無邪気のままに振舞って、何も知らない振りをしてくれた方が良かった。

「気のせいだ」

書物を腕に抱えると、フェリスは言い捨ててリアナを置いて部屋を出ていく。

もちろん後ろから彼女が追いかけてくるのは解っていたが、それでも、向かい合って彼女の瞳を見続ける気には、今はなれなかった。

授業を終えてからのフェリスの様子は、少し変わった。

しかし自室に戻った彼は、いつものように同じ年ごろの少年よりも少ない量の昼食をとり、いつもの不機嫌そうな顔で、おかわりを尋ねるアルバートに断りを入れていた。

もしかして、フェリスは彼の授業を中断させたことを怒っているのだろうか、とも思ったのだが、彼自身がそれを許してリアナに時間をくれたことを考えれば、辻褄が合わない。だいたい、それが理由ならフェリスは口に出して、リアナに文句の一つ二つは言うはずだ。

（何かしたかな……）

ただ、あの時のフェリスは怖い顔をしていたが、決して怒ってい

るようには見えなかった。張りつめた表情、とでも言った方がしっくりくる。

（どうしたんだろう……）

そうして悩んでいると、食後の紅茶を終わらせたフェリスと目が合った。

「……午後は何処かに行くんだったな」

「え？あ、うん。小さいけど綺麗な噴水のある所だって聞いているけど……」

リアナは少し躊躇ってから言う。

「やっぱり行くの止めるわ」

フェリスは少し意外そうに見返す。

「どうしたんだ？俺が行くと言ってしまったんだから、そうするつもりだが。気でも使ってるのか？」

「違うけど……でも、……」

「はっ。散々俺を城のあちこちに連れまわしておきながら、今さらそんな気遣いされてもな」

「うん……」

リアナの返事に要領を得ないのであろう。フェリスは訝しげにしながら、手にしていたティーカップを机に置いた。

「どうせ午後に用事はない。行きたいのなら行けばいい。余計な気遣いらない」

フェリスにすればずいぶん優しい言い方だった。  
だから、リアナは結局頷いた。事情は分らないが、フェリスの  
気分転換にも、その方が良い気がしてきた。

上着を手にして扉に向かうフェリスを見ながら、リアナも彼の背  
中を追って部屋を後にする。

「中央塔の西の方、だったか」

「うん、そうらしいよ。薔薇に囲まれた噴水があるんだって。お菓  
子貰ってきたから、ぜひそこで食べましょう」

「……俺は今しがた昼を食べたばかりなんだが……」  
「あんなの食べたのうちに入らないでしょうが。もっと食べなきゃ、  
大きくならないわよ」

二人はひとまず、中央塔に向って歩き出していた。

「大きくって……今さらじゃないか？」

「そんなことないわよ。16なんてまだまだ成長期よ」

「そうか？しかし、食後すぐに甘いものというのはどうかと……」

「いやね。甘いものは別でしょ、別！」

「……まあ、確かに成長するか。体重が」

「煩いわねー！」

リアナとて一応は少女であるし、その手の話には思うところがあ  
るのだ。

「食べてる分動いてるからチャラよー！」

「そつ言う問題か？」

そうしてああだこうだと話をしながら歩いていた二人は、東塔を出て中央塔を抜け、城内の西側に辿り着いた。

いくなれば、城はだいたい左右対称になっているので、中央塔からは東塔と同じような位置に西塔が見える。

「それで、どこまでいくんだ？」

中央塔から離れ、リアナは手入れの施された庭を通り過ぎていた。フェリスに問いかけに、彼女は答える。

「えっとね、たしか、高い垣根が目印だって。その中に噴水があるらしいよ」

「高い垣根……？」

なぜかフェリスの顔が曇る。

「知ってるの？」

「え？ああ……それは多分、西塔の近くにあるはずだ……」

「？　なんか曖昧ね。そういえばフェリスって、何年もお城に住んでるんでしょ？こっちの方は知らないの？」

「こちらにはあまり来たことがないからな」

少し躊躇うように言う。

「……………やはり、これ以上行かない方がいいかもしれない」

「え？なんで？」

「いや、それは」

歯切れの悪いフェリスの様子に珍しさを感じるが、リアナにはさっぱり意味が解らなかった。

彼は結局、首を横に振った。

「なんでもない。さっさと行くぞ」

「え、ちよっと？わけわかんないんですけどっ？」

引き留めようとするリアナを無視して、フェリスは先ほどの戸惑いを感じさせぬかのように足早に庭を抜けようとする。

この時、フェリスが己の直感に従っていたれば、彼と、そして彼女は面倒事には巻き込まれなかったかもしれない。

彼の心に、波風を立てるような事態にはならなかっただろう――

「あつ、や、止めてください……」

薄暗い小さな用具室といっても差支えないような、乱雑に物が積み上がった部屋。

一人の侍女は首筋を撫ぜる湿った感触にうち震えていた。

先ほどから抵抗はしているものの、彼女のそれは、相手にとって

抵抗していないことと同義だった。

「わ、私めには、まだやらねばならない仕事が残っています……」  
「それならやらなくて良い。私が“良い”と言っているんだ、放っておけ」

青年は口元を歪めて、侍女の耳元で低く掠れた声で告げる。侍女はそれだけで他に言うことができなかった。

徐々に乱れていく女を見ながら、青年は笑っていた。笑っていたが、目は酷く冷たかった。しかし我を失っていた女がそれに気がつくことはなかった。

その瞳は、雲一つない青空ではなく、深い水底の昏い淀んだ色であつた。

その瞳は、ふと艶めかしい肢体から離れ、明るい窓の外に移った。それは、何気ないことだった。

しかし、そこから捉えた景色に、非常に興味深いものが映った。興味深いでは足りない。彼にとって、今していることよりも何倍も「楽しい」ことが、通り過ぎて行つたのだ。

「……つく!!あの愚か者めッ!」

笑い声を噛み締め、青年は女から身体を離す。

「……エリオル様……?」

女は戸惑っていた。その瞳には縋る様子が浮かんでいる。だが、エリオルはもう彼女への興味など失せていた。……いや、初めからそんなものはなかった。ただの「気まぐれ」だったに過ぎない。

「すぐに歓迎の準備をしてやらないとな」

その時の彼の顔には、狂気じみたものさえ浮かんでいたことを、  
本人は気が付いていなかった。

## 15 蛇への道を行く（後書き）

えーっと、最後の方は注意書きが必要な程ではないです、よね？  
本当はもう少し細かく書くつもりだったんですが、この作品の流れからして、急過ぎることを身に染みているので軽めになりました。  
というよりも、作者の技量的に難しかっただけです。

でも今後の予定的に頑張らざるおえなくなります。ただ、書いても  
たまーに、微妙に、という感じですが。むしろこの先の2章は暗く  
（？）なるかもしれません。そんな作風嫌だという方は読むことを  
お勧めしません。よろしくお願いします。

## 16 闇の中の兄弟(1)

「あつ。あつたあつた！」

垣根から顔を覗かせたリアナは、目当てのも見つけて声を上げた。

彼女に手招きされたが、フェリスは歩く速さを変えずに少女がいる場所までたどり着く。

確かに円形を象<sup>かたど</sup>つた垣根の中央に、小さいながらも綺麗な噴水が湧きだしている水に陽の光を反射させて煌めかせていた。

傍には年季が入っていてあまり使われていなさそうだが、ちょうど二人が座れそうなベンチがあった。

リアナは素早くそこに座り、腰に下げていたポーチからピンク色の紙袋を取り出した。ポーチの中には普段小瓶や、何かしらの粉が包んである小さな紙など、彼女手作りの雑多なものが入っている。

「フェリス、早く来てよ」

浮き立つ彼女に急かされ、しかたないといった表情でフェリスもその隣に腰を下ろした。

可愛い紙袋からクッキーをリアナは取り出した。そしてそれをフェリスに渡そうと差し出す。

「俺はいらないから、自分ひとりで食べる」

「二人分持ってきたのよ？いいから、美味しいって！」

「お前、その菓子が好きなんだろ？後で取っておいて食べればいいじゃないか……」

だが問答無用と言わんばかりに、リアナは渦巻き模様のクッキーをフェリスの口に押し込んだ。

「ほら、美味しいでしょう？」

目の前で目を輝かせる少女に、フェリスは文句が言いたそうであったが、口の中にクッキーが入っていてそれができなかった。食べ終わると、彼は肩を竦めた。

「無理やり食べさせるとはどういった見だ」

「まあまあ。で？美味しかったでしょう？」

妙にしつこい彼女に、フェリスは仕方なく答える。

「まあ、悪くはない」

すると、リアナはフェリスに背を向けて拳を作った。

というのも、このクッキーは実際に貰ったものではなく、彼女の手作りだったのだ。フェリスにしては悪くない感想がもらえて嬉しくないことはないのだ。

「天気が悪くなってきたな……」

密かにほくそ笑んでいた彼女の背中では、フェリスがぼつりとそう零した。振り返ると彼はベンチに凭れて空を見上げていた。

確かに、先ほどまでは青空を見せていたのに、今は灰色の雲が速い流れで空を通り過ぎていく。

「そうね、雨降るかもしれないわ。こんな寒い季節にずぶ濡れにな

「つたら、本当に風邪ひいちゃう」

外に出る際には上着が欠かせない時期だ。だが、天気が悪くなつていて普段よりもなお寒さを身にしみて感じる。

「すぐに室内に入った方が良さそうだな」

そう言ったフェリスの言葉に、リアナは渋々返事をしようとした。しかし、その前に別の声がそれに答えた。

「私も、同意見だな」

驚いて一瞬視線を迷わせ、リアナは小さな声を上げた。  
フェリスといえば、その声が聞こえた時点で素早くベンチから立ち上がったいた。

「貴方は……」

フェリスが言い難そうに呟いていた。

眩い長い金髪に鮮やかな青い瞳、すらりとした体格。一度見たら決して忘れられない美青年が、生垣の傍に立っていた。

「久しぶりだな」

そしてリアナが自分の目を疑ったのは、散々酷い言葉で弟を罵っていた彼が、極上の笑みを浮かべて、フェリスにそう言ったことだった。

「……………はい。ご無沙汰しております」

そしてさらに驚いたのが、フェリスが兄に向って胸に手を当て頭を下げたことだった。

「仲が悪い」とか、そういう話ではない、そうリアナは直感的に思った。

「まあ、同じ所で暮らしているとはいえ、城が広すぎるからな。用事もない限り、会うこともないか」

「……殿下におかれましては、最近ご公務が多忙だと耳にしております。それも道理かと」

「くくつ。そうだな、とても疲れる仕事ばかり。国に招かれてばかりで困ったものだ。自由で暇なお前が羨ましいな？」

そう言うものの、エリオルのその言葉に羨望は一欠けらもなかった。彼の目が、それを如実に表していたからだ。

言うなれば「蔑み」。それが一番似合う瞳だった。

フェリスとてそれが解らないわけではないだろう。だが、彼は何も反応を見せず、淡々と答えるだけだった。

「恐悚致します。ですが、殿下の代わりは誰にも果たせるものではありません」

「そうだろうか。別に、お前がやってもいいのではないか？」

フェリスは軽く笑うと、首を横に振った。

「まさか。そのような大役、私では務まりません」

飽くまで態度を崩さないフェリスを、彼の兄はつまらなそうに見つめた。

「そんな話をしている場合でもないか。直に雨が降る。良かったらすぐそこだ、私の部屋に招待しよう」

その時になって、やっとフェリスは微かだが眉を顰め、言葉を詰まらせた。

「いえ。そのようなお手間をかけるわけには……」

「今はちょうど暇なんだ。少しくらい良いだろう。西塔など目と鼻の先。大した距離でもなかるう？」

「……………」

フェリスはさっと視線を辺りに向けた。

だが、ただ噴水から水が出ているだけだった。

エリオルは彼の行動の意味に気がついたのか、今度は笑いを噛み締めた。

「アークなら、今いない。あいつには別の用事に出てもらっている。生垣の外にいるのはやつより下位の騎士だけだ」

その言葉に、フェリスはエリオルに強い眼差しを向けた。

「なんだ？アークがいなければ、俺の招待には受けられないというのか？」

「そういうわけでは……」

「それならば、構わないだろう？何を躊躇っている。もしや、この私が怖いのではあるまいな？」

エリオルの笑顔はとても魅力的だ。そう、彼に対して正直いい印象を持っていないリアナとて、彼の美しさには未だに目を奪われてしまう程。その彼の笑みは誰をも虜にするのだ。

だからこそ、リアナはこの時のエリオルを「怖い」と思った。彼の問いがリアナに向けられていたならば、彼女は正直に頷いていただろう。

果たして、フェリスはどうだったのか——彼は暫くの沈黙を紡いだ。

やがて、吐き捨てるように、顔を歪めて答えた。

「殿下のご意思のままに」

「良くできました」

エリオルのは小さな子供を相手にするように、柔らかい声でそう言った。

彼はフェリスが承諾したことに満足したかのようで、先に西塔へと足を向けた。

しかし、突然踵を返すと、二人のやり取りの間身動きのとれなかったリアナの目の前まで来て、手を差し出した。

「私としたことが失礼な事を。女性を置いて先に行ってしまうとは、男して恥ずかしい真似をしでかす所だったな」

その洗練された優雅な姿にリアナは不覚にも見とれてしまった。すぐ傍のエリオルの表情は、夜会に女性を相手するような、甘く優しいものだったのだ。

だが、彼に「庶民の女」と蔑まされたリアナにとって、エリオル

のその姿は自分をからかって馬鹿にしているようにしか思えなかった。

それでも第一王子がわざわざ手を差し出しているのに、それを断ることは、今この微妙な雰囲気の中、しても良いことか？

リアナはじつと長い指を見つめた。

フェリスは、どういう彼の事情や理由にせよ、感情を抑えてまでエリオルの意志を優先させた。それならば、自分もそうあるべきなのではないのか……？ そう思った。

彼女は知らないうちに、ここである種の岐路に立っていた。

だが、彼女は自分の意志よりも、フェリスの意志を尊重した。そういう選択を、彼女はした。

だから、リアナは目の前の手を取った。

エリオルは慣れた手つきでリアナを立ち上がらせると、自然な動作で彼女の腰に手をまわした。

驚いたリアナが離れようとするが、彼はそれを許さなかった。

「殿下、その者まで招待することはないでしょう」

エリオルの前にフェリスが立つ。

「何故だ？」

「その者は私の“単なる”雑用係。貴方のような方が、わざわざ持て成すような者ではありません」

「くつくく！ 雑用係！？ それは非常に面白いな。私は彼女をお前の『護衛』だと聞いているが、それは間違いであつたか」

「失礼ながら、そう訂正させて頂きたい」

頑ななフェリスに笑いを噛み締めていたエリオルは、さっと表情を消すと、隣のリアナに聞こえるように呟いた。

「私の元に護衛もなしで来るとは、余程の身の程知らずだとは思わないか？」

ゾクつと、背中に戦慄が走った。

背の高いエリオルを恐る恐る見上げる。

綺麗な青い瞳は、なくなっていた。

そこにあつたのは、濁った光が、獲物を喰らうがの如く、不気味な輝きを放っていたのだった。

「宜しければ、わたしも同席させて頂きたく思います」

そう言った瞬間、フェリスは舌打ちをした。そして、リアナを睨んだ。だが、どこかそこには落胆と焦燥が混ざり合っていたように見えた。——そして、そこで初めて、微かに恐怖までもが垣間見えた。

しかしフェリスがどう言おうと、抗おうと、リアナにはできなかった。

エリオルの瞳を見た後で、彼を一人にさせるわけにはいかなかった。

もう、そんなことはできなかった。

「男だけでは華がないというものだ。喜んで招待しよう」

その悪魔のような男に、みすみす手渡すことだけは決して――

## 17 闇の中の兄弟(2)

少年は用紙を腕に抱え、大きな城の中で人を探していた。少年と言っても同じ年頃の子たちよりも成長の早かった彼は、やや大人びて見えるが、顔に浮かべていた笑みはむしろ彼を幼く見せていた。

廊下を駆けていた少年は何人もの侍従や侍女、騎士たちとすれ違った。

いつもは落ち着いていて振る舞いの上品な少年。その彼の無邪気な煌めいている表情に、大人たちは一様に振り返った。しかしその目は驚きに見開かれた後、暖かく優しい眼差しをまだ小さな背中に送った。

やがて少年は目当ての人物を見つけた。

屋上庭園にある四方に壁のない、小さな青白い東屋ガゼボの中に探していた人物が立っていた。

「父上」

だが声はすぐに萎んだ。男性の前に、7、8歳くらいの子供が石座に座っていたからだ。

なんとなく、少年は二人の様子を伺った。

「……………おれに構わないで下さいと言いました」

小さな顔の中の紫の双眸は、天を仰ぐように男性を見上げていた。

その子の様子に、少年は少し驚いた。

少し前まではもっと子供らしい口調だった気がするのに、数週間

ぶりに会った今の彼は、まるで男性と同じ大人のような顔つきと雰囲気をしていた。

でも、

「とても辛いこと」が彼にはあったのだ。今は明るく振舞う気分でもないのだろう。そう少年は思った。

「そんな事を言うな。俺はお前の父親だ。子が辛いときに、傍にいるのが当たり前だろう」

男性は優しく、いとおしむように、そつとその子の頭を撫でた。

どきつとした。

大きなその手に触れたことは記憶に数えるほどしかない。いつでも会える人ではなかった。だから、その人に頭を撫でられた記憶は

——少年の中にはなかった。

少年は羨ましいと思った。

とても眩しいものを与えられて、その子が酷く、酷く、羨ましかった。

しかしなぜだろうか。その子は急に眼を釣り上げると、邪険に男の手を振り払った。

「止めてください！！今までおれのことなんてなんとも思ってたなかつたくせに、今さらどういうつもりなんですか！？」

「そんなことはない、っ。俺は、今までもずっとお前のことを大切に……」

「口だけでは何とも言えますよね。でも、おれはあなたを父だなんて思っていない。おれの父親は、あんたなんかじゃない！！」

灰色の髪の子は、顔をくしゃくしゃにしながらも、泣かなか

った。瞳は、必死に目の前の男性を睨みつけていた。

「おれの父親は、もういない！！ここにはいない！！おれのせいで死んでしまったんだ！！！」

そう叫ぶと、子供は男性を強く押しのけて、少年がいる所とは反対側の方向へ走って行ってしまった。

少年は自分に背中を向けたままの男性に、声をかけようか、かけまいか、逡巡した。

「父上？」

そつと静かに、少年は歩み寄った。

父親の傍まで行くと、彼はゆっくりと振り返った。

「ああ、エリオルか」

少年と同じ金の髪の若い男性は、いつものような笑みを浮かべていたように見えた。

でも少年には解っていた。

父親のひきつった表情と、微かに震えている唇に、気づかないわけがなかった。

だからこそ、少年は父に元気になってほしくて、あえて気がつかない振りをした。

国王である父はいつも気丈で明るくて、太陽みたいな人だった。そんな父が好きだった。

「父上、これを見てください。私、今日やっと、帝王学のレポートで満点を頂けたんです」

「……そうか。それは、すごいな……」

柔らかい表情をしようとしているのに、それが出来ない。そんな顔を男性はしていた。「すごい」と言われても、そんな「悲しい」顔をされて、少年は少しも喜べない。

男性は少年に向けていた瞳を地面に落とすと、うなだれたように力無い背中を少年に向けた。

「……悪い、少し気分が悪いから、部屋に戻るな」

そう言っ、そのままのろのろと城の中に行ってしまった。

「……………」

少年はショックだった。

頑張ったレポートもさつと目を向けられただけで何も見てくれなかった。いや、少年すら瞳の中に映っていなかった。まるで、この場所に少年がいなかったような扱いをされた。しかも、実の父親に頭がくらくらしてきたように感じた。

「頑張ったのに」

少年は親指の爪をガリツ、と噛んだ。

帝王学の授業は、他の授業よりも難しいのに。他の授業だって楽じゃないのに。

やっと、満点を取って、褒めてもらえると思ったのに。

少年の脳裏に“その子”が浮かぶ。眩しくて少年が欲しいと思った手を、無残にも振りほどいた小さな子。その姿がぐにやりと歪んだ。

「フェリスがいなくても、私がいるのに」

ガリッ、

もう一度少年は爪を噛んだ。

ハロルドの子をフェリスが止めても、自分がいるのに。

……自分では、満足できないのだろうか？  
フェリスの方が、いいのだろうか？

でも、次の国王は皆が自分だと言っている。継承権の順序からいっても、自分が父の後を継ぐのに。  
だったら、別にフェリスがいなくたって、困らないの？

それなのに、フェリスの方がいいのだろうか。

いいのだろうか。

思ったよりエリオル王子の部屋は広くはなかった。

もちろん庶民の常識から言わせてもらえば意味のない程に広い部屋のだが、フェリスの部屋よりも一回りくらい小さい部屋のようなだった。

ただその分、部屋の数が多いらしく、その中の一つの「夢見の間にリアナたちは通された。

アンティーク調の重量感のある机にクッションが積まれたソファが周りを囲んでいる。そのひとつに部屋の主、エリオルがエスコートをしていたリアナに着席を促した。

不安定さに揺れながらリアナはそれでも体をクッションに沈めまいたとした。それは緊張からの体の強張りを壊すような真似はしないつもりだった故だ。

リアナの左側にフェリスが腰を下ろす。彼はじっとエリオルから目を離さなかった。

エリオルも対岸に腰を据えると、優雅に、そして大仰に長い脚を組んだ。

「良かったな、フェリス。雨はちゃんと降ってきた」

窓の外に顔を向けているエリオルに倣えば、たしかに薄暗くなっていた外で雨が窓ガラスに雨粒の跡を残していた。

ノックの音が響きエリオルが返事をする。侍女がお茶を持ってきた。とても静かな配膳で、侍女自身の表情は緊張と興奮が交じったようなものだが、指先は粗相を恐れるように慎重だった。やがて侍女が支度をすませて退室すると、部屋のなかには三人だけになった。エリオルの護衛たちは西塔にの入り口で主人に待機を告げられていたのである。

エリオルが紅茶を一口飲む。だがフェリスもリアナも口にしなかった。

「フェリス、お前も飲めよ。毒なんて入れてない。…まだな」

笑いを噛み締める第一王子をフェリスは無表情で返す。何を言われているのか興味がないようだった。

エリオルは吟味するように弟王子を見返すと、今度はリアナに目を向けた。

「フェリスの雑用係らしいが、一体なんの仕事をしてるんだ？ “なんでも” してくれるんだろ？ 私にもぜひ欲しいものだ。そういう人形みたいな相手が！」

頭にかちんときて立ち上がりたくなるが理性で押さえ込む。こんな相手が未来の国王だとは、ロスネルドはこの先どうなってしまうのか。

「わたしはフェリス王子の護衛です。雑用係ではありません」

「護衛ね……果たしてそいつに、そこまでする価値はあるのだろうか」

か？」

ねっとりとした視線をフェリスに向ける。

以前もまるで道具か何かのように弟を否定的に見ていたエリオル。その延長線の嫌味だと思つてリアナはムツとしながら応えた。

「それは、彼が王子であれば当然なのではないでしょうか」

エリオルは可笑しそうに笑った。

「王子だから、ね。しかし王族として相応しくなければ守られる価値などない」

まともな返事に一瞬言葉を失った。

しかしそう言う自分はどうかのだと質問してみたが、彼が将来の国王ならばぐうの根も出ない。

「以前私に楯突いてくれたが、私が言ったことは間違っていない。そいつが守られる価値があるならば、そんなことくらいにしか価値を出せないさ」

そんなこと——つまり外交の手腕を問われるロスネルドには重要なカードとして、他国との縁談を取り付けるということだ。

「他にどんな価値があるのだ？王族でありながらただのらりくらりと毎日を過ごす奴になんの価値が？」

（わたしに聞いているんじゃない）

フェリスを目の端に捉える。彼はただ、言われるまま黙っていた。

それでも、微かに膝の上の指が動いたのをリアナは見逃せなかった。

「わ、わたし聞きました。ロスネルドは16歳になるまで公務に携われないって。それにフェリスは授業だっしてしてるし、まだこれから……」

「16になつて2ヶ月以上経っている。その間そいつが何か国のためにしたか？していない。する気もないのさ。」

「だいたい16歳というのは何も制約じゃない。やる気さえあればそれ以下の年齢で国務に関わることは不可能じゃない。まあ、簡単な話ではないが」

どうしてもフェリスに対する批判が許せなくてリアナはまたもや第一王子に言い返していた。

「今までは何もしなかったかも知れませんが、これからがあります。貴方はこれからのフェリスの可能性を辱めてますッ」

言った後に本人の目の前で弁護していることに気が付いたが言ったことは取り返せない。リアナは半ばやけくそ気味にエリオルを睨んだ。

しかしエリオルは馬鹿にするような表情を変えてはいなかった。

「未来の話など無駄さ。本人にその気がないのだから、可能性など<sup>ゼロ</sup>にもなろう」

「なんでそんなことを決め付けるんですか！フェリスの心はフェリスが決めることです、貴方が決めることじゃない！」

エリオルの言うことがやけに頭に来る。わざといているのだろうか？

だがその怒りに冷水を浴びせたのは誰でもない、フェリスだった。

「擁護の言葉ならいい。その人が言ったことは間違っていない」

淡々と、事実を述べる口調だった。

フェリスは暗い表情で、噛みしめるようにそう言った。

## 17 闇の中の兄弟(2) (後書き)

二ヶ月ぶりです。ほんと不定期更新で申し訳ないです。

もうすぐ一年が経ってしまうのに展開が…今年こそいっぱい進めたいです。

(というかこのままだと終らない…)

それからここまでお読みくださった読者様、ありがとうございます。

どんなに更新されていなくても続きのことは考えているので、長い目で見て下さると初心者のお書きとしては嬉しいです。(作家としては

ダメダメですが…)

それでは(今更ながら)今年もどうぞよろしくお願いします。

## 18 闇の中の兄弟(3)

フェリスはリアナが止める間もなくテーブルの上のカップの中身を飲み干し、派手な音をたててカップをソーサーに戻した。

「確かに死なないようですね……お茶をどうもありがとうございました。」

これで私はこれで失礼させて頂きます」

上着を持ったまま部屋を出て行こうとするフェリスにエリオルが声をかける。

「雨は止んではないぞ」

「遠回りになります但渡り廊下から戻らせて頂きます。失礼」

リアナも慌ててフェリスを追おうとする。毎度ながらの勝手な行動に怒りを通りしこしてため息しか出ない。

後を追おうとすると体がかくんと揺らいだ。

驚いて振り返ると、エリオルがリアナの手を掴んでいた。

「待て、フェリス。持て成しは終わっていない」

不機嫌そうに後ろを向いたフェリスが何かを言う前に、リアナは腰から剣を抜いて彼のもとに駆け寄ろうとした。同時にフェリスも周りを見渡したが、その時にはもう遅かった。

部屋は一気に張りつめたものになった。

「どういづつもりだ」

礼儀など忘れたようだった。フェリスは、まだ手を掴まれているままのリアナ越しに、エリオルへ研ぎ澄まされた視線を向けた。

「余興を見せようとする前に、お前が帰るからだ」

リアナは剣の柄を握り締めて辺りを睨み、ぐつと唇を噛んだ。足を踏み出す前に囁かれた言葉のせいで、フェリスを庇うのに間に合うわずかな時間を逃してしまった。

——『動いたら、奴を殺す』、という言葉のせいで。

（違う、わたしの弱さのせいだッ）

そうだ。強かったらそんな言葉に怯まず一步を踏み出せたはずだが、できなかった。

フェリスは自分の周りを見渡すと、低い声で唸った。

「余興だか何だか知らんが、俺に剣を向けるとはいいい度胸だな」

部屋の中には黒装束の男たちが剣をフェリスに向けていた。部屋の扉を背に彼が囲まれているのだ。

男たちの顔は覆面で見ることはできない。微動だもしない。感情の見えない彼らが不気味な生き物に見えた。ただ分かることは、彼らはただ主の命を待っていた。

もしリアナが今飛び込んだら躊躇いなくフェリスを突き刺すに違

いない。それを嫌なほど感じる。だからリアナは足を床につけたまま動けなかった。

「ふざけたことしないでください！フェリスを傷つけるようなことしないでッ」

怒鳴るようにエリオルに言ってみるが、彼はただ楽しそうな顔をするだけだった。

「フェリスが傷ついたら困るものな。自分の“願い事”が叶わなくなってしまうからな？」

「え？」

「そのために奴の護衛をしているのだろう？所詮『自分のため』というわか。」

別に恥じることはない。誰だって自分が可愛いし、自分のために生きている。だからフェリスを傷つけられたら”困って”も何も恥じることはない」

「離して！」

リアナはエリオルの手を振りほどいた。

「自分のため」と思われても仕方がない。確かにそれは正しい。でも、全てではない。

それをエリオルに言う気はない。

エリオルは再び先ほどよりも強く手を掴んで、男たちに合図した。はっとして振り返る。

立ったままだったフェリスの髪が、宙を舞って床に落ちていた。

「抵抗するとあいつがどうなるかは……私の気分次第かな」

「そんな…！」

フェリスは男たちに囲まれても剣を抜かれても微動だにしない。恐怖に竦んでいるようには見えないが、下手に動くような真似は避けるべきだと解かっているのだろう。

そんな姿を眺めて気分が良さそうなエリオルの顔面を殴れるものなら殴りたかった。しかしそんなことをしたら今度は髪の毛だけでは済まないかもしれない。

そう考えると、リアナの心に氷が張った。俯き、微かに身震いした。

「あんたは相変わらず、詰めが甘い」

その言葉の後、短い悲鳴が響いた。

顔を上げたリアナは一人の男が腕を擦じられ、フェリスの膝の下で床に這いつくばっている姿が目に入った。

男たちの剣は動いたフェリスに合わせて動いていた。だが幸いなことに、それ以上動く気配を見せていない。

思わずほっと胸を撫で下ろしてしまった。

「ほう、あの男の技か。未だに覚えているとは師匠思いの良い生徒だなあ？くくつ。さしものそいつらでも見慣れぬ技に気を許したか」

（技…あの男？）

確かに武術剣術あらゆる技を学んでいたリアナでさえ、見たことのない体術をフェリスは使っていた。不法地帯「ガランド」に行っ

た時にも目にしていたが、滑らかで素早い技だった。

いったい彼がどこでその不思議な技を身につけたのか前から気にはなっていた。

しかしそこでエリオルの言葉を聞いたフェリスが、苦痛の表情を浮かべたことに気が付いた。

つらそうで、そして信じられないことに泣きそうな――？

だがそれも一瞬だった。

見たことが幻覚だと思わせるように、フェリスは男から確かな手つきで剣を取り上げると、切っ先をエリオルに向けた。

「ふざけたことはこれで終わりだ。これで終われば何も無かったことにする」

「剣一つで形勢逆転？馬鹿ばかしい」

「おい」

フェリスがリアナに視線を向けた。

「俺のことは気にするな、好きにやれ。自分なら守れる。出来るんだったらこの不法侵入者どもを叩きだせ」

状況が状況ながら、リアナは驚き、少し――いや、なぜだか「嬉しい」と思った。

フェリスが彼女をこのような場面で肯定する言葉は初めてだったからだ。

リアナの過去を受け入れてくれた時とは違う。彼の嫌がることを彼が許してくれて、あまつさえリアナに促してくれたのだ。

確かにフェリスの事を気にしなくて済むなら――護衛という役割

にしては情けないのだけれども——多少手こずるかもしれないが、勝つ自信がある。

自分を見つめ返しているリアナに、フェリスは浅く頷いた。

リアナは微かに紅潮した頬をぐつと引き締め、それに返事をしようとした——だが含みもった声がリアナにそれをさせなかった。

「おやおや。フェリスが剣一本と腕で勝てると思ってるのか？

一人やられたのは不意打ちだったからだ。手の内を読まれてこれ以上あいつが抵抗できると思うのか？あの男どもだってなにも素人を雇ったわけじゃない。君なら分かるんじゃないか？出来る人間なのか、どうなのか。彼らが城下のごろつきではないことくらい、分かるだろう。

ならこれも分かるだろう？『フェリスは自分ひとりすら満足に守れない』ことくらい」

リアナは押し黙って、フェリスを見た。

彼は憎たらしいほどいつもの表情で見返す。

「その男の言うことなど耳を貸さなくて良い。俺はそいつと違って少しは出来る」

確かにフェリスの剣さばきも見たことがある。一通りの剣術を習っていて、人並み以上に扱えることは知っている。

しかしそれが騎士であるコイズ並みの腕前なのかといえば、さすがにそこまで賞賛できるものではなかった。

それにフェリスはわざと言ってている可能性がある。

そもそも守られることが嫌いなフェリスが、自分を肯定するようなことを言っただろうか？もしや、無理でも自分が身動きをとれるよ

うに誘導しているのではないか？

……そうだ。冷静に考えれば、分かる。分かるじゃないか。

「剣を捨てろ」

エリオルが耳で囁いた。

「聞くな」

フェリスが微かに怒りを込めて言う。

ぎゅっと剣の柄を握った。

大事なこと。自分にとって大切なこと。護るもの。見失ってはいけない。

だから――

18 闇の中の兄弟(3) (後書き)

次話、ちよつと頂けない表現が入るかもしれません。かも、です  
が。

## 19 闇の中の兄弟(4) (前書き)

突然ですがP G - 12でお願いします。

えろさは皆無ですが、やっぱりひっかかる所があるかな、と。  
作者的には鬱展開だと思います。

## 19 闇の中の兄弟(4)

「……たら、……」

フェリスが強く睨んだ。だがリアナは剣先を床に下ろした。

「剣を捨てたら、フェリスを傷つけないで頂けますか」

「私の気分次第だっていったらどう？」

リアナは青い双眸を見上げた。その色は昏く冷えていて、聞く耳がある様に思えなかった。

それでもリアナは懇願した。

「傷つけるならわたしにしてください。

貴方に自分の為だと思われてもいい。でもお願いだからフェリスを傷つけないでください。自分の……弟を傷つけるなんて哀しいことをしないでください」

「馬鹿な事を言うなッ」

そのフェリスの怒鳴り声を聞いて、彼と初めて会った時のことを思い出した。その時も彼に同じようなことを言われたような気がする。

でも彼の心を傷つけないわけじゃない。だからもう一つ願った。

「どれだけ傷つけられてもいいです。でも、決して殺さないでください。殴られても、踏み躪られても、足を折られても、腕を斬り落とされても、目を潰されても良いです。でも、殺すことだけは止めてください」

その願いにエリオルは奇妙なものを見るような目つきになり、それから納得したように口端を緩めた。

「ははっ。死ぬのだけは怖いというわけか。  
しかしそれだけの拷問をされたらさっさと死にたくなると思うがな」

「正直、死んだ方がましかもしれませんね」

痛いのは嫌だ。

嫌じゃない人なんて、いるのだろうか？

「……それなら、なぜ殺すなの？」

その不可解さをにじませた問いに、リアナは笑った。

「なぜでしょうね」

理由を口にするほど、愚かではない。それでも“彼”は気づいた。だからフェリスはただ呆然と、リアナを見つめた。信じられないものをみるように、浅い息を吐きながら、見つめた。

「くだらない…ッ！ あんなのは一方的な約束だっ」

『わたしは絶対に死んだりしないわ』

フェリスと小指を交わし、約束したこと。

あの時は彼の事を何も知らなかった。ただ、そう、ある種、彼の瞳に惹かれていたのだろう——焦燥や絶望や哀しみを湛えた瞳に、

突き動かされるものがあつたのだろう。

その瞳が何を意味していたのか知らなかったけれども、あの時の約束はきつと間違っていないかった。

（――すべて失ってしまったわたしにはわかる。

生きて誰かに会うことのできる幸せは、とても尊いことだ。だからわたしは“死にたくない”。

フェリスとの約束だけじゃない。わたしはただ、“死にたくない”かない”。

わたしには何もない。でも、これからがある。まだスタートラインにすら立っていないかもしれない。でも未来のために、いま死んだりするもんか。

それに誰かを傷つけられるのも嫌だ。もう、何もできない子供が家族の死を見ているだけなんて、耐えきれない。あの無力で惨めな自分はもう嫌だ。

わたしは強欲だ。

フェリスを傷つけられたくない。でも死にたくない。  
だから、他の方法なんて選べない）

琥珀の瞳が揺るがないことを悟ったフェリスは、ただ苦しげな顔を伏せて頭を横に振るだけだった。リアナはただ静かに彼を見つめた。

二人のやり取りを見ていたエリオルは、掠れた声で「気に入った」と呟いた。

淀んだ青い瞳は微かに同情しながらも、リアナをソファに押し倒す。少女の長い髪がソファの縁から零れた。

「君の心意気や良し。フェリスの態度も面白い。だからその願いは叶えて差し上げよう。」

私はレディには優しいつもりだ。君を“身体的”に傷つけることも止めよう。

だから『拷問』に近しく、それでいて『死なない』方法でフェリスの代わりに君を『傷つける』。それで良いかね？」

押し倒された時には半ば予想できた事。リアナは小さく頷いた。

「本当にフェリスを傷つけないでもらえるなら、構いません」  
「ッ、やめろ！」

フェリスの怒号が胸が焼かれるように痛い。でも理由は解らなかった。

「意味が分かっているのか！」  
「無粋だぞ、フェリス。女性に言わせるものではない」

キツとフェリスがエリオルを睨む。

「エリオル！俺があんたを糾弾しないとも思っているのか？これ以上ふざけた真似をするなら俺がだってさすがに黙っていない！」  
「父上に泣きつくか？」

冷たく、でもとても落ち着いた声が部屋を打った。  
フェリスは怒りを削がれたように沈黙をつくったが、理解できないように頭を振りながら言葉を紡ぐ。

「俺を気に入らない理由が国王絡みならあんたの思い違いだ。あんたは昔から勘違いしている」

「勘違い？なんかのことやら。意味がわからないな」

「あんたは国王が俺を贖身していると思っっている。だがそれは違う。特別なのはあんたであって、俺じゃないッ！」

「知らぬな、そんなこと。私はただ――」

「お前を心底、嫌悪しているだけだ」

エリオルは黒服の男たちの中の弟に憎悪の一瞥を送ると、懐刀を取り出して刃を剥き出しにした。そして組み敷いていたリアナの上着をそのナイフで引き裂いた。

リアナは声を飲み込んで顔を背けた。

自分の心臓の鼓動が肉と骨を伝って耳の奥で反響する。布を切り裂く音がまるで肉まで削ぎ落としているようかの錯覚にとらわれる。ぎゅっと固く目を瞑る。

少し我慢していればきつとエリオルは飽きてすぐに終わるだろう。ただできればフェリスには見られたくない。でもきつとエリオルはそれを許してくれない。黙って身を委ねるしかない。

フェリスはどう思っているのだろう。ふしだらな奴だと思っっているのだろうか。

そう考えると胸が脈を打って痛みを抉った。しかしその痛みを消すように、エリオルが胸に触れた。

ガシンッ、という金属音が鳴った。思わず瞑っていた目を開けてしまう。

フェリスが男たちに切り掛かっていた。

それでも黒い牢獄からは逃れられない。男たちは微妙な間で太刀を避ける。

「いッッ!!」

短い悲鳴はリアナだった。

首筋に舌を這わせていたエリオルがいきなりそこに歯を立てたのだ。

「フェリス、忘れるな。お前が耳障りに暴れたら、この子が一生立ち直れないような扱いにする」

フェリスは嫌悪感を露わにして言葉を捨て吐く。

「そいつは関係ないだろうがッ!!これはあんたと俺の問題だ!」

リアナのくぐもった悲鳴が響く。

彼女の治りかけていた腕の傷に、エリオルが爪を立てたのだ。

「黙れ、と言ってるんだ」

容赦もない。

悔しげに唇を噛むフェリスの顔を見て、エリオルは快楽に溺れたようにうっとりとした表情になる。

リアナを「人質」にされている以上、フェリスにできることなどなかった。

人質の少女は唇から血を流していた。願ったのは己だが、恐怖に叫びだしてしまいそうだった。

蛇が肌の上を這うような感触に嫌悪感が後から後から湧いて出て

くる。それでもまだ幼さを残す少女は泣かないように、頭の中でただひたすらすぐ終わるのだと自分に言い聞かせた。

「あんたは哀れだな、エリオル」

挑戦的な言葉には一切青年は耳を貸さなかった。

だが、次の言葉で少女の身体を弄っていた手が止まる。

「好きな女に逃げられた腹いせに他の女に仕返ししてるつもりか？  
国王の跡継ぎにしては狭い心の持ち主だな」

舌が離れ、のしかかっていた青年が起き上がる気配がした。彼がソファから離れて足音が少し遠ざかる。

リアナが再び瞑っていた目をそっと開けると、エリオルがフェリスの顔を思いっきり蹴り上げた所だった。

「フェリス！」

鈍い音に身を乗り出すと無様にもソファから落ちた。すぐに身体を起こす。

エリオルは顔をおさえるフェリスの胸倉を掴んで無理やり立たせた。

「自分が今、どんな状況が分かって言ってるのか」

エリオルの顔は見えない。だがその肩は小刻みに震えていた。

フェリスは顔を血に染めながら、不敵な笑みを浮かべていた。

「あんたのその偏った趣味についていけなかったんじゃないか？彼女も可哀想に。あんたに目をつけられてきつと苦労したんだろう。」

だからあんたの元を去った。

彼女に同情する。こんな男の傍にいたのではいつ殺されるかわかったもんじゃない——」

「貴様ッ」

エリオルはフェリスの側頭部に固い革靴の先をぶつけた。フェリスは酷い音をたてて床に倒れたが、まだ笑っていた。

「子供か、あんたは。自分の不都合な事を暴力で解決できると思っている。国王になったらぜひともその稚拙な考えは控えてもらいたいものだ」

男たちから剣を奪ったエリオルがそれを振り上げる。それでもフェリスは薄笑いを止めなかった。

「止めて！」

剣を握った腕にリアナはなりふり構わずしがみついた。でも青年の腕力に振り払われて床に叩きつけられる。

立ち上がるために顔を上げた時、紫の瞳と視線が合った。身体が凍り付いた。

蔑むような、冷酷な眼差し。突き放すような拒絶の瞳。

（あ…）

一瞬、心臓が止まったような感覚がした。

その時場違いな程はつきりと部屋の扉がノックされた。

## 20 闇の中の兄弟(5)

剣を手にしていた男たちがさつと扉に剣先を向けた。

「誰だ？」

エリオルがフェリスの肩を踏みつけながら扉に向って声をかける。

「アークでございます。エリオル様」

意外な人物だったのだろうか。

今まで剣呑な表情であったエリオルの顔が、面白そう歪んだ。

「アークだと！私の用事はすぐには済まされる事じゃなかったはずだが、どうして戻ってきた？」

「フェリス様が西塔の傍までいらっしやるようだと耳にしたものですから、もしかしたら貴方様が何かをなされているのではないかと心配になったのでございます。」

どうか鍵を開けて私を中に入れていただけないでしょうか？」

扉越しの会話。それでも部屋の外の雰囲気が重たくなるのを感じた。

エリオルは足下のフェリスを見た。

フェリスは笑みを消し、ただじつと彼を見据えていた。その心中は顔色からは窺うことなど出来ない。

視線を外したエリオルは傍の男たちに一瞥を送った後、答えた。

「自分でどうにかして、入れ」

床に座り込んだままだったりアナには不可解な返事に思えた。しかし部屋の外の人物にはそうではなかったのか、「御意に」と彼が応えると、扉が強い衝撃を受けてしなり声を上げた。

ギシギシと音を立てて何度目か、扉が破壊の音と共に開いた。

扉から黒髪の男が入るやいなや、主からの合図を受けた男たちが一斉に彼に襲いかかった。

男はそれを予期していたのか、既に抜刀していた剣の一振りですぐに二人を薙ぎ払った。

アークは瞬時に次の二人を切り付け床に倒すと、剣を掲げたまま歓迎されぬ男たちに告げた。

「直ちに消えよ。さもなくば全員切り捨てる」

男の身体中から噴き出すような剣幕に押され、黒ずくめの男たちは怯んだ様子を見せた。彼らはちらりとエリオルに視線を向けるが、雇い主はただ興醒めしたような表情で男たちを見返した。

それで十分だったのか。男たちは留まるのは危険だと感知して蜘蛛の子を散らすように姿を消した。倒されたはずの男たちも同時に居なくなっていた。

剣を手に使っていたアークは小さくため息を吐きそれを腰に戻すと、主人に顔を向けた。

「エリオル様。その足をお戻しになってください」

アークは冷静に、主人が未だフェリスを踏んだままであることを

諫める。

エリオルはしばらく熟考するようにフェリスを虚ろな目で見つめていると、面倒になったかのようにフェリスを解放した。

アークはしゃがみこんでフェリスが身体を起こすのを手伝う。フェリスは顔を拭って袖口を紅く染めると、服の埃を払いながら立ちあがった。

少年がすっかり立つのを確認すると、アークは床にへたりこんでいるままのリアナの傍に寄った。

「大丈夫ですか」

ふわりと肩に温かいものがかかる。アークが自分のマントをリアナに掛けてくれたのだった。

気遣うような黒い瞳にほっとしておもわず泣きそうになってしまった。それをぐっと堪え、同時に自分の格好を思い出し慌ててマントの前を掻き合わせた。

アークは心配そうにリアナへ向けていた瞳を硬質なものに変えると、エリオルに向かい合った。

「こんな少女にまで手を出すとは、どういっつおつもりですか」

「どんなつもりだと？」

エリオルは乾いた笑い声を立てた。そして忌々しげにフェリスに視線を送った。

「兄弟喧嘩だ。ただの、なんてことない」

「度が過ぎております」

「少し手加減が分からなかったのさ。滅多に喧嘩などしないもので

な。なあ、フェリス？」

アークの視線を受け、フェリスは微かに開いた唇を閉じ、もう一度開いた。

「ええ。珍しいことでした」

兄に従う言葉の無機質な響き。

エリオルは表情は気味の悪いものを見るかのようなものに変わった。

「はっ。お前のそういう所は気持ちが悪いだよッ！！全てが済んだら今までの怒りは無しか？アークが止めたから、糾弾は無し？」

お前の頭の中身はさぞや捻じれ、縛もつれているのだろう。

だがお前がどんな理由にせよそれで良しとして、その女はどうなる？私の事を縊くり殺したいと思っているやもしれん。それでも咎めぬと？」

フェリスは一瞬リアナを見ると、彼女に背を向けた。

「貴方を咎めたいのなら、自分でするでしょう。私が申し上げたい事は何もありません」

まるで何もない空に落とされたように――突き放された気がした。

リアナはぐつと掌を握り締めた。同時に、堪えていた涙が眼の端に浮かんだ。嫌悪感から泣きなくなった時よりも、ずっと身の内側から裂かれるようにつらかった。

胸が熱い、それなのに向けられた視線の冷たさに打ち震えた。

「アーク。後のことは頼む。俺はこれ以上ここには居たくない」

「……分かりました。彼女のことは後で送らせて頂きます」

本当に部屋を出て行くこととするフェリスを、リアナは引き止めたかった。

でも喉はひきつり、心は怯え、伸ばしたい手は震えていた。

きつとフェリスは拒絶する。

分かっていて、どうすればいいのだろうか？

「フェリス」

リアナが引き留める代わりに、呼んだのはエリオルだった。

彼は部屋に入った時のようにソファに座り、冷めた紅茶を口にしていた。

「好き勝手言ってくれたお前に私からも言わせてもらおう」

もつうんざりだ、と言わんばかりにフェリスは返事もせずに廊下に足を踏み出した。

「お前はもう一度、人を殺す」

足がぴたりと止まり、それ以上歩みを進めない。

「なんだと」

冷えた怒りがフェリスから立ち昇る。振り返った双眸は研ぎ澄まされた氷の刃のようだった。

しかしエリオルは笑っていなかった。ただ、淡々と己の思いを口にする。

「その女は、ローシェンにそっくりだからだ」

向けられた青い瞳に、リアナは思わず身をすくませた。

「ローシェンに似て、護るもののためなら自分を犠牲にする。そして犠牲にすることを厭わない。何かを護るためなら、自分を傷つける。

あいつもそうだった。

だから、お前に殺された」

「先生のせいじゃない」

フェリスは小さく言葉を吐いた。

「俺のせいだ。そして俺が殺した。  
だからその贖い<sup>あがな</sup>は俺の命を持ってしてみせる」

「だから」と続け、フェリスは開けたままの扉に拳を叩きつけた。

「俺を貶めるのはやめろッ。俺の命は、あんたの酔狂な遊戯で落とすわけにはいかない。そんなに俺に死んでほしかったら待っている」

「俺は、いずれ死ぬ。それで十分だろう？」

静謐な声が、部屋全体を打った。

エリオルは何も言わずに頭を振った。だが耐えきれなかったかのよう<sup>よう</sup>に口を開く。

「私は、お前のそういうところが嫌いだ。お前の、その、鬱陶<sup>ふさ</sup>しい考え方！」

最後の最後になるまで抗おうとしないその姿勢！見ていると頭にくる！」

「それならばもう俺に関わるな。貴方はただ、自分が国王になることを考えていればいい。なにも案<sup>あん</sup>ずることなく、なにも患<sup>わ</sup>うことなく。」

いや、弟がいることさえ、忘れればいい。そうすればあんたは昔のようになれる」

フェリスはそれ以上何も言うことなく去って行った。  
振り返ることなく、何かを思い残すこともなく――

## 20 闇の中の兄弟(5) (後書き)

やっとなんとか二章終わりました！でも話が中途半端ですみません。

キリがいいし、どうしても二話いつきにupしたかったのでちょっと手間取りました。執筆はどうしても遅い…。

三章もよろしく願います。最初〰半ばくらいまではじめじめしてるかもしれませんが、その分大人組みが頑張ってくれるはず！

## 0 過去と現在の峡谷

月は欠けていた。

それでも部屋の中の明かりをつけていないためか、空からの月光がやけに眩しい。昼間の天気 of 悪さが嘘のようだった。

普段は不用意に窓辺には近寄らないようにしていた。しかし今夜はグラスを片手に窓に腰かけて夜空を見つめたかった。

グラスの中は別に酒でもなんでもない。ただの水。

だが水中に目を落とすとそこにも月がぼんやりと浮かんでいた。

「先生」

ぼそり、と声が漏れる。

言葉にすると身体にそれが染み渡っていくようだった。

「ローシェン、先生……」

水面に揺らめく月のような人だったな、と思った。

浅黒い肌と大柄な体には似合わないような、静けさと穏やかさをもった人だった。決して派手な性格をしているわけではないのに、内面から輝いているように自然と周りを惹きつける人。

それでいて確固たる強い意志と強さを兼ね備えた人。

傍にいと温かく、それでいて甘やかせず、一緒にいるだけで自分が変われるような気にさせてくれる——敬愛すべき師匠。

そして、父であった人。

思い浮かべていた男の姿が、ガラスが割れたように粉々になって

いく。

どうしてあの時死んだのが彼で、自分ではなかったのだろうか。狙われていたのが自分で、どうして殺されたのが彼だったのだろうか。

呪われた自分を呪いはどうしてさつさと自分を殺さなかったのだろうか。死んでいたら先生が死ぬことはなかった。呪いは決して自分を殺さないのだから。周りに不幸を与える存在として、生かすためだというのが。

王族になど生まれなければよかった。

そしたら先生は自分を守って殺されなかっただろう。

生まれた場所を間違えたとすら思える。この不可視の生暖かい檻は自由を思わせ、檻の中で鳥が羽ばたくのを笑ってみている。

「はやく死んでしまいたい……」

窓に片足を乗せてそこに顔を埋める。目にするものは何もいらなかった。

「死んで貴方に会いたい」

きっと彼が聞いたならば怒るだろう。それでも、会いたかった。もうこの場所にいるのは嫌だった。

死んだら天上で会えるなんて、そんな教えを耳にしているからではない。

それでも死んだらきっと会えるという、確信めいたものさえある。それは彼との絆ゆえ。血を超えた想いがあるから。

死ななかったのはただあの日の誓いのため。

血だらけの先生が冷えてもう動かないことを悟ったあの時に心の中で誓ったことがあるから。

誓いは最低で、野蛮で、蔑むべきもので、決して誰も幸せにはしないだろう——それが解つていても、あの日立てた誓いがあるから、苦しみに悶えながらもいまを生きている。

しかしその醜い誓いのために生きている自分に、価値などない。誰かに守られる価値などない。

いいや。

誓いなんてなくとも、生まれた時からこの国に自分の価値などありはしなかった。

それをもっと早く知っていたら、先生は死ななかった——

グラスを持つ手に力を込める。

「くそッ」

目を瞑った先が暗闇ではなく紅くなっていく。

鳥肌が浮かび、胸が痞<sup>つか</sup>えたように軋む。

思い出したくない。

自分が招いたことで忘れたいわけじゃなかった——でも人を「殺してしまった」時のことを思い出さなくなった。

自分を守って死んだ彼は、自分が殺したのと同じだ。

殺したくなかった人を、殺してしまった。

そんな苦しみはもう十分だ。

——顔を上げたフェリスは暗い影を瞳に落とし、空虚を見つめていた。

## 1 大人たちの困惑（1）

長方形の石が積まれた壁に、オクタグラム八芒星を象った銀の装飾が壁にかかっていた。

しかしそれは単なる飾りではない。

現に、それに向って一心に青年が祈りを捧げている。彼が両手を合わせた中にも、同じような形のペンダントが握られている。

「今日も朝日を迎えられたことに、女神に感謝いたします——」

少年と言っているようなアルトの声は、敬虔さを帯び厳かだった。淀みのない祈りの言葉に、彼がどれほど信心深いのかを窺うことができる。

そのまじめな姿にため息をつき、親衛隊騎士コイズ・ヴァレンシユタインは部屋の中に入りかけた格好で立って、半開きのままだった木の扉をこつんと拳で叩いた。  
大きな音に青年が顔を上げる。

「ご熱心なことだな、タクト。でも俺の気配に気がつかないなんてちよつと熱心すぎるぜ」

「先輩」

すでにいつもの後輩だった。

コイズは彼の部屋に入ると腰に手を当てて、膝をついて祈っていたタクトを見下ろした。

「今から城内の巡回だろうが。俺と、お前で」  
「そうでした。す、すみません」

立ち上がったタクトは寝台の上に置いていた騎士の制服の上着を羽織る。

「しかし、熱心な信者だな。俺なんて一週間に一度祈れば多い方だぜ」

ロスネルド国には国教がない。宗教同士の争いの悲惨さを歴史で学んでいるため、異教を排除することは結局国のためにならないという観念ゆえだ。そのためロスネルドは宗教に寛大で、人々は自由に信ずる神を祈ることが許されていた。

しかしだいたい国民は大陸で一番広く信じられている大陸宗教に属している。ロスネルドで一番大きな教会はその宗教の建物だ。王族たちもだいたい大陸宗教に順じていて、国王であるハロルドも時々教会を訪れていた。もちろん、一応とはいえコイズも洗礼を受けている。

しかし後輩騎士であるタクト・ザハロフは違った。彼は他宗教の信者であった。

女神シルフィリアを信じる「フィリア教」。それはロスネルド王国の隣国である「セント＝フィリア法王国」の国教である。八芒星を神聖な象徴として、女神と同等のものとして祈りを捧げている。

隣国で、しかもロスネルド国の近くの国々の中では力をもった宗教であるため、国内でもフィリア教はわりと盛んだ。だからフィリア教の信者は珍しくはない。

それでもコイズの知り合いにフィリア教の信者はいなかったもので、彼にとっては非常に興味のそそられることであった。

タクトは少し困ったように笑った。

「なんだか女神シルフィリアに祈っていると心が落ち着くんです。前の僕のことを…なんていうんでしょうか、共有できるというか。たぶん、昔の僕も女神に祈りを捧げていたんだと思います。祈っている間は、僕が僕であると、感じられるんです」

コイズは言われてまずいことを言ったか、と焦った。タクトは幼い頃の記憶がなく、いま彼が父と慕っている人に拾われていたのであった。

「悪い…」

「気にしないでください。僕はいまの生活がとても好きですから、記憶がないことを悲しいとは思いません。

ただやっぱり、気にはなりますから。唯一の手がかりがシルフィリアの八芒星のペンダントですし、フィリア教には思うところがあるんですよ」

「さ、いきましようか」とタクトは剣を腰にさしてコイズを促した。コイズは頭をがしがしと掻きながら青年の後に続いて部屋を出る。

二人は宿舎を出て中央塔に向かった。入口の同僚に声を掛けて扉をくぐる。

コイズは大きな体を前かがみにして腕を擦る。すっかり冬になっていて暖のとれない場所では寒さが身に染みて堪らない。

「さみいなー。外での演習はきついよなあ。カメみたいに、ベッドでブランケットにくるまっていたいぜ。一日中暖炉の前でごろごろしてえ」

「もう、なに年寄りくさいこといつてるんですか。先輩まだ若いんですからしゃきしゃきしてくださいよ」

「年のこと言うなよな。俺はまだ嫁さんさえもらってねえ」

「先輩は結婚するなら姐さん女房がいいと思いますよ」

「恋人ならナイスボディの姉ちゃんがいいけど、奥さんにするなら若くて可愛い奥さんの方が理想だけどなあ」

「贅沢言いますね。女性に怒られますよ。」

でも先輩はお尻を叩いてくれるようなひっぱってしてくれる女性の方が良いと思いますよ」

「なんでだよ。嫁が鬼嫁だったら楽しい新婚生活パアじゃねえかよ」

タクトとそんな話をしていると見知った顔を見つけた。

どこかの部屋からシーツを外に出している侍女に声をかける。

「おー、ローズ。ご苦労さん」

城内の巡回をしていれば必然的に城で働く使用人たちとも顔を合わせる機会が多い。もちろん侍女ローズの場合はフェリスの部屋に足繁く遊びに行くコイズには、それとは関係なく知り合いだが。

ローズはコイズたちに気がつくと手にしていた籠を床に放り投げた。

タクトと揃って目を瞬かせていると、彼女が眉を吊り上げてスカートの裾を持ち上げてこちらにやってきた。

「どうしたんですか？」

タクトが目の前までやってきたローズに尋ねるが、彼女はコイズを親の敵のように睨みつけた。

「どうした？それはわたくしの台詞ですわ！どういうことなのか？まったく」

「おいおい。何怒ってるんだよ。俺が何かしたって言うのかよ」

するとなぜかタクトが不安そうに見上げてきた。  
まるで「ああ、先輩の事だからなにかやつちやつたんだろうな」  
的な視線で。

「よく分からんが俺は無罪だ！」

「それならよくも二週間近くあの偏屈王子を放置してましたのねっ」

「ああ？」

コイズは思考を巡らせた。

「……フェリス王子のことか？」

確かにここ最近ではフェリスに会ってはいない。国王の生誕祭まで一か月を切っていて、その準備が常務の間にあつたし、二度ほど王子の部屋に出かけた際は、御付きのアルバートに入室を断られていたからだ。そういうことは以前にもあつたので特に気にはしていなかったが。

ローズは白い肌を朱に染めると、まるで子供のように胸元に当てていた両手をぎゅっと握りしめた。

「そうですね！あの、頑固で、融通のきかない、最低王子のことですわ！」

もともとローズは相手が誰であれ容赦のない形容の仕方をするのだが、フェリスに対してそこまで怒っているところは今まで見たことがなかった。

「ん？エリオル王子じゃなくって？フェリス王子？」

ローズの第一王子への怒りっぷりなら目にしているので彼女は何か勘違いでもしているのかと思ひ尋ねてみるのだが、「フェリス王子に決まっています！」と怒られてしまった。

「じゃあそのフェリス王子がどうしたってんだよ」

「どうしたもこうしたも！もうわたくし、リアナが可哀想で見えていられませんわ」

「リアナあ？わけわかんねえぞ。なんだ、王子に振られてもしたのか？」

冗談だったのだが、ローズに本気で睨まれた。  
肩身を狭くするコイズに代わってタクトが尋ねる。

「リアナがいったいどうしたんですか？最近王子と結構仲良くやっているみたいでしたけど」

「そうなんですのよ！フェリス王子がなんとなーくではありますけど、リアナを受け入れてくれたかと思つてた矢先つ。リアナの部屋の立ち入りを一切禁じたんですのよ！近寄ろうものならなんかもう、心底冷たい目で睨みつけて来て……リアナ、落ち込んで元気がないんですから」

思わず問いかける。

「何かあったのか？」

「分からないんですのよ。二週間前ほどに二人で噴水を見に行くつて出かけて、帰つて来たと思つたらフェリス王子のご機嫌がすごいことになつてて。」

わたくし用事がなければ近寄りたくありませんわ。アルバートは毎日困り顔でおろおろして、役に立ちやしませんし」

「原因について、リアナに聞かなかったんですか？」

「それが……あまり話したくないようで。でも『フェリスに嫌われた』っておっしゃってたから、喧嘩をしたんじゃないかって思いま  
すけど……」

フェリスたちはコイズからすればまだまだ子供。反発したり意見  
が合わずに酷い喧嘩をすることもあるだろう。

子供の喧嘩に大人が口を挟むのも無粋である。

「ほっときやいいんだよ。そのうち仲直りするって」

「まあ！リアナと王子の様子を見ていないからそんなこと言えるん  
ですわ。」

一度ご覧に行つて下さいまし。悠長なこと言つてられないんです  
からっ」

ローズはコイズも役に立たないと判断したらしく、踵を返し背を  
向けて放り投げたままだった籠を持ち直しに行ってしまった。

「ローズさんの様子ではただの喧嘩じゃなさそうですよ。一度見に  
行きましょう、先輩」

「ん、まあな」

タクトに促され頷く。なんだか心配になつてきた。

コイズとタクトは予定を変更して、早めに東塔へと向かった。

## 2 大人たちの困惑（2）

コイズとタクトは廊下の角から顔を半分覗かせ、傍から見れば「アヤシイ」の一言につきることをしていた。

視線の先にはフェリスの部屋の前の廊下が続いていて、その王子様の部屋の前には一人の少女が項垂れたように扉にもたれかかっていた。少し前から二人が見ているにもかかわらず、リアナはその間ずっと扉の前に立ったままだった。

リアナの表情は覇気がなくて暗く、疲れているようにも見えた。

「具合悪いのかなあ。寒い所にずっといたら身体悪くしちゃいますよね」

「真冬に部屋の外に放置って。あいつはサドか」

好き勝手なことをいつているものの、コイズたちは単純な喧嘩ではなさそうだということを、少女の様子から見る事ができた。

「先輩！ここはいつもの無神経さで王子の所に特攻して、お節介にも原因をつきとめて、王子に怒られながらも二人を仲直りさせてあげるべきですよっ」

「お前……せめて少しは俺を褒め称えろ。そんなんじややる気だねえよ」

無神経なのはお前だと心の中でタクトに言ってやりながら、コイズはもう一度扉の前のリアナに目を向けた。

（やる気ないとか、言ってる場合でもないか）

「タクト、今日の仕事はお前に任せた。隊長にはばれないように頼む」

「うーん。隊長にばれないようにするのは難しいですけど…努力します」

タクトは人差し指をビシッと突き立てると、「そのかわり」と続けた。

「仲直りとは言わなくても、リアナを元気づけてあげて下さいね」

後輩の少し偉そうな態度に苦笑しつつ、コイズは頷いた。

「りょーかいッ。お前さんこそよろしくな」

背中を叩いてやるとタクトは嫌そうに身を引きながら、その場を離れて行った。

それを見送ると、コイズは角からひょいと身体をのりだして、わざとらしく靴音を鳴らしながら不動のままのリアナに向かっていった。

リアナはぼーとした様子だったが、途中で気配に気が付いたのかビクッと身体を震わせ、顔を上げざまに腰に手を当てた。

「おいおい！俺だよ！このコイズさんの顔を見忘れたとは言わせねーぞ？」

剣を抜きかかっていたリアナをすぐさま止める。

いつもと違う愚鈍な行動にコイズは微かに口端で苦笑した。

「ごめん、コイズ。ちょっとぼおつとしてて。……どうしたの？」

リアナは自分の行動を恥じたように顔をそむけ、視線だけをコイズに向けた。

「どうした？そりゃ、そのままオメーに返すぞ。んーな所で何してんの？」

「えっと…」

リアナは弱り切ったようにうろたえた。

「別に、ちょっと外の空気吸いたくなって思って」

「それでずーっとそこに突っ立ってるってわけか？護衛にしちゃあ休憩が長すぎじゃねえか」

そう言うリアナは顔色を変えて目を鋭くさせた。どうやら気に障ったらしい。

「コイズに関係ないでしょう。仕事に戻ったら」

「残念でした。俺はフェリス王子様に話があるんです。お前も休憩はそれくらいにして部屋に戻ろっぜ」

「フェリス」という言葉に反応を見せるが、リアナは黙ったまま頭を力無く振った。

「……わたしはもうちょっと外にいるわ。コイズがいるなら安心だし……」

コイズはべちん、と掌をリアナの顔に押し付けた。

「ちょ、っと！なにするのよー！」

「顔つめてえなつ。……部屋に入って暖かくしろ。そんなんじゃ体調崩す」

手をどかしたリアナはコイズの視線を受けて言葉を詰まらせた。

「フェリスはお前が倒れたら自分のせいだと思っくんじやないのか？ あいつは“そういう”奴だよ。だから大人しく部屋に入って、身体を温めろ。体調管理はどの仕事でも第一だぞ」

ぼんぽんと頭を軽くたたくと、リアナは俯いた。

「……入れてくれない……」  
「ん？」

良く聞き取れなかったのでコイズが身をかがめる。リアナの唇は震えていた。

「部屋に入れてくれない。フェリスはわたしのこと——近づかせてくれない。嫌われちゃったの。だから、無理なの……」

「……なんで嫌われたって思っくんだ？ 喧嘩、したのか？」

「してないよ。悪いのはわたしだもの。だから、喧嘩じゃない。わたしがフェリスに嫌われるようなことをした。それだけ」

「何をしたって言っくんだよ」

リアナは頭を振るだけで何も言わない。  
言いたくないのだろう。

コイズは部屋をちらりと見ると、慰めるようにリアナの頭にもう一度触れる。

「入ろうぜ。俺があいつにがつんと言ってやるからさ！」

「でも……」

「悪いことしたって思うなら、謝りたいんじゃないのか？それなら今がそのチャンスだ。行こうぜ？」

見上げる琥珀の相貌には迷いが見て取れた。だからコイズは元気づけるように肩を叩いた。

「怖いなら手をつないでやるぜ？俺様のエスコートはちょっとやそつとじゃ受けられないんだからな」

そう言つて触っていた頭をぐしゃぐしゃと乱すと、リアナは嫌がつて手を払った。しかしわざと懲りずに髪の毛をぼさぼさにさせると、さすがにリアナは眉を釣り上げた。

「なにすんのよ！ああもう、すごく変になっちゃったじゃないっ」

リアナは腰のポーチから鏡を取り出して髪を整える。その姿はともじやないが王子の護衛をするような少女には見えない。剣を振るつて自分より大きな男たちをなぎ倒すような少女には思えない。

リアナは普通の、十六歳の女の子だった。それを今更ながらにコイズは思わされた。

「俺的トレンドじゃあ、年末はその髪型が女子の間で流行ると思うぜ？」

「そんなわけないでしょうが！なに考えてんのよまったく」

「馬鹿言っちゃいけねえ。男の俺がいつてるんだから、少なくとも男受けはいいはずだ」

「ふん。コイズの主眼なんて怪しすぎるわよ。みんなに笑われて終わりね」

「ひつでえ。なんでみんな俺の言うことに対して辛口ばっかなんだ

よ」

「コイズだからでしょ」

そこまで言うと、弱々しかったがリアナが笑った。頬の強張りは少しだけ溶け、口元は緩んでいた。

コイズはこっそり安堵のため息をつく。笑えるなら、まだ大丈夫だ。

「それで、手はつなぐのか？つながないのか？」

茶化すように訊くとリアナは苦笑した。

「気持ちだけでもらっておくわ。ありがとう、コイズ。」

……もう一度、フェリスと話をしてもらえるように頑張るね」

少しだけ輝きを浮かべた瞳に、コイズは優しい眼差しを浮かべて頷いた。

ただし、その時コイズが笑えたのは、まだフェリスに会っていなかったからだが――

## 2 大人たちの困惑（2）（後書き）

毎度のことながらの超不定期更新で申し訳ありません。

話の細かいことを考えると自然と執筆にストップがかかります。

それも考えなしに登場人物を増やしすぎたせいです。

護衛と王子の話を進めたいのに先に書かねばならないことが山積みで……

無計画さに涙が出ます。読者様方には稚拙な作者で大変申し訳なく思っております。

しかし先を考えると容易く終わりそうにはない話の展開になりそう。

……頑張りますね！

### 3 消えぬ悔恨

開かれた、扉の先。

二ヶ月近く訪れていたその部屋は廊下よりも暖かった。

しかしリアナの身体は酷く冷たかった。指先はかじかんで、膝は赤くなっている。

目の前を歩くコイズの背中がなければ、たぶん部屋の主の許しを得ずに入ることではできなかったと思う。

リアナは、二週間前のことを思いだしていた。

あの日——エリオルの部屋から黒ずくめの騎士、アークに送ってもらい部屋に辿り着いたリアナは、部屋に戻るよりも先に、フェリスにどうしても会いたかった。

フェリスが拒絶することは分かっていた。向けられた冷たくてしかたのない瞳はそれを物語っていた。

それでもリアナは謝りたかった。

選んだ選択肢はたしかに間違っていたのだろう。それでもリアナにはそれが自分に出来る精一杯の事だと思った。自分の傲慢な考えで、我儘だったことも知っている。それでもリアナが選べる選択肢はそれだけだった。

しかしフェリスにあったのはリアナの選んだ選択肢だけではなかっただろう。彼は選べた。だがそれをリアナが選ばなかった。だからフェリスはきつと——怒ったに違いない。いや、失望したのだろう。もともとフェリスがリアナに抱いていた期待があったとは思わ

ないが、それでも彼はリアナを許さないだろう。

だからこそ謝りたかった。フェリスが思い望む選択肢を選ばなくてごめんなさい、と、そう言っただけ許しを請いたかった。どんなにみっともなくとも、リアナは微かに震える握りこぶしを胸に押さえ付けてそう思った。

そのままフェリスの部屋に行こうとしたリアナを引き留めたのは、アークだった。彼はリアナもフェリスもお互いに疲れただろうから、明日にした方がいいと言った。

確かにリアナは疲れていた。そしてフェリスも同じだろう。リアナはその助言に従ってフェリスに会うことを諦めた。心のどこかで明日の方がフェリスの気持ちも落ち着いているだろうと思ったのかもしれない。

だけどそれは間違っていた。リアナは次の日、すぐにフェリスに会わなかった事を後悔した。

なるべく普段通りを装ってリアナはフェリスの部屋に入ろうとした。しかしその前に扉からアルバートが顔を出した。

アルバートに挨拶をしたリアナは、青年の困り切った様子を不思議に思った。

「どうしたの？」

「あの……申し上げにくいのですが……」

一度言い淀んだ後、アルバートは口を開いた。

「フェリス様が、リアナ様をお部屋に通さないように、とおっしゃっております……」

半ば予想していたことだった。リアナは素早く返事をする。

「フェリスがなんと言おうと、会わせてもらおう。どうしても言いたい事があるから」

「ですが、今のフェリス様にはお会いにならない方がいいかもしれません」

「どうして？」

アルバートは目を伏せた。黒いまつげが影をつくる。

「今のフェリス様では貴方を傷つけるでしょう。ですから、私の方からお会いになられることは控えて頂きたいと思います」

顔を上げたアルバートの顔は見たことのないほど硬い顔をしていた。

その態度に一瞬ひるんだリアナだが、それでも下がらなかった。

「酷いことを言われる理由が私にはある。だから当然の責苦を受け入れるわ。お願いだからどいて」

「リアナ様、いけませんっ」

横をすり抜けようとするリアナをアルバートはとどめようとするが、彼が手を伸ばしたときには既にリアナは部屋の中にいた。

「ダメです！」

アルバートを振り払ってリアナはフェリスがいるであろう奥の部屋をノックもしないで開けた。

フェリスはいつものように机の前に座っていた。いつものように紙束と書物に目を通してながら、言葉を発した。

「アルバート」

リアナの真後ろに居たアルバートが緊張した声で返事をした。

「俺が言ったことが分かっているなら、早く済ませろ」

「し、しかし」

「集中したいんだ。いつまでもそんなところに居られると迷惑だ」

アルバートがリアナの肩に手を当てる。そして耳打ちをするように小さな声で言う。

「リアナ様。部屋を出ましょう」

リアナは分かった。フェリスはあくまでリアナを無視するつもりなのだ分かった。

アルバートの手から離れて、リアナはフェリスに近寄った。

「フェリス。貴方に聞いてほしいことがあるの」

発した声は思ったよりずっと掠れていた。フェリスは聞こえないかのように目線を文章に落としたままだ。それでも昨日のような眼差しをむけられないから、リアナは続きを言えたのかもしれない。

「ごめんなさい。あなたの気持ちに沿えなくて本当に悪いと思ってる。ごめんなさい——」

リアナは深く頭を下げるが、フェリスは何も言わない。ページを

めくる音だけが部屋に響く。

どれだけ床を見続けていただろう——やがてフェリスが立ち上がった気配が分かった。

「どこにいかれるんですか？」

はらはらとしながらリアナの後ろにいたアルバートの声がそう言う、フェリスは淡々とした声で返す。

「お前が俺の言ったことをしないから、部屋を出て行くだ」

リアナは顔を上げて上着を手にしているフェリスを見た。

ちらりと一瞬交差された瞳に冷たさはないが、感情を読み取ることはできない。だが無機質な瞳に思わずたじろいだ。

それでもリアナはフェリスを引き留めようとした。

「待つて。わたしの言うことを聞いて」

リアナとアルバートの横を通り過ぎようとするフェリスの腕を掴んだ。その瞬間、勢いよく手を払われた。

あまりに強い力だったため、リアナは思いがけず床に倒れた。

アルバートが慌ててリアナの横にしゃがみこむが、リアナは呆然としたままフェリスを見上げた。

彼の瞳には感情が浮かんでいた。紫の瞳には剣呑さが拡がっていた。

「俺に触れるな」

突き刺さる視線がリアナの言葉を床に縫い付ける。何も言えず、何もできない。

「触るな、そして俺の視界に入るな。近寄るな。今後一切、お前の姿など見たくない」

闇に沈む紫の瞳には嫌悪が浮かび、リアナの一切を否定していた。否定し、また拒絶をしていた。

そしてフェリスは、リアナを傷つける言葉を放った。アルバートでさえ、驚愕してきつい視線を向けたほどだ。

「――」

向けられた言葉に込められた気持ちは、いったいなんなのだろうか。

嫌悪というには優しく、憎悪というには甘すぎる。もつと複雑で、希望の見えない哀しい言葉。似たようなことを言われたことはあるが、しかし全く異なる言葉。それがリアナの心の中を旋回して留まることを厭わない。

アルバートが慰めの言葉をくれても、リアナは立ち上がる気力を失っていた。

フェリスは行ってしまった。リアナが声を出すことも許さないかのように、立ち去った。残された彼の部屋は酷く寒い。寒くて、冷たかった。

『消える』

ぼたりと、涙が散った。

なぜそんなにも傷ついたのかもわからずに、リアナはただ床に座り込んだまま涙を流した。

## 4 空の眸

リアナはコイズの背中に隠れていた。部屋の奥に行くにつれて足は重くなり、コイズの大きな背中を片手で掴む。

コイズは安心させるかのように後ろを振り返って笑った。

「コイズさん、あの……」

一番奥の部屋から来客に気が付いたアルバートが出てきて、困惑した表情でリアナを見た。

「リアナ様はこの部屋にはお通しできないのです」

「フェリス王子が入れないように言ってるんだろ？ でもあいつにはそんな権利はねえぜ。陛下からの仕事を全うするのがリアナの役目だ」

「ですが」

「このままにしておくわけにはいかねえだろ？」

コイズはまっすぐにアルバートを見据える。

躊躇をみせたアルバートは暗い表情をしたまま黙り込んだ。しばらくの間そうしていたアルバートだったが、ちらりと後ろの部屋に視線を向けるとやがて小さく頷き、一步下がって扉の前から退く。

リアナはコイズに腕を掴まれて、彼に先導されるように中に踏み入れた。

そこに、当然ながらフェリスはいた。

彼はソファに背を預けて目を瞑っていた。机の上に中身の入ったカップが置いてあったが、湯気の出ていない紅茶は口をつけられて

いないのか、たつぷりと注がれたままだった。

「また遊びにくるのが遅くなって悪いな。年終わりの月はなにかと忙しくて時間がとれないのよ」

まるで寝ているかのように微動だにしなかったフェリスだったが、コイズが声をかけると目を瞑ったまま口を開いた。

「無理するくらいなら来なくて結構。貴重な時間をこの部屋に来ること以外のことには費やせ」

「相変わらずつれないお言葉ですねえ。そう言われるとますます来なくなるぜ」

コイズはフェリスの向かい側のソファに勝手に座ると、その隣にリアナに促した。

立ったままのリアナはちらりとフェリスを見たが、すぐに俯いてしまった。フェリスは何も反応を見せず、ただソファに身体を埋めている。

「いいから座れよ。王子と話をするんだろ？」

先ほどよりも強く言われ、リアナはもう一度フェリスを見る。

フェリスが立ち上がる気配はない。しかし今、彼が何を思っているのか全く分からない。

「リアナ」

コイズが勇気づけるように名前を呼ぶ。リアナは息を大きく吸い込むと、意を決してソファに座ろうとした。

しかしその時耳を掠めた言葉に、思わずその場を後ずさった。

「や、やめて」

リアナは顔を真つ青にさせた。足がまるで棒にでもなったかのよう  
うに感じられ、絨毯上を引きずってソファから離れた。

「やめてっ。言わないで！」

リアナの懇願に与えられたのは、たった一言だけだった。

「声も聞きたくない」

リアナは琥珀の瞳に涙を浮かべると、勢いよく部屋を飛び出した。  
コイズによつて微かに宿った光は濡れた瞳になく、絶望と哀しみが  
決壊していた。

「待て！ リアナ！」

慌てて引き留めようとしたコイズの声は、その時のリアナには聞  
こえなかった。

「先に言っておくが、お前が何をしようとも無駄だ」

リアナが出ていった方を見つめていたコイズはその言葉に振り返る。

いつも陽気な男には珍しく、顔には静かな怒りが浮かんでいた。

「声も聞きたくない？　いくらなんでもヒドイ言い方だな。そう自分で思わないか？」

フェリスはそこでやっと目を開けた。

紫の瞳が思っていたよりも凜いでいて、コイズは眉をしかめた。

「俺はもとよりあいつと仲良くしたいわけではなかった。嫌われるくらいがちょうど良いと思うが？」

フェリスは鼻で笑う。それは自嘲じみていた。

「リアナが傷ついてるって分かるだろうが！　お前は傷つけてたんだよ、言葉で、あの子の心をッ」

「だからなんだ」

心底どうでもよさそうに、フェリスはそう言い放った。

その態度にコイズはかっとなって座ったままのフェリスを殴り飛ばした。

フェリスが王子であることなど頭から抜けていた。腹立たしくて、殴らずにはいられなかった。

派手な物音にアルバートが駆け込んできた。床に倒れこんだフェリスは、気が動転しておろおろしているアルバートを押し退けて立ち上がると、唇に渗んだ血をこぶしで拭った。

「相変わらず他人に同情しやすい奴だな。騎士にお人好しは、過ぎると身を滅ぼすぞ」

「ぐだぐだ言ってねえで今すぐリアナに謝ってこいよ！」  
「コイズ」

トーンの変わらないフェリスの声に、コイズは一瞬唇を止めた。

「一生の傷と比べれば、一時の痛みなどいずれ忘れる。今の苦しきなど、些細なことだよ」

細められた瞳に、コイズは既視感を抱いた。それと同時に自分の胸から温度が引いていくようだった。

「……俺がいない間に何があったんだ？」

聞くだけ野暮なのかもしれない。コイズには解ってしまったのだから。思い出した過去の瞳に、思い当たる理由があったのだから。それでも、聞かすにはいられなかった。

フェリスは答えない。過去と同じように、コイズを見上げていた――  
――風いだ瞳ではなく、がらんとする瞳で、コイズを見つめていた。

「ローシェンに関係あるんだな」

その名前に一瞬空洞に色が満ちるが、こぼれおちたかのようにすぐ消えた。

それでもまごうとなき肯定。

耳の奥で幼い子供の声が甦る。

のろわれてるんだ

なんでぼくをころしてくれない

いやだいやだいやだあああ

……してやる、絶対に……ゆるさない……

腕の中で枯れた涙を流しながら、少年はずっと呟き続けた。あ  
るいは自虐の言葉を。あるいは恨みの言葉を。

心を壊してしまったように、周りなど目に入らないかのように、  
自分の中に籠って全てを遮断した少年。

その姿が、目の前のフェリスに重なった。

——リアナに対して酷いことを言ったフェリスを怒る気持ちは  
もうなかった。

コイズに今あるのは悔しさだけだ。

なにもない瞳を見ているのがつらくて堪らなくて、コイズは手を  
伸ばしてフェリスの顔を自分の胸に押し付けた。

「お願いだからその眸は止めてくれ」

フェリスの過去に自分がしてやれることがなくて、もどかしくて  
悔しくて、コイズは唇を噛み締めた。

知……っていたから。

だから、コイズは自分がしたいことができなかった。知っていた  
から、フェリスが抱く気持ちを全て否定することができなかった。

（過去じゃなくて、現在<sup>いま</sup>を見るよ）

そう言葉にすることができなかった。

8年前と同じように胸にフェリスを抱いて、コイズはただただ無力に打ちのめされた。

## 5 騎士からの誘い

『また同じ事を言われたいのか』

残響する声に胸が苦しくて、目の前のシーツを握りしめた。  
部屋の中は真っ暗で、月の光の届かぬ夜だった。

フェリスに問われた言葉に、リアナは震えて拒否した。  
「消えろ」という言葉を、フェリスの口からもう一度聞く勇氣は  
一縷もなかった。

だから、逃げた。自分から離れる真似はするまいと思っていたの  
に、怖くなって逃げた。

「弱虫」

いつまでたっても強くなれない自分が嫌になって、乱暴に顔をシ  
ーツに押し付ける。

「強くならなきゃ……また同じことを繰り返しちゃう……」

わずかに顔をあげる。気配のないとても静かな室内がに思わず身  
震いをした。自分がたったひとりなのだと、強く感じた。

リアナはフェリスに謝りたいと思っていた。今も思っている。だ  
が自分の選択肢に後悔はしていなかった。

だからこそ、向けられる嫌悪に屈せぬ強さが欲しいと思った。失  
うくらいなら、嫌われる方がずっと良いに決まっている。

しかしそう思っているにも、フェリスの言葉を思い出すだけで苦し

くてたまらなくなる。

胸に手を当てて、リアナは眠れぬ日を今夜も過ごす。

「リアナ様？」

ハツとして顔を上げると、あかがね色の髪的女性がリアナを見下ろしていた。

王妃ソフィアの第三騎士、ミュナーだった。

リアナはまだ薄暗い早朝に、庭園の薔薇の前のベンチでぼんやりと座っていた。どうしても眠れず、部屋に居るのが嫌になり、寝台を抜け出していたのだ。

冬の早朝は一日で一番寒い。しかしリアナはその肌を刺す痛みもあまり気にならなかった。

「こんな寒い所でどうしたんですか？」

「気にしないでください」

ミュナーは勤務中なのか、はたまた今からソフィア王妃のもとに行くのか、帰りなのか分からないが、やはり騎士服に身を包んでいた。しかしいつも引き締められている表情には気遣う様子が見られなかった。

リアナはなんともないと分かってもらうように、勢いよくベンチから立ちあがる。

「目が覚めちゃったので薔薇を見に来たんです」

ミュナーが遠慮気味にリアナの手を取った。彼女の掌はとても熱かった。

「長い間ここにいられたんですか？」

どうなのだろうか。リアナでは自分で分からなかった。とりあえず、リアナは首を横に振った。

「さつき来たばかりですよ。それより、ミュナーさんこそこんな朝早くにどうしたんですか？」

何か言いたげな様子なミュナーだったが、幸いな事に彼女はリアナの話に合わせてくれた。

「いまからソフィア様の所に参上するところです。今日は後宮の早朝巡回の担当も受け持っていますから」

「そうなんですか。朝からご苦労様です」

頭を軽く下げて、それからリアナは「部屋に戻ります」と告げる。いつまでも同じ場所にいたら不審がられるだろうと思った。

ミュナーは去ろうとするリアナを呼んだ。振り返ると、ミュナーがはつきりとした声で言う。

「リアナ様、今日はお暇な時間はありませんか？」

「え？」

「やはりご予定がありますか？」

「えっと、夕方の後なら大丈夫ですけど……」

曖昧に返事をする、ミュナーは思わぬ申し出をしてきた。

「よかったらその時間に私と図書館に行きませんか？」

リアナは目を丸くした。まさかミュナーにそんなことを言われるとは全く予想していなかった。

「でもミュナーさん、仕事は……」

「今日は早朝出勤なので、夕方には終わるんですよ。もちろん、リアナ様の気が進まないなら断ってください。どうでしょうか」

ミュナーの顔を見ても、どういう意図があるのか分からなかった。ミュナーのような人がリアナを誘うのは不自然にさえ思えた。

しかし悪意がないことはミュナーの瞳を見て分かる。とてもきらきらしていて、澄み渡った目をしていた。

「やっぱり、嫌、ですよね」

どこことなく——まるで元気を無くした子犬のようなミュナーにリアナは驚いた。

普段は凛々しく格好良く目に映るミュナーだが、目の前の彼女は容姿の美しさよりも可愛らしさを強く感じさせた。

「そんなことはありません！あの、わたしも本を借りたいと思ってたんですけど、図書館に行ったことなかったの、よかったら案内し

てもらえませんか？」

「それならぜひ一緒に緒させてください。図書館の司書とは懇意にしているんです。きっとお目当ての本がすぐに見つかりますよ」

リアナはミユナーと待ち合わせを決めると、少しだけ気分が軽くなったことを感じた。

コイズは黙々と朝食をとっていた。

いつもなら大あくびをするか朝から仲間の騎士にしゃべりかけているかのどちらかだが、今日は一人で、不気味なほど静かにパンやワインナーを口に運んでいた。

「コイズのヤツどうしたんだ？ 病気かなんかか？」

「病気なら食事しねえだろ」

「何か悩み事でもあるんですかね？」

「コイズに悩み事って……女に振られたとか、か？」

少し離れたところでひそひそと同僚たちが好き勝手なことを言っていることさえ気が付いていない。

同僚たちの一人が、ちょうど食堂にやってきてなにをしているんだろうと人垣を見つめていた小柄な後輩騎士に気がつき、詰め寄ってきた。

「タクト！ お前昨日コイズと巡回一緒だったよな。元気のないあい

つに何があつたか知ってるか？」

タクトは首を横に振った。元氣のないコイズを見て驚いているのは自分の方だ、とタクトは心中で呟いた。

昨日のコイズは、元氣のないリアナを元気づけるために巡回をさぼった——というより、タクトがそう勧めたのだが、その当の本人の不気味な静けさは一体何なのだろうか。

とても幸運なことに隊長にコイズのサボりはばれなかった。だからそれは関係ないはずだが。

「誰か本人に聞いてこいよ」

「あんな雰囲気のコイズ先輩に声なんかかけられないっすよ！」

「俺らが邪魔したら叩き切られたりしませんかね？」

「あいつはそこまで極端じゃないと思うが……」

「あの、僕が聞いてみますけど」

そうタクトが言うと、同僚たちは一斉にタクトの背中を叩いた。よろめいたタクトに「勇者だ！」や、「無事の帰還を願う！」などといったふざけた言葉がかけられる。

タクトは苦笑いし、それからコイズと向かいの席にわざとらしく座った。

「おはようございます、先輩」

「ん、ああ。タクトか。うんうん、おはよう」

いつもとは違う反応にタクトは眉をしかめる。重症かもしれないと思った。コイズは一瞬上げた視線を皿に戻し、レタスをフォークでつついていた。

「先輩、今日はいつもより静かじゃないですか？」

「そうか？俺はいつも通りだけど」

「それがいつも通りなら、隊長は喜ぶと思いますよ」

ここでコイズは「てめえ。遠まわしに嫌味言つてんじゃないやねえよ」と返すはずだ。そうだと思つていのに、先輩騎士は気づかなかったのか、

「んー？そうか？」

と返事をした。

タクトは立ち上がった。それはもう、勢いよく。

「先輩！医務室行きましょう！！疲れてるんです、先輩は、すつつごく疲れてるんです！休めば治りますから、怖がらずに僕と一緒に医者さんにみてもらいましょう！」

腕をつかむタクトを、コイズは目を瞬かせて見上げる。

「どうしたんだ？俺はいたって健康体だが……」

「身体は大丈夫でも、精神的に病んでるんです！貴方が気付かないだけです！さあすぐに行きましょう！」

「——あのさ、タクト」

声色の変わったコイズに、タクトは動きを止めた。コイズは沈んだように、目を伏せた。

「ごめんな」

「え？」

「俺は、リアナを元気にしてやれねえ。どうしたって、俺はフェリスのことを責められないんだ」

「先輩？」

コイズが何を言っているのかよく分からなかった。だが、詳しく聞くことを憚れるような雰囲気、タクトは言葉を飲み込んだ。

## 6 図書館にて（1）

フェリスは一日中部屋の外に出ることはなかった。だから、扉の前に居たりアナは彼に会わなかった。

今ではフェリスと顔を合わせることも怖い。

彼がどんな表情を浮かべるのか、どんな言葉を発するのか、想像するだけで怖かった。

だけれども、やはりリアナはフェリスの傍にいらしてほしいと思った。

傍にいないければ護れないから——その気持ちだけじゃない。ただ彼の傍にいたいと思った。今ならば、フェリスの頭にくる言葉さえ笑って聞き流せる気さえする。

なぜなら腹が立つ気持ちと同時に、リアナはその時間を「楽しい」と思っていたからだ。

兄弟や従兄弟たちとの喧嘩を思い出し、懐かしくて楽しかったのだ。

それでももうフェリスと言ひ合うことはできない。まともな会話すらできない。フェリスが拒絶し、リアナが恐れるのならば、尚更だ——それでもリアナは数か月程度の毎日が懐かしくてたまらなかつた。

相反する心に、リアナは何もできず、ただ時間を漫然と過ごした。

「リアナ様、お待たせしました」

ミユナーと待ち合わせをしたのは、中央塔の食堂の前だった。

食堂と言っても、基本的に使用するのは侍女や侍従、使用人たちである。使用人の中にも位の高い貴族がいたりして、そう言う人たちは自分の部屋か、もう少しこじんまりした格式のある場所で食事をするらしい。

しかしリアナはともかく、ミユナーは騎士である。まえにタクトに聞いた話だが、騎士は宿舎の食堂で食事をするのが普通らしい。食事は団結を強くする、とコイズが零していたともタクトは言っていた。

ただし、女性のミユナーが男性と同じ宿舎に寝泊まりしていると、は思えないので、もしかしたら彼女たち女性の騎士は別の場所で食事をしているのかもしれない。それが中央塔の食堂であっても可笑しくはない。

「リアナ様は食堂でお食事されたことはありますか？」

ちらりと食堂の中を見ながら、本を抱えたミユナーがそう尋ねた。

「いいえ。わたしはいつもローズ…侍女の方が食事を用意してくれるので来たのは初めてです。ミユナーさんはよく利用するんですか？」

「はい。私たち女の騎士は、後宮に部屋をお借りして寝泊まりして

いるんです。ですから、食事は後宮でとることが普通なのですけれども、私は家から城に通っているのです、時間のないときはこちらの食堂を使わせてもらっているんです。

「この食堂はだれが利用してもいいですし、早くて、でもとっても美味しいんですよ」

なぜミュナーはわざわざ家から通っているのだろう、とリアナはひっかかったのだが、そういう騎士もいるのだろうと思った。

「もしお食事がまだなら入ってみますか？」

「あ、いいえ。食事の準備をしてくれる人がいますから……。でも今度行ってみます。みんな楽しそうですし」

食堂の中は色んな人が楽しげに談笑しながら食事をしていた。見ているだけで、こっちも楽しい気分になる。

「それでは図書館へ行きましょうか。廊下の先を出て、少し行ったところにありますからすぐに着きます」

ミュナーに先導されてリアナは後に続く。

そこでリアナは思っていたことを言ってみた。

「ミュナーさん。わたしのことはその、普通に接していただけませんか？」

「普通に、ですか？」

振り返ったミュナーがきょとした目を向けた。

「えーと。普段ミュナーさんが振舞っている態度で接していただければ良いというか……」

皆まで言わずに、ミュナーはリアナが言おうとしたことを察したらしい。

「リアナ様がよろしければ、そうさせてもらいますけれど」  
「いいですいいです！その方がうれしいですッ」

慌ててそう言ったリアナを見て、ミュナーが微かに口元を緩める。

「それでは改めて――」

ミュナーが手を差し出す。

「よろしくね、リアナ」

騎士としてではなく、ミュナーが笑った。

その笑みに彼女がいつも纏っているような硬い雰囲気はない。ミュナーがまだ少女であることを、その時リアナは初めて気が付いた。

まるで一足飛びに仲良くなれたような気持ちになり、心の中を躍らせながらリアナはミュナーの手を握り締めた。

図書館は中央塔のすぐ傍に位置していた。  
石壁の円柱状の建物だ。夕刻過ぎのため辺りが暗いが、図書館の

正面には松明があり、迷うことはなかった。

「城の図書館は便利よ。街の図書館よりも長く開館してるから使い勝手がいいの」

嬉しそうに言うミユナーは相当本が好きなのであろう。

しかし正直なところ、図書館にリアナは行ったことがないので――大都市でなければそもそも図書館など存在しないので――図書館が使用できるだけで十分だと思った。

「そういえば図書館を利用したって今朝言ってたけれど、リアナは何か本を借りるつもりなの？」

「地理と歴史の本を借りようと思って……宿題があるから」

「宿題？」

不思議そうに問われる。

「――フェリス王子の政治学の先生から、隣国の主要都市の名前や位置、どういう街なのかを調べてくるよう宿題をもらったんです」

フェリスの名前を言葉にすることさえためらってしまった。リアナは小さく掌を握り締める。

ミユナーは訝しげに顔を少し傾げた。

「フェリス様の先生がなぜあなたに宿題を出すの？」

「先生がわたしも色々学んだらどうかって言ってくれたんです」

「良いことを言う先生ね。それならきっちり宿題を済ませなきゃいけないわ」

政治学の教師ネルソンに渡された宿題は、手元に参考になる資料を全く持たないリアナにはお手上げだった。だからこそ図書館に行きたいと思っていたリアナなのだが、他国の幾つかの都市について書かれた本など、置いてあるのだろうかと思った。自国<sup>ロスネルド</sup>について書かれた本ならばあるだろうが――

二人は松明の下まで辿り着く。そこには警備の人間が二人立っていて、ミュナーは彼らと言葉を交わして入り口に続く階段に足を乗せた。

数段の階段を上り終わり図書館の扉を開けると、目の前に大きな机が置かれていた。そしてそこには、髪の毛をひつつめにした妙齢の女性が座っていた。

「あら。またいらしたのですか？」

「昨日借りた本を読み終えてしまったのよ」

それを聞いて女性は苦笑した。

「いつものことですけど、利用許可書の提示をお願いしますわ。」

……はい、ありがとうございます。

ところで後ろの方はどなたでしょうか。ミュナー様が誰かと来られるのは珍しいですね」

ミュナーが見せた許可書を本人に返しながら女性がリアナを見る。

「彼女はフェリス様の護衛役のリアナ・レーベルト様よ。彼女には許可書がいらないはずよね？」

女性はまじまじとリアナを頭から足もとまで見渡した。凝視され、リアナは思わず身体を強張らせた。

「話には聞いていましたが、こんな少女が護衛などとは……。

あつ、失礼しました。確かにフェリス王子の護衛役の方には特別許可が下りていましたから、図書館の利用に許可書はいりませんわね。ただし、閲覧に制限のある書籍には私ども司書係に相談していただくかなとご覧になれませんか」

「図書館にもいろいろ規則があるのよ。後で私が教えるわね」

ミユナがそう言ってくれたのでリアナは大きく頷いた。本を読んだり借りるという事には色々と面倒があるのだな、とその時初めて知ったのだった。

「ところでパープルはいるかしら」

「あの子ですか？今なら五階あたりの整理をしていると思います」

ミユナの言っていた知り合いの司書のことだろうか。

彼女は女性にお礼を言うと、机の両側にある右の方の扉を開けた。

埃っぽいにおいがリアナの鼻についた。本独特のものにおいだ。

図書館に行ったことのないリアナだったが、かつて家族で暮らしていた大きな家には、書斎というには大きな書物が置かれた部屋があった。その部屋と同じにおいを嗅いで、懐かしさが胸中を占めた。

## 7 図書館にて(2)

室内というには広い空間が広がっていた。

図書館の天井は入り口の方の、手前の部分だけが吹き抜けになっていて、仰ぐと最上階まで目にする事ができた。壁に限らず辺りを整然と居並ぶ書架に思わず威圧される。

安心して本を見渡しているリアナをくすりと笑うと、ミュナーは上階へと誘った。

入口の反対側に三人ほどが通れる幅の階段がある。二階にあがると、一階と同じような造りになっていた。

二人は五階まで階段を上がる。

「パープル。こんばんわ」

五階の部屋の隅に向ってミュナーが声をかけた。そこには誰かがいて、腰元辺りまで積まれた本から一冊を取り出し、空いている本と本の間にぶつぶつ呟きながら差し込んでいるところだった。

近寄ってみると、髪をひとつに束ねたリアナと同じか少し年上くらいの少女だと分かった。

彼女はミュナーが声をかけてから少し経ったところで、リアナたちの方に顔を向けた。

「ミュナー様じゃないですかっ。そら耳かと思いましたよ！」

静かな図書館にそぐわない明るい大声を出して、少女は二人に駆け寄った。

「静かに。司書が騒いでたら立場がないわよ」

「ごめんなさいですう。えへへっ」

「相変わらず元気ね…。でもそこがあなたの良い所ね、パープル」

少女パープルに向かって微笑するミュナーは、室内の明かりに照らされて艶やかに見えた。それを目にして、パープルはほう、と感嘆のため息を漏らした。表情は恋い焦がれた少女のそれだ。

（す、すごいなミュナーさん……。素で女の人をファンにさせている）

違う意味でときどきしながらリアナはミュナーがパープルの心を驚掴みにしたシーンを見つめる。

「リアナ、紹介するわね。こちらはパープル・テンプトン。この図書館の司書係でわたしの古い友人なの」

「はじめましてっ。あたしパープルよ！お探しの本がありましたら、あたしがお手伝いいたしまーす！」

パープルが可愛らしくウインクする。

「わたしはリアナ・レーベルトです。図書館は初めてなので、色々お世話になると思います。よろしく願いします」

「やだよだ！この子がフェリス王子の護衛ちゃん？初めて見たよっ。かつわいい！」

パープルは至近距離から顔を覗いて来た。

「こんなにかわいいのに護衛なんて意外！ま、ミュナー様が騎士やつてるくらいだから信じられなくもないけどさあ。」

リアナちゃんは図書館初めてだよ。王宮図書館の司書パープル

ちゃんに聞きたい事があつたらんと聞いてちょうだいよ！」

胸を反らせるパープルに笑ってしまいつつ、さっそくリアナは宿題に役に立ちそうな本があるかどうかを聞いてみた。

探している本を聞くとパープルはすぐにリアナたちを上階、六階に案内した。

「六階はちょうど地理と歴史に関係のある書物を集めてあるから、階の移動はしなくていいよ。ただ、国ごとに書物の置かれている場所が違うから気をつけてね。一応壁にどこになにがあるかの大きな一覧と棚の対応番号とか載ってるから、今度来た時は参考にしてね。分らなかったらあたしたち司書に気軽に聞くことっ。

んー、リアナちゃんの宿題に役に立ちそうなものは……」

パープルが書架と睨みあい始めると、ミュナーがリアナに声をかけた。

「私も借りる本を探しに行つて来ていいかしら。案内はパープルで十分みたいだから」

司書の仕事に熱心なパープルに視線を向ける。

「わたしのことは気にしないでください。パープルさんがいてくれればひとまず宿題は大丈夫だと思います」

「そうね。

パープルっ。リアナのこと頼んだわよ」

すでに奥の書架の方に居たパープルが返事をした。ミュナーは「また後でね」と言つて階段を下りて行つた。

リアナはパープルのもとへ近寄った。彼女は梯子を使って自分の背丈よりも高い所の書物を取ろうとしている所だった。パープルはどちらかというと小柄なので、とても書架の上段には手が届かないようだった。

「大丈夫ですか？自分でやりますよ？」

「いいのいいのっ。こういうのも司書のやく…きゃっ」

梯子がぐらつきパープルが後ろに倒れそうになるのをリアナは反射的に防いだ。動きを止めた梯子を手にして、二人は思わず同じため息を吐く。

「ありがとねっ。あたしちよっとおつちよこちよいだもんで……」

「パープルさんが倒れなくて良かったですよ。」

自分で本を取りますね。こう言ったらなんですが、高いところは人より慣れてるんです」

リアナにとつてたえ本棚にしては高い一番上の棚も、梯子に頼らず手に取ることはたやすいのだ。ただそれをするには行儀がよろしくないで、リアナは梯子の様子を確かめてから足を乗せた。

「一番上の棚の、えっと、左から八番目あたりの白と茶色の背表紙の本よ」

手に取った本は案外綺麗だった。少し年期を感じさせるが、埃はかぶっていない。表紙には「ロスネルド王国と外交」と書かれている。

「その本をベースに、各国について詳しく書かれた本を読むと分かりやすいと思うんだ。セイント＝フィリア法王国とかシリル国とか、

それぞれの書物はこっちにあるよ」

「他国について書かれた本もたくさんあるんですね」

図書館とはなんでも揃っているのだな、とリアナは感心した。

違う棚から違う色の本を取り出しながらパープルが話しかけてくる。

「リアナちゃん、護衛ってどんなかんじなの？王子様と四六時中いられるなんてなかなかできない体験でしょ？そもお女の子の夢ってやつ！？」

その王子との関係が最悪なリアナはなんと答えようか逡巡してしまふ。しかたなく苦笑いをうかべるしかなかった。

「逆に夢なんて壊されますよ。王子様もみんなと変わらないんだなつて」

（でも……フェリスが特別なのかな？）

わざと王子らしく振舞わないフェリス。それを本人に告げた時に浮かべた柔らかな表情——いま思い出すと、彼の表情は嬉しげだったのでは、と思えてくる。

そして一転して蘇るのが、エリオルへのフェリスの態度だった。

（……フェリスは、王子であることが嫌なのかも）

だから、王子として振舞わないのだろうか。まるで自分が無価値だと言うように、自らを貶めるようなことを兄に言ったのだろうか。

「死ぬ」なんて、恐ろしいことを——

「みんなと変わらないなんて信じられないなあ。エリオル王子も超絶美形だけど、フェリス王子も周りから浮いちゃうような美人さんじゃん？正直フェリス王子ってとっつきにくいしいつも澄ましたような顔してるけど、なんだかんだで人気あるしねえ。そんなこといえるリアナちゃんはかなり贅沢だよ！」

「そ、そうでしょうか」

みんなフェリスの性格は勘定に入れないのだろうかと思った。

「エリオル王子なんてまさに王子様！って人だよ。容姿はもとより、頭もいいし振舞い方なんか見惚れちゃうわ」

エリオルに関してはリアナは何も言えない。はつきりさせれば、二度と会いたくない相手だ。

「それから優しいし、意外に面白いし。ちょっといじわるだけど、その一方で相手をとっても大事にする姿。うんうん、まさに王子！って人だよ」

何かを思い出すようにパールが腕を組んで頷く。その彼女の言うこととエリオルが重ならず、リアナは肩を竦めた。リアナにとつてのエリオル王子のイメージは、偏執狂とあまり変わらない。だからエリオルはよほどの演技派なのだろうと思った。

「とはいえ、その態度が誰にでも！ってわけじゃないのがまた良いよねー。心に決めた女性だけに見せる情熱の姿ってのがまたいいのよっ。思い出すだけで羨ましいなあ」

複雑な心境で耳を傾けていたリアナは、両手を組んでうつとりするパールの次の言葉に驚きを隠せなかった。

「周りから見ても口ばれだったよなあ。エリオル様がどれだけミユナー様のことが好きだったか」

リアナは思わず手にしていた本を絨毯の上に落とした。

## 8 図書館にて(3)

「ほんとお似合いのお二人だったなあ。あたしもあんな恋人欲しい！」

パープルは本が落ちたことも気づかず、熱弁を奮う。  
リアナはリアナで少々混乱していた。

(ミュナーさんとエリオル王子が恋人！？ありえない。爽やかで明るいミュナーさんと、あの腹黒そうなエリオル王子なんて……。何かの間違いなの？名前が同じの他人とか？でもエリオルって名前の王子が他にいる？)

「あらら？どしたのリアナちゃん。ねえねえ？」

理想の彼氏の夢を終えたパープルが眼前で手を振る。

リアナは我に返った。

「ミュナーさんとエリオル王子が恋人同士ってホントなんですか！？」

「へっ？リアナちゃん知らないの？そっか、リアナちゃんお城に来てそんなに経ってないんだっけ」

まいったなあという風にパープルが頬を掻いた。

「聞いたらずい話でした？」

確かに王子が誰と付き合っているかなど庶民が誰それと付きあうのとは違うだろう。

だがパールは困ったように笑った。

「そんなことはないんだけど……。別に密会してたわけじゃないから秘密の話ってわけでもないんだけどさ。

ただね、今はもう違うから」

「違うって……？」

そこでリアナはネルソンが話していたことを思い出した。

『……特にシ ril 国とロスネルドは結構親密だよ。エリオル殿下はシ ril 国に婚約者がいるしね。』

「あ！　もしかして、婚約者がいるから？」

パールは少し悲しそうに眼を伏せた。

「……ここだけの話にしてね。事情が変わっちゃってお二人は別れなきゃならなかったの。いっておくけど、どっちが振ったとかそういう話じゃないよ。そりゃ、お似合いの二人だったんだから。でも、エリオル様に婚約者ができたから——」

図書館はひどく静かで、パールの小さな声もまるで耳元で聞こえているように感じられた。

「本当はね、正式なものじゃなかったけどミユナー様が実質的な婚約者みたいなものだったんだ」

「婚約者……え！？　ミユナーさんってお姫様なんですか！？」

すっとんきょうな声を上げて慌てて口元を押さえるリアナを、パールは顔を上げ瞼を瞬かせて見つめた。そして盛大に嘖き出した。

「ちよつとちよつと！何言ってるの？もしかしてリアナちゃん、王子様ってお姫様としか結婚しないと思ってるの？」

「違うんですか……？」

そう言うたパープルはさらに笑った。それだけで十分リアナの考えが間違っていたということが分かった。

「違うよ！リアナちゃんってメルヘンチックなんだねえ。」

あのね、お姫様じゃなくても身分の高い女性なら、王子様と結婚できることもあるんだよ。現にソフィア様は公爵家のお嬢様だったんだから。まあ公爵家の娘なんてお姫様とほとんど同じようなものなんだけどさ」

「そう、なんですか。初めて知りました」

「つても、ソフィア様はシリル国の公爵家出身なんだ。ハロルド陛下の結婚話が出た時にシリル国には王族で未婚の適齢のお姫様がいなかったから、公爵家から王妃様選ばれたってわけ」

一度に言われてリアナは頭の中がぐるぐるしそうだった。

「王妃のソフィア様はシリル国から嫁いできた公爵家の娘、なんですわね」

「そうそう。実際はさ、シリル国とロスネルド国の友好の証ってわけでの政略結婚だったんだけど、ハロルド様とソフィア様は仲良くってさ。お互いいい人に巡り合えたってもんだよねえ。」

あ、話を戻すね。そもそもミューナー様は公爵家。公爵家ウィントンのお嬢様なわけ。だから問題なし、むしろエリオル王子にふさわしい相手だったの。だからお二人が惹かれあっても問題にならなかったんだ。むしろ水面下では、元々ミューナー様をエリオル様のお妃さまにしようって話が進んでたくらいだって聞いているわ」

(ミュナーさんが公爵家のお嬢様……)

まるで寝耳に水、という話ばかりだ。エリオルとミュナーが恋仲だったり、別れていたり、ミュナーが公爵家の出身だったり——  
そこでまで思考が至ってリアナは気になった。

「あの、貴族の娘さんって騎士とか務めるものなんですか？」

ミュナーは確かに品もあり美しく、貴族だと言われれば素直に頷ける。だが、貴族しからぬ短髪に騎士という肉体労働は貴族のお嬢様がすることだろうか。

「ああ、それは……」

リアナは図書館の同じフロアに誰かがやってきたことを気配で気がつく。

ちらりとミュナーの後ろにある階段の方に目を向ける。そしてそこにいた人物がミュナーでもなければ司書でもなく、しかし見知った顔であったことに驚いた。

言葉が続けようとしたパープルは、リアナが自分越しになにかを見つめていることに気がついたのか後ろを振り向いた。

「あっ！」

パープルの驚く声を耳にしながらリアナは肌に嫌悪感を抱いた。生理的に表れた人物を受け付けなかった。だからリアナは小さく己の体を抱きしめた。

「なかなか面白い話をしているではないか」

リアナたちの傍までやってきた青年は美しく怪しい笑みを浮かべた。

いまなら分かる。その輝かしい笑顔の裏までも美しいわけではないことが分かる。

嫌悪感から我に返ったりリアナは思い出したように身構えて周りを見渡す。エリオル以外の気配には気がつかなかったはず。それでも本能的にあたりに視線を向けた。

ロスネルドの第一王子はその様子を見て小さく笑ったかと思うと、視線をリアナから外した。

「久しぶりだな。パープル」

「はい！ 王子がお元気そうで何よりですっ」

パープルは嬉しそうにエリオルへ笑いかける。その表情はとても嬉しそうだ。

「最近は図書館に来られないので寂しかったんですよ？」

「……すまない。他国訪問など色々業務が立て込んでてな」

エリオルは苦笑を浮かべた。

なんてことない、普通の表情。

でも恍惚に歪むエリオルを一度目にしているリアナにとって、その「普通」であるエリオルの顔に衝撃を受けた。

エリオルの表情は嘘ばかりの綺麗な笑顔でもなく、厭らしい笑みでもなく、まるで「本当かと見間違うほど」柔らかかった。エリオルの部屋で見たような狂った表情など結びつかないような表情だった。

「エリオル様、ミユナー様がいらっしゃるの気がつきましたか？」

うかがうようにパールはエリオルを見上げる。その視線を受けてエリオルは微かに綺麗な眉を動かした。

エリオルの青くて昏いと思っていた瞳。

でもいま彼の瞳に移っているものは、寂しげな光の残滓のように見えた。

「……熱心に本を読んでいた。相変わらずだ」

「エリオル様に気がつかなかったんですか？ お声はかけないのですか？」

「読書中を邪魔するのは忍びなくてな。用事があるわけではないし」

「そんな、用なんてなくていいじゃないですかッ。全然ミユナー様と話してませんよね？ミユナー様、そういう様子はみせてないですけど、絶対エリオル様に会いたがってます！」

「会ってどうする」

責めるような口調ではなかったように聞こえた。

それでもパールはひるみ、俯いた。

「どうするって……それは、前みたいに話をすれば……」

「私にはもう婚約者がいる。ミユナーといると良い顔をしない者もいるのでな」

「そ、……な……。でもでもエリオル様なら正室だけじゃなくても……」

そこでパールは自分の口を手で塞いだ。項垂れて、エリオルに頭を下げた。

「ごめんなさい。あたし、最低な事を……」  
「いいんだ。私たちのことを思ってたのだから。……ありがとう」

エリオルは優しい手つきで背の低いパープルの頭を撫でた。その光景は温かくて可愛らしくて、リアナの目には本当の兄妹のように映った。

だからこそ、目の前の光景が信じられなかった。

（なんで……？）

リアナが二人を見て思ったことは仲の良い二人に対する温か気持ちではなく、ただただ疑問だった。

（本当に兄弟なのは、フェリスのはずなのに……？）

これも演技だから、ということなのだろうか。

だから実の弟よりもパープルに向けるまなざしや表情が家族に対するものに見えるということなのか？

それともやはりパープルの事が妹のように可愛いのかもしれない。二人のやり取りの節々にそういう優しさが感じられる気がする。

でもなぜそれがフェリスに向けられないというのだろうか？

「そうだ。さっき他の司書がお前を探していたぞ。一階に戻った方がいい」

「ほんとですか？でもあたしは今リアナちゃんの探し物してるので、後にします！司書たるもの頼ってくださいる利用者様を放ってお

くなんてできませんからねっ」

エリオルはにっこり笑った。

その笑みにリアナは覚えがあった。思わず背筋に冷たいものが走る。

「それなら彼女の相手は私がしよう。面識はあるのでね。……ねえ？リアナ・レーベルトさん？」

青い瞳と目を合わせてリアナは思った。

エリオルという人間は自分が敵とみなした相手には容赦がないのだ。それがたとえ、血のつながった弟であってもそうなのだ。そうでもなければ、自分の弟に刃を向けさせるようなことができる兄がいるなんて考えられない。

リアナは大きく息を吸うとキッとエリオルを睨みつけた。

そう、ここで逃げてはいけない。あの忌まわしい一時の記憶に臆してはならない。

リアナはフェリスを守るためにいる。

だからフェリスを傷つけようとする相手に怯んではいけない。それが例え王子だろうが、国王だろうが、必要ならば立ち向かわなければならぬ。

例え剣を振わなくてもフェリスを護りたいと決意したのは、自分なのだから——！

「ぜひお願いします。エリオル様」

エリオルはリアナの心の内をはかるように目を細めると、やはりくすりと笑った。

## 8 図書館にて(3) (後書き)

久々の更新です。本当に定期的に書けない作者です。すみません。更新していなかった間にリニューアルされていて、とてもユーザーとして快適です。こんな場からですが、サイト関係者様方にはお礼を申し上げます。

さてさて、前話の後書きでまともなエリオルがどうかどうか、なんて書きましたが、意外にも早く再登場して、しかも本当は結構まともなのか?という今回だったと思うんですがいかがでしょうか。

……実際どうなのでしょうね。

## 9 図書館にて(4)

「…………二度とフェリスに手を出さないでください」

パープルが階下に行くのを見届けてから、リアナは開口一番そう言った。

エリオルは肩をすくめてやれやれと首を振る。

「この間のことを罵られるかと思っていたのに、口を開けばそれか。いやはや……君は本当に仕事熱心というか愚かというか」  
「…………」

強い眼差しをぶつけると、エリオルは肩をすくめる。そしてにやつと笑うとリアナに手を伸ばした。

「そんなに怒らなくても良いではないか。私と君の仲だろう……?」

リアナは不愉快でたまらず、渾身の力でエリオルの手を叩いて退けた。

「やめてください。話を逸らさないで!……貴方に兄としての自覚がないのなら、もうフェリスにかかわらないでください。もしもそれでもフェリスに手を出すというなら——」

リアナの琥珀の瞳が普通の少女には到底浮かべられないような陰翳を帯びる。

——それは獣の瞳だった。

「私はもう躊躇ためらいません」

黄金の眼差しにエリオルは息をのむ。

……だが口元を引きつらせながら開口した。

「……私が君に言われて改心するとても？そこまで言われると、逆になんとしてでもあいつをあらゆる苦痛で顔を歪ませてやりたくないなあ？」

にやりと顔を歪めるエリオルのなんと醜いこと。どんなに外見が美しくてもリアナにはもうエリオルを美しい存在だとは思えなかった。

リアナにはエリオルという存在がフェリスの兄の皮を被っただけの、赤の他人にしか思えなかった。

兄であれば、実の弟を殺そうとするわけがない。そんなのは兄弟じゃない。哀しい。理解できない！

兄弟でないパールには兄でいられるのにフェリスの兄でいられないなど全くもって理解できない！！

……そう。理解、できない。

「あ……」

でも理解できないのは当たり前なんじゃないか？

だって、リアナはエリオルの何も“知らない”。

知らないのにたった今、エリオルは自分にとって敵だと認識した

相手を徹底的に排除する人間だと思った。そう理解した。  
でもその理解は自分のただの……………妄想だ。

だってリアナは知らない。醜くても美しくてもそのどちらでもなくとも、エリオルの真実の姿を“知らない”。

エリオルのなにも知らないからこそ、本人がどんな人物であれリアナがそうだと思い込んだ人物像をあてはめたに過ぎない。

それは——虚像とはいわないのだろうか。

…………いやそんなことはない。

現にエリオルはフェリスを傷つけようとした。刃物をもった男たちに襲わせた。それは事実だ。だから間違っただけなんかない。

それは紛れもなく事実。

でも真実とはそれだけなのだろうか。

そこでリアナは思い知る。

エリオルがフェリスを傷つけようとした事実は確かにある。でも、“なぜ”そうしようとしたのか——それはなにひとつ分からない。

想像もできない。

理由が正当だからと言って私刑が許されるかは別の問題だろう。

でもそれを知ることによってもっと別の見方ができるのではないだろうか。

周りから見たら裔狼族が暗殺集団に見えて、リアナにとっては家族であるように。

レギオスが無暗に戦争を仕掛ける国に見えて、実際は深い悲しみ

が根底にあるように。

真実の見つめ方を、城<sup>しろ</sup>に来てから学びたいと思ったのは自分ではないか。

フェリスの……、彼の言葉に励まされてそう決めたのは自分じゃないか。

——そうだ、間違っているのは………自分の方だ。

「教えて……ください……」  
「何？」

リアナは言葉に力を込めた。

「なんでそこまでフェリスを嫌うのか、理由を聞かせてもらえないでしょうか」

リアナはエリオルの一面しか見ていない。  
だけど考えるまでもない。エリオルにはパープルに慕われ、ミUNA<sup>ミユナ</sup>が付き合うだけのなにかがあるのだろう。  
それはリアナには見えないだけなのだ。

エリオルは突然の言葉に目を丸くする。彼が常に纏っているような緊張感のような張りつめたものが一瞬緩む。

「……私がフェリスを嫌う理由を知りたい……？」

「はい。なぜ貴方がそこまでフェリスを嫌うのか。

私はフェリスの側に立っているから殿下を……殿下に非があるので

はないかと思いました。でもそれは間違ってるんです。殿下がフェリスを嫌うようになったのは、フェリスが原因なのかもしれない。その可能性を私は全く疑わなかった。それについてお詫びいたします」

リアナは深々と頭を下げた。

「私は穿った見方をしました。だからこそ……、ちゃんと貴方とフェリスの関係を理解したいと思いました」

「それで私がフェリスを嫌う理由が知りたい、と」

「わたしはフェリスに以前聞いたんです。貴方のことをどう思っているのかって。そしたらフェリスは、『昔は兄だと思っていた』って言いました」

「はは、兄だと思われなくて結構！私もあいつが血のつながった弟だとは思いたくないからな」

「そういうことを言ってるんじゃないやありません。……昔は仲良かったのなら、原因があるのでしょうか？きっと、あなたがフェリスを傷つけたと思うほど、つらい原因が」

エリオルは眉を顰め、リアナを睨む。

だが耐えかねたのか視線を床に落とす。

「私は“特別”ではなかった……」

「え？」

小さなつぶやきをリアナは聞き取れなかった。

エリオルが顔をあげる。その時にはその顔に表情はなかった。ただ整った形をした蠟人形の顔があった。

「……………まあいい。フェリスに伝えてくれ。それで君の好奇

心も満たされるだろう」

「どういう意味ですか？」

エリオルの青白い顔が、壊れる。

大きな掌でリアナの首を押さえつけそのまま本棚に押し付ける。  
苦しさにリアナが呻いた。

「貴様のせいだッ!!」

(何——ッ!?)

突然の豹変ぶりにリアナは呆然とし動けなかった。

エリオルの瞳は目の前にいるリアナではなくずっと遠くを睨んでいた。

「……貴様のせいで……貴様のせいで……ッ!! 私には愛する女と結ばれることが叶わなくなった!!! お前はいつたいどんな姑息で下劣な方法を使ったんだろうなア!?? いまどんな気分なんだ!? 私を笑っているのか!?? 本来ならお前が結婚するはずだったというのに、なぜ!? 急に!? どうして!? お前とイージエの婚約は昔から決められていたのに!!! お前はいつたいなにをしたんだ!? どうしてこうなった!? お前はいつたい……ッ」

リアナは必死にエリオルの手を押さえつけ呻くしかできない。

激情にかられたエリオルの手がぎちぎちとリアナの首を締めあげる。片手は剣の柄を握っているものの、理性が切りつけることを押さえつける。

だが迷いが長引くにつれて息がつかなくなっていく。

苦悶の表情を浮かべながらリアナはエリオルと自分の間に足を滑り込ませ、背中の本棚を支えに一気に蹴り離れた。

「お、落ち着いてください」

エリオルを興奮させてしまった原因はリアナにある。だが冷静さを失ったエリオルの激怒に困惑するしかない。

「……………私は、ミユナーと結婚することになっていた」

床に倒れこんだままエリオルがリアナを見上げる。青い双眸はやはり昏かった。だがその姿はとても——悲しげだった。

「だけどなぜかフェリスとあいつの婚約者の縁談がなくなり、その婚約者が私の婚約者になった」

## 9 図書館にて（4）（後書き）

なんとか年内更新間にあいました。

最近弟王子を書きたくてうずうずしてるんですがそこまで話が進まない。

自分のせいなんですけどね。

10 図書館にて(5)

「どうしたんですか!？」

パールが階段から飛び込むようにやってきた。

エリオルはいつもの仮面を身につけ微笑を浮かべる。

「大したことではない。リアナさんとレギオス国について騙っていたらつい力が入ってしまつてね。……私があの国を心底嫌っているのはパールも知っているだろう?」

「え、ええ、エリオル様があまり好きではないとは知ってましたけど……」

パールがリアナを窺うように上目づかいをする。

階下までエリオルの言つた言葉がはつきり聞こえたとは思えないが、なにせ図書館はもとから静かな場所。怒鳴り声をあげたら音が響くのは当たり前だ。

「大きな声にびっくりしましたけど、それだけですよ」

リアナもエリオルに合わせるように口添えする。パールに話すようなことではないだろう。

その場にいた二人からなにもないといわれてしまい納得しない様子のパールだったが、「館内では声の大きさに気をつけてくださいね」と司書らしくそれ以上追及することはなく注意をするだけだった。

その時、エリオルが一瞬体をこわばらせたことにリアナは気がついていた。

パープルの後ろの階段にあかがね色の髪が見える。

その美しい髪を持ち主は驚いたようにこちらを見つめていて、慌てたように視線をはずした。その場に膝をつき、頭を下げる。

第一王子はその様子を見て唇をかみ締めた。だがリアナの視線に気がつき、いつも浮かべる不敵な笑みを形作る。

パープルに別れの言葉を告げ、エリオルは床を見つめたままの女騎士の傍までゆるりと歩みを進めた。そして目の前で止まる。

誰も、なにも言わない。

リアナの目にはエリオルの肩が震えているように見えた。

「エリオル様」

静かな声色にその場の者たちがそちらに顔を向ける。

黒髪に黒眼の騎士——アークだった。

「外で待っていると言ったのに」

「陛下からお呼び出しがありました。至急お戻りください」

エリオルはもう一度ミュナーに視線を向けたが、結局何も言わずに彼女の横を通り過ぎた。ミュナーはずっと下を向いて固まっただけだった。

階段を下りようとするエリオルに続こうとしたアークを、彼の主人が振り返って止める。

「私が言ったことは守れ。しばらくお前の干渉は受けたくない。ついてくるな」

アークは表情を変えずに、でもすぐに返事はしない。

「私に逆らう気でも？」

「……まさか。外に他の騎士が待機しておりますゆえ、どうか彼らを困らすようなことはないようにお願いします」

「主人に命令をするとはさすがアーク！ お前はいつでも飽きぬな」  
「あまり嬉しくないお言葉ですね」

「しばらくはお前のその慇懃無礼な態度がみられなくなると思うと寂しいものだ」

「それならば今すぐにも私を貴方のお傍に置いていただければ問題ないかと存じます」

「くつくつく！ ……結構だッ」

エリオルは踵を返し、彼の第一騎士をその場に置いて階段を下りていった。

それを見送ったアークは微動だにしないミュナーに目を向ける。

「エリオル様は行ってしまわれましたよ」

「……はい」

抑えていたようだがミュナーの声は震えていた。顔を上げ立ち上がった彼女の顔はいつもよりもずっと白かった。

パープルがすばやく傍に寄り添う。

「ミュナーさま……」

「……私が殿下を傷つけておいて自分がこの様なんて、酷い女よね……」

「ち、違います！ ミュナー様は何も悪くない！ ミュナー様も、

エリオル様も、どつちも悪くない！」

「いいえ。私が全て……悪いから……」

「絶対に違います！ ミュナー様はエリオル様のためになにもかも……ッ」

パールはいまにも泣き出しそうだった。そしてそれ以上にミュナーはもつと苦しそうな表情をしていた。

「リアナ殿。私がお帰りを送らせて頂いてもよろしいですか？」

ミュナーたちに何も言えず立ちすくんでいたリアナにアークが静かに訊ねる。彼がなぜそう申し出たのかと思い黒い瞳を見つめ返すと、そこには優しい瞬きがあった。

リアナはもう一度ミュナーたちに目を向ける。お互いを支えるように寄り添う二人にリアナが出来ることなど、この場を離れること以外になかった。

夕食時間を過ぎた城内の廊下は人氣が少なく、とても寒かった。肩を並べてリアナとアークは無言で歩いていた。

「ミュナーさんもエリオル様も、今もお互いを想ってるんですね……」

リアナは微かに残る首の痛みを指でさすりながらぼつりとつぶやく。

エリオルの狂気の叫びには想い人——ミユナーへの気持ちが込められていた。その言葉自体は一方的で理不尽な言いがかりであったのかもしれない。でも紛れもなく、その言葉の裏には愛と呼べるものがあつたと感じた。

「……貴様のせいで……貴様のせいで……ッ！！ 私は愛する女と結ばれることが叶わなくなつた！！！！ お前はいつたいどんな姑息で下劣な方法を使つたんだろうなア！？？ いまどんな気分なんだ！？？ 私を笑っているのか！？？？ 本来ならお前が結婚するはずだつたというのに、なぜ！？？ 急に！？？ どうして！？？ お前とイージエの婚約は昔から決められていたのに！！ お前はいつたいなにをしたんだ！？？ どうしてこつなつた！？？ お前はいつたい……ッ」

「………なんでフェリスの婚約者がエリオル様の婚約者になつたんだろう……… あんなに想い合つて二人を引き離すなんて酷い」

リアナはいつのまにかアークに問うような独り言を洩らしていたことに気がつく。

「う、ごめんなさい！ あ、今言つた事は忘れてください」  
「はい」

アークは少し考えるようなそぶりを見せる。なにか推し量るようじつくりとリアナを見つめ——口を開いた。

「エリオル様とミユナー様はとても仲が良くありました。お互い

がなにもかも支えあえるすばらしい関係だったと思います。

でもある時突然フェリス様の婚約者であるはずのシリル国の姫ジエニフィ様をエリオル様の妃に、という動きがあったのです。当然エリオル様は抗議なされ、一時は王族を辞める決意さえお持ちでございました。あのお方は周りが思っている以上に激しい気性のお方ですから」

煌びやかで優雅な見かけによらず荒々しい感情をぶつけられたリアナは苦笑いを浮かべるしかない。

「どうしてそうなったのか、陛下のお心も宰相様方の思惑も分かりませんでした。でも王族を辞めるといったエリオル様にミュナー様がお心を痛められ、自らが殿下のお傍を離れる決意をなされたのです」

なるほど。だからミュナーはあれ程自分を責めたように言っていたのか。

でもとてもじゃないがミュナーのせいだとは思えない。むしろ、愛する人のために自ら離れることを選んだ彼女を誰が責められるというのだろうか。

「ただミュナー様は城から離れることはできなかったのでしょうか。

……私があのお方に再び会った時、ミュナー様は騎士になられ、ソフィア様のお傍に仕えていました」

（そっか……ミュナーさんが騎士になったのはエリオル様のためなんだ）

なぜ貴族の娘であるはずのミュナーが騎士であるのか不思議に思っていたが、こんな形で理由を知ることになるうとは。

優しく朗らかなミュナーが心の中で苦しんでいたのだと思うとつらくなる。役に立てない、かける言葉すら出てこなかった自分がふがいなくて情けない。

同時にエリオルの怒りがフェリスに向けられている事情も理解する。本来なら婚約者はフェリスであつたはずが、エリオルになつた。そのせいでミュナーと別れることになつたのだ。リアナが思っているよりもずっとエリオルはつらかったに違いない。同情すらもエリオルにとって苦痛になるように思えた。

でも婚約者が変わったことをフェリスのせいと憎むのは筋違いだ。……しかだからこそ、なんとかその誤解を解けばフェリスとエリオルは兄弟としてやり直せるではないかとリアナは思った。

「あなたは何よりも先に、自分のことを考えたほうがいいと思いますよ」

ドキツとした。

考え込んでいたリアナはアークを見上げる。黒い瞳は相変わらず優しく、そして見透かしているようだった。

きつと今のフェリスとの関係を言っているのだろう。リアナがまずやるべきことは、ミュナーを心配することでもフェリスとエリオルの関係に悩むことでもなくフェリスと仲直りすることだ、と。

「……………そうですね。そうですね……………」

「原因はエリオル様です。ですから主に代わって私にできることがあれば遠慮なく言ってください」

「いえ、そんな…あの……」

リアナは足を止めて、同じく立ち止まったアークに向かい合う。彼とこうしてちゃんと顔を向き合わせるのは初めてだった。

「あの、この間貸していただいたマントをまだお返ししてなくすみません。それから遅くなって申し訳ないんですけど………ありがとうございます」

目の前の黒い身なりの騎士がいなかったらきつと“決定的に”、フェリスとの関係は崩れていただろう。もちろんフェリスとの仲が友達と呼べるようなものではないと自覚しているが、それでも彼と出会った時よりも仲良くなれたと思えた。だからできる事なら、許されるのなら仲直りをしたい。それがまだ間に合うのだと、今は思う。まだそれが出来ると思う。その機会を目の前の騎士がくれたのだ。

そう思っても拒絶は、怖い。

でも……フェリスを守りたい。そう決心した自分を貫きたい。エリオルに向き合ってそれを痛感した。

いや、もっと単純に。

また言葉を交わしたい。好意的な返事でなくてもいいから。傍にいたい。

目を閉じれば灰色の髪の銀の輝きを思いだせる。初めて見た微笑を思い出せる。彼がくれた言葉を思い出せる。不機嫌な表情も、朝が苦手だということも、王子扱いされるのが嫌いで、でも偉そうで、それでもお菓子を作るとちゃんと食べてくれて——ほんの数ヶ月の

関係だけど、それらをもう知っている。

失うくらいなら、嫌われたほうがいい。でも、嫌われるよりも好きでいて欲しい。望んで嫌われないなんて思えない。向けられる嫌悪に屈せぬ強さじゃなくて、好きになってもらえるように自分が前を向ける強さが欲しい。

だから単純に、自分の心のままに。悩んでるのは――性に合わない。

「……………あなたにはその顔が似合ってますよ」

驚いてアークを見る。彼は相変わらず表情を変えていないけれども真っ直ぐにリアナへ微笑みの眼差しを向けていた。

だから、リアナもにっこりと笑った。それは朝露を弾いて開花した純白の小さな薔薇のようだった。

## 11 水面に石は投げられた

アルバートは最近浮かない表情ばかりしていた。人がいない時はよく溜息もついていた。

それというのも、彼の主とその護衛について頭を悩ませていたからだ。

アルバートにはフェリスとリアナの関係が悪くなった原因など分らない。でも護衛に対する嫌がりようとは別格の拒絶を、フェリスがリアナに抱いているということを主の態度から察するのは難しいことではない。リアナ個人に対する感情が引き金になってフェリスの様子が可笑しいのだらうと思った。

常に不機嫌な主への触れ所を間違えば怜悯な視線を突き刺される、という状況は実に自分の役目を全うし難い環境ではある。だがフェリスから遠ざけられたままのリアナに比べたら自分の立ち場など幸せなのだ。

寒々しい廊下で、置いてきばりにされた幼児のように壁に寄りかかって俯く少女。

励ましの言葉をかけることもできず、ただ視線を向けることしかできない自分。いつもフェリスの傍にいるアルバートには、我儘や機嫌でフェリスがリアナを遠ざけているわけでないことなど分かるふとした時に見せる紫の瞳の奥の深い感情を見ると主に進言する気にはなれない。

アルバートにできることは、これ以上フェリスもリアナも傷つかないように気を使うことだった。だから二人が顔を合わせるようなことにならないように配慮するしかない。

今朝もアルバートはフェリスの部屋に向かいながら大きな溜息をついた。

リアナが部屋を追い出された日から彼女はアルバートよりも早くフェリスの部屋の前にいるようになった。だから朝出勤した時に必ずリアナに会う。その時挨拶をしてもリアナは小さな声で、元氣のない顔で挨拶を返すだけだ。毎日変わることはない表情にアルバートは心苦しくて思っていた。

だから半ば諦めの心情とともに、今日も一緒だろうと思っていた。今日もまた、少女は哀しげな顔で部屋の前にいるのだろうと思った。

そう思っていたので、最初主人の部屋の前が目に入った時に見間違いかと思った。

……… 今日もリアナは部屋の前にいた。  
居たには居たが、ただじっと立っていたのではない。

「おはよう、アルバート！」

アルバートに気がついたリアナが笑いかけてきた。その表情は無理した作りものではなく、ごく自然に、飾らない少女らしい笑みだった。

前日とはまるで違うリアナの様子にアルバートは戸惑い、返事に窮する。

「どうしたの？」

「あ、いえ。その……」

ぱちぱちと不思議そうに見つめてくるリアナは以前と変わらない

様子だった。

「…もしかしてこの格好はまずかったかな？」

リアナは見せびらかすように肩にかけていた厚手で大きなストールを広げた。

それだけだったら温まるために用意したものと分かる。だが今日のリアナはどこからか椅子を持ってきたのか、それを部屋の前に置き座っていた。廊下に腰を据えて座っている姿は場違いだと思えるのに、得意げなリアナの顔を見ると実に快適と言わんばかりだ。

「え…と……………寒いので、もっと厚着してもいいくらいだと思いましたが…」

「そう思う？ 廊下にも暖炉があればいいのに！ ……なんて贅沢言ったら外でお仕事してる騎士の人たちに怒られちゃうわね。でも身体があったまるようにレモンティーを水筒に入れてもらったのよ。あと小腹がすいた時用にお菓子も用意してもらったんだ。みてみてこのマドレーヌ美味しそうでしょ？」

脇に置いてあったバスケットを取り出しわざわざ中身を見せびらかすリアナ。

茫然としながらその様子を見ていたアルバートだったが、だんだんと胸の奥からせり上がってきた思いに耐えられなくなり声を出して笑ってしまった。

当然、いきなり笑われてリアナは怒る。

「すみません、あまりに、リアナ様の準備がいいものですから…」

「椅子はさすがにやりすぎだったかな」

「いえいえ……………良いと思います。もしも入用でしたら机も用意してもらいますけど」

「机はさすがに要らないわ。フェリス王子に会えないおかげで雑用を押しつけられずに済むから、書くような仕事はないもの」

リアナは立ち上がり、ポケットから白いものを取り出す。そしてそれをアルバートに差し出した。

「お願い。これを王子に渡してくれる？」

そう言ったりリアナの顔は悪戯を考えているような楽しげな様子だった。

いったいこのリアナの変化はなんだろうかとアルバートは不思議に思った。しかしどんな理由があろうと、いまこの瞬間、リアナは生き生きとしていた。フェリスと真っ直ぐ向かい合おうと言う意思がアルバートにも伝わる程だ。

だからアルバートも嬉しくて、沈んでいた気持ちが晴れていくような気分がした。

アルバートのその心に共鳴するかのように朝の鐘が鳴り響く。

リアナから預かり物を受け取る。頭を下げ、部屋に入るためアルバートに許されている主の部屋の鍵を差し込み解錠した。

そのまま中に入るうとするアルバートをリアナはもう一度呼び止め、耳打ちをした。

「もしも王子が……………なかったら、アルバートが……………くれる？」

「良いのですか？」

「うん、いいの。だからお願いね！」

笑顔のリアナにアルバートはしっかりと頷き、入室した。

「リアナをあなたのお傍に置いてくださいな」

ローズはキツと目の前の相手を睨む。相手は優雅に椅子に背を預け、視線を書物に落としたままだ。ローズの言うことなど聞かないという意思表示だろう。いい度胸だ。

今朝がたリアナはローズにお願いをしてきた。いつも塞ぎこんだ様子のリアナが楽しげだったので吃驚したが、ローズは喜んでそのお願いを聞きいれた。それは些細なお願いごと——水筒とお菓子の準備だった。

ローズはそのお願いの理由が、フェリスの部屋の前に椅子を持ち出し準備万端の様子のリアナを見て分かった。

つまりリアナは、真っ向勝負に出たのだ。フェリスが折れないのなら、リアナも折れない。そういう姿勢を見せたのだ。

だからローズも戦うことにした。いや、この際溜まっていた文句を言わせてもらう。

「リアナが傷ついてる姿を王子は御覧になりました？ あの子がこの部屋の外でただけつらそうな表情をしていたか分かります？ あなたは部屋に籠っていて知らないかもしれませんがね！ 男のくせにうじうじ引き籠って目を逸らしているんじゃないわ！」

いくら相手が王族しからぬフェリスといえども、もしも彼が気分

を害し一言いえば、ローズなど問答無用で城から放り出されるだろう。それでもローズは言わずにはいられなかったのだ。だからこそ彼女の言葉には強い意志が込められている。

それでもフェリスには届かない。素知らぬ顔で読書を続ける。

「この……ッ」

馬鹿王子！ とローズが罵ろうとした時、扉のノックが響く。アルバートだった。

「おはよう……ございます？」

ローズが既に部屋に居たことに驚いたのか、部屋のピリピリとした雰囲気面に食らったのか、アルバートはフェリスとローズを交互に見やる。

気がそがれ、それでもむつつりとしたままローズは本来の役目である侍女の仕事を再開する。いつもより粗雑にフェリスの朝食の準備していく。

「フェリス様、お渡ししたいものがございます」

アルバートの言葉には反応を示すフェリス。ローズは横目でそれを見つつ下唇を噛む。

「なんだ？」

「こちらをどうぞ」

渡されたのは白い封筒のようだった。

「誰からだ？」

どうやら差出人が書かれていないので不審がつているようだ。アルバートは一瞬悩んだような様子を見せる。

「中をご覧いただければお分かり頂けると思います」  
「……」

手紙とアルバートを交互に見たフェリスは目を細めた。

「……お前が差出人が誰か言わないのなら、俺はこの手紙を読まない」

「……。不審な手紙ではありません。それは保証します。ですからとにかく読んでください」

「あいつだな」

誰のことかアルバートもすぐ分かったのか、言葉を詰まらせる。その反応だけでフェリスには十分だったようで、手紙をアルバートに戻す。

「読むだけでもよろしいのではないでしょうっか？」

アルバートの必死の声を、フェリスは背を向けることで遮断する。

「その手紙を読む時間があるなら俺はこちらの書物を読むことに費やす」

「フェリス様！」

ローズは今度こそ我慢ならぬとフェリスの前までずんずんと足を進める。

しかしローズの怒りの叫びは――アルバートによって遮られてしまった。

「分かりました。フェリス様がお読みにならないのなら、私が読ませていただきます！」

ローズはアルバートには珍しいような強い口調に驚いて振り返る。彼は封筒から便箋を取り出していた。

「アルバート！」

フェリスの鋭い声にも怯まずアルバートは口をゆっくりと開け――そのまま固まった。黒い瞳を何度も瞬かせる。

「……どうしたんですの？」

ローズが不思議に思いアルバートの横から便箋をのぞきこんだ。

その文面を飲み込むとローズは声を上げて笑った。……どうやらリアナは自分と同じ気持ちだったらしい。とにかくローズは笑った。

アルバートはどう読めばいいのか分からないらしい。便箋とフェリスを交互に見て、あぐくにローズへと縋るような視線を送る。

確かにこの文章をアルバートが読み上げるのは気が引けるだろう。

「貸してくださいまし。わたくしが読めますわ」

リアナと同じ気持ちだから感情を込めて読み上げよう。すうっとローズは息を飲み込み、吐き出した。

「『そんなにわたしが嫌いなら正々堂々勝負しなさいよッ！』もしもフェリスに負けたらわたしは護衛を止めて城を出てやるわ。でももしわたしが勝ったならわたしをもう一度傍に置いてもらうわ！いつまでも部屋に籠ってるんじゃないわよ、この根暗王子ッ！』」

シン…と静まる室内。

ローズは笑いを噛みしめる。

「……だそうですけど。フェリス王子？」

声をかけてもフェリスは何も言わない。

ただ書物を机に置いて椅子から立ち上がり、窓の外を見た。外は晴天の朝に相応しい輝きに満ち溢れている。ローズの居る位置から微かに見える横顔は眩しそうに瞳を細めていた。

「この挑戦状、どうするおつもりですか？ まさかフェリス王子ともあるうお方が逃げるなんて真似はしませんでしょうけど」

ローズが煽るように訊ねる。だが当然挑発に乗るフェリスではない。だから返事をしない。じつと外を見たまま。

「きっとリアナは王子がどれ程拒否してもあなたの護衛を辞めません。この手紙でお分かりでしょう？ もしどうしてもリアナを遠ざけたいと思うならこの勝負に乗るべきです。それ以外にあなたがあなたの子を辞めさせる方法はないのですから！ 王子が勝てばあなた

の望むようになるでしょう。これはあなたにとって幸運な申し出なのですよ？ あなたならわたくしが言うまでもなくお分かりでしょうけれど。…それとも勝負すら目をそらして現状に甘んじるおつもりですか？ 逃げ続けるのはさぞ楽でしょうね」

それ以上言うのは無粋だ。ローズはフェリスの返事を――反応を待った。アルバートはそわそわとしながらも、期待の眼差しをフェリスに向けている。

どれだけ経ったのかわからなかったが。  
フェリスはひとつの反応を見せた。彼はローズを見据える。

「アルバート。ローラインを外に出せ」  
「えっ！？」

アルバートが素っ頓狂な声を上げる。  
腹の立つ回答にローズはフェリスを睨み、そしてアルバートを睨む。アルバートは言われたことを実行したくないようだったが、主人にも睨まれてしまったら従うほかない。

「すみません…」  
「いいですわよ！ 自分で出ていきます！」

なんと臆病で狭量な王子だと文句を言いながらローズは部屋を出ていく。フェリスの顔も見たくなかった。

……だからローズは見ていなかった。  
再び外に視線を向けた紫の瞳が、揺れていたことに。



## 12 波紋すら抱いて(1)

周到な準備のおかげでリアナは実に快適な一日を過ごした。

今朝方アルバートに渡した手紙は案の定フェリスが受け取ってくれなかったとローズに聞いた。怒り心頭の様子で部屋から出てきたローズはその事と、リアナの手紙を感情を込めて読んでくれた事を教えてくれた。フェリスの反応は案の定なかったらしい。でもそれも予想できたことだった。

「いいの。フェリスを挑発する意味も本当はあったけど、一番とにかく私の今の気持ちを知って欲しかったから」

本当なら目の前で自分の口で言ってみたかったけれど、とリアナは心の中で付け加える。

「しかしフェリス王子は勝負を受けてくれそうにないですわよ。あの頑固王子はなかなか自分の意見を変えたりしませんからね。ところで勝負っていったいなにするつもりなのですか？」

「えーっと…まだ決めてないけど」

ローズは目を睜<sup>みは</sup>り、溜息をついた。

「考えてないのにあんな挑戦状みたいな文章を送りつけるなんて。無計画じゃありません？」

「それが私とフェリスが対等に勝負できる事をなかなか思いつかなくってね。チェスはフェリスに勝てないし、決闘はわたしの方が有利だし」

「確かにリアナは身体を使った勝負の方が分があるでしょうし、フ

エリス王子はそういうのよりも頭を使った勝負の方が得手でしょうね。その中間の勝負事があればいいんですけど」

その後ローズは仕事があったのですぐに行ってしまったが、良い勝負を考えておくと云ってくれた。勝負についてリアナも思案したところだが、それよりもまずフェリスをどうやって勝負に引きずり込むかの方が先だ。

賞品はフェリスが勝ったらリアナが護衛を辞めて城を出るという事。実に不本意だがこの賞品はフェリスにとって効果があるはずだ。だがどれだけ効果があるのかは分からない。彼には“現状維持”という選択肢が当然あるのだ。

煽るのが一番簡単だろうが、そう易々挑発に乗るような相手ではないのは周りの人間であれば理解している。まして納得せず他人の意見を受け入れてくれるような純粹無垢な少年でも残念なならない。……下手にこちらから動かないほうが良いような気もする。

「とりあえず後でアルバートにアドバイスをもらおうかな。後はコイズとか……」

そういえばコイズとはフェリスの部屋で別れてから会っていない。部屋を飛び出したままでいらぬ心配をかけているのではないだろうか。

少しでも顔を見せに行った方がいいだろう。それに今の自分の気持ちをコイズにも聞いてもらい。ならば後回しにするわけにはいかない、今夜会いに行こう。

リアナは気合いを入れて――ひとまず甘いお菓子を口に放り込んだ。

冬の夜空は澄み渡っていて星の瞬きが良く見える。時折吹く風に身を震わせながらリアナは騎士の宿舎に足を運んだ。

しかしコイズをどうやって見つければいいのかということもリアナはすっかり失念していた。宿舎に着いてもどこで彼の居場所を聞けば良いのかすら分らない。時々すれ違う騎士たちが訝しげに外に立っているリアナに視線を向けて通り過ぎていく。

こんなことなら事前に連絡を取っておくか、ローズかアルバートに聞いておけば良かった。

今度通りすがった人に思い切って聞いてみよう、とリアナが思ったちょうどその時。

「レーベルト君」

宿舎から出て来た騎士に名前を呼ばれた。

精悍な顔立ちと貫禄を備えた顔。額には古傷のようなものがある。年は三十代にも見えるが、男の持つ雰囲気を感じ取ると四十過ぎにも感じられる。少なくとも騎士としてそう短くない経験を持っているのだろう。見覚えのある男性だった。

「……タクトの隊長さん、ですよね？」

以前タクトと武器庫を掃除した時に会った騎士だ。タクトがそう呼んでいたので、彼の隊長に違いないのだろう。

「そう言えば名前を言っていなかったか。私はザクス。タクトとコイズの上司をしている。…ところで君はどうしてここに？」

「あの、コイズに会いに来たのですが今どこにいるのか分からなくて…」

「そうか。それなら案内しよう」

思いがけないコイズ達の隊長——ザクスの申し出をありがたく受け取り、リアナは彼について宿舎の中に入る。

宿舎は廊下と片側に部屋が置かれた直線構造がいくつか交差した建物だった。外から見たところ二階建てのようだ。

リアナは真っ直ぐ伸びる廊下をザクスに案内されついで行く。二度廊下を曲がった所で廊下の先が騒がしいことに気がつく。食欲をそそる良い匂いで、辿りついた場所が食堂だと分かった。

「コイズはいま食事中でな」

「そうだったんですか。後で出直しますね」

「気にするな。どうせ食後もここでくつろぐ者は多い。よかったら君もなにか頼むと良い」

「そんな、私騎士じゃないですし…」

以前ミユナーに食堂を利用するように勧められた時と同じく、コイズが食事を用意してくれるので断ろうとした。だがそのまえにきゅーっと恥ずかしい音がお腹から聞こえてきた。

「……………騎士でなくとも気にする者はおらんよ。遠慮はいらない」

「は、はい…」

ザクスの申し出はお腹の空いたリアナにはありがたいものではあるが……一言くらいつつこんで欲しいと思ったり思わなかったり。

リアナは後で夕食を取ることを考え、とにかく空腹感を一時的に満たせられればいいような軽いメニューを選ぶ。

（明日の朝食は少なめにすれば、きっと大丈夫よねっ。…多分）

注文を受けたコックたちがカウンターの向こうに見える厨房で腕を振う。しばらく待てば、リアナは山菜と茸のサラダ、ザクスには拳二つ分程のパンを三つに豚肉のバター焼き、季節野菜の盛り合わせと川魚の蒸し焼き、それから綺麗に皮の剥かれたリンゴがプレートの上に乘って出てきた。

リアナは周りを見回す。部屋を縦断する様な長い机が二つ置かれていてそこで騎士たちは食事をしているが、どの騎士の食事もザクスのように大盛りだった。伊達に身体を使う仕事ではないらしい。

そうして騎士たちの様子を窺っているとテーブルの奥に見知った顔があった事に気がつく。

「ザクスさん、コイズがいました！」

隣に立っていたザクスも奥に目を向ける。

「ふむ……。さて、私はここでお別れしようか。一緒だとコイズと話にくいこともあるだろう」

「ここまで案内してくださってありがとうございます」

「とんでもない。それでは」

ザクスは近くの開いている席を見つけそちらに足を向ける。リアナは軽く頭を下げてからコイズの元へ行く。

リアナが傍によるとコイズは驚くほど静かに食事をしていることに気がついた。

一人、他の騎士たちから離れてぼんやりしているようにも見えた。彼の手は皿から離れて顎に当てられている。食事も減っていない様子だ。

てつきり皆と騒いで飲み食いをしていると思ったリアナは意外に思った。

「コイズ、こんばんは」

リアナはサラダの器とフォークをもったまま声をかける。だがコイズに反応はなかった。

聞こえなかったのだろうかと再度声をかける。それでもやはりコイズはぼーっと、まるで寝ぼけたように前を見ているだけだった。

「ちょっと無視なんて酷いじゃないっ」

いつもと違う様子に首を傾げながら肩を叩く。

すると驚いたのか足をテーブルにぶつけ食器に音をたててコイズが振り返った。濃い緑の瞳が大きく見開く。

「……リアナ……か……？」

「他の誰に見えるのよ。隣失礼するわね」

返事を待たず座る。コイズはまじまじとリアナを見つめた。

「なに？　なんか可笑しい？　やっぱり一人だけ浮いてるわよねー」

先ほどから視線を向けられているのは分かっていたが気にしないようにしていたのだが、知り合いに妙な反応をされると恥ずかしい騎士しかいない食堂に違う制服を着た少女がいたら気になるのも分かるのだが…。

しかしコイズはまだ目の前にいるのはリアナなのか確かめるように上から下に視線を動かしていた。てっきり大声で笑われると思っていただけにリアナは居心地が悪くなる。

「ちょっとホントにどうしたのよ。具合でも悪いの？」

「…いや、俺は大丈夫だが…お前は…？」

リアナの様子を窺うような、その殊勝なコイズの態度がまるで今までの彼のそれとは別物のようだった。

「私？　この通り元気だし怪我もしてないけど」

「本当に？」

「う、うん。本当だけど」

コイズが身を乗り出してリアナを見つめる。まるでその言葉に嘘がないか見定めようとするかのようなうだった。なんだか尋問されている気分になり、リアナはたじろぐ。

「でも………お前、泣いてただろ？」

コイズと共にフェリスの部屋を訪れた時、リアナは泣いて出て行った。そのことをコイズは引きずっていたのだ。それをリアナはや

つと気がつく。心配はされているかもしれない思ったが、目の前の気を使うような態度をとられるとは全くもって思っていなかったのだ。

コイズに心配をかけてしまっていたことを申し訳なく思う。コイズの表情を見てリアナはもっと早く会いに来て安心させればよかったと思った。それでも心配してくれていたことを嬉しくも思った。

「……心配してくれ本当にありがとう、コイズ。でもね、もう大丈夫だから！」

「でもフェリスはお前を……」

「分かっている。でも、うじうじ泣いてるのはもう嫌なの。だから真正面からフェリスとぶつかってみようと思うんだ。落ち込んでる暇なんてないわ。フェリスにもう宣戦布告しちゃったし」

「宣戦布告？」

コイズが不思議そうに訊ねる。リアナは自分が元気なのだとアピールするようにわざとらしく胸を張る。

「フェリスにね、私と勝負してもしも私が勝ったらもう一度傍に置いてもらえるように手紙を書いて送ったの。負けたら私が護衛やめることになるから正直ギリギリの提案だけどね。いまはどうやってその勝負をフェリスが受けてくれるか考えてるんだけど……なにかいい案ないかしら？」

リアナはてつきり元気そうな様子に安心して笑ってくれると思った。

しかしコイズはリアナの話を聞くと表情が和らぐどころか、だんだんと硬くなっていった。

「……………悪い」

「え？ なに？」

聞き間違いかと思ったので聞き返す。だがコイズはもう一度、はつきりと口にする。

「悪い…俺はリアナの応援はしてやれない」

「なんで…？」

てつきりフェリスとのことを応援してもらえと思っていたので思わずそう口にしていた。疑問を浮かべるリアナの視線をコイズは顔を逸らして背ける。

「……………本当はお前のこと応援してやりたい。できれば励ましてやりたかった。幸いにもお前にはその必要がなかったみたいだけど……………でもやっぱり俺は手伝ってやれない」

「コイズ？」

「俺は…知ってるから…」

「……………知ってる？」

音を立ててコイズは立ちあがる。拳を握りしめ、食堂の喧噪の中小さな独り言を——それでもリアナに聞かせる。

「あいつがづらい過去を思い出してるんだって気づいちまったし、分かったから。だから俺は、なにも、出来ない。俺は“あれ”を知っているから…ッ」

### 13 波紋すら抱いて(2)

コイズがなんのことを言っているのかすぐには分からなかった。

しかしリアナはハツと気づく。

コイズが言うフェリスにとってつらい過去とはきつと……王妃ソフィアが言っていた『とても大切な人を亡くしてしまったこと』だと思った。そしてその人がエリオルがフェリスに言っていた“ローシェン”という人なのだとコイズの言ったことを耳にして合点がいった。考えれば想像できたことかもしれないが、今までそんなことを考えている心境ではなかった。それを確かめるようにコイズに訊く。

「フェリスを……かばって亡くなったという人のことを言ってるの？」

「お前、ローシェンの話を聞いたのか？」

コイズが弾かれたようにリアナを見る。

「……名前は……なんとなくだけど。でも、フェリスがとても大切な人を亡くしてしまったと王妃様から聞いたわ」

「なら分かるだろう？ お前とフェリスに何があつたのか分からないが、きっとローシェンに関係してるんだって、あいつが亡くなったことを思い出してつらいんだってフェリスを見ればそれが俺には分かる。」

……俺はローシェンを亡くした時のフェリスを見ていた。だから今のフェリスの姿は……見られない。できればもう波風立てないでやってくれ……。俺だつてこのままじゃ駄目だつて分かっている。分かってるけど……お願いだ。そつとしておいて欲しい」

コイズの言葉は矛盾している。迷いが瞳に映っている。

彼は周りをちらりと見て席を離れようとする。周りが立ったままのコイズを不審に思い始めたようだ。

「………… コイズ、教えて。私はフェリスが大切な人が彼を守って亡くなったことを聞いたわ。でもそれも含めて彼を守りたいと思った。知っているからこそ、そこから彼を救いあげるべきじゃないの？」

何も知らなかったわけじゃない。ちゃんと彼が護衛を嫌う理由を知っている。知ったからなお一層、彼を守りたいと思ったのだ。

コイズは哀しそうに眼を伏せてかぶりを振る。

「知ってるからこそ、できないこともあるんだ」

それはリアナが眩しく思ったことの影の部分を垣間見たようだった。

「………… それにお前が聞いたことは所詮言葉だけだ。フェリスがローシェンを失った時どんな様子だったのか、どれだけあいつが傷ついてたのか、見てないだろ。………… 知ったような口を聞くなよ」

言葉に苛立ちを感じ取った。コイズの背中にはそれがあつた。だからそれ以上リアナが何か言葉をかけることはできなかった。

リアナの脳裏に単語が次々と浮かぶ。

独りよがり、傲慢、無神経、欺瞞……それらが重石となって軽い頭痛すら引き起こす。

でもどうすればいいのだろうか？

リアナはその時、その場所に、いなかった。それを未来から変えられるわけがない。それはもうすでに起こってしまったことで、人は過去に行って未来を変えることはできない。その場にいなかった者には彼の過去に触れる資格すらないと言ったのか？

違う。コイズが言いたいのはそんなことじゃない。

『知っているから、できないこともある』

コイズがその時フェリスとともにいて、一番近くでフェリスの痛みを見つめていたならば、それはリアナよりも深くフェリスの心を理解できるのだろう。

……ならば己がその時一緒にいたなら、そもそも護衛などにはならなかったのだろうか。フェリスに二度と同じ苦しみを味あわせないように、時間がいつか傷をいやしてくれることを願って――。

でも、とリアナは思った。

時間は確かに傷を癒すかもしれないが、ただそれだけで痛みが消えるとは限らないのではないだろうか。

リアナは家族も親族も失った。

その傷を失うことはないし、忘れることはないし、思い出せば胸がつかえる。ただ10歳の自分では気が狂ってしまう惨劇を、痛みを抱きながらも思い出せるようになった。しかし時間が経つのを待ただけで今のように思い出せるようになったのかといえば、きつと違うだろう。

リアナは一度絶望した。世界を諦めた。すべてを憎んだ。

温かい家族を殺されたことに憤り、孤独になった己に恐怖し、リアナの世界を破壊した全てを憎悪した。失うものなどなかった。だからこそ何でもできる気がした——それこそ、なんでも。

でもそこから救いあげてくれた人がいた。

絶望の闇からその白い腕で輝きの中に導いてくれた人がいた。諭された。世界にはまだ喜びがあることを。まだ生きる価値があるのだと。

全力で、真正面から、例えリアナが傷つけたとしても笑ったまま、抱きしめてくれた。

幾度も己の命を粗末した。そのたびにリアナを引き留め、叱り、涙し、そして笑ってこの世界の光を示してくれた。諦めを知らない、不屈の人がいた。

だからリアナは悲しい出来事を思い出として振り返ることができる。殺戮の夢は今もたまに見る。でもだからといって自分の命を粗末にしようなんて考えることは絶対にない。感情は溢れ出ても世界を見失うことはない。それは時間のおかげだけではなく、紛れもなくリアナを支えてくれた人がいたからだ。

もちろんフェリスに支えてくれた人がいなかったとは思わない。少なくとも、コイズはフェリスのことを想っているのだとリアナにも分かる。

でもコイズは躊躇ってしまふのだ。フェリスを想っているからこそ、最後までフェリスに残酷な仕打ちができないのだ。———どれだけフェリスがづらい思いをしていたのか、知………っているからこそ。

そっとしておけば癒える傷もあるだろう。でも薬や医者が必要な傷もあるように、自分では癒しようのない傷はある。たとえ患者に苦痛を与えようとも、その傷を治すためにそれが必要な医者はその苦痛を患者に与えるだろう。その傷が治ることを願っているから、例え苦痛を与えると知っていても治療をするだろう。

見守っているだけで何も変わらないのなら、望まれないと知りながらも手を出すべきなのではないだろうか、とリアナは思った。

(……………でもそれこそが、傲慢だと言うのに、ね)

悶々と出口の見えない思考を繰り返した。

コイズが出て行った食堂にいつまでいてもしょうがなく、リアナはとりあえずサラダをお腹に入れると居心地悪くその場を後にする。宿舎を出ると相変わらず風は止んでおらず寒さをあちらこちらとまき散らしていた。

リアナが既舎の後ろを通り過ぎた時だった。馬の嘶いななきと騒がしい声に気がついた。

そちらに目を向けリアナは啞然とする。

馬が暴れていた。

まるで激痛に耐え切れず暴れているかのような馬の周りに5、6人の騎士たちが慌てふためいている。彼らは手綱を掴もうと馬に近寄ろうとするが危険すぎてそれができない。もしも足にでも蹴られてしまったら怪我や骨折、打ち所が悪ければ命までも落としかねない。それがよく分かっているからこそ騎士たちは慎重に間合いを取っている。

だがその内の一人が馬の身体に接触してしまい転倒した。

「止むを得ん！」

騎士が抜刀する。

リアナはすばやく腰に下げているポーチから小瓶とハンカチを取り出す。小瓶の中身の液体を全てハンカチに染みこませた。

「どいて！」

騎士たちが駆けてくるリアナに振り返る。その間を抜け地面を強く蹴る。

わずかな浮遊感の後の衝撃に顔を顰めながらも必死に手綱を握る。リアナに飛びかかれた馬はさらに混乱したように身を震わす。

馬がはねるたび身体と馬の胴体がぶつかる。その痛みを奥歯を噛みしめ耐え、馬の顔面に手を伸ばす。片手で手綱を離さないようにしがみつく。

痛みに耐えているとやがて馬は静かになっていく。薬の効果が出

てきたようだ。

「……っ!？」

そこで最後の足掻きだというかのように馬が大きく跳ねる。油断していたリアナは手綱から手を離してしまった。

幸いだったのが投げ飛ばされた方向だった。空に向かって飛ばされたリアナは宙で体制を整え、まるで曲芸師のような実に美しい着地を決める。もしも地面に向かって叩きつけられていたら大怪我は免れなかっただろうが。

散々暴れていた馬は力尽きたように地面に倒れた。

リアナが馬に嗅がせた薬は自前のもので、対人間であれば少量を湿らせてある程度嗅がせれば意識を朦朧とさせ、その後気絶させることができる代物だった。が、動物、しかも人より身体の大きな生き物に使用を試した事がないため適用量が分からなかった。だからリアナは薬を全て使ってしまったのだった。

「大丈夫かい!？」

騎士たちが投げ飛ばされたリアナに駆け寄ってきた。

「なんとか……」

「お嬢ちゃん、手を擦りむいてるよ」

指摘された通り見れば手の甲がつつすらと赤くなっている。だが舐めておけば治る程度の傷だった。

「これくらい平気です」

「そういうわけにはいかないぜ。医務室にいったほうがいい」

「本当にたいしたことありませんから」

「嬢ちゃん女の子なんだからこんな傷でも放っちゃいけねえよ」

「そうだぜ。俺らなんて傷が出来たら勲章モノだが、嬢ちゃんに傷が残ったら事態を収拾できなかった俺らの立つ背がまるでねえ」

そうだそうだと頷く騎士たち。真剣な眼差しをいくつも受けてしまいそのまま立ち去ることが難しくなってしまった。

仕方なくリアナは医務室へいくことにした。怪我をしたのは嘘ではないのだから、治療を受けても悪くはあるまい。

恐縮しながら騎士の付き添いまでしてもらって医務室へ向かう。付き添いの騎士は「手際の良さに感服した」とか「着地がすばらしかった」とか「いつたいお嬢ちゃん何者なんだい？」とか「どうやって馬を大人しくさせたんだ？」とか賛美や疑問を次から次へとリアナにぶつけてきて、苦笑するしかなかった。

着いたのは医務室といっても以前訪れた城内のものではなく、騎士の宿舎に併設された建物であった。扉を開けて入ると中は宿舎よりも暖かった。訪れる患者のためだろうか。

「先生、この子の傷診てもらえますか？」

白衣を背にしていた医師は体を捻って肩越しにリアナたちを見る。でっぷりとした身体に白髪頭の初老の男性——以前フェリスに医務室へつれていかれた際に治療してくれた医師、エダンであった。

#### 14 波紋すら抱いて(3)

「まったくまったく！！　ここの者たちは簡単に傷をつくって医務室に入り浸る！　少しは自分の身体を大事にせんかッ」

リアナを椅子から見上げた医師エダンは悪態をつくようにそう零す。どうやらリアナのことには気がついてないようだった。

「先生、そう言わないでくださいよ。俺ら騎士なんですから」

付き添いの騎士をエダンは眼鏡の奥から忌々しげに睨んだ。

「お前たちが引つ切り無しに傷をつくるからわしの休む暇がない！」

「仕方ないですよ。それが先生の仕事なんですから」

「わしの身体を労わってちつとは訓練でもなんでも手抜きをせんか！」

「そんな怠惰な騎士がいたら隊長たちにこつてり絞られますよ」

相変わらずやってきた患者に何かいわずにはいられない医師のようだ。騎士は真面目に受け答えしているが、頬はまるで笑いを堪えるかのようにひきつっていた。

そこでやっとエダンは自分の患者をじっくり小さな瞳に収める。焦点の調節するように眼鏡を指で押さえた。

「なんじゃ。アンタもまた怪我したのかい！」

「す、すみません」

「いいから患部を見せなさいッ。どうせ病気ではないのだろう！」

まるで叱られているようで、リアナは恐る恐ると手をエダンに見せる。手の甲にはちょこんと血が出ていたが、大げさに医師に診せるものだとは思えない。リアナは冷や汗を流す。

エダンはじつと怪我を見た後、先端に綿を付けた棒を机の上の瓶の中に一度入れて取り出す。それから薬を含んだ綿をリアナの手の甲にとんとんと丁寧に押し当てた。

てつきりこれくらいは怪我で！ と怒られるかと思っていたが、エダンは実に誠実な仕事をしてくれた。薬だけでなく包帯までもしてくれる。

「これで心配なかつた。さあ帰った帰った」

「ありがとうございました」

リアナは頭を下げて付き添いの騎士と共に医務室を出ようとする。しかしなぜか呼びとめられた。

「……お嬢ちゃんはおつと残りなさい。そつちの騎士の坊やはいらんぞ」

「でも俺は彼女の付き添いで——」

「傷の手当はもうしたじやろうが！ それともなんだ、わしの腕が信用できないとでも!?」

「いえいえいえいえッ！ そういうわけではないですよ!?」

「じゃあ出て行きなさい！」

医師の気迫に負けた騎士は申し訳なさそうにリアナを見て、「ごめんね」と言うように片手を顔の前に上げてから医務室を出て行った。

それを見送ったエダンはリアナをもう一度椅子に座るよう促す。

「……………全く、痛みを我慢しても仕方ないじやろうが」  
「はい？」

とぼけたようなリアナの返事にエダンは眉間にしわをつくる。

「本当は手の傷だけじゃないのだろう。歩き方が変じゃったぞ」

鋭く指摘され、リアナは舌を巻いた。普通に振舞って騎士たちにはばれなかったのに、目の前の医師には簡単に見抜かれてしまった。

「嘘はつくんじゃないぞ。わしの見たところ左足はまず怪我しているとみて間違いない。しかも複数箇所痛いところがありそうだ。どうかの？」

正直に言うべきか逡巡したものの、せっかくエダンが配慮して騎士のつきそいを帰してくれたので素直になることにした。

「右上腕部と左腹部、左脹脛を打撲しました。痛みはありますが、湿布を当てがっておけば治る程度だと思います」

「そう言って自己申告する者ほど信用ならん」

医師はリアナの腕に軽く触れる。リアナは本能的に身を引いた。

「……………痩せ我慢が美德だと思うなら今日からその考えを止めるべきじゃ。わしが手を出すのも年若いアンタじゃ抵抗あるだろう。湿布を渡すから自分で患部に当てておきなさい。それがすんだらあちらのベッドに横になって安静にきなさい」

「湿布だけで十分です」

「いいや。アンタは痩せ我慢して歩いておった。誰か連れてきてア

ンタの部屋まで運ばせてもいいが、アンタはそれを望みはせんだろう。なら大人しく今日はここに泊って行きなさい」

「大丈夫です。これくらいの怪我で動き回ったことはしょっちゅうありましたから」

「そうかいそうかい。それは馬鹿な経験をしたものじゃ。だがわしの患者である以上そういう真似はさせないことにしておるのだな」

だから諦めて横になりなさい、とエダンは諭す。それでもリアナは頑なに拒む。

「何を意固地になっておるのやら。そんなに医務室が嫌いかね」

「そういうわけでは」

「寝るだけならどこでも変わらんじやろ。それともアンタは豪華な枕じゃないと寝られない性質たちかね」

「違いますっ。そうじゃなくて……」

「そうじゃなくて？」

リアナは躊躇いながらも、医師の勧めを断るためはつきり言うことにした。

「できればフェリスの近くにいたいんです。近くって言うてもどうせ部屋にはいれてもらえませんが……なるべく近くにいたいんです。何かあつた時のために」

夜は一応勤務外ではあるが、できるだけ近くにいたいのだ。夜中、とくに一番明け方が危険だと言う事を、あいにくリアナは施されていた教育から十分理解している。フェリスには知らされてないのだから、東塔の警備が一番強いのはリアナが傍にいられない特に夜半過ぎから明け方である。それでもリアナの部屋にはフェリスの部屋に侵入者があつた時のための“仕掛け”があるし、異変に気がつ

いたときに行動を起し易い場所でもあった。だから出来れば自室で寝たかった。

しかし医師は納得してくれるものだろうか、と顔色を窺うと、エダンは神妙な表情で黙りこんでいた。説得が上手くいったのだろうか。

「アンタはフェリス様の護衛だったか」

エダンは細く長い息を吐く。その姿は澁刺<sup>はつらつ</sup>として年齢を感じさせなかった医師を、年相応の、あるいはもっと年をとった老人に見せていた。心なしか肩が落ちて背中も曲がっているようだった。

「どうかしたんですか？」

「いや、なに。あの方の護衛には思う所があつてな」

そういえば、エダン医師は以前フェリスに護衛がつくことになったことを聞いて驚いていた。それ思い出し、リアナにはあることが思い浮かぶ。聞こうかどうか迷って、胸が少しどきどきした。

「あの………先生はローシェンさんという方のことを知ってますか？」

訊いてしまった。

リアナは額に薄い汗を浮かべながらもぐつと唇を噛みしめる。

エダンといえは瞠目していた。

「アンタ、ローシェン・ワンルイを知っておるのか」

「わんる……？」

「彼の姓<sup>ラストネーム</sup>じゃ。それは知らなかったのかい？」

「……なんというか、フェリスを以前護衛していた人で、名前はそんな感じの人くらいしか知らないの。……あと亡くなったことも」

エダンは椅子からお尻を持ち上げ座りなおす。眼鏡を指で何度も押し上げ見定めるようにリアナを小さな瞳でぱちぱちと見やる。

「わしは薬剤師の資格も持っていてな。薬草園をよくいじくっておるんじゃが、ワnlルイは珍しい薬草に知識があつたものだからそれなりに交流を持っておつたよ。それで、なにが訊きたいのかね」

エダンはリアナの言葉を見越していたようだった。リアナは戸惑いながらも、ずっと誰かに訊いてみたかつたことを口にする。

「ローシェンさんって、どんな人だったんですか？」

フェリスをかばって亡くなった、彼のとても大切な人。

どれだけ想像してもちつともどんな人か分からなくって。でもなんとなく、優しい人だったんじゃないかと思つて。でもやっぱり想像の域を出なくて。

「どんな人、か。ふむ。何から話したもののか……」。

そうだな、年齢は亡くなった時……42？ いや、43歳だったかな。浅黒い肌のなかなかの大男だったの。この国の人間でなく、ずっと遠い東国からやってきたそうだ。どうも陛下が若い頃城下で遊びまわっていた時に仲良くなったとかどうとかだったかな。その関係で武術にも長けたワnlルイをフェリス様の護衛兼教育係に頼んだそうじゃ」

遠い東国とはどんな国なんだろう。今まで耳にしたことのある国？ それとも想像もつかないような未知の国？ あんまり若いんだなあ。大男ってコイズよりもおっきいのかな。陛下と仲良くなるなんてそうそうないよね。どうやって出会ったんだろ。うんうん、それから？

「わしは分野が違うので断言できんが、戦略知略にも通じ、剣術武術も親衛騎士の隊長に見劣りすることもないほどの腕前だったとか耳にしたことがある。陛下が護衛を頼むほどであるからこの医務室にひっきりなしにくるようなヒヨッコでないことは確かじゃろう。

見た目は頑丈そうだが内面は穏やかな男でな。いや、穏やかというかいつでも落ち着いた雰囲気を持っておったというべきか。物事を見渡し、見通す力の持ち主だった。見た目は城ではこれ以上なく目立っていたが、それとは別の存在感があって……あれはなんといえればいいのか分かんない……」

リアナはエダンの言葉をひとつひとつ慎重に拾い上げ、ローシェン・ワンルイという人と出会っていく。

「そうそう。フェリス様は親しみを込めて『先生』と呼んでおったな」

……親しみを込めて、か。

なぜだろう。以前感じたような小さな感情を——フェリスに大切な人がいると知って感じた想いと似たようなものが心の中にぽつんと浮かんだ。でもやはりエダンが話すことよりも大事なものとは思えず、リアナはそれをすぐに忘れた。

「先生、だなんてあのフェリス王子が言うなんてあまり想像できま

せんね」

「はっはっは。フェリス様は今はあれでも小さい頃は無邪気な方だったからの」

「無邪気……。もつと想像できません」

あのフェリスが無邪気とは。生意気で扱いにくい子供だったんじゃないかと思っただけに意外だ。

「あまり大きな声では言えんがね、無邪気というか、良い意味でも悪い意味でも王族の子供だったというかな。周りから傳かすかれ何不由ない生活をしていたのだから、仕方ないといえば仕方ないのだろう。本人が知らぬうちに周りよりも上の存在であることを求められ受容させられていたのだから、その上で驕おこるのが全てその子のせいかと言われれば、わしは違うと答えるな」

婉曲的に表現しているが、つまり裏表はないが我儘で子供ながら威張り散らした少年だった、ということだろうか。

今のフェリスは、捻くれてて偉そうで無愛想だがまともな——それこそ庶民的感觉も持ち合わせた思考の持ち主だ。王子扱いが嫌いな所は彼の中に“驕り”という言葉を持っているとは思わせない。別人の幼い頃の話をされている気がした。

「しかし今のフェリス様よりは子供らしくて可愛らしかったのは確かだのう。少しは昔の奔放さを残していたら苦しむこともなかったじやろうが……。いや、あの事件があつたからこそ変わられたのか」

エダンは丸めていた背中をすつと伸ばす。眼鏡の奥の瞳はあまりにも真剣だった。

急に態度が代わり、静かに聞いていたリアナは緊張した。なにか

大切なことをつきつけられるのではないかという——予感がした。

「……今日アンタに会ってワnlイのことを話すことになったのは、わしがアンタにこれを言わなきゃいけないからだ、いま、思ったよ。……フェリス様の護衛であるアンタなら、知る資格があると……忠告を受ける権利があると思った。わしは医師だ。だがそれ以上に、人としてアンタに伝えなきゃならん」

ごくりと喉が鳴る。

それはリアナのものか、エダンのものか。

「ワnlイが護衛だったことはアンタも知ってるようだが、その死に際に関して聞き及んではないじやろう。知っていても進んで教えないものでもないだろうしの。でももしかしたらアンタも同じような……酷い目にあうかもしれない。フェリス様の護衛に限らず、陛下やエリオル様の護衛たち、いや騎士たちにも当然言えることじゃ。でも若いあんたじゃ死ぬ時のことを想像することはあまりないだろう。」

だからこれは人生を少しばかり長く生きてるわしからの忠告として受け取って欲しい。聞いた上で護衛を辞めても誰もアンタを責めたりはせん。わしがさせん」

「……聞かせてください」

「ああ、そうしようとも。アンタが想像するのは酷い光景かもしれない。でも想像しなさい。自分がその危険と隣り合わせであることを自覚するべきだ。だからわしは話そう。わしが知っている、ローシエン・ワnlイの最期を」



#### 14 波紋すら抱いて(3) (後書き)

ローシエンのラストネームをどこかで書いていた気がしていたのですが…

今回が初出でなかったらと思うと恐ろしいです。

## 15 波紋すら抱いて(4) (前書き)

前半は雰囲気が多少残酷かもしれませんが。

ほとんど描写はしていないつもりですが、ほんの少しでもグロい雰囲気駄目

という方は中盤までスクロールを推奨します。

## 15 波紋すら抱いて(4)

八年前の晩春のことだった。

エダンが呼ばれたのは昼過ぎの午後だった。食事を済ませた後で少々眠たかったが、医務室の備品補充のリストをその日の内に作らねばならなかったので、時々やってくるサボリの使用人たちをあしらいつつ足りないものをチェックしていた。それでもいつものようにさして特別な日ではなかった。

騎士が息を切らして医務室に駆けこんでくるまでは。

汗だくの騎士が告げる内容にエダンは一瞬呆けた。でも次の瞬間自分でも驚くような瞬発力で部屋を飛び出した。

騎士はエダンを南東に当時建てられていた小さな小屋へ案内する。普段は庭師が使う刈り込みハサミやナイフ、籠、梯子、鋤、箒などをしまつ物置小屋になっていた。しかしエダンがその小屋を目にした時心臓が嫌な音を立てて跳ねた。

小屋の周りには多くの騎士たちがいた。その半分近くが地面に伏していたり、膝をついたり、身体のだこかしらから血を流していた。彼らの治療をするために他の医師たちが走り回っている。辺りに血の匂いが充満していた。

「なんということだ……」

怪我人は見たところ十数名だろうか。騎士たちの訓練で事故があった、と考えるには無理がある。ならばいい——……？

医師としてやってきたというのに自分の役目を忘れたように立ち尽くし惨状を見渡していたエダンは、騎士や医師たちの怒号や呻き声の中に子供の声が混ざっていることに気がついた。

声のする方へ視線を向けると、小屋の反対側で7、8歳くらいの少年が、まだ年若い騎士に身体を抱き込まれたまま暴れていた。少年は小屋に向かって手を伸ばし、眼から涙をこぼしながら叫んでいた。

彼らに引き寄せられるように小屋の裏にまわったエダンは、少年が必死の形相で見つめている先に視線を向けて―――すぐに目を背けた。

なにか、今、見てはいけないものを見たような気がした。いや、なにか、ではない。ほんの一瞬しか視界に映していないはずなのに、脳裏に刻印されたかのように焼きついていた、だから、なにか、ではなく。

誰か、が。

エダンは青ざめる顔の下半分を手で覆いながら、それでも医師として顔を上げた。

「あ…… ああ……」

とても言葉にできなかった。名前を呼ぶような……そんな頭のまわったことはできなかった。わけのわからない恐怖の悲鳴を口から漏らすしかなかった。

（神よ、なぜこんな……）

目に浮かんだ涙のせいで視界が歪んだ。だがそれは現実を変えてくれるものではなく、ただエダンが小屋の壁に寄りかかっている存在を見えなくさせただけだった。

震えていた足が身体を支えきれずその場に崩れ落ちる。

人を救うためにここまで駆けて来たのに、医師として立ち上がることもできない。

でも、とてもじゃない。

とてもじゃないが、あれを生きていると言うにはあまりにも――

「先生ッ、先生、うわああああああ！！！！！！」

悲痛の叫びが鼓膜を震わす。その叫びが自分が目にしたものが確かに、ささやかな交流を共にした友であったことを、肯定する。

……小屋の壁に縫い付けられた赤黒い身体の持ち主が、ローシェン・ワンルイで間違いないのだと現実を知らしめる。

男の身体には無数の刃物と杭のようなものが突き立てられていた。それがどういう風だったかは脳裏にあっても思い出さたくない。エダンは必死にかつての友を思い出そうとするが、それはすぐに血に染まった残酷な姿に変わってしまう。

——それは、今でも。

「……………後で聞いた話だ。ワンルイはフェリス様を護ろうとした際に負傷、そのままフェリス様を城内に侵入した賊が連れ去ろうとした。」

だがその賊の中に……………言うのも腹立たしくておぞましいが……………最低な趣味をもった獣のような者がおつてな……………。ワンルイが身体の痛みに耐えている間だけなら、フェリス様を連れていくのを待ってやる、などと言っておつて……………」

それ以上を、聞くまでもなかった。

……………きっと彼は耐えたのだろう。  
身体を蝕む激痛を耐えた。だから、フェリスは助かった。

たとえその命を失うことになったのだとしても——

「異変に気付いた騎士がその場に駆け付けた時、わずかに間に合わずワンルイは絶命した……………。フェリス様が助かったことを、あと少し、見るのが叶わなかった……………それでもあやつは、……………」

ローシェン・ワンルイは、

「最期まで、“護衛”だった」

エダンは背もたれに体重を預けたまま医務室の天井を見上げた。  
それから椅子を軋ませながら身体を起こした。

「……………フェリス様が傷つけられたわけじゃない。浚われたとしても、城には優秀な騎士たちがいる。賊だつてすぐに捕まっただろう。ワnlイがその事を分からなかったとは思えん。しかし、戯言かもしれない、嘘かも知れない賊たちの言葉を信じて痛みを受け入れ、そしてあやつは死んだ」

「……………」

「ワnlイが他の最善手を思いつかなかったとも思えんのだ。なのにあやつは、賭けのような提案に乗ってあげく死んだ。わしには分からなかったよ。でもあやつは……………“護衛”だった。フェリス様を護るために自ら苦痛を選び、耐えたんだろう」

「お嬢ちゃん」とエダンは呼びかけた。

「アンタはワnlイの最期を聞いてもちつとも怖いと思わんかね。身体に刃を突き立てられる苦痛、恐怖。アンタが護衛を続けるなら同じ位酷い状況に会うかもしれない。いや、ワnlイの場合自ら選んで受け入れた苦痛だ。だがアンタもまた苦痛を選ぶ状況になるとは限らない。いや、なんの前触れもなく襲われることの方が多いのかもしれない。護衛とはただフェリス様の傍にいれば務まる仕事じゃない」

「アンタはいつでも殺される場所にいる。それを忘れちゃいかん」

リアナは思わずエダンから視線を逸らした。

……忘れていたつもりはない。

でも実際に同じような立場の人間が目も覆いたくなるような殺され方をしたことを聞いてしまうと、背筋にぞくりと這い上がるものがあった。

それは決して強い感触ではないが、皮膚を微かに、でも確かになぞられているような不快さだった。

そして家族を殺された時のことを思い出してしまふ。

縦に切り込まれた隙間の中に外の様子が見え、色んな音が重くて不気味な空気を震わせる。悲鳴と怒号、血飛沫、たくさんの影、鈍い肉の裂ける音、おじい様の背中……………。

護衛とは、“あの中”に、わたしが立っていることと同じ——？

我に返り、リアナは胸元を握り締めた。心臓が五月蠅い。

「もしもお嬢ちゃんが危険に飛び込まなければならぬ状況があった場合、任務を放棄するという選択肢はあるだろう。しかしわしの見たところアンタはそういう真似ができるとは思えん。いや、例えたとしても自分の選択を後悔して苦しむのが見て取れる」

「……その通りです。自分だけ逃げたらわたしは……絶対後悔します」

かつてリアナは後悔した。

一人だけ残ったことを。力がなかったから、誰も助けられずただ

ただ守られ庇われて一人だけ生き残ったことを後悔した。

だからもう守られるのではなく、誰かを護れる人間になりたいと思ったのだ。自分を“護って”くれた家族たちのように。絶望の淵から救いあげてくれたあの人のように。

そこでリアナは今の自分を頭の中で振りかえった。そしてなぜか、  
(わたし、また守られてる……？)

そんな想いに駆られた。

フェリスが自分を守ってくれているのではないか、という想いに。

(まさか、ね。わたしはいつたい何を考えてるのかしら……)

思わず額に手を当てる。

しかし……もしかしたらフェリスは誰よりもリアナの立場を心配していたのではないだろうか。

いいや。初めからそうだったではないか。

リアナが怪我をした時、彼はいつも気にかけてくれていたではないか。いつもフェリスは護衛を厭っていたからそういう風に考えたことはなかったけれど、彼は誰よりもリアナがいる場所の危険を気にかけてくれたのではないだろうか。

——だから、わたしを危険から引き離すためにわざと自分から遠ざけようとした？

——今回のことに限らずいつもそっけない態度を示すのはそのため？

……なんと自分に都合のいい解釈だろうか。

フェリスに本当は嫌われていないだなんて、自分がそう望むから

彼の態度を歪曲して受け取ろうだなんて、馬鹿馬鹿しくて愚かで恥ずかしい。彼は護衛が嫌いだから、リアナが馬鹿な真似をしたから拒絶したではないか。そんなの自分で分かっているじゃないか。

それでも、あるいはフェリスなら——と思う自分も確かにいた。

だって彼は物言いは酷いけれど悪い人じゃない。怪我をしたら心配してくれて、王妃に一人で会うのが不安な自分に文句を言いながらもついてきてくれたり、歩けない自分を背負ってくれたり、そういうちよつと分かりにくいけどたぶん、きつと……認めるのが癪だけれども……、優しい人だ。

だから、もしかして……？

なんだろう。ただの可能性なのに胸が熱くなる。情けないのに、なんだか嬉しくて力が湧くような気がする。

（変なの）

胸が温かくて、先ほどまで感じていた這う様な気持ち悪さはもうなかった。それどころかなんとしてもフェリスと勝負して、勝って、また護衛をやってやろう、という気持ちの昂りさえあった。

たった今、エダンに自分がどれだけ危険な場所にいるのか教えてもらっているのに、自分が目にしたことのある悪夢が自分の身に降りかかるかもしれないのに、辞めようと思うどころか護衛をなんとかしてでも続けたいという気持ちがもっと大きくなっていく。

（わたしって正真正銘の馬鹿かもしれないわ）

リアナはギュツと拳をかたく、強く、握りしめた。

「アンタは任務を放って逃げるなんてできない。だからアンタは積極的に危険な選択を取るだろう。それは苦痛を受け入れるか否か二択あるようで、ほとんど選んでない。なぜならアンタの中でな選ぶまでもない選択だからだ。……それならいっそそんな選択をしなくて済むように、いまのうちに護衛などやめなさい。もっと自分を大切にしたらどうだね。」

もしも護衛をやめるとしても、お嬢ちゃんは何にも気にしなくても良い。怖くなったって良い。それが普通だ。だから無理はしなくていいんだ」

エダンは優しくリアナの肩を叩いた。その肩は細く、とても死への恐怖に耐えきれるようなものだとは思えなかった。

彼には孫がいた。リアナより10歳ほど年下の小さな孫だ。もしも彼女がリアナと同じ年頃になって護衛をするなどと言ったらエダンは猛反対するだろう。リアナは孫ではない。だが孫のことを考えれば自然とリアナが受ける苦痛を忠告してやって、危険な場所から離れて欲しいと思うのだ。

「とにかく今日は医務室に泊まって行きなさい。フェリス様が心配なのは分かったから騎士の誰かに……」

「先生」

ちょうど湿布を用意しようとしていたエダンは、強い語調の呼びかけに振り返った。

「なんだね」

「色々お話をしてくれてありがとうございました。先生のおかげで決心が付きました」

「なに？」

エダンは思わず上ずった声を上げた。

いままで護衛がどれほど危険か指摘していたつもりだからリアナの返事はそれに対してのものだと考えたほうが自然だ。だがリアナはやけにすっきりとした顔をしている。なにか別の話をされているような――

「相手の様子見て、つてのはやめます。もう本当に私ってダメダメですね。フェリスの出方なんか待っちゃいられません。場合によってはぶっ壊します」

意味が分からずとも、とにかく物騒な発言にエダンは冷や汗を流した。

「な、何を？」

椅子から立ち上がったリアナは腰に両手を当てて、小さな子供のようによりと笑った。

## 16 そして幕が開く

一心に文字を目で追った。ただただ与えられる世界を自分でかみ砕き、再構築させていく。

隙間風を感じて顔をあげると蝋燭の灯が机上で揺らめいていた。蝋がすっかり短くなっていて、どうやら長い間本を読んでいたようだった。……そろそろ湯浴みを済ませなければ。

灰色の髪の子は取っ手の付いた燭台を掴み部屋を出ようと扉まで移動しようとした。しかし途中で一對のソファの間にあるテーブルの上に置いてある白いものが、青暗い中に滲んでいることに気づく。火を近づけるとそれが便箋であることが分かった。

（アルバートめ……）

フェリスは手紙を手にとるとぐしゃりと握り潰した。持って帰れと言ったというのに。フェリスは潰した手紙をごみ箱に放り捨てた。

侍女といい、なんでこうも煩わしい事ばかりする者が多いのか。国王が護衛を自分に付けると言い出したことから全てが狂った。それなりに心乱されることのない日々を送っていたと言うのに、今の自分と言えば波風を立てられ、しかもそれに対し子供のように苛立っている。おかげで最近妙に疲れる。

国王が護衛をつけるだなんて言い出さなければ良かったのだ。いや、せめてあのリアナ・レーベルトでなかったならまだ良かった。

護衛になった人間が、それなりに仕事をして俺に干渉などしないような人間であればよかったのだ。危ないと思ったら護衛対象を放って逃げるような、そんな無責任な人間だったならどんなに良かったか。

しかし残念ながら、リアナ・レーベルトはフェリスの望む人物ではなかった。

フェリスを放り投げて逃げるどころか、彼女は剣を握って躊躇いもせず戦う人間だ。護衛として当たり前といえそうだ。だがあることにリアナ・レーベルトは自らが傷つくことを躊躇わない。護るためなら、それが必要な自分から傷つく人間だ。

……だからフェリスは以前、リアナが嘘について自分の命を狙っているのだと疑い切れなかったのだ。

フェリスの命を狙っている人間が、あるうことにその人物が死ぬ千載一遇のチャンスを邪魔して、あまつさえ自分が怪我をする。しかも全く躊躇いも見せず。

だからこそ、フェリスはリアナが刺客ではないのかもしれないという気持ちがあった。

もちろん、今でも完全に疑いを消したつもりはない。

それでも最近の自分は少しかり彼女に気を許していたようにフェリスには感じられた。それはリアナがあまりにフェリスに対して無防備過ぎたからに違いない。いや、フェリスだけに限らずローズや、コイズ、アルバートたちに対しても。

剣を握っていない時の彼女は本当に、普通の少女なのだ。

だからこそ、護衛なんて止めて普通に幸せな生活を送ればいいのと思う。

そもそも護衛など馬鹿馬鹿しいのだ。自分よりも他人を優先してどうする。護衛とて人間だ。殴られ蹴られ、斬られたら簡単に傷つく。

人間など酷く脆いなど、そんなことはとうの昔から知っている。傷つけば痛いだろう。傷によつてはそれ以後の生活が困難になる場合もある。それでもそれ以上に、死んだら何にもならない。

他人の人生のために自分の命を投げ出してどうするというのが。

そんなのただの草木の肥料のようなものだ。肥料ならまだいい。草木をささえるただの土の一粒にしかないかもしれない。哀れで、馬鹿馬鹿しい。虚<sup>むな</sup>しいだけだ。

こんな自分のためにそんな馬鹿をする必要などないというのに。美しい大輪には支える価値はあるかもしれない。その花は虫たちに蜜を与え人の目を喜ばせることができる。

でもただの雑草はなにも与えることができない。ただ生きることしかできない。守られる価値などない。

そうだ。自分に、誰かの命を犠牲にしてまで生きる価値などない。もしもそんな人間がいたのなら……いや。“彼”は……。

「先生は、馬鹿だ」

ローシエンは強かった。聡明で、人のために多くのことを成せる人だったと思う。彼はまさしく誰かにとって価値のある人間だった。それがこの無駄な命のために、たった一人の子供のために、多くの人のための命を捨てた。

申し訳なくて、ふがいなくて、だれよりも慕っていた人をよりによって、護る価値もない自分のせいで亡くした。いや、自分が殺してしまった。

「くそっ」

フェリスは燭台を持っていない方の手で扉を強く叩いた。

過去のことを思い出すと、哀しみ以上に自分に関する全ての情けなさややるせなさで自分自身に苛立って仕方がない。苛立ち、哀しみ、そして怒り……………あらゆる感情が湧きだしてくる。

しかし短くない時間をかけながらもフェリスは落ち着きを取り戻す。一度大きく深呼吸して、胸のあらゆる感情を全て吐き出した。今は何も考えず入浴を済ませて寝よう。感情をあちこちに揺らすとそれだけでとても疲れる。

フェリスは書斎を出て、廊下に行く扉を解錠する。手にしていた燭台の火を吹き消して脇の小さな棚の上に置く。

ノブを回して押すと廊下から冷たい風が流れ込んできた。

「……………」

フェリスは刹那、部屋に戻ろうとしたことを屈辱的に思った。その感情を押し殺し、何も言わずに扉を閉める。なにも見てないし、誰かがいたとしても関係ない。廊下を急<sup>せ</sup>くように歩きだす。

「逃げるの？」

ぶわっと苛立ちが膨らんだ。

先ほどまでの渦巻く感情が一瞬で呼び起こされ、たかが一言に心の内が騒ぎ出すと言うことが許せない。

そうだ。これは挑発だ。感情に流されてそれを素直に表現したところで、後悔するのは自分なのだ。自分の情けない姿を晒すなど笑止。さらに相手の思惑に乗ってどうする。

それに逃げると思われてもそれがなんだというのだ。“逃げることを確かに自分は望んでいる。ならば言い返すこともない。言わせればいい。その侮辱など失うものに対してさして比べるまでもない瑣事<sup>さじ</sup>”。

だから止まらない。言い返さない。振り向かない。

「……………ローシェンさんのこと聞いたわ」

これは……、とフェリスは思った——自然と足が止まる——これは、なんとも卑怯だ、と。

「そうか。ならば早く護衛など止めて城を出ることだな。死ぬなどごめんだろ」

足よりも唇が動く。反応してしまったことを後悔しながらも、フェリスは結局返事を待った。

「わたし言ったわよ。『死なない』って」

靴音がして、相手が自分に近づいてきていることが分かった。それでも身体は動かない。

やがて視界に青い服がひらりと舞った。

同時に額にこつん、と何かがあたり、思わず目の前の相手の顔を見てしまう。琥珀の瞳がまるで初めて見るように美しいと思った。

「わたし、案外あなたのこと気にいつてるみたいだわ」

額から彼女の指先が離れる。リアナは苦笑を浮かべていた。

「だから、このままは嫌。つまらない」

「何が言いたい」

「フェリスが言い返さないのはつまんない。ム力つくけど、黙りこんで部屋に籠ってるあんたは嫌」

「……そんなのお前の勝手だろ」

「うん、勝手ね」

リアナは腰に両手をあてて胸を張る。

「例え護衛という立場が危険であっても、それすらも受け入れてわたしはわたしの意思で護衛でいたいわ！ 決めるのは私。あなたじゃないのよ！」

強い眼差しをするリアナを見てフェリスは内心で舌打ちをした。

……きつともう、フェリスがいかにかに冷たい言葉をかけてもリアナは逃げたりしない。逃げるところか、自分の方が逃げようとしている。それをフェリスは心で制する。

「ところでわたしの手紙を“聞いて”もらったと思うけれど。返事は頂ける？」

手を後ろで組んでのぞき込んでくる少女。その顔は高慢そうでしかし隙がない。こういう顔もできるのか、とフェリスは妙に感心した。だが返事はしなかった。

反応を見せないフェリスにかリアナは溜息をつき、それでも不敵な笑みを唇に浮かべた。

「フェリスはあの手紙の利益メリットが分かってないのかしら」

「……お前を完全に排除するか現状維持か、その話か」

「それはちよつと違うわね。現状維持、つて無理な話よ。わたしはもうあなたが嫌がっても傍にいるつもりだもの。ううん、最初からそのつもりだったわね。でもそれを……いつからか忘れていたわ」

リアナは少しだけ目を伏せた。

「それにね、フェリスは勘違いしてると思うわ」

「勘違い？」

思わず聞き返すと王子の護衛はにこりと微笑んだ。フェリスはその笑みに本能的に身がまえた。

「現状維持なんて無理なの。だってわたしから見ればフェリスの部屋の鍵なんて鍵がかかってないことと同じだもの。鍵開けて、割と得意だったのよ。でもね、そんな技術なくなつてやろうとすれば扉なんて開けられるでしょう？ 壊せば開くのよ」

ぞくりとしたものが背中を走る。

それは恐怖ではない。なにか相手に畏怖を覚えるような種類のものだった。

「わたしはもうあなたに何言われたつて離れるつもりはないし、部屋に籠つたつて扉を“開ける”わ。開けて、あなたを部屋から引きずりだしてやる。……あなたはどうかやってわたしを遠ざけるつもり

？ そんな手段、ないでしょ？」

「……」

「だからあなたにとってわたしの提案は利益はあるけれど、不利益になることなんてない。素敵な提案でしょ？」

フェリスははつと息を吐く。

ローリスク、ハイリターンだと。都合が良すぎて反吐が出る。

「どうだかな」

「そうよ。それに勝負の方法はあなたに任せるわ」

フェリスは眉を寄せて注意深くリアナを見る。

「俺が自分に有利な勝負を提案しても受け入れるというのか？」

「あなたがそうするというのならね」

なにを企んでるんだ？

フェリスにはリアナの意図が分からない。勝負というものは公平でなければ意味がない。それなのに自分から自分が不利になる状況を作り出そうとしているのはどういふつもりだというのか。

「もちろん、あなたに有利だというなら、わたしにハンデがなければ駄目よ。わたしに有利ならあなたにハンデを。ただあなたが公平だと“思う”設定にしてくれば、どんな勝負でもルールでもあなたの言ったことに従うってだけの話よ」

馬鹿にされている。いや、リアナの顔には挑発するようなものはない。ただフェリスの前で静かに佇んでいるだけだ。

「……俺を試してるのか？」

今度はリアナが応えない。真っ直ぐにフェリスを見据えている。きつとそれが全てだった。

リアナに不利で自分に有利な状況を作りたいのならそれも構わない。ただし、そうしたならばフェリスの心にならずしこりが残る。恐らくそれをフェリスは避ける。

……そう推測しているということか？　ならばご愁傷様だ。そんなもの必要ならいくらでもしてやる。

それとも……まさか自分が卑怯者ではないと信じていると言うのだろうか。

信じている？

それだったら頭に花畑が広がってるに違いない。自分は拒絶をはっきりとリアナに示した。それなのにまだ護衛に執着し、あまつさえ自分を信じるだと？

こいつは本当に馬鹿で、無謀な賭けに出た。

まだ分らないと言うのなら……いいだろう。自分がどんな人間か分からせてやろう。

それにどうせ現状維持が無理だと言うならば、自分がやることはひとつしかない。

再び仮初とは言え平穏を取り戻せるならば、真正面からぶつかって散らせて見せよう。

そしたらもう誰も、傷つかなくて済むのだから。

「分かった」

フェリスはリアナを睨んだ。  
悪意すら込めて。

「お前の勝負、受けて立つ」

—— 月光が窓越しに少年と少女を照らす。月はただ、静寂とともに彼らを見守っていた。

## 17 紫水晶の戯れ(1)

「痛い、ローズ！」

リアナは寝台の上で涙目になる。お構いなしに侍女ローズはリアナがエダン医師から貰ってきた湿布を強めにあてがった。そこはうつすらではあるが、皮膚が紫色に変色していて痛々しさがあった。

「だからお身体を大事になさいといってるのに！ 女の子なんですから！」

「すみません……」

しょぼくれるリアナにローズは大きな溜息をついた。

「フェリス王子に勝負の内容を全て委ねるだなんて……リアナはどうかしてますわ」

「あはは。そーよね」

「笑ってる場合ではないでしょう！ フェリス王子が公平な勝負にしてくださったとしても、もしもそれが剣術とか身体を使った勝負だったらどうするの？ フェリス王子は普段のあなたを参考にルールを設定なさるでしょうからのみち今のリアナには不利になるんですからね」

身体の4か所を打撲していて激痛とは言わないが、動くのに気になる怪我ではある。リアナは頬を掻いた。

「でもフェリスは勝負は三日後だって言ったし、二日あれば状態も落ち着くと思うわ。大丈夫よ」

リアナの勝負を受け入れたフェリスは、

『勝負は明々後日の朝、日の出直後に開始する。だから日の出前に支度を済ませて来い。お前が準備する物はないが、よく寝ておけ。あとローラインを連れてきても良い』

とリアナに言った。

まるで事前に勝負で何をするか決めていたかのようなフェリスの様子は驚きだったが、彼がそう言ったのでリアナは勝負の開催日までに英氣<sup>えいき</sup>を養うしかない。

「わたくしも行って良いなんて王子にしては気前がいいですわね。てつきり目障りだから来るな、くらいは覚悟してましたけど。まあそんなこと言われても見に行きますけれどね」

「でもわざわざ言うってことはなんか考えがあるのかしら？」

「……どうでしょうね。わたくしはイマイチあの方の考えることはよく分かりませんわ。

それにしてもリアナ、せっかくわたくしが良い勝負のアイデアを考えて来たのそれを無駄にになってしまうなんて酷いですわ」

「う……ごめん」

「薔薇の速摘みとか、フラワーアレンジ対決とか、紅茶の銘柄当てとか色々考えましたのにつ」

いや、それは……まあ確かに勝負かもしれないが……。

そんなことを言い出せなかったリアナだった。

そして勝負の日の朝。

リアナは前日早めに休んだおかげで目がぱっちりと覚めた。寝台から起きてカーテンを引くが、まだ窓の外は暗い。

「よしッ」

一人ひそかに気合を入れて、着替えを済ます。いつもの青い制服だ。

着替え終わった頃に部屋の扉がノックされた。出ると案の定口ズだった。

彼女はお湯の入った洗面器と綺麗なタオルを持ってきてくれた。彼女の後ろから現れた侍女たちが朝食の用意をしてくれる。

「朝早いのにすみません。……ありがとうございます」

ぺこりとリアナが頭を下げるとどの侍女たちもにこにこ笑って、嫌な顔をするどころかリアナの事情を知っているのか、応援の言葉をかけて部屋を出て行った。

「どうせわたくしたちはもう起きて仕事を始めてる時間ですし、気にしなくて良いですよ」

ローズはてきぱきと器をリアナに渡し洗顔を促す。顔を洗う水ではなくお湯であると言うことは、冬では非常にありがたかった。

顔から落ちる雫をタオルで受け止め、リアナは珍しく部屋の隅にある鏡台の前に腰かけた。

「あら、お化粧でもなさるの？」

「髪を結ぼうと思って」

いつもは自前の櫛と鏡で簡単に髪を整えてるだけだが、今日は気合も込めて髪を纏めておこうと思ったのだ。

「それならわたくしにやらせて下さいな」

鏡台の引き出しから大きな櫛や髪留めをローズは取り出した。

今まで中を見たことのなかったリアナは引き出し中身を知って少しばかり驚いた。きらきらとした髪止めや色とりどりのリボン、耳飾り、ネックレスなどどれも可愛らしくて綺麗なものばかりだった。

「この髪留めの石はガーネットなの。きっとリアナを勝利へと導いてくれるでしょう」

鏡越しにローズが髪留めを見せる。小さな紅玉が室内の明かりに反射して輝いていた。手際よく頭上で髪留めがされ、首元がすっきりとする。

朝食をとつたら……勝負の時間だ。リアナはぐつと顎を引いて鏡の中の自分を見据えた。

朝日はまだ大地を照らさない。しかし西の空が白み始めている。

フェリスの部屋には、部屋の主とリアナ、ローズ、アルバート、そしてなぜか眼鏡の中年男がいた。

（確かわたしが剣術大会に参加した時と、謁見の間にいたおじさんよね）

神経質そうな男を上から下へと無粋に眺めていたリアナは、当の本人がわざとらしく咳払いをしたので慌てて視線を逸らした。

「なんでこんな所にマインド宰相様がいらっしゃるのかしら」

ローズが小声でリアナに訊いてきたが、リアナは初めて目の前の男がこの国の宰相であると知ったばかりだったので、ただ首を横に振るしかなかった。

宰相はローズの声が聞こえたのか、再びわざとらしく咳ばらいをした。

「私はフェリス様とリアナ・レーベルトの勝負の立会人として、わ

ざわざ、こんな早朝に、早起きをしてまで、来ました」

なんともねちねちとした言い方だった。ローズが傍らで嫌そうなため息をつく。

宰相はぎろりと――なぜかリアナを睨んできた。それにたじろぐ。

「そもそも……陛下と護衛の任務契約をした貴方が、勝手に勝負で仕事を辞める辞めないを決めるなどと、我々が与り知らぬ所で言うとは信じられません。そう言うものは、雇い主であるハロルド様にせめて一言はおっしゃるのが礼儀というものです。

まあ私個人としては、貴方のような品のない小娘などさっさとフエリス様から離れていただきたいと思っていますがね」

どうやら敵視されているようだ、とリアナは睨みつけてくる宰相を見て思った。

「陛下は貴方がたの勝負を独自に耳にいれて私をここに寄越しました。陛下は深い懐をお持ちだったようで、勝負の結果に対してはリアナ・レーベルトの好きにするがいいとのことですよ」

「あの、ありがとうございます」

確かに国王になにも言わなかったのは申し訳ないと思った。リアナは「約束を叶えてもらう」という報酬の他、いままで生活面での援助を受けていた……しかもかなり厚遇の。なりより、人として少なくとも一言は言うべきだったことを反省した。

（後になってしまっけれど、陛下に直接お詫びをしないとな……）

謁見する時には勝負の結果は出てしまっているだろうが。

そこへ新たな来室者が現れた。

騎士コイズと、その後輩タクトだった。

コイズと目が合うと、何も言わずに顔を逸らされた。

「おはようございます。今日は王子とリアナが勝負をされるそうですので、僕たちがリアナの代わりに王子の警護を務めさせていただきます」

タクトが背筋を伸ばして騎士らしく一同に挨拶を済ます。宰相が深く頷いていてフェリスが興味なさそうな顔をしている辺り、どうも宰相が二人を呼んで来たようだった。

「……さて、日の出までそう時間はない。勝負の内容について説明させてもらおう」

その場にいた全員がフェリスに顔を向けた。室内はまだ、燭台の火の光によって明るさを保っていた。

フェリスは机の上に置いてあった布袋から一枚のコインを取り出し、リアナたちに見せた。

大きめのボタンと同じ位の大きさのコインだ。彫られている柄はロスネルド王国では見かけないもので、どこかの国の貨幣か、記念コインのようだった。

コインを渡されじっくり見ると、表側は鳥……からすが羽を広げ足に宝玉を掴んでいるような絵柄だった。裏面は何か文字が書かれているが見たこともない文字で、リアナには分からなかった。

手元をのぞき込んでくるアルバートたちも、何のコインか知らない

ようだった。

「そのコインと同じものを城の敷地内に隠した。同じコインを9枚集めたらお前の勝ち。そういう一種の宝探しをしてみらおうと思う」

勝負というよりお遊び的要素が強い提案にリアナは驚いた。正直もつと堅苦しいか、形式ばった勝負だと思っていたのだ。

フェリスはそんなリアナの心情など知らず説明を始める。

「制限時間は陽が昇ってから再び昇る一日後までだ。流石に城は広いためにいくつか設定がある。

まず地面の上や、土の中に隠したと言うことはない。また雑木林、中庭と薔薇園のエリアは初めから除外する。あと衣裳部屋もそこに追加しておこう。誰かがコインを身につけているということもなしだ。

お前に与えられる権利として、この勝負に関してお前は3つ質問することができる。ただしコインそのものの場所、あるいはエリアを絞った質問を“直に”訊ねることは禁止とする。

それから、手助けを借りることを可能とする。アルバートとローラインもそいつを手伝いたければしても良い」

リアナはすかさず異議を唱える。

「ちょっと待って。これはわたしとあなたの勝負。アルバートと口ズは関係ないわ」

一対一のぶつかり合いとして勝負を挑んだわけで、公平を謳ったのは自分だが大勢対一人など望んではない。だが思わぬ拳手を食らう。

「ぜひお手伝いをさせてください！」

「そういうことでしたらわたくしも協力させてもらいますわ」

アルバートとローズが、考える様子もみせず名乗りをあげたのだ。  
った。

「ちょっと、なんでやる気なの？　　というか二人とも仕事があるでしょうが！」

「今日はもとからリアナの応援のために休みをとってありますわ！  
ですから心配いりません！」

ローズは誇らしげに笑みを浮かべる。

一方アルバートは訴えかけるような眼差しをフェリスに向けた。

「この勝負はお前が協力すること前提だ。それに今日一日お前に渡す仕事はない」

フェリスの言葉にアルバートはぱあっと子供のように表情を輝かせた。

二人の好意をありがたく思いながらも納得のいかないリアナに、  
フェリスが静かに良い含める。

「俺はもともとお前を含め、アルバートたちにも勝負の結果を納得させるために協力者ありの設定にした。人手は多い方が良いと思うがな」

フェリスのゲームを受けるとするなら、明らかに一人では無理だ。  
言い返せず、唸るしかない。

「この勝負でお前の協力者の上限は設けない。協力してくれる者がいるなら素直に頼んだ方が賢いだろうな。……そこまで暇な者もないだろうが」

自分たちが暇人とも言いたいのか、とリアナはむっとした。

フェリスはそんなリアナをあざ笑うかのように、指で掴んだままだったコインを取り上げる。

「さて、ルールの続きといこう。

城の者に俺がどこにいたか聞くことは可能だ。ただし、中には口止めしてある者もいるからな。気をつけることだ。

またコインの居場所に関して鐘が鳴ることにひとつヒントを与えてやるう。つまり一日に5回鐘が鳴るから5回分だ。鐘がなったらすぐ俺に聞きに来ても良いし、まとめて聞いても構わない。好きにしろ」

「ちよつと待つて。城の敷地内って言ったら、城壁内ってことよね？　なら城壁そのものは“敷地内”に入るの？」

リアナの疑問にフェリスはにやりとする。

「それは答えられない」

「え？」

「とりたい所だが、領域の境目は言っておかないとな。城壁その物は範囲に入らない。それより内側が範囲内だ。

……… 言っておくが、設定に関して基本的に俺が言ったこと以外、お前たちの質問を受けつけない。もしもそれでも聞きたければ、お前たちに与えら得ている権利を行使しろ」

「どういうことよ」

「お前たちには俺に三つ質問することができるようになってあるだろ

うが。その質問としてなら俺は答える、と言ってるんだ」

「なにそれ。それじゃあ質問が勿体ないじゃない！」

「質問自体も勝負の内だ。文句があるなら勝負自体やめてもいい」

そう言われてしまうと言葉に詰まる。

「ある程度の人手と頭を使うなら、それなりにコインを見つけるお前たちに譲歩してある勝負だとは思うが……しかし、お前がこの勝負では嫌だと言うなら止めても良い。お前が、俺が望む勝負を、といったから考えて作った勝負だが、お前の気が乗らないなら仕方がないな」

フェリスは大げさに肩を竦めてリアナに向かって薄ら笑いを浮かべた。どうしてこの王子はいちいちカンに障る言動をするのだろうか。

リアナは怒りと呆れを感じつつ、その口調がなんだか懐かしく思えて少し口元を緩めた。

しかしフェリスの勝負に勝たねばリアナは城をでなければならぬ。自分の願いを叶えることが、自らの決意すら貫くことが——そしてフェリスを“護れ”なくなるのだ。笑っている場合ではない。

「わたしはあなたが決めたルールに従うと言ったわ。二言はないわよ」

「本当に？」

「あたりまえよ」

フェリスは吟味するようにリアナを見つめ、口を開く。

「……もう一度考え直した方がいいのではないか？」  
「良いっていつてるでしょ！」

しつこいフェリスの確認にリアナは思わず声を荒げる。そこまで自分の言ったことが信用ならないのだろうかと思うと悲しくなる。

「本当に、いいんだな」

真剣な眼差しでフェリスは問う。瞳の奥にはなにか良く見えないフェリスの真意があるようで、リアナはまるで自分が愚かな選択をしている気持ちになった。

—— 本当二、良イノ？

真冬の早朝だというのに、嫌な汗が首を伝ったような気がした。

「……いいわ」

リアナは頷いた。それがなぜか……取り返しのつかない判断だったのではないかという猜疑心を産む。  
でも引かないと決意してここにいるのだから、答えるべき返事はひとつだけだった。

そして室内に眩いばかりの朝日の光が差し込んだ。

「でたために探したら余計に時間がかかりますわね。それぞれ担当を決めて探していきましょう」

とりあえずフェリスの部屋を出てリアナとローズ、アルバートは今後の行動を話し合う。

ローズの積極的な発言に頷くリアナだったが、ひっかかることがあった。

（フェリスは頭を使えばコインを探す事は可能だと言っていたわ。ということは普通に探すんじゃなくて探すコツがあるってことかしら？）

リアナが考えている傍ら、ローズがテキパキとこれからの割り当てを決めていく。リアナが東塔、ローズが中央塔、アルバートが図書館……できればその場にいる人たちに協力を仰ぐということではやく作戦を決める。

「ではさっそく行きましょう！」

いまにも駆けだしそうなローズをひとまず自分の考えを伝えるために止めようとしたリアナだったが、その前に彼女を引き留める声がかかる。

「待ってください」

先ほどからリアナたちの作戦に口を出さず静かにしていたアルバートだった。

「どうしたの？」

「そのですね…… コインを探さなくて良い場所をあらかじめ削っておいた方が良いと思います」

「探さなくていいって、それが分からないから順番に探そうとしてるわけではないですの」

「このゲームの本質は一から十を全て調べるのではなく、いかに的を絞って正解を見つけるか、だと思います」

「どうということ？」

アルバートは少し時間をください、と言って空いている部屋にリアナたちを案内した。

とりあえずすすめられるに従ってリアナとローズはソファに腰を下ろす。

「ゆっくりしている暇はなくてよ？」

「分かっています。ですが初めに除外する場所を決めておかないと一日ではとてもコインを見つけれません」

「アルバートの言う事は分かるけど、どうやって範囲を狭めるといふの？」

「質問ですよ」

リアナとローズは共に首をかしげる。

「フェリス様は私たちにこのゲームに関する質問を三つお許しになりました。コインそのものの場所に関する質問を直にすることは許されていない。しかしコインに対するヒント自体は時間になれば与えてくれる。」

ならば我々に与えられた質問自体はコインそのものに対するヒントを導き出すものではなく、別の意図のために存在するのだと思い

ます」

「別の意図？」

「おそらくその意図は、コインがある場所を絞るための手段ではないかと思うのです。例えば……私がまず思い浮かんだ質問なのですが」

アルバートが人差し指をピンと立てる。

「『コインはフェリス様が単独で隠したどうか』という質問です」

## 18 紫水晶の戯れ(2)

「コインはフェリスが“単独”で隠したかどうか、答えて！」

悠然と椅子に座って読書をしていたフェリスは、部屋に駆けこんできたリアナたちが大声で一つ目の質問をすると、にやりと笑った。

「……悪くない質問だな」

「それって、コインは単独で隠したって事で良いの!？」

詰め寄るリアナとローズを軽くあしらって、フェリスは本を膝の腕に置いた。

「質問のひとつ目としてカウントするが、構わないな？」

「待ってください」

アルバートはいつもは穏やかな漆黒の瞳を、少しばかり細めた。

「質問における“単独で”と言う言葉の意味は、『意識、無意識に関わらず他人の援助を受けていない』という解釈をお願いします。ただしルール上フェリス様が口止めの可能性を示唆しているので、それに関しては問いません」

フェリスは顎に指をあてると、じっとアルバートを見つめた。

「お前は“援助”から除外した方が良かったかもしれんな」

「お褒めの言葉ありがとうございます」

「誰が褒めた。……まあ、良い。お前たちの質問に答える。『俺がコインを隠す際、意識、無意識に関わらず他人の援助を受けていな

い』……これでいいか」

リアナは思わず拳を握った。

アルバートに言われた「コインはフェリス様が単独で隠したかどうか」という質問。その質問に肯定が返ってくることで、コインを探す場所を大幅に削ることができるのだ。素直に喜びたくなるというものだった。

時を少し戻して――。

アルバートに誘導された空き室で、リアナたちは「コインはフェリス様が単独で隠したかどうか」という質問で、いったい何が分かるのだろうかと言を傾げていた。

「いいですか？ 例えば……後宮ですが、あそこは息子と言えどもフェリス様であっても簡単に行ける場所ではありません。後宮に入るには陛下かソフィア様にお許しを頂かなければならない場所です。しかしフェリス様が……その、少々申し上げにくいのですが、あの方が陛下やソフィア様をお願いしてまで自らコインを隠しに行くとは思えません」

国王ハロルドと王妃ソフィアへのフェリスの態度を思い出しながら、リアナは相槌を打った。

「誰かに頼んでコインを隠してもらおうという手段もあります。でも、もしも誰の手も借りずにフェリス様がコインを隠した、ということが分かれば、誰かに頼むと言う行為はそれに反します。ですからコ

インの居場所の候補から後宮を抜かすことができるのです」

「……なるほど。悪くない推理ですわね」

ローズはアルバートの説明に目を丸くしていた。実に意外そうな表情であつた。

「『コインは単独でフェリス王子が隠したのかどうか』という質問が肯定されれば、他人の補助を受けてコインを隠した可能性を省けるというわけですね」

「単純に……フェリス様が行けない場所は調べなくて良いと言つことなんです」

フェリスが行けない場所——と考えて、リアナは真っ先に浮かんだ場所があつた。

「フェリスは西塔は絶対行かないと思うわ」

もともとフェリスは西塔の付近は警戒していたようだったし、なによりエリオルに襲われたばかりだ。コインを隠すためだけに迂闊に西塔に近寄る真似をしたとは思えない。

「フェリス王子はエリオル王子を毛嫌いなさってますものね。……」

ならば後宮、西塔は対象から省けそうですわ」

「あと城内のプライベートな場所にはコインを隠していないと思います。そういうことをする方ではありませんから」

「王子だからといってわたくしの部屋に入り込んでいたら、平手のひとつはしないと気が済まないですわね……。使用人の部屋なんかは省いていいでしょう」

アルバートは部屋の隅の机から紙と羽根ペン、インク壺を持って

きて城の図面を簡単だが描き込む。

紙の真ん中に城の本体ともいえる大きな中央塔、その両脇にフェリスが住んでいる東塔とエリオルが住んでいる西塔。さらに現在に使われていない塔を二つを書きだす。中央塔の後ろには後宮があり、その他独立した建物——図書館や使用人たちが寝泊まりする宿舎など——をいくつか付け足していく。

地面はルール上考慮しなくて良いため、アルバートはそこにクロスをつける。それから薔薇園、雑木林にも同じ印をつけた。

「もしも私たちの質問が有効であれば……」

アルバートは後宮と東塔に斜線をつける。使用人の宿舎にも同じ印をつけようとするアルバートをリアナが止めた。

「使用人の人たちの部屋に入らなくても、建物のどこかに隠すことは可能だわ。念のため保留にしておきましょう」

「そうですね。分かりました」

「……これだけでも大分探す場所が減りましたけど、それでもコインを探すのは大変ですわね」

「現在使われていない塔は鍵がかけられていますし、頑丈に入口を塞がれているので、人手を借りずに中に入ることは難しいでしょう。除外してもいいと思います」

アルバートはさらにクロスを図面に足す。

「ざっと見て、ここの東塔と中央塔、騎士の宿舎辺り……あとめばしい建物だと図書館とか、迎賓館、礼拝堂くらいになりますわね。細かく見れば用具小屋とかもありますけれど」

「そうですね。さらに調べる場所を絞っていけば、コインを全て探し出すのも不可能ではないと思います」

図面の半分以上が対象から外れ、ぐっと探す範囲が狭くなった。もちろん狭くなったと言っても、リアナたちがいる東塔だって城下の一軒家とは比べ物にならない大きさと部屋数があるので、喜んではいられない。それこそちよっとした貴族の屋敷とさほど変わらない。横があるか縦があるかの違いだろう。しかしあてもなく城中を探し回るよりずっと見つかる可能性が高くなったはずだ。

——そういうわけで、フェリスへの質問が有効であったことは、リアナたちにとって大きな収穫であったのだった。

「他に質問はないのか？」

フェリスに促され、アルバートが口を開く。

「ではもう一つ質問をさせてください。……『コインは同じ建物に一枚しか置かれていないのかどうか』、です」

この質問は、コインが見つかったても他の場所を探す必要があるのかわからないかを調べる質問だ。肯定されれば、建物で一枚コインが見つかった場合、それ以外の探していない場所を無駄に確認せずに済むのである。無駄が省ける。しかし否定されれば、もう一枚建物にコインがあるのかないのかを確認するために、残り全ての可能性のある場所を調べなければならぬのである。

「ただし中央塔は質問の意図から抜かしてください」

アルバートの読みでは中央塔は大きすぎるため、一箇所以上コインが置かれているのだらうということだ。

「建物内にコインがあるとは限らないぞ？ それはどうする」

「この質問は建物にコインがある場合のみの質問とさせてください」

設定上、外にコインを置くことができる場所は限られているのは明らかなので、ほとんどコインは建物のどこかにあると考えるべきだろう。外の可能性のある場所を調べて潰す方が、建物でコインが見つかった場合に残りの場所をいちいち調べるよりも、効率的だと考えたのだ。

「早く答えて下さいまし！ こちらは時間ないんですのよっ」

「煩いな。……そうだな、お前たちの読み通り『中央塔を抜かした建物に隠されたコインに限っては、その建物に一枚しか隠されていない』。……お望み通り答えたが、この後はどうする？」

「最後の質問はまだ残させていたたくつもりです」

「そうか。もったいぶって手遅れにならないようにせいぜい気をつけるんだな」

「焦って最後に打つ手がなくなってしまうたら困りますので、そうします」

につこりとほほ笑むアルバートが妙に頼もしい。さすがフェリスが御付きとして選んだ青年だけのことはある。優しいだけではないのだ。

内心質問が二つとも否定されたらどうしようかとリアナたちは思っていたが、幸いにしてそれは杞憂に終わった。おかげで事前の相談の通り行動することができる。

リアナ、アルバート、ローズはフェリスの部屋の前で別れ、本格的にコインを探し始めたのであった。

各分担はこうだ。

リアナは騎士たちの宿舎とその周辺、アルバートは洗濯場やいくつか点在する用具小屋、ローズは仕事上慣れた西塔を始めに探すことになった。中央塔は広すぎるので、後回しに変更になったのである。

宿舎に着いたリアナはまずフェリスの目撃情報がないか聞いて回ることにした。

日の出からそう時間の経っていない朝とはいえ、城勤めの騎士は交代制で常時働いている。宿舎にはちょうど夜勤が終わったのか、これから勤務なのか、思ったよりも人気ひとけがあった。リアナは何人かの騎士に声をかけて、灰色の髪の第二王子をここ三日近く、見かけなかったかたずねた。

簡単に目撃情報を得られるとは思っていなかったリアナは、四番目に声をかけた三人組の若い騎士たちからあっさりと王子を見つけたとの返事をもらって、少し拍子抜けしてしまった。

「コイズ先輩がフェリス様と仲良く……というか結構一緒にいるから顔はよく存じ上げているけど、さすがに宿舎で見かけたことはないからちよつとびっくりしたぜ」

「そついや王子はあんまり公には顔出ししないよな」

「確かに。……でもなんでフェリス王子はこんな所に来たんだろう

ね」

不思議そうに首をひねる騎士たちだが、そもそも一国の王子が気安く騎士の宿舎にくるということはないのだから自然な疑問であった。しかし騎士たちの様子では、フェリスが何をしていたのかは分からないようだった。

「フェリス王子はどの辺りにいたんですか？」

「うーん、宿舎の廊下をぶらぶら歩いてただけ、って感じかなあ。

だから余計に何しに来たのか気になったんだけど」

「厩舎の方も見て回ってたけど、フェリス様は乗馬がお好きなのかな」

若い騎士たちにお礼を言つて、リアナはその後何人かの騎士たちからフェリスの目撃情報をもろう。だが誰もがフェリスは「歩いていただけ」と言っていて、特別なことをした様子を聞くことは出来なかった。

いったいフェリスはどこにコインを隠したのか、有力な手がかりはない。むしろ宿舎にコインを隠す場所を見つけに来たけれど、結局なにもせずに他の場所に隠しに行ったのかもしれない。

城の人間に自分どこにいたのかを聞く事を、フェリスがリアナたちに制限しなかったのは、逆にリアナたちへの情報錯乱を狙っていたからなのかもしれない。

有力な情報がないなら、今度は地道に調べていくしかなかった。とりあえず廊下の隅から怪しいところを見て回っていたリアナだったが、途中で騎士とは様相が違う男性がやってきて、声をかけた。

「君はいつたい、ここで何をしているのかね」

どうやら男性は騎士ではなく、宿舎の管理人のような立場の人だったらしい。騎士や宿舎の関係者とは違う部外者を不審に思ったようだ。

（そりゃあ、廊下の床を掃除するでもなく目を皿にして見回してたら怪しいわよね……）

リアナは床の上から男性を見上げ、苦笑いを浮かべた。

「実はコインを探しているんです」

「コインさん？」

「カラスが彫られたコインなんですけど……」

「我が国の通貨にカラスの絵などどれにも彫られていないが、他国のものか？」

「……だと、思っていますけど」

あいまいな受け答えに男性の目がだんだん怖くなる。

「失せ物落し物ではないのか？ 君は侍女ではないようだが、何者かね。答えられない場合は事務所まで来てもらうぞ」

「その、わたしは……」

「フェリス殿下の護衛、リアナ・レーベルト君だ」

## 19 紫水晶の戯れ(3)

宿舎の廊下でリアナが声のした方に振り向くと、騎士隊長のザクスが立っていた。ザクスはリアナをちらりと見た後、視線を後ろの男に向けた。

「ザクスさんじゃないですか。お知り合い……というか、この子が例の護衛ですか」

「そうだ。だから身元の心配ならいらない」

「そのようですが……」

「気になるのなら、詳しい事情は私が彼女から聞いておく。君は仕事に戻ってくれ」

ザクスにそこまで言われたら言い返せないだろう。男は納得しない様子を見せながらもその場を離れた。

リアナはザクスに頭を下げる。

「すみません……助かりました」

「礼を言われるまでもない。しかし落とし物なら一緒に探そうか？」

「いえ……物を落としたわけではないので、大丈夫です」

ザクスは見透かすようにリアナを眺めた。

「早朝、マインド宰相からの指示でヴァレンシュタインとザハロフ……コイズとタクトをフェリス殿下の所に行かせた。君の代わりに護衛を勤めるためだと宰相殿は言っていたが、それと何か関係があるのか？」

指摘され、隠すことでもないのでリアナはザクスに、フェリスとの勝負について説明した。話を聞いたザクスは納得したように頷いた。

「……なるほど。君が負けたら殿下の護衛を止めなければならないのか」

「はい。だから、絶対負けられないんです」

「君はどうしてそれ程に護衛でいたいのだろうか」

ザクスに理由を問われ、リアナは一瞬驚いた。少しためらってから、頬を掻く。

「フェリスを守ると自分で決めたから。それからもう一度フェリスと話ができたらなって思ったから、でしょうか」

「そうか」

言っただけ、しばらくの間ザクスは黙考していたようだった。会話を続ける事も去る事も憚れるようで、リアナはザクスをうかがいながらその場に留まる。

やがてザクスが顔を上げた。

「宿舎や演習場くらいであれば、コインを探す手伝いができるだろう。私にまかせてくれないか」

「え？ でも、ザクスさんはお仕事があるんじゃないか……」

「いいんだ」

ザクスの瞳は優しい鳶色をしていた。そしてなぜかふと、その瞳の色をどこかで見たことがある気がした。

「——ということでお前たちに協力してもらいたい」

隊長の言葉に騎士たちは戸惑う。演習場に集められた騎士たちは、ザクスが隊長を務める第二親衛隊の所属である。彼らたちは現在城の巡回、警備等の任務から外れている。しかし休み時間や休暇中というわけでもなかった。

集まった騎士たちは本来であれば演習場でザクスの指導の元、訓練をしているはずだったのである。しかし彼らの隊長は訓練ではなく、突然あるかもわからないコインを探してくれと言い出した。それは、常に自分にも他人にも厳しい隊長にしては晴天の霹靂のような発言であった。

隊長の言葉にお互いを見合った騎士たちは、戸惑いながらも厳しい訓練と宝探しコインを天秤にかけた。目配せの結果は案外簡単に出た。

「隊長がそれで良いというなら、俺らはコイン探しつてので構いませんよ」

若者たちは満場一致で後者を選んだ。偶然ながらも頭の堅い熟練の騎士たちがその場にいなかったおかげだったからなのかもしれない。

騎士たちの返事を聞いて頭を下げたのは、ザクスの隣に立っていたまだ十代半ばと思える少女だ。話に聞くと、彼女は少し変わった王子と噂のフェリスの護衛だという。その護衛の任務続任を賭けて「宝探し」をしているらしい。

花も恥らう年頃の少女というのに護衛の仕事がそんなにも好きなのか、と騎士たちは首を傾げながらも、相手が女性というだけで男

に頼まれるよりもやる気にはなるものだ。その辺りは「騎士道」に則っているので当然だと、下心を無視している輩もないこともないのが現状だったりするのだが。

しかし相手が女性といえ、ザクスが訓練よりも少女のことを優先させようとしたことに若い騎士たちは驚きを隠せなかった。

ザクスは騎士道よりもそのときの優先すべき事項をよく見定め、行動する人である。なにかザクスなりの深い理由でもあるのかと気になってしまう。

だが本人に聞けるわけもなく、結局騎士たちは手際のいい隊長の指示に従うしかない。

「適当にコインを探すのは無駄が出てしまうな」

顎に手を当ててそう呟くザクスになにやら嫌な予感がしたが、若い騎士たちは取り合えず続きを待った。

「各班に分かれて搜索することにする。無駄なく、迅速に調べるとは必ず実践でも役に立つ。見晴らしの悪い場所、時間帯で敵を追い追いつめる際、相手がどの経路を辿ったのか形跡を見つけることが大切だ。場合によっては素早く相手を追い詰めねばならない。時間が無制限だと思うな」

ザクスの言葉にやはりこの人はどんな時でも隊長なのか、と少々呆れる。しかし若者たちの気持ちを鋭く感じ取ったのか、ザクスは睨むようにしながら号令をかけた。騎士たちは慌てて少人数の班に分かれる。

「緊張感を持て。これも訓練の内だ。いや、コインがみつからねば自分の命にかかわると思えッ」

騎士たちに声を張り上げるザクスを、隣に立っている少女が困惑気味に見上げた。

「なにか気になることでも？」

「その……私のわがままのせいで皆さんに負担がかかるのは悪いですし、普通に探してもらえれば……」

「なに、心配するな。普段の訓練はこんなものではない」

「でも……」

「お嬢さん、気にすることはないよ。俺達にしてみれば隊長のいつもの厳しい訓練を受けるくらいなら、コインを見つける方がずっと楽というものさ」

恐縮する少女に騎士の一人が声をかける。他の騎士も頷いた。

「そうそう。ちょっとくらい厳しくされたって、あの扱きに扱かれる訓練に比べたら可愛いもんさ！」

「普段の隊長なんて戦神が乗り移ったみたいに厳しくて怖いんだぜ？　だけど今日はお嬢ちゃんのお陰で天使様みたいだ。お嬢ちゃんサマサマってもんさ」

騎士たちがどつと笑う。それをザクスは咎めた。

「ほお……お前たちはいつもそう思っていたんだな？」

騎士たちは「言いすぎたか」と慌てた。しかしザクスは軽く笑っているだけだ。どうやら本気で怒ってはいないらしい。それぞれ胸を撫で下ろし苦笑いを浮かべた。

「ま、そういうわけでき、気にしないでいいんだぜ」

誰もが頷くと、少女はほっとしたようだった。姿勢を正すと深々と頭を下げた。

「よろしくお願いします」

「おまかせあれ！」

一人の騎士のわざとらしい返事に、再び騎士たちの間で笑い声が沸いた。

「ないですわッ！」

寝台の下に潜り込みながらローズは叫ぶ。いくつもの部屋をのぞいても、ないない、ない。見つかる気配がない。

ローズのコイン探しの管轄は東塔だった。いつも掃除したり駆けまわっている仕事場ではあるが、コインと言う小さい物を探すとなれば小憎らしい程無駄に大きな建物だと再認識せざるを得ない。もとも使っていない部屋など初めから作らなければいいのにと常々思っていたが、今までは仕事上割り切っていた。しかしその不満が溢れたようだった。

東塔を管轄する侍女仲間たちには掃除をしながらコインがないか探してくれるように頼んである。しかし全員の掃除が終わるのを待っているわけにもいかず、ローズは駆けまわって部屋の中を探っては次の部屋を調べる作業を続けていた。

（フェリス王子がコインを隠したとなるといやらしい場所にありそうなのがぶんぶんしますわね）

寝台の下や棚の中にフェリスが普通に隠したとも思えないが、それでも裏を搔かれてごく自然にそんな場所にコインがあつたらそれこそ馬鹿らしいので、地道に探すしかない。

「ローズさあん」

空き室を出たローズは名前を呼ばれたことに気がつく。仕事仲間の侍女メルがとことこ傍に寄って来た。赤毛を三つ編みにした純朴そうな少女だ。

「どうしたんですの？」

「侍女長に持って来いって言われたユリの柄が入った壺が見当たらないんです。あれってどこにありましたっけ？」

「それでしたら三階の奥の物置部屋にありますわ。麻の箆笥の上に置いてあつたはずです」

「そうなんですわね！　ありがとうございますっ」

礼を言ったメルを見送ったローズは、再び声をかけられた。今度はハンナと言う名の侍女で、彼女は困った様子だった。

「ローズさん、ちょっといいですか？」

「なんですの？」

「実は……明日のシフトのことなんですが……私、その、急に幼馴染が王都来ると手紙を寄こしてきて……。できれば王都を案内してあげたいのでお仕事をお休みしたいのですが、あまりにも急な話ですから侍女長に言いづらくて……」

「たしかに明日休むとなると侍女長も素直に休ませてはくれないで

しょうね」

「でも本当にずっと会っていない幼馴染なのでどうしても会いたいです。明日会えなかったら、また当分会えないだろうし……」

「仕方ありませんわね。後でわたくしの方から侍女長にお話しておきますわ。もちろんご自分でも侍女長に言わなければなりませんわよ」

「は、はい！　ありがとうございます！」

ほっと溜息をついたハンナはもう一度頭を下げて自分の仕事に戻っていく。

ローズは次の空き室を調べようとノブに手をかけるが、またもや名前を呼ばれた。

「ローズ・アルト・ローライン。貴方は何をしていますのですか？」

やってきたのは顔を顰めた侍女長だった。靴音を響かせて近づいてくる侍女長は、さながら尋問しようとやってくる衛兵のようである。

「貴方、今日はお休みを取っていたのではありませんか？」

「そうですけれど少々探し物をしてるんですの」

侍女仲間にコイン探しを頼んだローズだったが、さすがに侍女長にまで事情を話したりはしなかった。

東塔の侍女を纏める侍女長は、冗談の効かない手厳しい女性だ。何事に対しても神経質で、ほんの少しでも仕事中に立ち話でもしうものなら罰則を食らって仕事が増やされてしまうくらいだ。

「探し物？　とにかく仕事中の侍女たちの迷惑にならない様になさ

い」

「はい。ところで侍女長、少々お話が……」

先ほどの休みの話を侍女長にすると、予想した通り顔を真っ赤にした。

「明日休みたいですって!? そんな急に言われても困るに決まってるじゃありませんか。駄目です。ちゃんと出勤するように言っておきなさい」

「ですが大切な人に久しぶりに会える機会なんです。どうかハンナをお休みさせてあげて下さいな」

「駄目です! 一人一人にそんな対応していては、つけ上がります。どうしてこう侍女として自覚のない子たちばかりなのかしら!？」

愚痴を零し始めた侍女長にさてどう言って納得してもらおうかと思つたローズだったが、傍の階段から壺を探しに行つたはずのメルが戻つて来た。

すぐにメルを見咎めた侍女長が彼女を叱責する。

「メル・エデス! どうしてここに居るのですか!? 壺はちゃんと言つた通りに飾つたのですか?」

「はいッ。ちゃんと言われたとおりに置いてきました!」

「ならばなぜここに居るのです? 壺を飾つたら次は書架室の整理をしなさいと言つたはずですよ?」

「それが……」

メルが言いかけた所で廊下に「ワン!」という鳴き声が響いた。ローズと侍女長が声の方に目を向けると、絨毯の上で尻尾を振っている仔犬がいた。

「なんですかこの犬は!？」

侍女長の掠れた叫び声があがる。メルは表情をぱっと明るくさせ、金茶色の耳の大きな仔犬を抱き上げた。

「この子を探してたんですー」

「メル・エデス! なぜ城にそんな生き物がいるのですっ。説明なさい!」

「侍女長はワンちゃんお嫌いですかぁ?」

「そんなことはどうでもいいでしょう!? 答えなさい、なぜここに犬がいるのです! いいえ、とにかくその犬を即刻城から出しなさい! これは命令……ぎゃっ!」

メルの腕から跳び下りた仔犬が侍女長の足に縋りつくようにじやれはじめた。侍女長は顔を真っ青にして犬から逃げる。どうやらかなり犬が苦手のようだ。

「メル! こここの犬をなんとかし、しなさい!」

「侍女長ワンちゃんに気に入られたみたいですねっ」

「ああもう! ローズ! 貴方がどうにかなさい!」

「……分かりましたわ」

いつもはしかめっ面ばかりの侍女長の慌てぶりをもう少し見ていた気もするが、流石に可哀そうだったので、ローズは顔を真っ青にした侍女長がお気に入りの子の仔犬を拾い上げた。

ローズが犬を抱いたことに侍女長は安心した様子だった。そこで

ローズは妙案を思いつく。

「侍女長。先ほどのお話ですけど、明日ハンナをお休みさせてくだ

さいな」

「だから駄目だと先ほどから言っているでしょう?」

「そうですか……残念ですわ」

ローズはわざとらしくため息をつき、腕の力を抜く。仔犬はやっとばかりに腕から逃げ出し、再び侍女長に飛びついた。

「ひいひい!?! ローズ! 何をしているのですか!?!」

「すみませんですわ。ちょっと手が滑って……」

「やめて! こっちへ来ないで!?!」

侍女長は本格的な悲鳴を上げて逃げ惑う。

「侍女長、どうしてもハンナはお休みにしていただけませんか?」

「そ、そんなこと今はどうでもいいでしょう!?!」

「駄目ですか?」

「だから今はとにかくこの犬を……」

「お返事をくださいませ、侍女長」

「分かった、分かりました! ハンナの休みを許可します! だから早くこの犬をどうにかなさいッ!?!」

侍女長の許可を引き出すことを成功させたローズはにっこりしながら仔犬を捕まえた。いつもはがっちりと纏めた侍女長の髪は乱れ、憔悴した様子だった。

「わ、私は持ち場に戻ります! メルはその犬をすぐに絶対に城から出しておきなさいッ」

まるで捨て台詞のようにそう言い残すと、侍女長は逃げるように階段を下りて行った。

「侍女長どうしたんでしょうか？」

メルは全く事情が分からないといったように首をかしげる。その様子に苦笑しながら、ローズは仔犬をメルに渡した。

「その仔犬はどこから迷い込んだのかしら？」

王宮で犬は飼っていないはずだ。妙に小奇麗な犬にローズは首を傾げる。

「違いますよ！ オリバーに頼まれて私が預かってたんです」

オリバーとはメルの恋人だ。確かその恋人は王都に住む商家の息子だったはずだ。父親の仕事について城に来ることがあり、その縁でメルと出会ったと聞いている。

「壺を飾った後にワンちゃんが城に入り込んだことに気がついて、ここまで追って来たんですよ。でも私思うんですけど、このワンちゃんに協力してもらえばローズさん楽なんじゃないですかあ？」

「協力？ 何のことですよ」

「決まってるじゃないですか！ コイン探しですよ、コイン！ ワンちゃんにローズさんが探しているコインを見つけてもらうんですよ。すごい名案だと思いますか！？」

得意げなメルにローズは長いため息をついた。

「……メル。どうやってその仔犬に探し当てるものが何か教える気ですよ」

「それはワンちゃんですから、フェリス様の香りを覚えさせてコイ

ンまで辿りつくに決まってますよっ」

「ですがここはフェリス王子の居住区ですわ。そこらじゅうに年季の入った王子のにおいがあるに決まってるじゃありませんか。仔犬が混乱して終わりですよ」

メルはぼんと手を打つと「ローズさん天才です！」ときらきらと目を輝かせた。

「それじゃあワンちゃんの出番はなしですかあ」

「気持ちは嬉しいですわ。ありがとう。でも侍女長に言われた様に仔犬を城の外に出しておきなさい。これ以上その子が城に居たら侍女長は安心して仕事ができないでしょうからね」

慌てふためく侍女長を思い出し、ローズはくすりと笑った。

外に点在する用具小屋をひとつひとつ調べていたアルバートは、洗濯場にやってきていた。朝日を背に女性たちは大きな桶の中の冷たい水に手を入れ、洗濯物を綺麗するために一生懸命汗を流していた。

洗濯をする女性たちは侍女ではない。侍女たちがほとんど親兄弟のつてだったり、推薦を受けた女性たちであるのに対し、彼女たちは募集によって採用された使用人である。

陽気に歌を歌う中年の女性、まだ幼い顔つきの少女たちなど、様々な年代の女性たちが一斉に洗濯をしている様子は、朝日の中とても爽やかであった。

「あら。あちらにいらしているのはアルバート様ではなくって？」

一人の女性の言葉に周りの女性たちが一斉にアルバートの方へ顔を向ける。洗濯の邪魔をしてしまっただろうかと恐縮したアルバートだったが、女性たちといえば自ら洗濯物を手放し傍に集まってきた。

「アルバート様だわ！　こんなところで会えるなんて僥倖ね！」

「あ、ああの、私、サマンサと申します……」

「やだ、素敵な殿方じゃないの。旦那がいなきゃぜひお付き合いしたいわ」

「何言ってるのよ。あんた歳を考えなさいよ、歳を」

「……格好良い……」

「誰？　誰なの？　貴族の方？　誰か教えてよ！」

女性陣に囲まれたアルバートは色んな声をかけられる。だが彼女たちの勢いに押され、言いたいことが全く言えない状態になってしまった。

そうしておろおろとしていたアルバートを助けてくれたのは、50歳くらいの快活そうな女性だった。

「あんたたち！　なあに仕事をサボってるんだい？　それにアルバート様が困ってるじゃないのさ。さあ散った散った！」

女性たちはしぶしぶといった様子で仕事に戻っていく。アルバートはどうやらこの場を纏める立場にいるらしい女性に頭を下げる。

「アルバート様はなんでこんな所にいるんですかね。なにか御用で？」

女性に事情を説明すると、彼女は申し訳なさそうな表情になった。

「お手伝いをして差し上げたいのですが、あたしらも洗濯がまだまだありますのでそうもいかないんですよ。この辺りをお調べになるのは構わないんですけどね……」

「お仕事のお邪魔をさせていただくのはこちらですし、そう言っただけで嬉しいです。ありがとうございます」

アルバートは洗濯に勤しむ女性たちの傍ら、道具置き場を見て回る。しかしコインはどこにもなさそうだった。

ふとアルバートは洗濯場にある井戸に気がつく。しばらく考えた上で、額を抑えた。

よろよと井戸に近付いて中をのぞく。洗濯に使われる井戸の中は、薄暗いが見える程度の水量なら良かったのだが、目の前の井戸

その水の中にフェリスがコインを放り投げた可能性は……。

「ないとは言えませんよね……」

飲食用に使われる井戸ならばフェリスがコインを投げ込んだとは思わない。しかし洗濯に使われる井戸となれば話は別だ。

井戸の縁を両手で掴んだまま、アルバートはしゃがみこんだ。枯れ井戸や底が見える程度の水量なら良かったのだが、目の前の井戸の中の水位は恐らくアルバートの身長よりも深いだろう。つまり、潜るしかない。

潜ることが嫌なわけではない。必要なだからそうするしかないのだから。冬の朝に冷水の中に入るのはつらいだろうが、やるしかない。

やるしかないのだが、問題があった。

(……溺れたらどうしましょうか)

アルバート・ルノ・リゼルセムはしばらくの間、真剣に悩んでいた。

## 20 紫水晶の戯れ(4)

騎士たちと共にコイン探しが始まった。

リアナは他の騎士たちと共に宿舎の二階を搜索することになった。ブライベートな場所は除外するため、調べるのは長い廊下と、用具や武器が置いてある部屋、資料室、空き室、階段、食堂などであった。その中でも武器室と資料室は普段鍵がかかっている。

フェリスは「意識的にも無意識的にも他人の援助を受けていない」とのことなので、「鍵を借りる」という行為は排除できる。だから鍵のかかった場所は調べる必要はない。

リアナや騎士たちは二階の用具室を調べることにした。

部屋は雑然としていたが、よく使われているのか埃を被った様子はない。

リアナたちは奥の棚から順に調べていく。掃除用品やよく分らない部品など、色々どかしたり移動させながらコインを探す。

「おっ」

喜色の声上がり、部屋にいたものは一斉にそちらへ振り向いた。騎士の一人がコインをつまみ上げていた。

「……悪い。コインはコインでも普通のロスネルド硬貨だった」

がっかりする一同。再び黙々と搜索に戻る。

結局用具室には見つからず、リアナたちは次の搜索場所に移動することにした。

廊下には何十人もの騎士たちが床や壁に張り付いて、コインがな

いか調べている。なかなか異様な光景だった。

他の部屋も調べて行くが、やはりコインは見つからない。

窓の外を見ると、演習場は太陽の光が反射して眩しかった。直接見ることは出来ないが、城の方も本格的に人々が動きはじめたようだった。

——朝の鐘が鳴り響いた。

それはヒントが与えられることを示していた。

コイン搜索を途中で抜けることは、お願いする立場としては申し訳ないことだった。しかし騎士たちは快くリアナを送り出してくれた。

予定として、鐘がなったらフェリスの部屋の隣——つまりリアナの部屋に集合することになっていた。

自室の前までやってきたリアナは、すでにローズたちがいることに気がついた。しかしどうも二人の様子がおかしい。

ローズはアルバートの髪に手を伸ばし何かを払っているようだった。アルバートと言えば、今朝方見た時よりも髪型や服装が違っていた。うだった。

「どうしたの？」

リアナに気がついたローズはげんなりとした様子だった。

「アルバートったら井戸に入ったんですって」

「井戸に？」

間近で良く見れば、アルバートの黒髪は湿り気を帯び、前髪からは雫が垂れている。唇は少し紫色だ。

「大丈夫なの？」

「少し温まりましたから心配なさらないでください」

冬に冷たい水中に入るのは時として危険を伴う。危険といわずとも風邪でも引いたらやっかいだ。

「コインを探すために井戸に入ったの？」

「すみません……見つかりませんでした」

「なんで謝るのよ！」

リアナはアルバートの冷えた手を握り締めた。

「ありがとう、アルバート。でも無茶しないで」

「体調管理には自信があります。本当に無理でしたら休ませていただきますね」

微笑む青年にリアナはもう一度感謝の言葉を伝えることしかできない。

「それにしてもよくアルバートがよく水泳なんてできましたわね。溺れかけた、なんてことはなかったんですの？」

ローズの問いにアルバートはうろたえる。

「えっ！？……その、はい」

アルバートは恥ずかしそうに俯いた。

「溺れそうになったって……本当に大丈夫なの？」

「少し息継ぎができなかっただけですから。大丈夫です」

それは大丈夫とは言わない。

「もう、アルバートって本当に運動苦手ですわね。そんなんですから騎士にもなれなかったんでしょう」

寝耳に水な話にリアナは目を丸くする。

「アルバートって騎士になりたかったの？」

ローズが疑問に答えた。

「アルバートの家……リゼルセム家は代々騎士を輩出している名家ですよ。息子ができたら必ず騎士にさせるため幼いころから訓練させて、娘ができてても素質があれば淑女としてではなく騎士として学ばせる厳しい家なのですわ。当然アルバートも騎士になるべく剣や乗馬の稽古をしていたそうよ」

長身とはいえ瘦躯で、いつも穏やかな表情を浮かべているアルバート。彼が剣を振り回す姿は少し想像できない。

「でもアルバートは酷い運動音痴でしてね。剣を振るえば見当違いの場所に剣が当たり、馬に乗ろうとすると振り落とされ、走ろうとすれば転倒する。こんな人が騎士になっても周りの足を引っ張るだけですよ！」

アルバートは苦笑を浮かべて反論することはなかった。

だが心なしが落ち込んでいるように見えた。

「運動音痴のアルバートが水に潜るのは簡単なことではなかったでしょう?」

「……おっしゃる通りです」

「まったく、無理して潜らなくてもわたくしに言っただけで、わたくしがしましてよ。無理して何かあったらわたくしたちの気分が悪いですわ。できないならできないとちゃんと一言なければ駄目ですわよ」

やれやれといったローズの姿にリアナはするつと口を滑らせる。

「なんかローズって……お母さんみたい」

ローズは眉根を寄せる。

「わたくしは十九でしてよ! 年上の息子がいてたまりますか!」

ぴしゃりと怒鳴られ、リアナとなぜかアルバートは揃って頭を下げた。

「井戸を必死に潜っても結局コインが見つからなかったんですから腹が立ちますわね! リアナもその様子ではコインはまだ見つかってないみたいですし。本当に全部集められるのかしら……」

しつかり者の侍女は片手を頬に当てて溜息をついた。

「悩む前にとにかく行動しましょうよ。ヒントを聞けばすぐに分かるかもしれないし、一緒に頑張って?」

リアナがそう言つとローズは「そうね」と元氣を取り戻したようだった。

栄光の輝きは暁の英雄を永久とわに照らす  
答えを求めるのなら、彼かの者の証を探せ

ヒントを貰いにフェリスの元を再び訪れたリアナたちに渡された紙には、こう書かれていた。

「何これ？」

どうやらコインの居場所に関するヒントらしい。しかしリアナには意味がよくわからなかった。

「ヒントというか謎解きみたいですね。この短文で本当に分かりますの？」

ローズがヒントの紙から目を離し、相変わらず自室の書記机の前に座っているフェリスを半眼で睨んだ。

部屋の主は感情の読めない表情で背もたれに身体を預けた。

「ヒントよりもよっぽど分かりやすいように作つてある。俺としてはむしろ答えを教えているようなものだ」

嘘臭い、とローズが鼻を鳴らす。美人には相応しくないような仕

草だった。

フェリスの部屋で謎解きをするわけにはいかなかった。  
リアナの部屋に戻った三人は、テーブルの上に渡された紙を置き  
それぞれ首をひねらせた。

「んー……暁の英雄、って誰のことかしら。二人は知ってる？」

「多分ですけど何百年前だかの騎士のことじゃなかったかしら。  
どうでしたっけ？」

ローズがアルバートに訊ねる。

「かつてロスネルド王国の危機を救った英雄とうかがっております。  
なんでも騎馬族アルターニヤに攻め入られた時に、百の歩兵と三十  
の騎馬兵で迎え撃ち、見事勝利に導いた騎士なのだとか」

「その騎士の証を探せてことですわよね。でも証といわれてもな  
んのことを指してるのかしら」

「証か……。遺品とかはどうかしら？ 剣とか鎧とか」

アルバートはリアナの意見に頷く。

「その可能性はありそうですね。そういう遺品なら迎賓館の展示室  
にあったと思います」

「遺品を見に行けばすぐにコインの場所が分かるかしら」  
「分かりません……。リアナ様、三人で確かめに行くのは効率が悪  
いと思います。とはいえ、展示室に行つてすぐにコインが見つかる  
とも限りません。三人のうちの誰かが展示室に行くか、三人一緒に  
行くか……。どうしましょうか？」

「そうね……。私は騎士の人たちにコイン探しを手伝ってもらつて

いて向こうの様子が気になるし……。でもそつちも気になるわね」  
「どうせいま三人揃っています。とりあえずみんなで展示室にいきましよう。もしもヒントが役に立たなかったり意味が分からないなら、もうそこは後回しにすればいいですわ。時間も経てばいい考えが浮かぶかも知れませんもの」  
「しかしヒントは早い段階で潰す方が、後のヒントの関係でいいかもしれませんし……」

ローズはアルバートを睨んだ。

「それならコインが見つかるまで探せばよろしいんですわ！　こうやって話し合う時間だって惜しいのですよ！？」

女性につめ寄られたじろぐ青年。

まるで恋人の誕生日を忘れたうっかり者が、用意された夕食を目の前に、食事を済ませて来たなんぞ言ってしまった亭主のようだ。

——思い出す。リアナの叔父と叔母はいつもそんな調子の夫婦だった。

リアナが笑い声を出してしまうとローズが首だけこちらに向けて睨んできた。

「リアナ、あなたはどう思いますの？」

「……ローズが言う通りでいいと思います……」

かくして、三人は共に迎賓館に向かったのであった。

演習場はいつもと違う様子を見せていた。

今日は訓練ではなく騎士たちが他のことをしているからだ。

彼女はそこにいる一人を探していた。

目当ての人物は厩舎での搜索を終えて出て来たところだろうか。

ふと目線を上げると彼は一瞬彼女と目を合わせた。

騎士たちから離れた彼は演習場から少し離れた立木の下まで――  
彼女の足もとまで移動してきた。

「……どうかしたか？」

視線を演習場に向けながら、木の上の彼女に彼は声をかけた。

「コインをお探しになられていると耳にしました」「それで？」

「コインのある場所ならばおおよそ分かるかと」

彼は微かに頬を強張らせたが表情は変えなかった。

「なるほど。それを言うためにあの方のお傍を離れたわけか」

「他の者がいます。私はあなたに伝えるため――」

「言わなくていい」

彼はあっさりと彼女の好意を断った。

「なぜですか」

「必要がないからだ」

「ですがこのままでは……」

「さがりなさい」

彼女は口をつぐんだ。不服だった。

「……大丈夫だ。だから言わなくてもいい」

彼に断られれば彼女は従うより他にない。

「私はコイン探しの続きをする。君も仕事に戻ってくれ」

反論を飲み込み、彼女はそこから離れた。

## 21 紫水晶の戯れ(5)

迎賓館の壁や柱には丸みを帯びたなだらかな模様が刻まれていた。真つ白な正面扉に入ると、広い空間が目の前に現れる。

ホールには沢山の椅子が用意されていた。どの椅子も疲れた来客者たちを癒すに相応しい、惜しみない贅沢が尽くされているのだろう。計算されて配置された椅子の間には花たちがホールに彩りを与えていた。

ローズとアルバートは何度か迎賓館に来たことがあるらしい。城でパーティーや催しがあると、一時的にここで客人たちを持て成さなければならなかったからだ。

迎賓館で客人を持て成すのは、二人にとって本来の仕事外の勤務だ。だが忙しくなれば実際そうも言ってられないのだろう。臨時の仕事として、催し物があれば迎賓館やホールで持てなしの仕事をしているとのことだ。

迎賓館のホールの両脇には階段が二階まで繋がっていた。階段を上るとその先に扉があり、そこに一人の騎士がいた。リアナたち三人は彼に会釈をして扉の中に入ると、目当ての展示品を探しはじめた。

展示室にはいくつか大きくて横に長い台があり、その上に乗せられたガラスの箱の中に展示品が並べられていた。

リアナたちは展示台を覗き込み目当ての物を探す。そう時間がかけず暁の騎士と呼ばれていた英雄の遺品を見つけることができた。

ガラスケースの中には英雄の物だったらしい、刃の欠けた剣と傷だらけの冑が並べられていた。その横にあるプレートには暁の英雄と讃えられた戦士の生まれや功績などが刻まれていた。

「みなさんお揃いで、ようこそいらっしゃいました」

英雄の遺品をガラス越しにまじまじと見つめていたリアナたちに、一人の女性が近寄ってきた。

「展示室で勤務されている方ですか？」

アルバートの問いに女性は柔和な笑みを浮かべた。

「はい。展示品の案内などをさせていただいております。もし分からない事やお聞きになりたいことがございましたら、なんなりとお訊ねになってくださいな」

「すみません、展示品を取り出すのってまずいですか？」

リアナの問いかけに係の女性は少し目を丸くした。

「申し訳ありませんが、展示品の劣化を防ぐため、直接手で触れて頂くのをご遠慮させて頂いております」

「このガラスケースって上部が取り外しできますよね？」

鍵が付けられているわけでもなく、ガラスケースから遺品を取り出すことはフェリスでも可能そうだった。

「それはそうですが……ただあの……」

疑惑の視線を受けてリアナは慌てて簡単に事情を説明した。どうやら勝手に持ち出されるのではないかと思われたようだ。

「……そういう事情でしたのね」

「あなたに調べていただくことも駄目でしょうか？」  
「分かりました。少しお待ちくださいな」

女性は一度展示室の奥に行き、なにかを持って戻ってくる。手にしてるのはシヨール程の大きさの厚手の布だ。彼女はそれを床に敷くと、ポケットから白い手袋を取り出して手に嵌めた。

ガラスケースの上部——ただのガラス板を外して布の上に置くと、女性は慎重な手つきで剣を手にとった。

「なにか変わった様子とか変なところとかありますか？」  
「そうですね……」

女性はむき出しになった剣の先から柄までじっくりと見ていく。

「以前と変わった所はなさそうなのですけれど……」

リアナたちは顔を合わせる。

女性は冑かぶとの方も時間をかけて見るが、結局首を横に振った。

「私が見る限りどこにも変わった所はありません」

リアナたちは困惑した。どういうことだ？

「あのヒントは展示室のどこかにコインがあるって大まかなヒントなのでなくて？」

「展示室を隅々までチェックした方が早いのかしら」

「……あの、ここ三日間ほど展示室にフェリス様が来たりしませんでしたか」

アルバートが係の女性に訊ねる。

「来てはいない、と思います。その、昨日まで二週間ほど展示室を閉めていましたから」

思わぬ証言にリアナたちは閉口した。

「今日は久しぶりの開室で……もしかしてフェリス様はコインを最近お隠しになられたのですか？ 鍵がなければこの展示室にフェリス様は入れなかったと思いますよ」

展示室に来たらすぐにヒントの謎が解けてコインが見つかる、とは思っていなかった。

しかし『彼の物の証』そのものは、展示室の遺品を指した言葉だと思った。

展示室の遺品は間違い。それならば『彼の者の証』とはなんなのだろうか。

「図書館とかでちゃんと調べた方がいいんじゃないかしら」

リアナの提案にローズたちも同意する。

「ではすぐに図書館に――」

「あれ？」

展示室を出ようとしていたリアナたちは、声があがった入口の方に振り返った。

「リアナ君じゃないか。それにアルバートさんにローズさんも。展示室になにか用……ってそりゃあ展示品見に来たに決まってるよね」

眼鏡をかけたひよろりとした体躯の男が立っていた。フェリスの政治学の教師をしているネルソンだった。

「先生……」

「リアナ君ちゃんと宿題やってる？ 調べ方が分からなかったら僕でもフェリス様でも、どっちに聞いていいからね。あ、勝手にそんなこと言ったらフェリス様怒るかな？」

あははと一人で笑うネルソンは、ノリの悪いリアナたちに気付き肩をすくめた。

「もしかしてお邪魔だったかな。室長に借りた物返すだけなんだけど」

そう言いながらネルソンは案内係の女性に室長の在室を問う。女性が今は席をはずしていると答えると、史料を返しておいてください、と片手に抱えていた長方形の箱を彼女に渡した。

「それじゃあ」

気を使ってか、さっさと帰ろうとするネルソンを係の女性が引きとめた。

「あの、ネルソン教授。『暁の騎士』にまつわる品は、ここにある遺品以外で城にあったでしょうか？」

「いきなりなんだい？ 君の専門は絵画じゃなかったかな」

女性がリアナたちに代わって事情を説明すると、ネルソンは慌てたように展示室の中に戻ってくる。

「君たちそういう大事なことはすぐに言いなさい！ 剣と胃じゃないなら、考えられるのはあそこだッ」

自分たちの口からろくに話もできないうちに、ネルソンはリアナたちをとある場所まで引つ張って行った。

斜めになった天井からまばゆい光が零れ、床にタイルで描かれた白銀の鷲が光を放っていた。

「暁の騎士は――」

城の中央塔にリアナたち三人をつれてきたネルソンは、一階の一番東の部屋の奥に立ち、そう切り出した。

「騎馬族と戦う前に、ここで仲間たちへ語りかけたそうだ」

何百人が集まっても十分な程の広い部屋には調度品も置物もいっさいなく、清潔さだけ保たれていた。だから城では少し浮いた場所のようにリアナには感じられた。

リアナたちがやって来たこの『初春の広間』は、建物から半分飛び出したような部屋の構造になっていて、二階がない部分はガラスの天井で太陽の光を上から受けられるようになっていた。

「戦いの季節は冬が終わるかどうかの頃だったと記録に残っている。騎馬族から国を守り抜き春を迎えたい気持ちがあつて、彼はここか

ら出陣しようとしたんじゃないかな」

リアナは光の中にいたネルソンの隣に立つ。

「どうして騎馬族を退けるために十分な兵力を集めなかったんですか。その頃のロスネルドには集められない事情が？」

「簡単に説明すると、ロスネルドが建国されてすぐに内乱があったんだ。西南の領地を任された力のあった候爵が反乱を起こしてたわけ。そんな時に国外から攻撃受けた。兵力を候爵の領地に向かわせていたからすぐに動かせる兵がほとんどいなかったんだ。でもものすごい勢いで国外から敵がやってくる。そこで立ち上がったのが当時、王都を守っていた戦士の一人『暁の騎士』だったんだ」

ネルソンは上から注ぐ光に背を向けた。

「出陣の朝、彼はこの場所で勝利を誓った。その姿をちょうど現れた朝日が照らす。まるで太陽が彼に福音を齎してくれたようだったそうだ。その後暁の騎士は勝利不可能と言われた戦いに奇跡を起こした。おかげで無事内乱も鎮圧され、ロスネルドの平和への礎は築かれたんだ。まさに『暁』の名に相応しい伝説の騎士だと思わないか」

熱く語るネルソンの瞳は少年のようだった。リアナも知らなかった自国の歴史の一端を耳にして好奇心が刺激される。

しかし楽しく歴史や偉人の話をしているわけにもいかない。

「さて話はこれくらいにして……。ヒントの『栄光の輝き』はおそらく太陽を指し示している。『永久に照らし出す』ともあるし間違いないだろうね。そして問題の『彼の者の証』だ。暁の騎士は好んで銀翼の鷲の紋章を身につけていたそうだ。太陽に照らされた証に

なりそうなもの……ここまで言えば分かるね？」

リアナはその場にしゃがみこむ。

タイルとタイルの間になにかあった。

正確には何かではない。本当はわかっている。胸が膨らむ。

「リアナ、どうですの!？」

焦れったそうなローズの問い掛けも耳に入らず、リアナは指先にあつた感触に食らいつく。摘んで引き上げた。

それは光を受けて、白い輝きを放った。

「あつた……!」

カラスの彫刻が施された小さなコインのひとつ目が、見つかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6640d/>

---

Konzert

2011年6月26日00時13分発行